

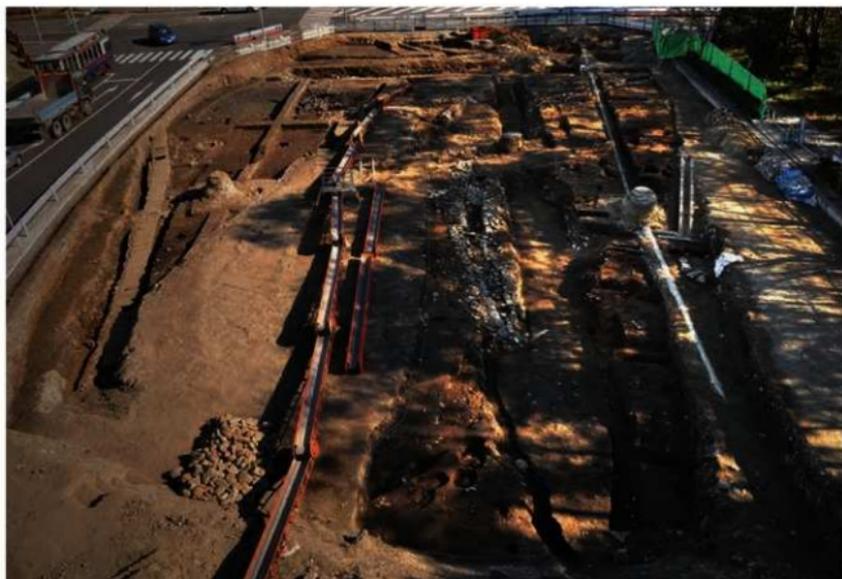
仙台市文化財調査報告書第 401 集

川内 B 遺跡ほか

—— 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ ——

2012 年 3 月

仙台市教育委員会



I層上面全景（西から）



SD2・3石組溝跡完掘（西から）



SDS石組溝跡発掘全景（南から）

序 文

仙台市の文化財保護につきまして、日頃から多大なご協力を賜り、まことに感謝にたえません。さて、当市では、高速鉄道東西線事業を推進し、高速鉄道南北線や、JR、バスと連携した公共交通ネットワークを形成することにより、暮らしやすく環境にやさしい新しい都市づくりを進めております。

高速鉄道東西線の計画路線内には仙台北城跡や関連した遺跡があり、さらに新しい遺跡が発見されることも予測されたことから、仙台市教育委員会では事業主体者の仙台市交通局と協議を重ね、平成16～18年度に試掘確認調査を実施し、その結果に基づき本発掘調査を行ってまいりました。このうち川内B遺跡は、仙台北城二の丸跡の北側に位置し、平成16年から18年にかけて実施した試掘調査により、平成20年度に新たに遺跡登録され、平成20年度から本格的な発掘調査を実施してきました。本報告書は平成22年度の本発掘調査の成果をまとめたもので、高速鉄道東西線関係の本報告書としては7冊目となります。

これまで、先人たちが残してきた貴重な文化遺産を保護し、活用しながら市民の宝として、次の世代に引き継いでいくことは、これからの「まちづくり」に欠かさない大切なことであると考えております。ここに報告する調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、昨年3月11日の東日本大震災では、仙台市内も大きな被害を受けております。震災から1年を経て、仙台市では震災からの復興に向け、「ともに、前へ仙台 ～3・11からの再生～」を掲げて、復興計画を進めているところです。そうした中、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます、刊行の序といたします。

平成24年3月

仙台市教育委員会
教育長 青沼 一民

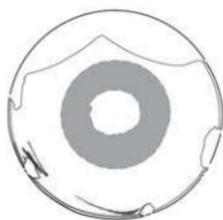
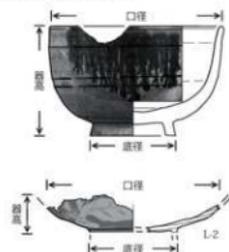
例言

1. 本書は、仙台市高速鉄道東西線建設に伴い実施した平成22年度川内B遺跡、仙台城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会が大成エンジニアリング株式会社に委託して実施した。
3. 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 工藤信一郎・水野一夫の監理の下、大成エンジニアリング株式会社 蒲 明男・岩瀬雄史が担当し作成した。
4. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、次の機関よりご指導、ご教示等を賜った。
記して謝意を表す次第である（敬称略・順不同）。
雄華文庫 斎藤報恩会 宮城県公文書館 仙台市博物館 仙台市歴史民俗資料館 仙台市交通局 仙台市建設局
5. 発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。
6. 陶磁器の年代等の確認は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 佐藤 洋の協力を得た。

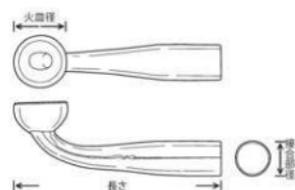
凡例

1. 本書の土色は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局1998年版）に準拠している。
2. 本書中の第1図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「仙台」の一部と、1万分の1地形図「青葉山」「仙台駅」の一部を合成して使用した。
3. 図中の座標値は、日本測地系（第X系）座標を使用した。
4. 本文図版等で使用した方位は真北を基準としている。
5. 標高値は、海拔高度（T.P.）を示している。
6. 遺構図は、1/40縮尺を基本とした。その他については各国のスケールを参照されたい。
7. 基本層の表記は、近代整地層からローマ数字を用い、遺構堆積土についてはアラビア数字で表記した。
なお、今回調査の近代整地層であるI層は平成20年度調査の近代整地層のII層に対応し、近世の整地層であるII層はIII層、III層はIV層、IV層はV層、自然堆積層であるVI層はVII層に対応する。
8. 遺構・遺物の登録・整理及び報告書での表記は、以下の分類と略号を使用した。
SA：柱列跡、SD：溝跡、SE：井戸跡、SK：土坑、P：ピット、SX：性格不明遺構
A：縄文土器、F：丸瓦・軒丸瓦、G：平瓦・軒平瓦、H：その他の瓦、I：陶器・瓦質土器・土師質土器、J：磁器、K：石器・石製品、L：木製品類、N：金属製品、O：自然遺物、P：土製品、X：その他の遺物
9. 遺物実測図は、原則として縮尺1/3としたが、瓦は1/4、土製品・石製品・金属製品は2/3、古銭は原寸で表示した。
10. 遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線、推定線は破線で、軸部は一点鎖線で表した。
中心線が一点鎖線の場合は、展開し図上復元したものである。
11. 陶磁器類の遺物観察表には、備考に「口クロ成形」の記載はしていない。また、法量の表示で（）書きの数値は残存値である。
12. 遺物写真図版で、実測図の番号がないものは写真のみの掲載遺物である。
13. 報告書内で使用している尺・寸の長さは「1尺＝30.3cm」、「1寸＝3.03cm」とした。
14. 座標値及び標高値については、平成23年3月11日に発生した東日本大震災前のものである。
15. 遺構及び遺物図のトーン及び法量の基準は次項の通りである。
16. 本文中の「灰白色火山灰」（山田・庄子1980）は、これまで仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田a火山灰（To-a）」と考えられている。降下年代は現在、西暦915年（延喜15年）と推定されており、本書もこれに従う。
山田一郎・庄子貴雄1980「宮城県に分布する灰白色火山灰」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』
仙台市教育委員会2000「沼向遺跡第1～3次調査」仙台市文化財調査報告書第241集
小口雅史2003「古代北東北の広域テラフをめぐる問題—十和田aと白頭山（長白山）を中心に—」『日本律令の展開』吉川弘文館

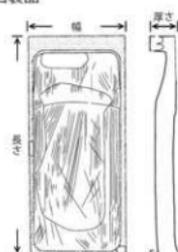
陶磁器、土器、漆器



金属製品



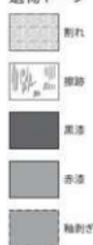
石製品



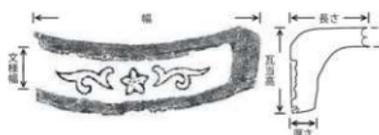
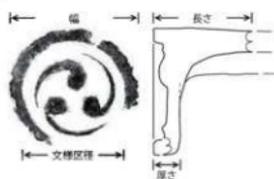
土製品



遺物トーン



瓦



遺構トーン



本文目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
1 川内B遺跡現地調査	1
2 仙台城跡現地調査	2
3 整理作業	2
第3節 調査概要	4
1 川内B遺跡現地調査	4
2 仙台城跡現地調査	4
3 整理作業	5
第4節 位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
第2章 川内B遺跡	11
第1節 調査区グリッドの設定と基本層序	11
1 調査区グリッドの設定	11
2 基本層序	12
第2節 検出遺構と遺物	19
1 VI層上面検出遺構	19
2 IV層上面検出遺構	22
3 III層上面検出遺構	33
4 II層上面検出遺構	55
5 I層上面検出遺構	66
第3節 出土遺物と検出遺構について	93
1 出土遺物について	93
2 検出遺構について	103
第4節 まとめ	108
1 川内B遺跡周辺の地形	108
2 川内B遺跡の自然地形と近世の整地層	109
3 川内B遺跡の土地利用	112
第3章 仙台城跡	120
第1節 調査区グリッドの設定と基本層序	120
1 調査区グリッドの設定	120
2 基本層序	121

第2節 検出遺構と遺物	122
1 V層上面検出遺構	122
2 IV層上面検出遺構	129
3 III層上面検出遺構	134
第3節 自然科学分析	137
第4節 まとめ	139
第4章 総括	143
川内B遺跡	143
仙台城跡	143
引用・参考文献	144

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3	第35図 SK32・37・38・41・P26土坑平面図・断面図	40
第2図 河岸段丘分布図	6	第36図 SK43・44・45・50土坑平面図・断面図	41
第3図 調査区周辺の地図・地図(1)	8	第37図 SK46・51土坑平面図・断面図	42
第4図 調査区周辺の地図・地図(2)	9	第38図 SX4性格不明遺構平面図・断面図	43
第5図 周辺遺跡分布図	10	第39図 SX7性格不明遺構平面図・断面図	44
第6図 川内B遺跡グリッド設定図	11	第40図 SX7性格不明遺構出土遺物(1)	45
第7図 調査区壁・ベルト断面図(1)	14	第41図 SX7性格不明遺構出土遺物(2)	46
第8図 調査区壁・ベルト断面図(2)	15	第42図 SX8性格不明遺構平面図・断面図	46
第9図 基本層序概念図	16	第43図 SX10・11性格不明遺構平面図・断面図	47
第10図 VI層上面検出遺構配置図	19	第44図 SX10・11性格不明遺構出土遺物	48
第11図 SD1溝跡平面図・断面図	19	第45図 SX12性格不明遺構平面図・断面図	48
第12図 SD1溝跡出土遺物	20	第46図 SX14性格不明遺構平面図・断面図・立面図(1)	49
第13図 SK8・9・22土坑平面図・断面図	20	第47図 SX14性格不明遺構平面図・断面図・立面図(2)	50
第14図 SK30・36土坑平面図・断面図	21	第48図 P3・5・6・7・8・10平面図・断面図	50
第15図 P4・22平面図・断面図	21	第49図 P9・11・12・13・14・16・17・18平面図・断面図	51
第16図 IV層上面検出遺構配置図	22	第50図 P19・20・21・24・34・35・37平面図・断面図	52
第17図 SD4溝跡平面図・断面図	23	第51図 III層出土遺物(1)	53
第18図 SD5溝跡平面図・断面図・立面図	25	第52図 III層出土遺物(2)	54
第19図 SD5溝跡出土遺物(1)	24	第53図 II層上面検出遺構配置図	55
第20図 SD5溝跡出土遺物(2)	27	第54図 SD6溝跡平面図	55
第21図 SD5溝跡出土遺物(3)	28	第55図 SD6溝跡断面図・立面図	56
第22図 SK18・34・35土坑平面図・断面図	29	第56図 SD6溝跡出土遺物	56
第23図 SK39土坑平面図・断面図	30	第57図 SDB溝跡平面図・断面図	57
第24図 SK40・42・47・48・49土坑平面図・断面図	31	第58図 SDB溝跡出土遺物	58
第25図 SX13性格不明遺構平面図・断面図	32	第59図 SE1井戸跡平面図・断面図・出土遺物	59
第26図 P27・28平面図・断面図	32	第60図 SK1・3土坑平面図・断面図	60
第27図 IV層出土遺物	32	第61図 SK10土坑平面図・断面図・出土遺物	60
第28図 III層上面検出遺構配置図	33	第62図 SK10土坑出土遺物(2)	61
第29図 SA1柱列跡平面図・断面図	33	第63図 SK15・16・17・20・33土坑平面図・断面図	62
第30図 SA2柱列跡平面図・断面図	34	第64図 SX5・9性格不明遺構平面図	63
第31図 SD7・9溝跡平面図・断面図	35	第65図 P1・25・39・40平面図・断面図	63
第32図 SK2・4・13土坑平面図・断面図	36	第66図 II層出土遺物(1)	64
第33図 SK14・19・21・24土坑平面図・断面図	37	第67図 II層出土遺物(2)	65
第34図 SK23・25・26・27・28・29・31土坑平面図・断面図	38	第68図 I層上面検出遺構配置図	66

第69図	SD2 溝跡平面図・断面図・立面図(1)	67	第109図	基本土層柱状図	111
第70図	SD2 溝跡平面図・断面図・立面図(2)	68	第110図	川内B 遺跡全体図(Ⅰ期)	114
第71図	SD2 溝跡出土遺物(1)	68	第111図	川内B 遺跡全体図(Ⅱ期)	115
第72図	SD2 溝跡出土遺物(2)	69	第112図	川内B 遺跡全体図(Ⅲ期)	116
第73図	SD3 溝跡平面図・断面図	70	第113図	川内B 遺跡全体図(Ⅳ期)	117
第74図	SD3 溝跡立面図	71	第114図	川内B 遺跡全体図(Ⅴ期)	118
第75図	SK5・6・7土坑平面図・断面図	72	第115図	川内B 遺跡全体図(Ⅵ期)	119
第76図	SK6土坑出土遺物	73	第116図	仙台城跡グリッド設定図	120
第77図	SK11土坑平面図・断面図・出土遺物	74	第117図	調査区壁・ベルト断面図	121
第78図	SK12土坑平面図・断面図・出土遺物	75	第118図	V層上面検出土構配置図	122
第79図	SK1性格不明遺構平面図・断面図	76	第119図	SD2 溝跡平面図・断面図	122
第80図	SK2性格不明遺構遺物・木材腐蝕位置図	77	第120図	SD2 溝跡出土遺物(1)	123
第81図	SK2性格不明遺構平面図・断面図	78	第121図	SD2 溝跡出土遺物(2)	124
第82図	SK2性格不明遺構出土遺物(1)	79	第122図	SD3 溝跡平面図・断面図	124
第83図	SK2性格不明遺構出土遺物(2)	80	第123図	SD4 溝跡平面図・断面図	125
第84図	SK2性格不明遺構出土遺物(3)	81	第124図	SK7・8・9・10・11土坑平面図・断面図	126
第85図	SK2性格不明遺構出土遺物(4)	82	第125図	SK12・13土坑平面図・断面図	127
第86図	SK2性格不明遺構出土遺物(5)	83	第126図	SK3性格不明遺構平面図・出土遺物	127
第87図	SK2性格不明遺構出土遺物(6)	84	第127図	P8・9・10・11・12・14平面図・断面図	128
第88図	SK2性格不明遺構出土遺物(7)	85	第128図	V層出土遺物	129
第89図	SK2性格不明遺構出土遺物(8)	86	第129図	IV層上面検出土構配置図	129
第90図	SK2性格不明遺構出土遺物(9)	87	第130図	SD1 溝跡平面図・断面図	130
第91図	SK3性格不明遺構平面図	88	第131図	SK1・2土坑平面図・断面図	130
第92図	SK6性格不明遺構平面図・断面図	89	第132図	SK5・6土坑平面図・断面図	131
第93図	SK15・16・17性格不明遺構平面図・断面図	90	第133図	SK2性格不明遺構出土遺物	131
第94図	P2・15・23平面図・断面図	90	第134図	SK2性格不明遺構平面図・断面図	132
第95図	I層出土遺物	91	第135図	P1・2・3平面図・断面図	132
第96図	近世以前出土遺物	92	第136図	P4・5・6・7・13平面図・断面図	133
第97図	出土陶磁器層位別産地別割合	94	第137図	IV層出土遺物	134
第98図	器種・機能・層位ごとの陶磁器産地割合	97	第138図	III層上面検出土構配置図	134
第99図	墨書のある土器	99	第139図	SK3・4土坑平面図・断面図	135
第100図	瓦	99	第140図	SK1性格不明遺構平面図・断面図	135
第101図	各段階の煙管	100	第141図	SA1・5E1平面図	136
第102図	各種銅製品	101	第142図	表探出土遺物	136
第103図	銭貨	101	第143図	仙台城跡出土漆器木地の顕微鏡写真	138
第104図	各面で検出された柱列跡・建物跡	103	第144図	検出土構時期別変遷模式図	139
第105図	区画施設の変遷	104	第145図	仙台城跡全体図(V層上面検出土構)	140
第106図	川内B遺跡検出土構時期別変遷模式図	107	第146図	仙台城跡全体図(IV層上面検出土構)	141
第107図	周辺の調査地点と自然地形及び塋地層断面模式図	108	第147図	仙台城跡全体図(III層上面検出土構)	142
第108図	自然堆積層等高線図	110			

表 目 次

第1表	調査地点の屋敷地拜領者一覧表	8	第14表	出土陶磁器層位別産地別数量一覧表	94
第2表	遺跡地名表	10	第15表	器種・機能・層位別陶磁器集計表	96
第3表	調査区壁・ベルト土層観察表(1)	17	第16表	出土陶磁器産地別機能別数量表(1)	96
第4表	調査区壁・ベルト土層観察表(2)	18	第17表	出土陶磁器産地別機能別数量表(2)	97
第5表	P4・22観察表	21	第18表	焼酎・漆器陶磁器産地別機能別数量	98
第6表	P27・28観察表	32	第19表	平成20年度調査の基本土層	109
第7表	P26観察表	40	第21表	基本土層対応関係表	109
第8表	P3・5・6・7・8・10観察表	50	第20表	今回調査の基本土層	109
第9表	P9・11・12・13・14・16・17・18観察表	52	第22表	調査区壁・ベルト土層観察表	121
第10表	P19・20・21・24・34・35・37観察表	52	第23表	P8・9・10・11・12・14平面図・断面図	128
第11表	P1・25・39・40観察表	63	第24表	P1・2・3・4・5・6・7・13観察表	133
第12表	P2・15・23観察表	90	第25表	仙台城跡出土漆器の器種同定結果	137
第13表	出土遺物数量一覧表	93			

写 真 图 版 目 次

図版 1	川内B遺跡基本土層 (1)	147	図版 33	川内 B 遺跡出土遺物 (1)	179
図版 2	川内B遺跡基本土層 (2)	148	図版 34	川内 B 遺跡出土遺物 (2)	180
図版 3	川内B遺跡基本土層 (3)	149	図版 35	川内 B 遺跡出土遺物 (3)	181
図版 4	川内B遺跡基本土層 (4)	150	図版 36	川内 B 遺跡出土遺物 (4)	182
図版 5	川内B遺跡基本土層 (5)	151	図版 37	川内 B 遺跡出土遺物 (5)	183
図版 6	川内B遺跡基本土層 (6)	152	図版 38	川内 B 遺跡出土遺物 (6)	184
図版 7	川内B遺跡VI層	153	図版 39	川内 B 遺跡出土遺物 (7)	185
図版 8	川内B遺跡IV層 (1)	154	図版 40	川内 B 遺跡出土遺物 (8)	186
図版 9	川内B遺跡IV層 (2)	155	図版 41	川内 B 遺跡出土遺物 (9)	187
図版 10	川内B遺跡IV層 (3)	156	図版 42	川内 B 遺跡出土遺物 (10)	188
図版 11	川内B遺跡IV層 (4)	157	図版 43	川内 B 遺跡出土遺物 (11)	189
図版 12	川内B遺跡IV層 (5)	158	図版 44	川内 B 遺跡出土遺物 (12)	190
図版 13	川内B遺跡IV層 (6) III層 (1)	159	図版 45	川内 B 遺跡出土遺物 (13)	191
図版 14	川内B遺跡III層 (2)	160	図版 46	川内 B 遺跡出土遺物 (14)	192
図版 15	川内B遺跡III層 (3)	161	図版 47	川内 B 遺跡出土遺物 (15)	193
図版 16	川内B遺跡III層 (4)	162	図版 48	川内 B 遺跡出土遺物 (16)	194
図版 17	川内B遺跡III層 (5)	163	図版 49	川内 B 遺跡出土遺物 (17)	195
図版 18	川内B遺跡III層 (6)	164	図版 50	川内 B 遺跡出土遺物 (18)	196
図版 19	川内B遺跡III層 (7)	165	図版 51	川内 B 遺跡出土遺物 (19)	197
図版 20	川内B遺跡III層 (8)	166	図版 52	川内 B 遺跡出土遺物 (20)	198
図版 21	川内B遺跡III層 (9)・II層 (1)	167	図版 53	川内 B 遺跡出土遺物 (21)	199
図版 22	川内B遺跡II層 (2)	168	図版 54	仙台城跡基本土層・V層 (1)	200
図版 23	川内B遺跡II層 (3)	169	図版 55	仙台城跡V層 (2)	201
図版 24	川内B遺跡II層 (4)	170	図版 56	仙台城跡V層 (3)	202
図版 25	川内B遺跡II層 (5)	171	図版 57	仙台城跡V層 (4)	203
図版 26	川内B遺跡II層 (6)・I層 (1)	172	図版 58	仙台城跡V層 (5)・IV層 (1)	204
図版 27	川内B遺跡I層 (2)	173	図版 59	仙台城跡IV層 (2)	205
図版 28	川内B遺跡I層 (3)	174	図版 60	仙台城跡IV層 (3)	206
図版 29	川内B遺跡I層 (4)	175	図版 61	仙台城跡IV層 (4)	207
図版 30	川内B遺跡I層 (5)	176	図版 62	仙台城跡IV層 (5)・III層 (1)	208
図版 31	川内B遺跡I層 (6)	177	図版 63	仙台城跡III層 (2)	209
図版 32	川内B遺跡I層 (7)	178	図版 64	仙台城跡出土遺物 (1)	210

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成11年5月、仙台市教育委員会と当時事業主管局であった仙台市都市整備局との間で、高速鉄道東西線建設事業に伴う遺跡の取り扱いについての第1回目の協議が持たれた。その後、事業主管局は仙台市交通局に移され、平成15年度より仙台市教育委員会との本格的な協議が行われた。その結果、高速鉄道東西線事業計画予定路線における周知の遺跡及び遺跡範囲外の状況把握のため、先ず確認調査及び試掘調査を実施し、その結果を踏まえて本調査を実施する箇所を決定し、これを基に発掘調査を順次、事業計画に沿いながら進めていくことが両者間で確認された。

以上の協議事項に基づき、平成16年度より確認調査及び試掘調査を開始した。平成16年度の対象地域は、高速鉄道東西線西部の川内地区、青葉山地区、西公園地区で18箇所の調査区を設定し、総面積448㎡の調査を実施した。平成17年度の調査対象地域は仙台北部及びその周辺地区、川内A遺跡隣接地区、西公園地区で、22箇所の調査区を設定し、総面積421㎡の調査を実施した。そのうち扇坂トンネル下段部（この試掘調査での便宜的区割りのB区）は、平成16年8月24日から8月27日の間、6箇所（180㎡）の試掘調査が行われ、その翌年、平成17年8月22日から9月2日の間、3箇所（72㎡）の試掘調査が実施された。その結果、近世の遺構面が確認されたことから、仙台市教育委員会はこの部分を「川内B遺跡」として新規に遺跡登録し、仙台市交通局と協議を行った。その結果平成20年度に本調査を実施することとなり、平成19年8月に確認調査を行ったうえで、平成20年7月1日から平成21年2月27日に本調査を実施した。その後、平成20年度調査の未調査区域及び隣接する市道部を対象に本調査を実施することになり、平成22年9月14日から開始した。

仙台北部については、平成18年度に本調査を実施した亀岡トンネル開削部について、設計変更が行われたことから拡幅工事が計画された区域を対象に、平成22年5月18日から本調査を実施した。

第2節 調査要項

1 川内B遺跡現地調査

遺跡名称：川内B遺跡（宮城県遺跡登録番号 O1565）

所在地：仙台市青葉区川内地区

調査原因：仙台市高速鉄道東西線路線建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：文化財課調査指導係主任 渡部 紀

文化財課調査指導係文化財教諭 菊地貴博

調査組織：大成エンジニアリング株式会社

主任調査員 蒲 明男

調査員 岩瀬雄史

調査補助員 高橋直樹

調査面積：1120㎡

調査期間：平成22年9月14日～平成22年12月28日

第2節 調査要項

2 仙台城跡現地調査

遺跡名称：仙台城跡（宮城県遺跡登録番号 01033）

所在地：仙台市青葉区川内地内

調査原因：仙台市高速鉄道東西線路線建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：文化財課調査指導係主任 渡部 紀

文化財課調査指導係文化財教諭 菊地貴博

調査組織：大成エンジニアリング株式会社

調査員 岩瀬雄史

調査補助員 高橋直樹

調査補助員 吉田好孝

調査面積：56㎡

調査期間：平成22年5月18日～平成22年6月18日

3 整理事業

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：文化財課調査指導係主任 工藤信一郎

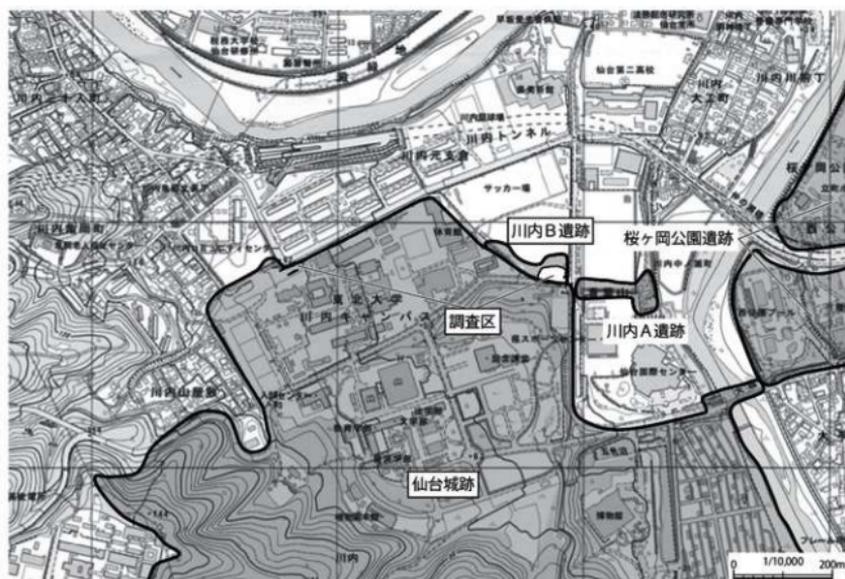
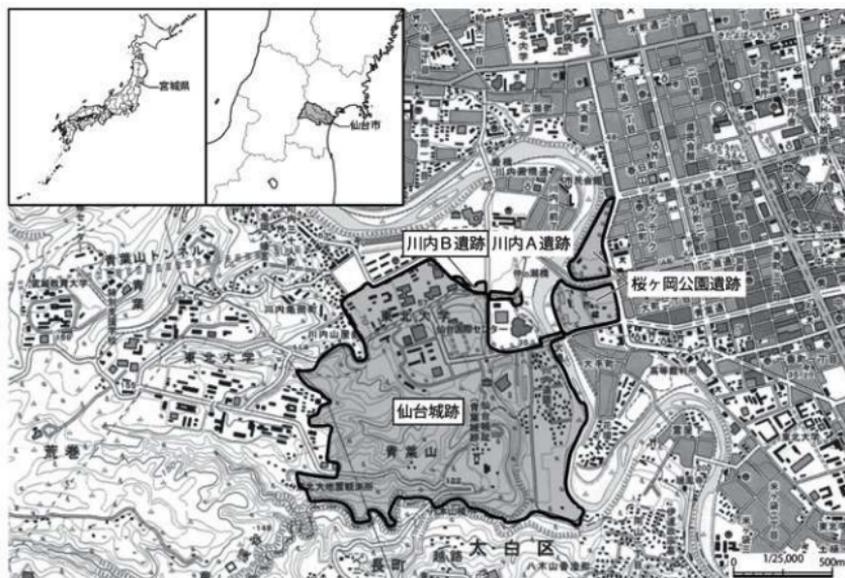
文化財課調査指導係主事 水野一夫

調査組織：大成エンジニアリング株式会社

調査員 蒲 明男

調査補助員 岩瀬雄史

整理期間：平成23年6月13日～平成24年3月9日



第1図 遺跡位置図

第3節 調査概要

1 川内B遺跡現地調査

現地調査は、高速鉄道東西線塚坂トンネル工事に伴い、平成22年9月14日から12月28日まで実施した。調査は、平成20年度に現地調査が行われた迂回路部と路線部Ⅱ区に挟まれた部分を市道部Ⅰ区、その東側を市道部Ⅲ区、路線部Ⅱ区の南側を市道部Ⅱ区、その東側を市道部Ⅳ区として行った。調査日数は72日、調査面積は1120㎡である。

平成22年9月15日、平成20年度調査のデータをもとに掘削深度を確認し、遺構検出面まで重機により表土掘削を開始した。調査区は既存埋設管により攪乱されている部分が多く、既存埋設管を破損しないよう人力による掘削も同時に行い、攪乱断面で土層を確認しながら調査を進めた。

調査区は平面及び攪乱断面の土層観察から、整地層の堆積状況が一定していないことが確認された。このため、整地層の範囲から調査区域を大きく盛土①～⑦に区分し、整地層出土遺物に関しては各範囲内で層ごとに取り上げた。遺構検出面はⅠ層上面からⅥ層上面を設定した。これに関しては、整理段階において調査層位等の再検討を行い、平成20年度調査との整合作業を行った。その結果、今回調査の近代整地層であるⅠ層は、前回調査の近代整地層のⅡ層に対応し、以下近世の整地層であるⅡ層はⅢ層、Ⅲ層はⅣ層、Ⅳ層はⅤ層に対応している。自然堆積層であるⅥ層はⅦ層に対応している。

調査は、市道部Ⅰ区では東西ベルトと南北ベルトを設定し、人力により6面の遺構検出作業を行い、各面で検出された遺構の掘削・記録作業・ベルトの断面記録・北壁の土層の断面記録・攪乱壁を利用した土層の断面記録を行った。また、市道部Ⅰ区東側部分及びⅢ区は工事掘削深度の関係から、Ⅲ層中（標高42.20m）までの調査にとどめ、工事に影響する部分のみトレンチ状にⅥ層上面（自然堆積層）まで調査を行った。未調査部分に関しては布を敷き、遺跡保全を図った。

市道部Ⅱ区はⅠ区と通しの南北ベルトを設定し、人力により5面の遺構検出作業を行った。11月19日に、Ⅰ層上面で検出された石組溝の完掘状況を含めた全景写真をスカイマスター（高所作業車）より撮影した。それ以降は、各面で検出された遺構の掘削・記録作業・ベルトの断面記録・南西壁の土層の断面記録・攪乱壁を利用した土層の断面記録を行った。

市道部Ⅳ区は人力により6面の遺構検出作業を行い、各面で検出遺構の掘削・記録作業・ベルトの断面記録・西壁の土層の断面記録を行った。

12月27日に市道部Ⅰ～Ⅳ区の調査を終了し、28日に終了確認を受け、現場事務所及び器材の撤収を完了した。

2 仙台城跡現地調査

現地調査は、高速鉄道東西線亀岡トンネル開削部の施工拡幅工事に伴い、平成22年5月18日から6月18日まで実施した。調査区は、平成18年度に現地調査が行われた2000㎡部分の北側と南側に隣接する。調査日数は24日、調査面積は56㎡である。

平成22年5月18日、平成18年度調査データをもとに北側施工拡幅部（北区）と南側施工拡幅部（南区）の調査区及び掘削深度の確認をし、重機及び人力によって表土掘削を開始した。5月21日から整地面検出作業を行い、現地表面から約1.0mでⅢ層整地面を検出し、北区で土坑1基、南区で集石遺構1基・柱列1基・性格不明遺構1基を検出し、それぞれ遺構を掘削・記録した。Ⅲ層上面で検出された遺構の全景を写真撮影した後、人力によりⅢ層掘削、Ⅳ層整地面の検出作業を行った。Ⅳ層上面では、北区で溝1条・土坑2基・柱列1基・ピット7基、南区で土坑3基、性格不明遺構2基を検出し、それぞれ遺構を掘削・記録した。Ⅳ層上面で検出された遺構の全景を写真撮影した後、人力によりⅣ層掘削、Ⅴ層整地面の検出作業を行った。Ⅴ層上面では、北区で溝2条・土坑4基・ピット5基・性格不明遺構1基を検出した。それぞれ遺構の掘削・記録作業を行い、Ⅴ層上面で検出された遺構の全景を写真撮影した後、自然堆積層であるⅥ層まで掘削を行った。Ⅵ層上面で遺構は検出されなかった。また、Ⅵ層まで掘削した後、土層ベルトを断面記

録した。最終の全景写真を撮影した後、南区西側の南壁土層の断面を記録し、6月18日に調査を終了した。

6月21日～6月24日まで現地で遺物洗浄、図面整理等の基礎整理作業を行い、6月25日に現場事務所及び器材の撤収を完了した。

以上の川内B遺跡と仙台城跡の計測作業は、日本測地系座標に基づいて設置された基準点から、今回調査に使用可能な位置に新点を設置し、グリッドの設定及び、遺構の計測・遺物出土地点の計測を行った。平面図はトータルステーションで測量し、測量ソフト「遺構くん」で編集した。断面図は手作業によって図化した。

写真撮影は、遺構検出状況、土層断面、遺物出土状況、遺構完掘状況、全景写真、作業状況等を35mmのモノクロフィルムとリバーサルフィルム及びデジタルカメラを使用して撮影した。

また、遺構番号は遺構種別ごとに、基本的には検出順に1番から通し番号を付した。ただし、整理作業時に遺構の欠番がいくつか生じたため、検出順を前後させて欠番を埋めたものもある。なお、今回調査では前回調査の遺構の続きが検出されているが、新たに番号を付しているため、前回調査とは別番号となっている。

3 整理作業

川内B遺跡・仙台城跡ともに、平成22年度は現地調査終了後の平成23年1月4日から平成23年2月28日まで平断面図の整合作業及び写真整理等の基礎整理作業を行った。また、平成23年度は平成23年7月4日から平成24年3月9日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。

両遺跡ともに既調査地点に隣接しているため、遺構図面は既調査と整合を図り、その後、現場で計測・作成した遺構平断面図の整合作業を行った。また、遺構の検出面・堆積土・出土遺物等を確認して、帰属年代・性格等を検討し、遺構図の作成を行った。

出土遺物は内法54.5×33.6×15cmの平箱に、仙台城跡が8箱、川内B遺跡が33箱程である。それぞれ大部分を近世～近代の陶磁器が占め、その他に瓦、土師質土器、金属製品等が出土している。川内B遺跡では少量であるが、縄文土器の破片等も出土している。出土遺物は水洗い・注記した後、取り上げ番号ごとに内容を確認し、遺物台帳に記載した。注記の内容は、遺跡番号(01565)-調査年度(10)-調査区(市道1区～IV区)-出土地点(遺構名)-層名-取り上げ番号の順に記載した。なお、注記作業後に遺構面の検出層等について再検討を行っているため、注記内容について訂正が必要となったことから、調査記録の対照表を作成している。また、注記内容の変更が生じた遺物に関しては、後に検索できるための遺物台帳を作成した。

出土遺物は材質ごとの分類を行った後、接合を行い、中でも産地・時期が判別でき、遺構や土層の性格が判断できるものについては抽出遺物とし、実測・写真撮影に耐えられるよう破片箇所を石膏で補強・復元した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラ及び35mmモノクロフィルムを用いて、正面、見込み、高台内文様等必要に応じて数方向からの撮影を行った。遺物実測は外形及び断面を手作業で行い、文様等はデジタルカメラで撮影したものを画像処理して重ね合わせ、遺物図を作成した。

その後、陶磁器類については、産地別・器種別に分類し、取り上げ番号ごとにそれぞれの破片数を集計した。また、金属製品等は付着している泥土や錆を落とし、分類・集計・抽出を行った。木製品は洗浄後、水漬けして保存し、器種・形状等で分類し、抽出を行った。抽出遺物については、それぞれ種別ごとに登録し、実測・デジタルトレースによる遺物図作成及び写真撮影を行い、遺物観察表を作成した。

遺物のデジタルトレース及び編集にはAdobe社の「Illustrator」を、画像処理には同社の「Photoshop」を使用した。遺構平面図・断面図は、現場で計測・描画した図面データをAdobe社「Illustrator」で編集・調整を行い作成した。また、報告書の編集作業にはAdobe社「InDesign」を使用した。

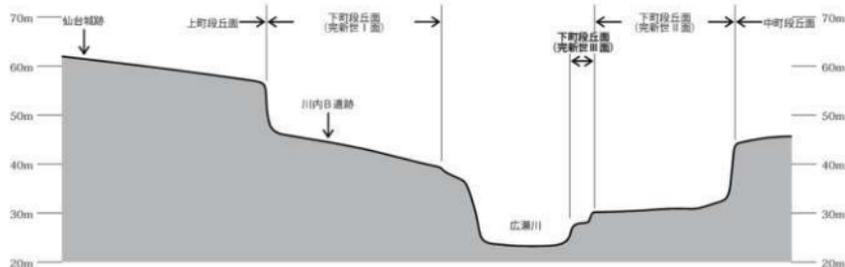
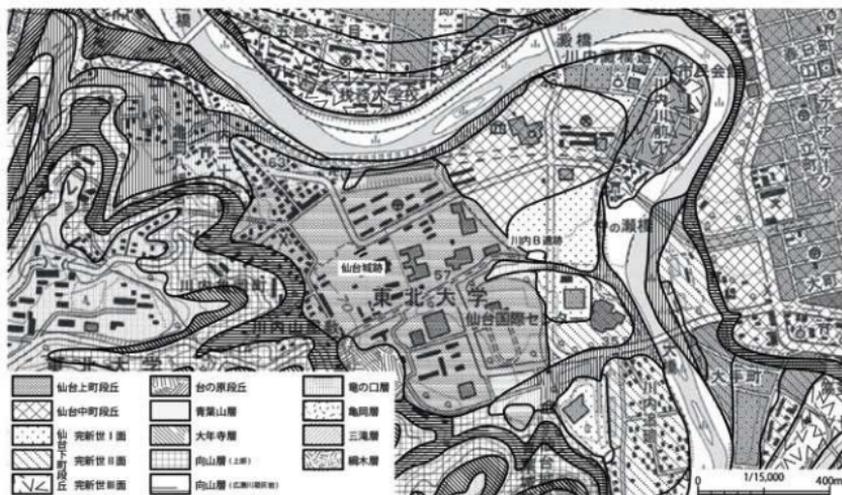
第4節 位置と環境

1 地理的環境

川内B遺跡と仙台城跡は、仙台市青葉区に所在する。南と西には青葉山丘陵があり、北と西には広瀬川が大きく蛇行して流れている。遺跡はその広瀬川が台地に形成した河岸段丘上に立地する。

仙台市は宮城県の中央やや南に位置し、西は山形県に接する奥羽山脈があり、東は太平洋に面している。市域は東西に長く、西から山地・丘陵地・低地に大別され、西と東では地理的環境が大きく異なる。低地はさらに話断層である長町一利府線を境に、西側は台地、東側は沖積平野に分かれる。

広瀬川の河岸段丘は上位より、青葉山段丘・台ノ原段丘・仙台上町段丘・仙台中町段丘・仙台下町段丘群の5面に大きく分類される。仙台下町段丘群は完新世Ⅰ～Ⅲ面に细分されている。段丘面の形成時期は、台ノ原段丘:約10万年前、仙台上町段丘:2.6万年前、仙台中町段丘:1.6万年前、仙台下町段丘(完新世Ⅰ面):9100～9500年前、仙台下町段丘(完新世Ⅱ面):約2010年前、仙台下町段丘(完新世Ⅲ面):完新世Ⅱ面の形成から近世、仙台下町段丘(完新世Ⅳ面):完新世Ⅱ面の形成から近世と考えられている。



第2図 河岸段丘分布図 (松本・熊谷 2010 の図を一部加筆して使用した。)

これらの河岸段丘のうち、仙台城跡は仙台上町段丘上に立地し、標高は約65mを測り、川内B遺跡は仙台下町段丘完新世I面に立地し、標高は約42.5～47mを測る。仙台城跡と川内B遺跡の間には、仙台上町段丘と仙台中町・下町段丘との境を成す段丘崖があり、現在では明治時代に作られた石垣が北西から南西方向に延びている。

調査地点周辺では青葉山丘陵から広瀬川に流れるいくつかの沢がある。川内B遺跡の南には千貫沢が流れ、隣接する川内A遺跡では近世まで流れていた沢跡や、土石流の跡が見つまっている。仙台城跡の西には沢が流れ、過去の調査で土石流の跡が見つまっている。

2 歴史的環境

今回調査した川内B遺跡と仙台城跡は、仙台城の北、二の丸に隣接し、近世には武家屋敷地であった。遺跡の東側には川内A遺跡と桜ヶ岡公園遺跡の武家屋敷地、南東には経ヶ峰伊達家墓所と大年寺跡の伊達家の墓所など、仙台藩に関わる近世の遺跡がある。近世以前では、青葉山B・E遺跡など旧石器～平安時代の遺物包含地や散布地があり、大年寺山周辺には古墳時代の横穴墓が点在し、南東には中世の板碑群や茂ヶ崎城などがある。

仙台城は慶長5年(1600)に初代藩主伊達政宗によって、国分氏の旧城で廃城となっていた千代城の跡に築城が開始された。築城に伴い城名は、現在の仙台城に改められた。慶長7年(1602)には、それまでの居城であった岩出山城から家臣や町人に移住が行われ、仙台城と城下町の整備が進んだことが窺える。寛永15年(1638)に二代藩主伊達忠宗によって、それまで伊達宗泰の屋敷があった仙台城の北側で、二の丸の築城が開始された。以後二の丸は本丸に代わって、仙台藩の政治が執り行われる政庁として機能していった。元禄年間(1688～1700)に四代藩主伊達綱村によって、二の丸の改造が行われ、かつて五部八姫の屋敷であった天麟院様元御屋敷(西屋敷)を取り込んで、二の丸の範囲が北側に拡張する。また二の丸と北方の武家屋敷の間には千貫沢が東西に流れ、上流には千貫橋、下流には筋違橋の二つの土橋が架けられていた。土橋で千貫沢を堰き止め、二の丸の水堀として利用されていた。しかし大雨などにより土橋は度々流され、二の丸の増改築と共に沢の改修も行われ、川幅が減少している。文化元年(1804)の落雷による火災で、二の丸は全焼し、その後数年をかけて再建される。弘化4年(1847)ころまでに二の丸の北西に亀岡御殿が築かれ、同年に栄心院(十二代藩主伊達齊邦正室)、文久2年(1862)に延寿院(十三代藩主伊達慶邦生母)、明治3年(1870)に徳子(十三代藩主伊達慶邦養女)など仙台藩主に近い女性が居住している。

明治2年(1869)に版籍奉還が行われ、二の丸には勤政庁が置かれた。明治4年(1871)に廃藩置県が行われ、二の丸には東北鎮台(後に仙台鎮台へ改称)が置かれた。明治以降も二の丸の建物は利用されていたが、明治15年(1882)の火災によって焼失してしまった。明治21年(1888)に仙台鎮台を改編し、陸軍第二師団が置かれた。以後第二次世界大戦終了まで使用され、戦後はGHQが駐留し、昭和32年(1957)に返還され、現在は東北大学の川内キャンパスとなっている。

現存する絵図資料から、調査地点の拝領者をまとめた(第1表)。当該地には仙台藩でも、比較的上級の家臣が居住していたことが窺える。特に仙台城跡には一門など、仙台藩主に近い者が居住している。屋敷地の変遷を見ると、正保2年(1645)の「奥州仙台城絵図」(第3図1)では侍屋敷の記述が見られ、その頃までに武家屋敷地として整備されていたと考えられる。それ以降の絵図では屋敷地の境界線と拝領者の名前が描かれている。川内B遺跡では江戸時代を通じて、屋敷地割りの変更は少ない。川内B遺跡の南側にある千貫沢は、元禄4・5年(1691・92)の「仙台城下五層掛絵図」(第3図3)までは、比較的川幅が広いが、以後の絵図では川幅が狭くなっている。仙台城跡では宝暦10年～明和3年(1760～66)の「仙台城下絵図」(第3図5)から、このころまでに屋敷割りの変更されていることがわかる。後に亀岡御殿が築かれ、安政3～6年(1856～59)の「安政補正改革仙府絵図」(第3図6)では、再び境界線が変更されている。明治に入ると、明治8年の「宮城郡仙臺町引圖」(第3図7)では、亀岡御殿の地に鎮台病院が置かれ、のちに明治13年(1880)の「宮城縣仙臺區全圖」(第3図8)では、勸業試験場の用地の一部となっている。明治15

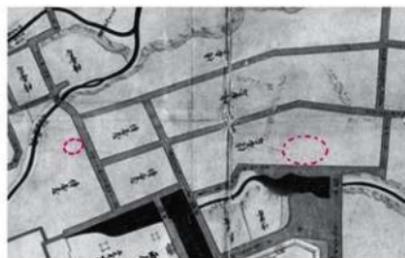
第4節 位置と環境

年(1882)の「櫻臺區及近傍村落之主」(第4図1)では、武家屋敷地全体が陸軍省用地になっている。明治26年(1893)の「仙台市測量全圖」(第4図2)では、陸軍第二師団が置かれたのに伴って、大規模な区画整理が行われ、近世以来の道路や地割りから、現在の道路や地割りに変更されている。

図版	川内B遺跡 西側屋敷地					川内B遺跡 東側屋敷地				
	絵図	拝領者	家格	知行高	所領	絵図	拝領者	家格	知行高	所領
第3図1	記載なし					記載なし				
第3図2	芝多文之丞	芝多常春	着坐	200	小泉・村田	富田忠岐	富田氏紹	着坐	200	小野
第4図1	芝多対馬	芝多常春	着坐	200	小泉・村田	富田忠岐	富田氏紹	着坐	200	小野
第4図2	鮎貝志摩	鮎貝盛益	一家	100	志摩	中嶋	中嶋実信・純信	一族	200	金山
第4図3	大内主膳					亙理内膳	亙理常篤	一家	500	佐沼
第4図4	松前主水	松前広群・ 広致	単一家	200	清水沢・藤田・ 松川	亙理伯耆	亙理基胤	一家	500	佐沼
第4図5	記載なし					記載なし				
第4図6	記載なし					記載なし				
第4図7	陸軍省用地					陸軍省用地				
第4図8	第二師団用地					第二師団用地				

図版	仙台城跡 屋敷地(北側)					仙台城跡 南側屋敷地				
	絵図	拝領者	家格	知行高	所領	絵図	拝領者	家格	知行高	所領
第3図1	記載なし									
第3図2	永沼作左衛門	永沼致信	召出	101						
第4図1	永沼作左衛門	永沼致信	召出	101						
第4図2	遠山帯刀	遠山良房		100						
第4図3	大町将監	大町朗頼	一族	300	金ヶ崎	伊達出羽殿	伊達村嘉	一門	807	宮床
第4図4	泉田大隅	泉田倫時	一家	141	薄衣	伊達六郎殿	伊達村烈	一門	807	宮床
第4図5	亀岡御殿									
第4図6	鎮台病院									
第4図7	筋業試験場									
第4図8	陸軍省用地									

第1表 調査地点の屋敷地拝領者一覧表



1. 正保2・3年(1645・1646)「奥州仙台城絵図」

○ 仙台城跡調査区推定範囲 ○ 川内B遺跡調査区推定範囲 青森県史学会蔵



2. 延宝9年～天和3年(1681～83)「仙台城下絵図」

仙台市歴史民俗資料館蔵

第3図 調査区周辺の絵図・地図(1)



1. 元禄4・5年(1691-92)「仙台下五層掛絵図」

西郷報忠会所蔵



2. 宝暦10年～明和3年(1760～66)「仙台下絵図」

西郷報忠会所蔵



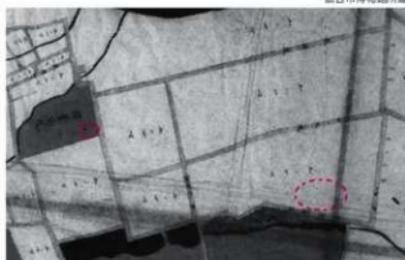
3. 天明6年～寛政元年(1786～89)「仙台下絵図」

仙台市博物館所蔵



4. 安政3～6年(1856～59)「安政補正改革仙府絵図」

蔵没失



5. 明治8年(1875)「宮城郡仙臺町地引圖」

宮城県公文書館所蔵



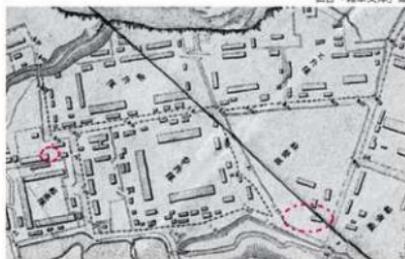
6. 明治13年(1880)「宮城縣仙臺區全圖」

仙台「雜草文庫」蔵



7. 明治15年(1882)「權臺區及近傍村落之図」

仙台市博物館所蔵



8. 明治26年(1893)「仙台市測量全圖」

仙台「雜草文庫」蔵

○ 仙台城跡調査区指定範囲 ○ 川内B遺跡調査区指定範囲

第4図 調査区周辺の絵図・地図(2)



第5図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名称	時代	所在地	性格	番号	遺跡名称	時代	所在地	性格
1	川内B遺跡	縄文・近世	青葉区川内	武家屋敷	17	大年寺山橋穴墓群	古墳	太白区向山4丁目	橋穴墓
2	仙台城跡	中世・近世	青葉区川内・荒巻	城跡群	18	八木山緑町遺跡	弥生・奈良・平安	太白区八木山緑町	集落跡
3	川内A遺跡	縄文・近世	青葉区青葉山2丁目	武家屋敷・散布地	19	森ヶ丘遺跡	縄文晩・奈良・平安	太白区森ヶ丘	散布地
4	桜ヶ岡公園遺跡	縄文・近世	青葉区桜ヶ岡公園	武家屋敷・散布地	20	土樋遺跡	縄文	青葉区土樋1丁目	散布地
5	餅ヶ家伊達家墓所	近世	青葉区墓屋下	墓所	21	向山高貴遺跡	縄文中期	太白区八木山緑町	散布地
6	大年寺跡	近世	太白区茂ヶ崎1丁目	墓所	22	青葉山E遺跡	縄文早・中・晩・弥生・奈良・平安	青葉区荒巻字青葉	包合地
7	長徳寺砦跡	中世	青葉区向山2丁目	砦跡	23	青葉山B遺跡	縄文早・中・晩・弥生・奈良・平安	青葉区荒巻字青葉	包合地
8	川内古砦跡	中世	青葉区川内・荒巻	砦跡	24	森ヶ丘遺跡	縄文	太白区八木山本町1丁目	散布地
9	片平船子大神宮の砦跡	中世	青葉区片平1丁目	砦跡	25	二ツ尻遺跡	縄文	太白区八木山孫生町	散布地
10	滝ヶ崎砦跡	中世	太白区茂ヶ崎1丁目他	城跡群	26	森ヶ丘B遺跡	縄文	太白区森ヶ丘・高橋	散布地
11	青葉山二丁目遺跡	奈良・平安	太白区青葉山2丁目他	散布地	27	青山二丁目B遺跡	旧石器・縄文	太白区青山2丁目	散布地
12	茂ヶ崎橋穴墓群	古墳・奈良	太白区二ツ尻	橋穴墓	28	杉ヶ手	近世	太白区茂ヶ崎3丁目他	線路付土手
13	二ツ尻橋穴墓群	古墳	太白区二ツ尻	橋穴墓	29	延元二車砦跡	中世	青葉区八橋	砦跡
14	愛宕山橋穴墓群A地点	古墳	太白区向山4丁目他	橋穴墓					
15	愛宕山橋穴墓群B・C地点	古墳・奈良	太白区向山4丁目他	橋穴墓					

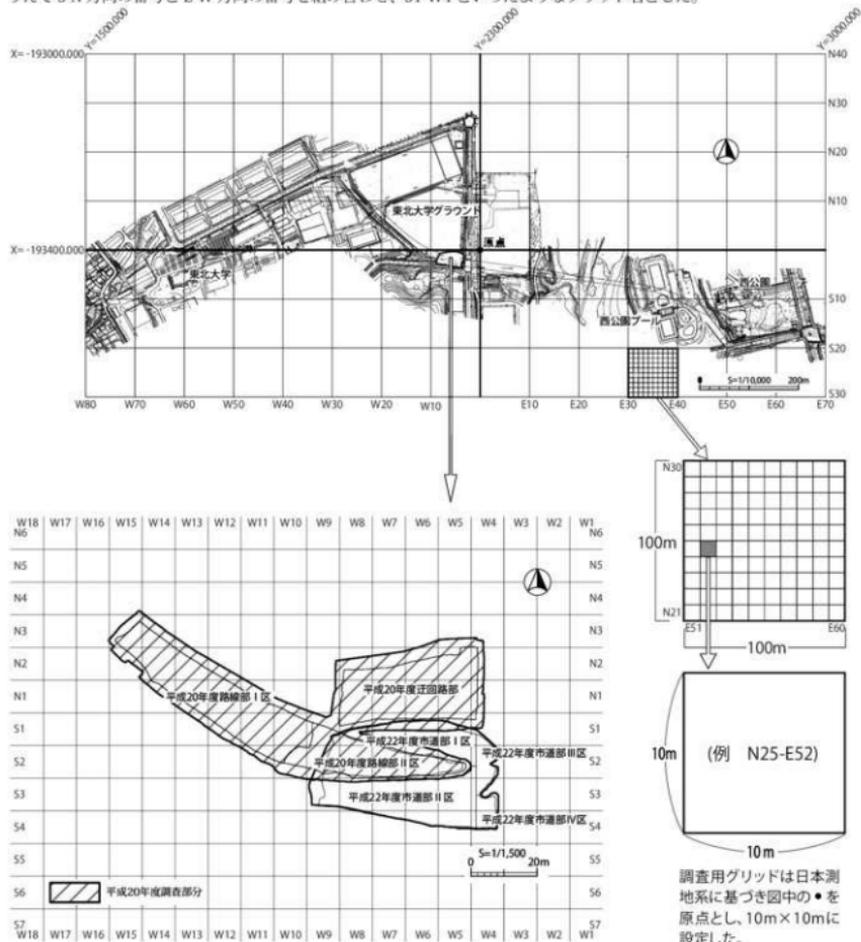
第2表 遺跡地名表

第2章 川内B遺跡

第1節 調査区グリッドの設定と基本層序

1 調査区グリッドの設定

高速鉄道東西線計画路線に関わる青葉山地区、川内地区、西公園地区の全域を網羅するグリッドが既に設定されており、今回の調査でもそのグリッドに準拠して調査を実施した。日本測地系: X=193400m, Y=2300mの座標点を原点として、10m単位の方眼を設定し、東西南北それぞれの方向へE1・W2・S3・N4というように方位記号と番号を付した。そのうえでS-N方向の番号とE-W方向の番号を組み合わせ、S1-W4といったようなグリッド名とした。



第6図 川内B遺跡グリッド設定図

調査用グリッドは日本測地系に基づき図中の●を原点とし、10m×10mに設定した。

2 基本層序

現代の土層は第二次大戦後、GHQ 駐屯時及び GHQ 撤収後の東北大学が盛土・整地したもので、今回調査では表土として掘削し、近代の整地層以下を基本層序として設定した。基本層序は、近代の整地層から自然堆積層までを6層に大別した上で、各層を細分した。I層は近代以降の盛土・整地層であり、II～V層までは近世の整地層である。近世の整地層については、屋敷境の石組溝（SD5・SD8）を中心に、その他の遺構の検出面と土層の関係を基に4層に大別し、また、平成20年度調査及び市道部I区・II区の土層との連続性を確認して設定した。

I層は近代以降に東北鎮台・第二師団が盛土・整地した土層で、4層（I-1～I-4）に細分される。市道部I区では暗褐色の砂質シルトを主体とするI-1層が西から東へ向かって緩やかに下り堆積する。市道部II区では近代以降に切り土や削平、盛土が大幅に行われたと考えられ、I層は西側に黒色シルトを主体とするI-2層が水平に堆積している程度である。平成20年度調査のII層に対応する。

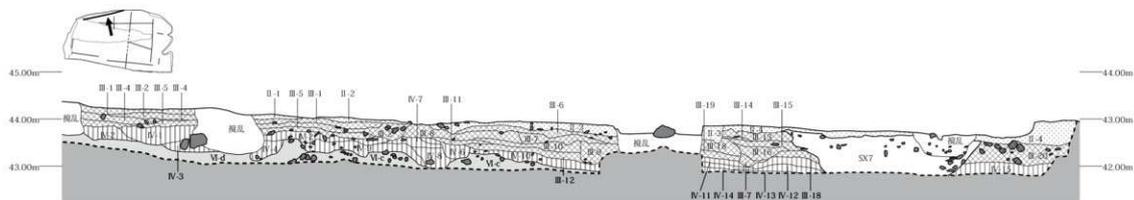
II層は近世の整地層で、25層（II-1～II-25）に細分される。市道部I区では黒褐色や暗褐色の砂質シルト層と暗褐色や褐色のシルト層が西から東へ、南から北へ向かって下り堆積する。ただし、III層以下の堆積と比較すると、傾斜は緩やかになる。他層よりも層が厚く、礫の含有量が多い。西側は近代以降に削平を受け、II層は検出されなかった。市道部II区では黒色や褐色のシルト層・砂質シルト層が、西から東へむかって下り堆積している。また、中央部分ではII層が検出されなかった部分も見られるが、比較的安定した堆積が見られる。西側ではほぼ水平な安定する整地も確認できた。II層からの出土遺物は19世紀前半のものが主体で、整地は19世紀前半以降に行われたと考えられる。平成20年度調査のIII層は、土層の色調や礫の含有量が多く、土層の特徴が共通していることから、同一層と考えられる。

III層は近世の整地層で、53層（III-1～III-53）に細分される。全体的に様々な色調の比較的小規模な土層が重なり合い、礫の含有量が多い。市道部I区では黒褐色のシルトと暗褐色や褐色の砂質シルトを主体とする層が西から東へ向かって下り、南から北へ向かって下り堆積している。市道部II区では黄褐色や褐色のシルト・砂質シルト層が主体となる。中央部分では市道部I区よりレベルが若干高くなるが、全体的には西から東へ向かい下り傾斜して堆積している。また、中央部分ではIII層が検出されなかった部分も見られるが、比較的安定した堆積が見られる。特に、II層同様西側ではレベルがほぼ水平な安定する整地も確認できた。III層からの出土遺物は18世紀中葉から19世紀前葉のものが主体で、整地は19世紀前葉頃に行われたと考えられる。平成20年度調査のIV層は、黒褐色、黄褐色、暗灰黄色等様々な色の比較的小規模な土層が重なり合い、多量の礫が含まれ、比較的短期間の間に盛土されたもので、土層の特徴が共通していることから、同一層と考えられる。

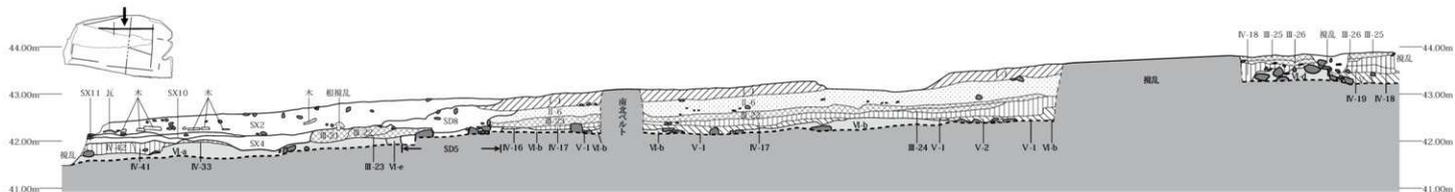
IV層は近世の整地層で、42層（IV-1～IV-42）に細分される。市道部I区では概ね黒褐色のシルト層が西から東へ向かって下り、南から北へ向かって下り堆積している。市道部II区では暗褐色や褐色の砂質シルトも含まれるようになる。中央部分では市道部I区よりレベルが若干高くなるが、全体的には西から東へ向かい下り傾斜して堆積している。また、市道部II区ではIV層が検出されなかった部分も見られ、市道部I区ほど安定した堆積は見られなかった。市道部I・II区ともに、整地層中の礫の含有量が比較的少量である。IV層からの出土遺物は17世紀後葉から18世紀中葉のものが主体で、整地は18世紀中葉頃に行われたと考えられる。平成20年度調査のV層は、黒褐色の土層で比較的安定した堆積が見られ、SD5（平成20年度調査SD3）が機能していた面などの特徴が共通することから、同一層と考えられる。

V層は市道部I区の一部のみで確認され、3層（V-1～V-3）に細分される。黒色シルトと黒色粘土が主体で、西から東へ向かって低く傾斜する自然堆積層の傾斜変換部分直上に堆積が見られる。V層からの出土遺物は縄文土器のみである。平成20年度調査と対応する土層は見られない。

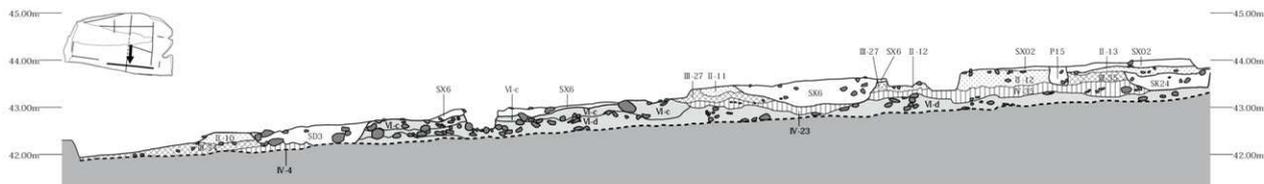
VI層は自然堆積層で、5層（VI-a～VI-e）に大別される。にぶい黄褐色の砂礫層、黄褐色の砂層、暗褐色の砂質シルト層、にぶい黄褐色の砂質シルト層、灰オリーブ色の5層に分類される。調査区全体での堆積状況を概観すると、概ね砂礫層は調査区東側、砂層は調査区中央北側の傾斜部分と調査区南西側、暗褐色の砂質シルト層は調査区西側、にぶい黄褐色



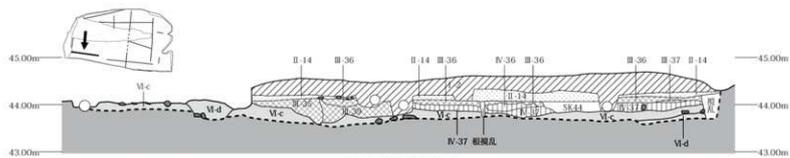
I区北壁断面図



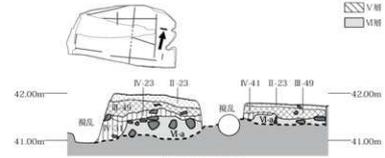
I区東西ベルト断面図



II区撥乱南壁断面図



II区西側南壁断面図

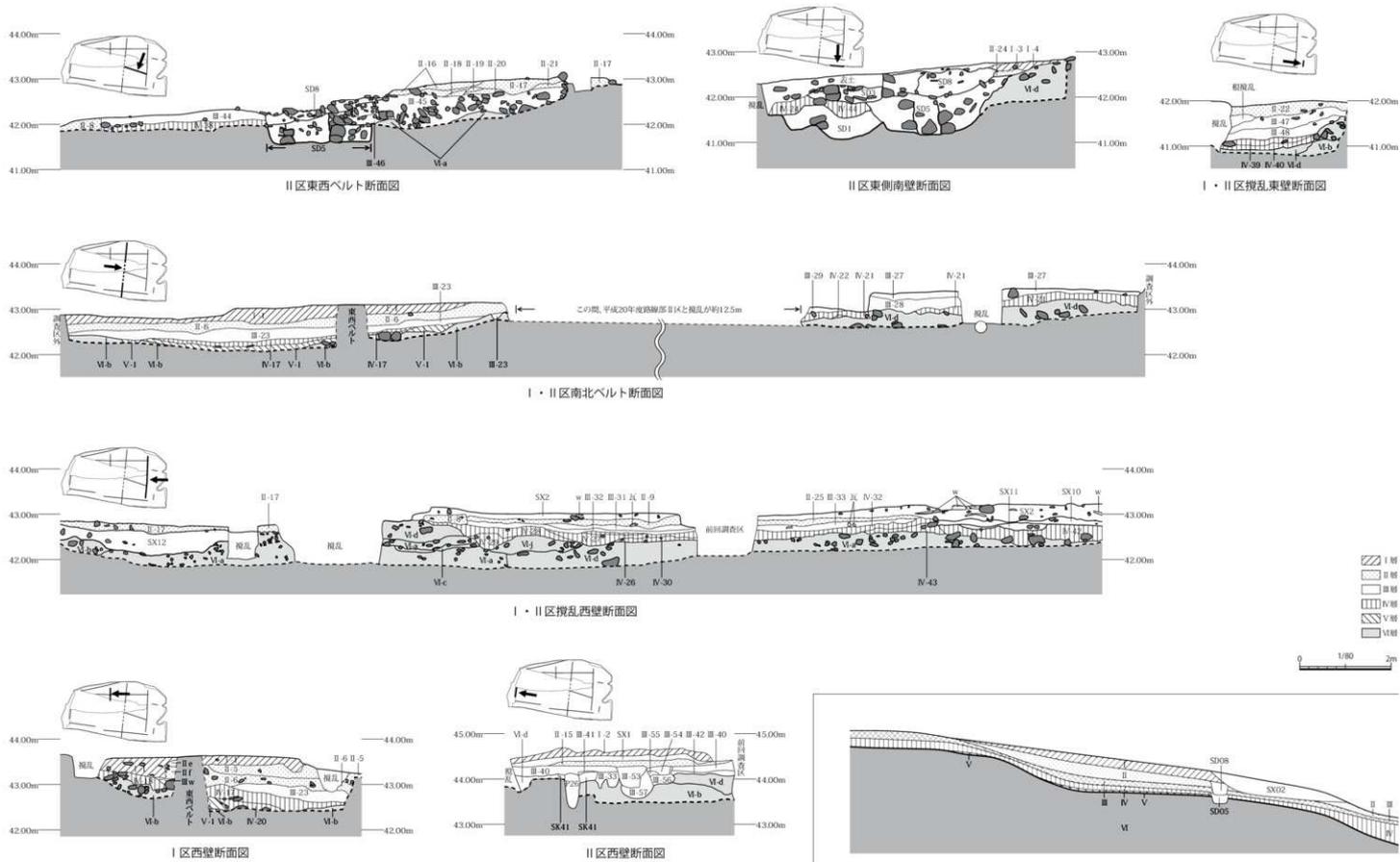


III区北壁断面図

第7図 調査区壁・ベルト断面図(1)

-  I期
-  II期
-  III期
-  IV期
-  V期
-  VI期





第8図 調査区壁・ベルト断面図(2)

第9図 基本層序概念図

の砂質シルト層は調査区南側と全体に所々堆積している。粘土層は調査区北東の一部で確認されたが、全体には広がっていない。自然堆積層の地形は、全体的に南西から北東に向かい下り傾斜している。平成20年度調査のⅧ層に対応する。

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I-1	10YR3/3	暗褐色 砂質シルト	あり	やや強	赤褐色粒少量。黄色砂質中層。炭化物少量。径1~10cmの礫多量
I-2	10YR2/1	黒色 シルト	やや強	やや強	下層に径1~3cmの礫多量
I-3	10YR4/2	灰黄褐色 シルト	やや強	やや強	径0.5~3cmの礫少量
I-4	10YR4/4	褐色 砂質シルト	あり	強	径1~3cmの礫多量
II-1	10YR3/4	暗褐色 シルト	あり	やや強	径0.5~3cmの礫少量
II-2	10YR3/4	にがい黄褐色 シルト	やや弱	強	黒色シルト少量。径0.5~3cmの礫多量
II-3	10YR4/4	褐色 シルト	弱	強	黒色シルト少量。径1~3cmの礫中層
II-4	2.5Y2/2	暗褐色 砂質シルト	あり	やや強	径3~5mmの炭化物粒少量。径0.5~2cmの礫少量
II-5	10YR3/2	黒褐色 砂質シルト	あり	やや強	赤褐色粒少量。黄褐色粒中層。炭化物中層。径1~10cmの礫少量
II-6	10YR3/3	暗褐色 砂質シルト	あり	やや強	赤褐色粒少量。黄褐色粒中層。炭化物中層。径1~10cmの礫中層
II-7	2.5Y2/1	黒褐色 シルト	あり	やや強	赤褐色シルト少量。径1mmの白色粘粒層。径0.1~0.5cmの礫少量。径10~20cmの礫少量
II-8	10YR4/3	にがい黄褐色 砂	弱	やや強	径5mmの炭化物粒層。径5cmの礫少量
II-9	10YR1/7/1	黒色 シルト	あり	やや強	径1~3cmの礫少量
II-10	10YR3/3	にがい黄褐色 シルト	あり	やや強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層。径1mmの白色粘粒層。径3~8mmの炭化物粒層。径1~10cmの礫少量
II-11	10YR3/2	黒褐色 砂質シルト	やや弱	やや強	褐色土ブロック少量。炭化物少量。径2~3cmの礫少量
II-12	10YR4/4	褐色 砂質シルト	あり	強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層。径1~5cmの礫少量
II-13	10YR3/2	黒褐色 シルト	あり	強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層。径3~5mmの炭化物中層。径1~5cmの礫少量
II-14	10YR3/4	暗褐色 砂質シルト	やや強	あり	径0.1~2cmの礫少量
II-15	10YR3/3	にがい黄褐色 シルト	やや強	強	暗褐色シルト少量。径0.2~0.5cmの礫少量
II-16	2.5Y4/2	暗黄褐色 砂質シルト	あり	やや強	炭化物中層。径3~5cmの礫少量。径25cmの礫少量
II-17	2.5Y4/4	黄褐色 砂	弱	やや強	炭化物粒層。径1~10cmの礫少量
II-18	10YR3/1	黄褐色 砂質シルト	あり	やや強	炭化物中層
II-19	2.5Y4/1	黄褐色 砂	やや弱	あり	炭化物少量
II-20	2.5Y4/1	黄褐色 砂質シルト	あり	やや強	炭化物中層
II-21	2.5Y4/1	黄褐色 砂質シルト	あり	やや強	径3~6cmの礫少量
II-22	10YR3/4	暗褐色 シルト	あり	やや強	径2~3mmの炭化物粒少量。径1~3cmの礫少量
II-23	2.5Y3/1	黒褐色 シルト	弱	強	
II-24	10YR5/2	灰黄褐色 砂質シルト	やや強	強	径0.3~0.5cmの礫少量。砂中層
III-25	5Y2/1	黒色 シルト	強	強	径5~10mmの暗褐色粘土塊層。径5mmの炭化物粒少量。腐食土中層。径1~10mmの焼土粒中層
III-1	10YR3/3	暗褐色 シルト	あり	やや強	径2~3mmの明黄褐色粘粒少量。径0.5~1cmの礫少量
III-2	10YR3/2	黒褐色 シルト	やや強	やや強	径1~8mmの明黄褐色粘粒層。黒色シルト少量。径0.5~3cmの礫少量
III-3	10YR3/3	暗褐色 シルト	やや強	あり	径1~3mmの明黄褐色粘粒層。径2~3mmの炭化物少量。径0.5cmの礫少量。径5cmの礫少量
III-4	10YR3/3	にがい黄褐色 砂	弱	あり	径0.1~1mmの明黄褐色粘土中層。径0.1~0.5cmの炭化物粒層。径0.5~3cmの礫中層。径5~10cmの礫少量
III-5	10YR3/2	黒褐色 シルト	やや強	やや強	径2~3mmの明黄褐色粘粒。径1~5cmの礫少量
III-6	10YR3/3	暗褐色 シルト	あり	やや強	径3~5mmの炭化物粒少量。径1~3cmの礫少量。径10~30mmのにがい黄褐色砂質シルトブロック少量。径2~3mmの10YR3/4明黄褐色粘粒層
III-7	10YR3/3	暗褐色 砂質シルト	あり	あり	径1mmの赤褐色粒少量。径5~10mmのにがい黄褐色砂質シルトブロック少量。径3~5mmの炭化物粒少量。径1~5cmの礫少量。ボソボソとした土質
III-8	10YR3/2	黒褐色 シルト	あり	強	径0.1~0.5cmの明黄褐色粘粒中層。0.1~0.2cmの白色粘粒少量。径1~5cmの礫少量。径5~20cmの礫少量
III-9	10YR4/2	灰黄褐色 砂質シルト	あり	やや強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層。径0.3~3cmの礫少量
III-10	10YR3/3	暗褐色 シルト	やや弱	やや強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層。径1~5cmの礫少量
III-11	10YR3/2	黒褐色 シルト	あり	強	径1~2mmの明黄褐色粘粒層
III-12	10YR2/2	黒褐色 シルト	あり	強	径1~2mmの明黄褐色粘粒層。径3cmの礫少量
III-13	10YR4/2	灰黄褐色 砂質シルト	やや強	強	径0.5~2cmの礫多量
III-14	10YR4/3	にがい黄褐色 シルト	あり	強	径5mmの炭化物粒少量
III-15	10YR4/2	灰黄褐色 砂質シルト	やや強	やや強	径3~5mmのにがい黄褐色粒少量。径0.3~0.8cmの礫中層
III-16	10YR3/3	暗褐色 シルト	あり	強	径1~3mmの炭化物粒少量。径0.5~2cmの礫少量
III-17	10YR3/1	黒褐色 シルト	やや強	強	径1~2mmの明黄褐色粘粒層。径1~3cmの礫少量
III-18	10YR3/2	黒褐色 シルト	あり	強	赤褐色粒中層。径3~5mmの炭化物粒少量。径0.5~2cmの礫少量。径5cmの礫少量
III-19	10YR3/2	黒褐色 シルト	あり	強	赤褐色粒中層。径1~2mmの明黄褐色粘粒層。径3~5mmの炭化物粒少量
III-20	2.5Y4/2	暗黄褐色 砂質シルト	やや弱	やや強	径2~3cmの礫中層。径5~20cmの礫少量
III-21	5Y4/2	灰キリープ色 砂質シルト	やや強	やや強	炭化物少量。径3~5cmの礫少量
III-22	5Y3/2	オリブ黒色 砂質シルト	あり	やや強	炭化物粒層。径2~8cmの礫中層
III-23	2.5Y4/1	黄褐色 シルト	やや強	やや強	径1~5cmの礫少量
III-24	10YR4/1	褐色 シルト	やや強	やや強	径0.1~0.5cmの明黄褐色粘粒中層。0.1~0.2cmの白色粘粒少量。径1~5cmの礫少量。径5~20cmの礫少量
III-25	10YR3/1	黒褐色 砂質シルト	あり	やや強	炭化物粒層。黄色砂質粒少量。径1~5cmの礫少量
III-26	2.5Y6/6	明黄褐色 砂質シルト	やや弱	あり	径1~10cmの礫中層
III-27	10YR3/4	暗褐色 シルト	やや強	やや強	径2~3mmの明黄褐色粘粒層。径1mmの白色粘粒少量。黒色シルト少量。径0.3~0.5cmの礫少量。径1~3cmの礫少量
III-28	10YR4/6	褐色 砂質シルト	やや弱	やや強	径2~3mmの明黄褐色粘粒層。径1mm白色粘粒層。径0.5~1cmの礫少量。径3~5cmの礫少量
III-29	10YR3/4	暗褐色 砂質シルト	あり	やや強	径5mmの明黄褐色粘粒層。黒色シルト少量。径1~3cmの礫少量
III-30	10YR4/2	灰黄褐色 シルト	あり	強	にがい黄褐色粒少量。径0.2~0.5cmの礫少量
III-31	10YR3/2	黒褐色 シルト	やや強	やや強	赤褐色粒少量。径5~10mmの炭化物粒層。砂粘層。径0.5~2cmの礫少量
III-32	10YR4/2	灰黄褐色 シルト	やや強	強	径1~3mmの白色粘粒層。赤褐色シルト少量。径1~3mmの炭化物粒少量
III-33	2.5Y2/1	黒色 シルト	強	強	径5~10mmの暗褐色粘土塊層。にがい黄褐色粘土下に少量。腐食土中層。径3~20mmの焼土粒少量。径10~30mmの炭化物粒少量

第3表 調査区壁・ベルト土層観察表(1)

第1節 調査区グリッドの設定と基本順序

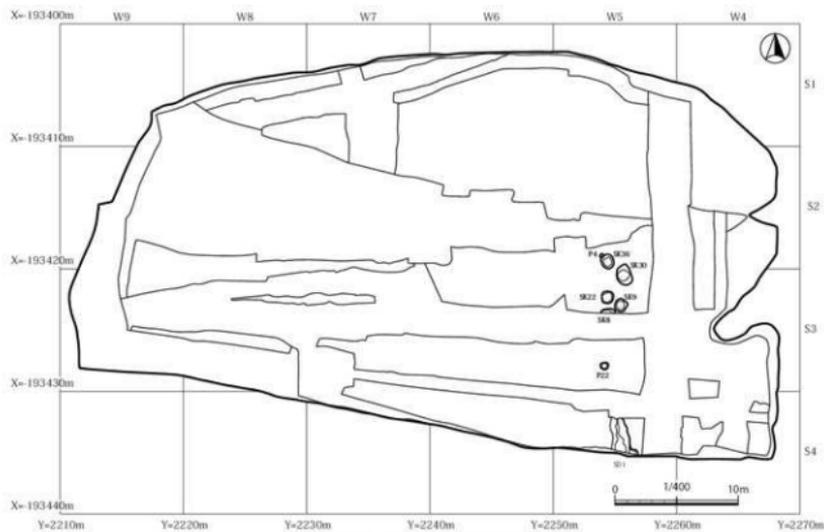
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
III-34	10YR3/3	暗褐色	シルト	やや強	灰黄褐色粘土層, 径1~10cmの礫少量, 径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 径1mmの白色粘粒少量, 径3~8mmの炭化物粘塊	
III-35	10YR4/3	にがい・黄褐色	砂質シルト	やや強	無	
III-36	10YR4/4	褐色	砂質シルト	やや強	あり	
III-37	10YR5/6	黄褐色	シルト	強	径0.5~2cmの礫層	
III-38	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	あり	やや弱	白色粘粒層, 径0.5~1cmの礫層
III-39	10YR4/4	褐色	砂質シルト	あり	やや弱	白色粘粒層, 径1~10cmの礫少量
III-40	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	やや強	径0.1~1cmの明黄褐色粘土層, 径0.1~0.5cmの炭化物粘塊, 径0.5~3cmの礫少量
III-41	10YR2/3	黒褐色	シルト	あり	強	径1~2cmの礫層
III-42	10YR3/3	暗褐色	シルト	やや強	強	径2~3mmの明黄褐色粘粒層, 径0.5~2cmの礫層
III-43	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	強	径0.1~1cmの明黄褐色粘土層, 径0.1~0.5cmの炭化物粘塊, 径0.5~3cmの礫少量, 径5~10cmの礫層
III-44	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	あり	やや強	赤褐色粘粒層, 炭化物少量, 径1~5cmの礫少量
III-45	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	径1~30cmの礫少量(礫層)
III-46	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	あり	やや強	径1~20cmの礫少量(礫層)
III-47	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	やや強	径1mmの明黄褐色粘粒層, 径1~3cmの礫層
III-48	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	やや強	径0.3~1cmの礫少量, 径1~5cmの礫少量, 径1mmの赤褐色粘粒層
III-49	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	強	径0.1~0.2cmの白色粘粒層, 径0.5~3cmの礫少量
III-50	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	強	径0.5~1mmの明黄褐色粘粒層, 径1~2cmの礫層
III-51	10YR3/4	にがい・黄褐色	シルト	やや弱	強	面に沿い、10YR4/3に変わる
III-52	10YR2/2	黒褐色	シルト	あり	強	径2~3mmの明黄褐色粘粒層
III-53	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	やや強	にがい・黄褐色シルト少量, 径1~3cmの礫層
IV-1	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 径3~5mmの炭化物粘塊, 径1~10cmの礫少量
IV-2	10YR3/3	暗褐色	シルト	やや強	やや弱	径1~3cmの礫層
IV-3	7.5YR3/3	暗褐色	砂質シルト	弱	強	径0.1~0.5cmの礫層, 径5~20cmの礫層
IV-4	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径1~5cmの礫少量
IV-5	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 径1~3cmの礫少量
IV-6	10YR3/2	黒褐色	シルト	あり	強	赤褐色粘粒層, 径1~2mmの明黄褐色粘粒層, 径1~3cmの礫層
IV-7	10YR2/1	黒色	シルト	やや強	やや強	径1~2mmの明黄褐色粘粒層, 径1~5cmの礫少量
IV-8	10YR2/1	黒褐色	シルト	あり	強	径1~2mmの明黄褐色粘粒層, 径0.1~0.3cmの礫少量, 径1~3cmの礫層
IV-9	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 径1~3cmの礫少量
IV-10	10YR3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 暗褐色シルト少量, 径3~5cmの礫層
IV-11	10YR3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや強	赤褐色粘粒層, 径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 径0.5~3cmの礫層
IV-12	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや強	強	赤褐色粘粒層, 径1~2mmの明黄褐色粘粒層
IV-13	10YR2/1	黒色	シルト	強	やや強	無
IV-14	10YR4/1	褐灰色	シルト	強	やや強	無
IV-15	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	強	径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 径1~2cmの礫少量
IV-16	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや強	赤褐色粘粒層, 径1cmの礫層
IV-17	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	強	やや強	赤褐色粘粒層, 黄色砂質粘粒層, 径1~3cmの礫少量
IV-18	10YR2/1	黒色	砂質シルト	やや強	あり	黄褐色砂質シルトブロック少量, 径5~10cmの礫少量
IV-19	10YR3/4	にがい・黄褐色	砂質シルト	やや強	あり	径3~15cmの礫少量
IV-20	2.5Y2/1	黒色	粘土	やや強	あり	鉄分中量, 径15cmの礫層
IV-21	10YR4/6	褐色	砂質シルト	あり	強	径1mm明黄褐色粘粒層, 黒褐色シルト少量, 径0.3~0.5cmの礫少量, 径1~5cmの礫少量
IV-22	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	やや強	径0.3~0.5cmの礫層
IV-23	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径0.5~3cmの礫層
IV-24	10YR4/3	にがい・黄褐色	砂質シルト	強	強	径0.5~1cmの礫層, 径3~5cmの礫少量
IV-25	10YR5/4	にがい・黄褐色	砂質シルト	やや強	強	径0.3~1cmの礫少量
IV-26	7.5Y4/4	褐色	砂	弱	強	径5mmの炭化物粘塊, 径0.1~0.5cmの礫層
IV-27	10YR2/3	黒褐色	シルト	あり	強	径1~5mmの炭化物粘塊, 径1~5cmの礫少量
IV-28	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	やや強	赤褐色粘粒層, 径1~3mmの明黄褐色粘粒層, 径1~5mmの炭化物粘塊, 径1~3cmの礫少量
IV-29	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	あり	強	赤褐色粘粒層, 径1~3mmの炭化物粘塊, 径5~25cmの礫少量
IV-30	2.5Y2/1	黒色	シルト	あり	あり	径0.1~0.5cmの明黄褐色粘粒層, 0.1~0.2cmの白色粘粒層, 径1~5cmの礫少量, 径5~20cmの礫層
IV-31	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	あり	強	径0.1~0.5cmの明黄褐色粘粒層, 0.1~0.2cmの白色粘粒層, 径1~5cmの礫少量, 径5~20cmの礫層
IV-32	10YR2/2	黒褐色	シルト	あり	やや強	赤褐色粘粒層, 径5mmのにがい・黄褐色粘土粘塊層, 径1~3cmの礫層
IV-33	7.5Y5/2	灰オリーブ色	砂	弱	やや弱	径1~3cmの礫層
IV-34	2.5Y4/1	灰黄色	粘土質シルト	やや強	やや強	径0.3~0.5cmの礫層, 径2~3mmの炭化物粘塊
IV-35	10YR3/4	暗褐色	シルト	やや強	やや強	径1~3cmの礫層, 径1mmの白色粘粒層
IV-36	10YR2/3	黒褐色	シルト	強	あり	径0.5~2cmの礫層
IV-37	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径1~10cmの礫少量, 黄褐色粘粒層, 白色粘粒層
IV-38	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	やや強	やや強	赤褐色粘粒(鉄分)中量, 径1~20cmの礫少量
IV-39	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径3~5cmの礫層
IV-40	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや強	やや強	径1~3cmの礫層
IV-41	7.5Y5/2	灰オリーブ色	シルト	やや強	やや強	黄褐色土ブロック少量, 径10~25cmの礫少量
IV-42	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	強	やや強	赤褐色粘粒少量, 径1~25cmの礫少量
V-1	10YR2/1	黒色	シルト	やや強	あり	鉄分少量
V-2	2.5Y2/1	黒色	粘土	強	強	鉄分中量, 径15cmの礫層
V-3	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	やや弱	やや強	径1~12cmの礫層
V-4	10YR3/3	にがい・黄褐色	砂	弱	やや強	砂少量, 径1~20cmの礫少量
V-5	2.5Y3/3	黄褐色	砂	あり	あり	径1~10cmの礫層
V-6	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	やや強	径1~15cmの礫少量
V-7	10YR4/3	にがい・黄褐色	砂質シルト	あり	やや強	径1~10cmの礫少量
V-8	7.5Y3/3	灰オリーブ色	粘土	強	やや強	径1~2cmの礫少量

第4表 調査区壁・ベルト土層観察表(2)

第2節 検出遺構と遺物

1 VI層上面検出遺構

VI層上面で検出された遺構は、溝跡1条、土坑5基、ピット2基である。遺構は、市道部Ⅱ区の東側に見られる。遺構数、遺物数ともに少ない。

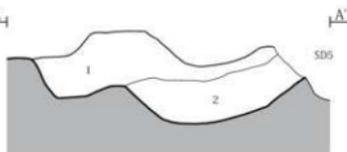


第10図 VI層上面検出遺構配置図

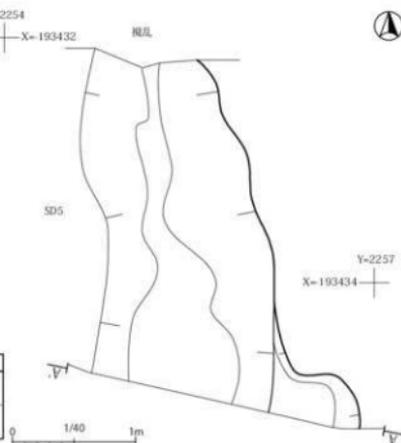
(1) 溝跡

1) SD1 溝跡 (第11図、図版4-8、7-1・2、33-1)

S4-W5グリッドに位置する。南北に延びる溝状を呈する遺構である。南側は調査区外へ続き、北側は規乱に、西側はSD5により壊される。残存規模は、長さ210cm、上端幅52～159cm、下端幅8～62cm、深さ最大32cmで、南側に向かって幅が広がる。主軸方向N-6°-Wを指す。

41.90m A₁

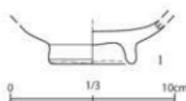
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
1	2.5Y4/2	暗灰褐色	シルト	強	やや強	砂中量、径0.5～1cmの礫少量、径3～10cmの礫多量
2	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂質シルト	やや強	強	径0.5～1cmの礫中量、径3～10cmの礫多量



第11図 SD1 溝跡平面図・断面図

第2節 検出遺構と遺物

底面は起伏を有し、壁面は南東側で段をもちながら立ち上がり、断面形は不整形を呈する。堆積土は暗灰黄色シルトと砂質シルトの2層からなる。また、10～40cm程の円礫が検出面に多量に含まれていた。遺物は17世紀中葉から後葉の肥前産陶器の円器手碗が出土している。



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	胎土	文様	輪軸 軸付	口径	法量 (cm) 口径 底径 器高	産地	時期	備考	登録番号
1	33-1	S4W5	SD1 土層	陶器	中碗	円器手碗	体部・高台	赤		戻軸	—	4.80 (2.70)	肥前	17c 中～後	全面施釉 唇付垂むね跡	170

第12図 SD1 溝跡出土遺物

(2) 土坑

1) SK8 土坑 (第13図、図版7-3・8)

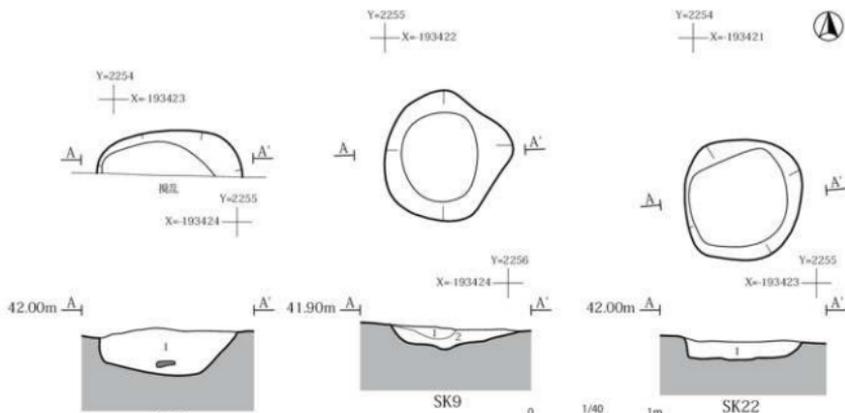
S3-W5 グリッドに位置する。南側は攪乱により壊されており、残存規模は、長軸117cm、短軸37cm、深さ27cmを測る。平面形は楕円形と考えられる。断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

2) SK9 土坑 (第13図、図版7-4・8)

S3-W5 グリッドに位置する。規模は、長軸107cm、短軸105cm、深さ17cmを測る。平面形は不整形円で、断面形は不整形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする2層からなる。遺物は出土していない。

3) SK22 土坑 (第13図、図版7-5・6・8)

S3-W5 グリッドに位置する。規模は、長軸108cm、短軸102cm、深さ12cmを測る。平面形は円形で、断面形は底部が平坦な皿形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SK8	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	あり	やや強
						赤褐色粒少量、径1～3mmの明黄褐色粒微量、径0.3～0.8cmの礫少量、径2～3cmの礫微量
SK9	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強
						赤褐色粒多量、径3cmの礫微量
	2	10YR3/1	黒褐色	シルト	あり	やや強
						赤褐色粒少量、径1～3mmの明黄褐色粒微量、径3cmの礫微量
SK22	1	10YR3/1	黒褐色	シルト	強	強
						径0.5～3cmの礫微量

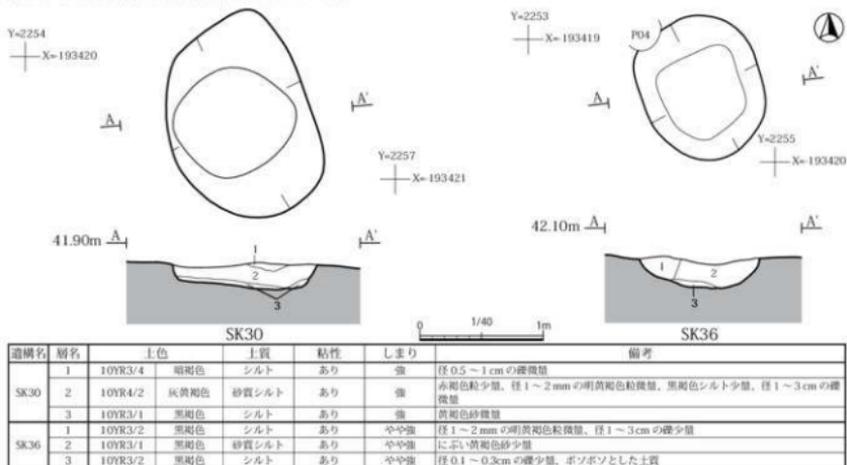
第13図 SK8・9・22 土坑平面図・断面図

4) SK30 土坑 (第14図、図版7-8)

S3-W5グリッドに位置する。規模は、長軸171cm、短軸117cm、深さ20cmを測る。平面形は不整形円形で、断面形は底部がほぼ平坦な逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色砂質シルトを主体とする3層からなり、底面直上に黒褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

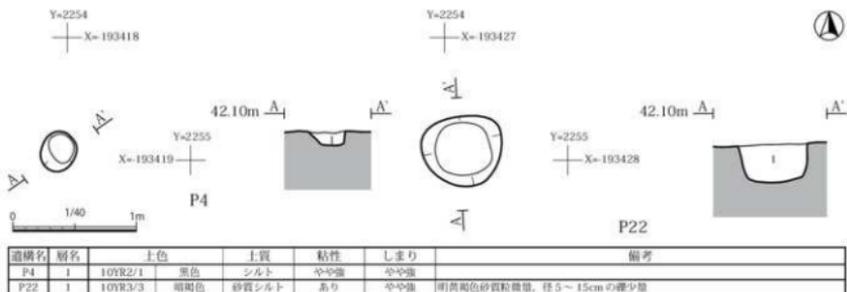
5) SK36 土坑 (第14図、図版7-7・8)

S2-W5グリッドに位置し、北西側でP4により一部壊される。規模は、長軸118cm、短軸101cm、深さ22cmを測る。平面形は円形で、断面形は底面がほぼ平坦な皿形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトと黒褐色シルトを主体とする3層からなる。遺物は縄文土器片が出土している。



第14図 SK30・36土坑平面図・断面図

(3) ピット (第15図、第5表)



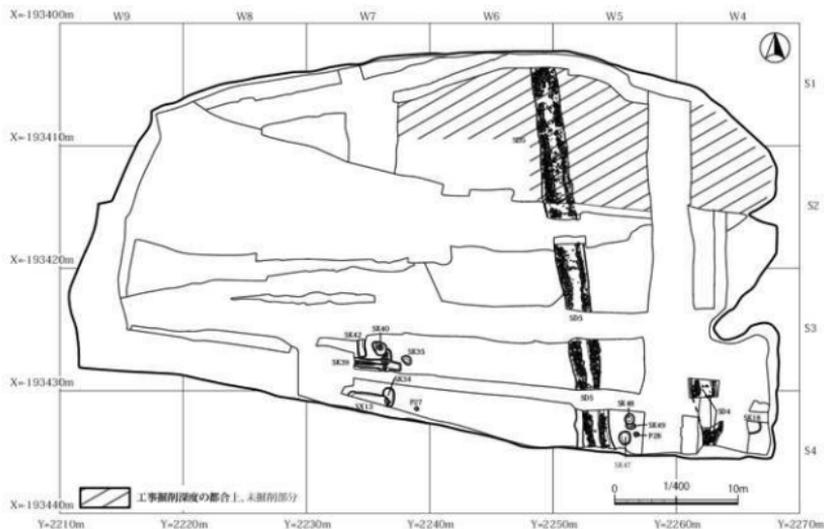
第15図 P4・22平面図・断面図

遺構名	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
P4	S2-W5	33	29	11	不整形円形	皿形	SK36→P4	
P22	S3-W5	65	59	20	不整形円形	皿字形		

第5表 P4・22観察表

2 IV層上面検出遺構

IV層上面で検出された遺構は、溝跡2条、土坑9基、性格不明遺構1基、ピット2基である。遺構は、主に市道部Ⅱ区中央からⅢ区で検出された。市道部Ⅰ区の一部は工事掘削深度の都合上、上層のⅢ層までの調査となり、IV層の調査は行っていない。



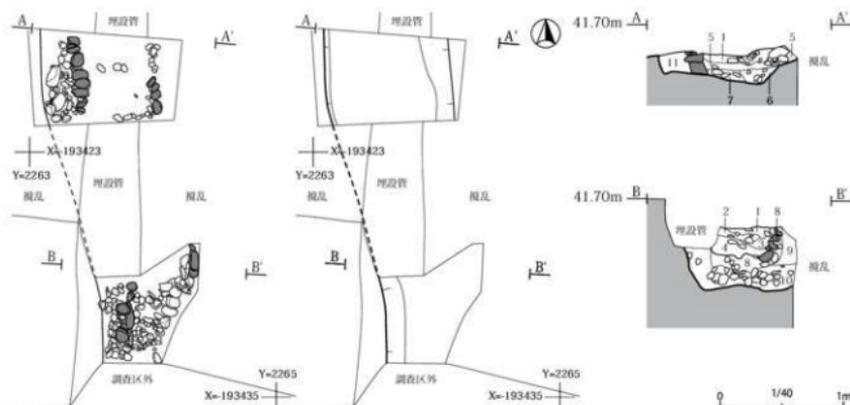
第16図 IV層上面検出遺構配置図

(1) 溝跡

1) SD4 石組溝跡（第17図、図版8-3～6）

S3・4-W4グリッドに位置し、北から南西に向かって伸びる石組の溝跡である。南側は調査区外へ続いている。周囲を掘削により壊され、径230cmと径170cmの範囲内でのみ検出され、残存状況は不良である。主軸方向はN-10°-Wを示し、ほぼ直線状であったと推測される。残存規模は、長さ530cm、幅43～104cm、深さ33～60cmを測り、断面形は不整形を呈する。南へ向かって緩やかに低く傾斜する。

石組は長さ14～28cm、幅14～49cm、厚さ8～17cmの円礫を最大で3段積み上げて構築されている。西側の石組は比較的礫を積み上げている状況が明瞭に確認できるが、東側は残存状況が不良で、ほとんどの礫は崩れており、1段が列を成している状況が確認できる程度であった。石組の裏込めには径6～14cmの円礫が使用され、砂礫混じりの砂質シルトや粘土・砂が詰められる。底面はほぼ平坦であるが、南側で底石の可能性のある長さ5～16cmの円礫が一部検出されており、やや起伏を有する。掘り方は上端幅151～199cm、下端幅156～168cm、深さ34～65cmを測り、断面形は逆台形を呈する。堆積土は6層に分層されるが、上層ではにぶい黄褐色シルトと暗オリーブ褐色シルト、にぶい黄褐色砂質シルトの3層からなり、下層に黄灰色系の砂層が堆積する。遺物は19世紀代の大堀相馬産陶器の碗が出土している。



部位	現在	土色	土質	粘性	しまり	備考	
堆積土	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや強	やや強	径0.5～5cmの礫少量
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	強	やや強	径1～2mmの暗黄褐色粒微量、径2～3cmの礫微量
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや強	やや強	径0.5～2cmの礫中量、径2～5cmの礫少量
	4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	やや強	やや強	径1～2mmの暗黄褐色粒微量
	5	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	強	径1～2cmの礫中量、径5～10cmの礫微量
	6	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	やや弱	強	径3～5cmの礫中量
構築土	7	2.5Y3/3	黄褐色	砂	弱	強	径3～5cmの礫中量、径10～20cm礫少量
	8	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	強	強	径3～5cmの礫多量
	9	10YR4/6	褐色	砂	弱	強	
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	強	径5～20cmの礫多量
	11	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	あり	やや強	径0.5～3cmの礫多量

第17図 SD4溝跡平面図・断面図

2) SD5 石組溝跡 (第18～21図、図版2-1、4-5～8、8-7・8、9-1～8、10-1～5、11-1～3、33-2～13、34-1～11)

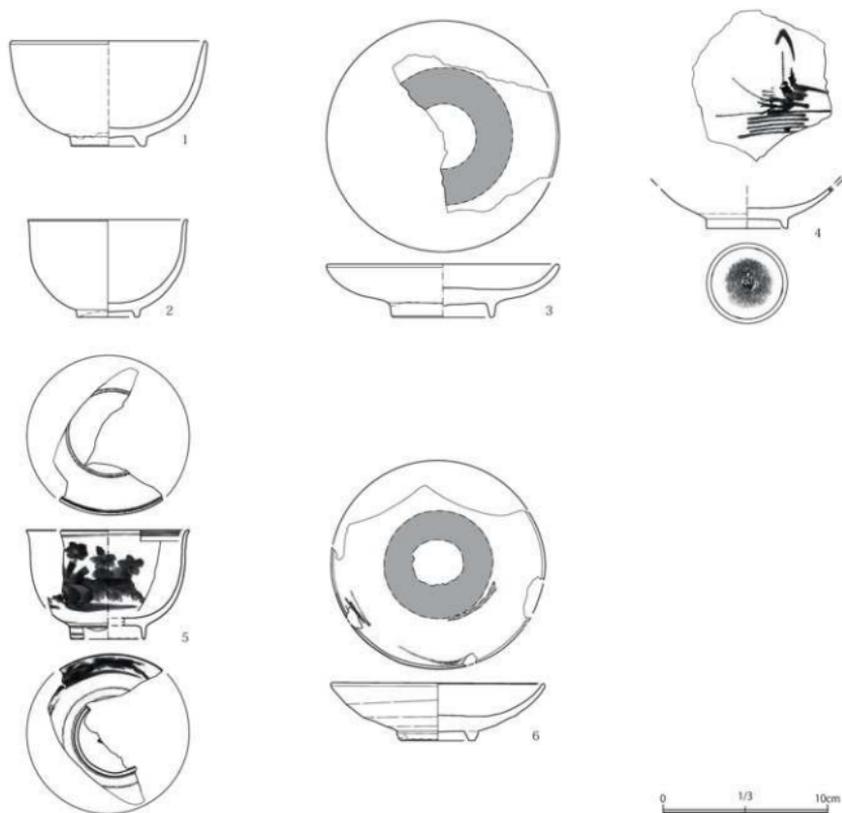
S1・2・3・4・W5・6グリッドに位置し、北西から南東に向かって延びる石組の溝跡である。北側と南側は調査区外へ続き、南側は2箇所で境乱により壊される。また、平成20年度調査の路線部Ⅱ区と迂回路部においても同遺構が検出されており、路線部Ⅱ区ではSD1、迂回路部ではSD3である。主軸方向はN-8°Wを示し、直線状である。残存規模は、長さ31.24m、幅45～105cm、深さ35～55cmを測り、断面形は方形を呈する。南へ向かって緩やかに低く傾斜する。

石組は長さ11～47cm、幅11～95cm、厚さ11～19cmの円礫を1段から3段垂直に積み上げて構築されている。円礫は大小様々なものを使用しており、ほとんどは円礫を加工せずそのまま積み上げている状態である。石組の裏込めには径5～14cmの円礫が使用され、砂礫や砂礫混じりの砂質シルトやシルト、砂が詰められる。底面はほぼ平坦で、底石は検出されなかった。掘り方は上端幅193～250cm、下端幅127～203cm、深さ44～68cmを測る。断面形は逆台形を呈するが、南側で上端幅80～107cm、下端幅53～79cm、深さ7～18cmの一段低くなる段差が確認された。堆積土は8層に分層されるが、上層では概ね灰黄色・黒褐色・暗灰色のシルト、褐色・にぶい黄褐色の砂が堆積し、中層から下層にかけては暗灰黄色の砂礫層が堆積し、所によっては底面に砂や砂利が堆積する。全体に砂礫が多量に含まれており、Ⅲ層を整理する際それぞれ以前に短期間に人為的に埋められたと考えられる。Ⅲ層整理後、本遺構の直上に同方向に延びるSD8が構築されたと推測される。本遺構は、直線状の規模や形状から、区画施設の一部と推測される。

第2節 検出遺構と遺物

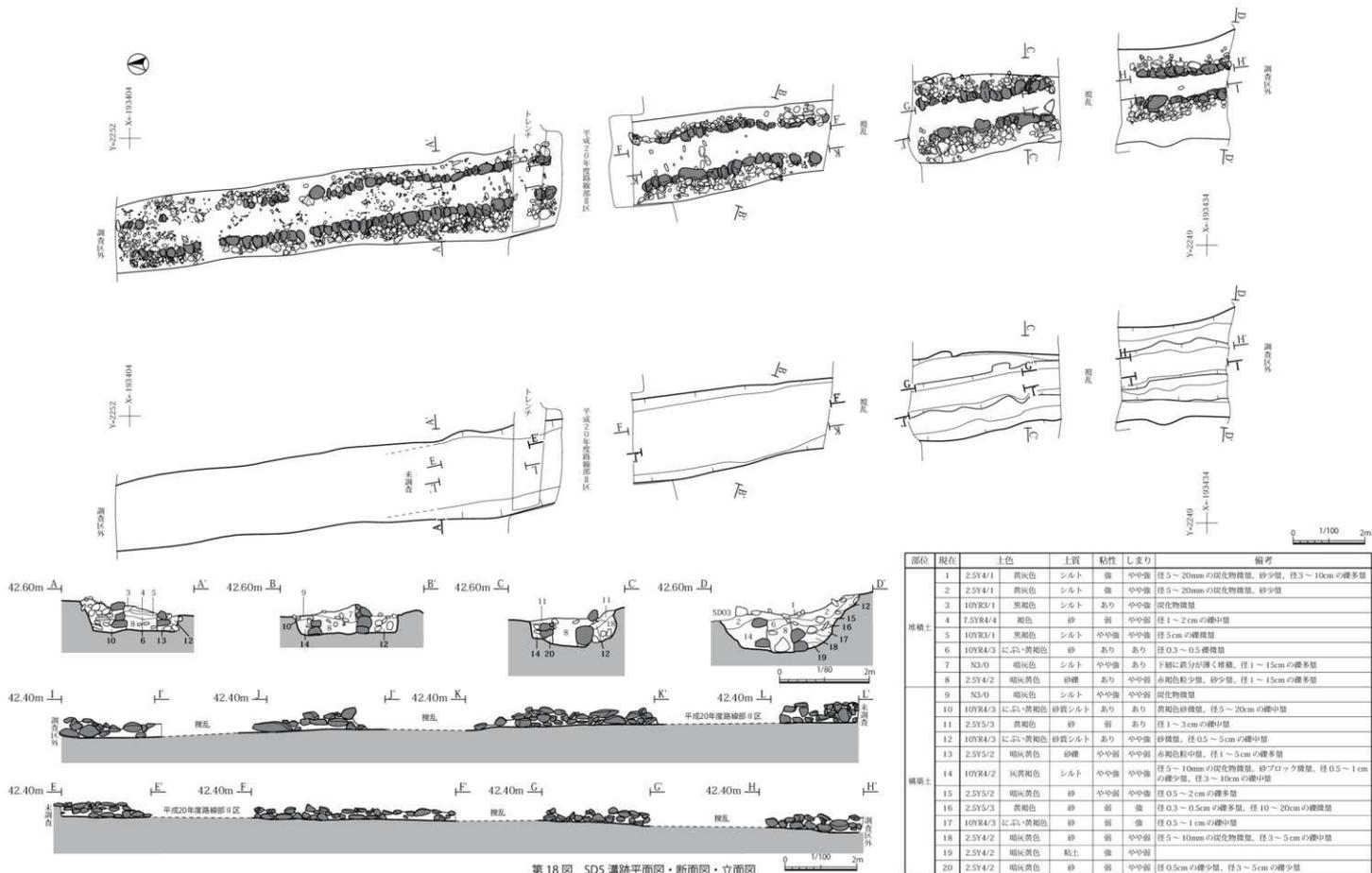
遺物は17世紀後葉以降の磁器と18世紀後葉以降の陶器が多く出土している。陶磁器類の製作年代は17世紀中葉から19世紀中葉となるが、概ね18世紀代にまとまりが見られる。他には、在地産土器、瓦、常滑産磁器の大甕、煙管等の金属製品、銭貨（古寛永通宝）等が出土している。

また、17世紀中葉の初期伊万里様式の碗・皿、17世紀代の中国産磁器の皿が出土している。

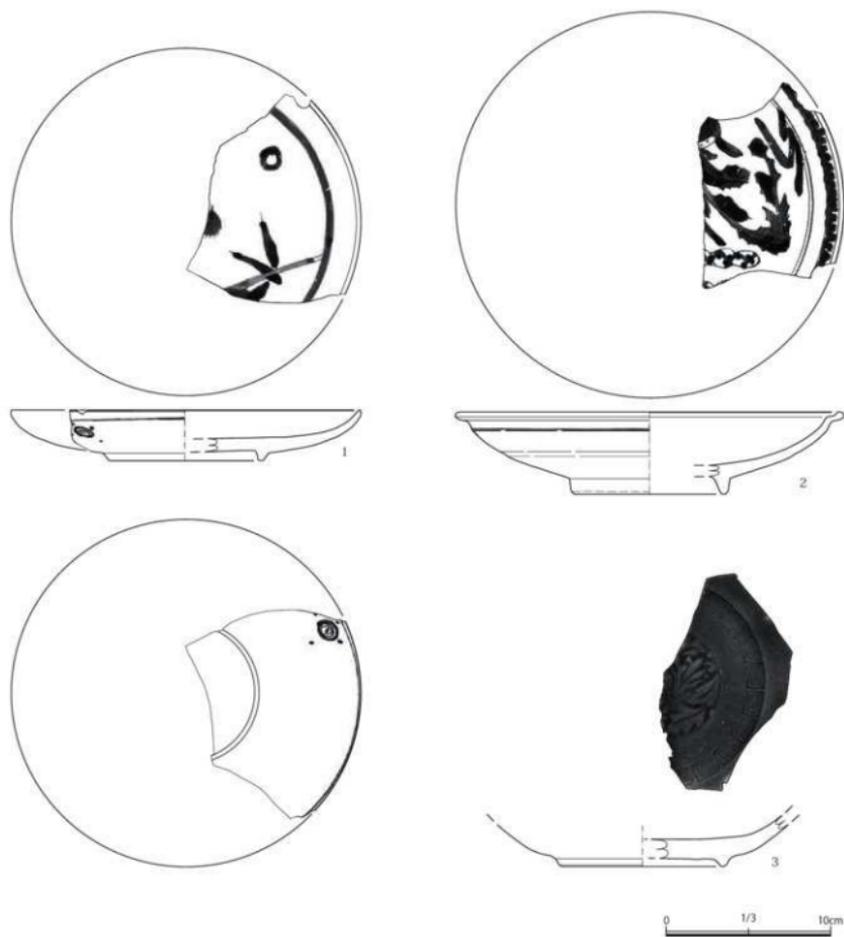


図録 番号	写真図版 番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	軸差 (cm)			産地	時期	備考	登録 番号	
										軸差 給付	口径	底径					
1	33-2	S2-W5	SD5	陶器	中碗	口縁～ 高台	やや粗			灰軸	(11.6)0	(4.4)0	5.85	小野粗馬	18c代～	見込ハ刀跡	I-48
2	33-3	S2・3・ 4-W5	SD5 下層	陶器	中碗	口縁～ 高台	やや密			灰軸	(9.6)0	3.80	5.95	大塚粗馬	19c		I-50
3	33-4	S2・3・ 4-W5	SD5 下層	陶器	小皿	口縁～ 高台	粗			灰軸	(13.9)0	(5.9)0	3.25	小野粗馬	18c代～	見込蛇ノ目輪割ぎ	I-51
4	33-5	S2-W5	SD5	陶器	小鉢	側部～ 高台	やや密	内：山水文	透明釉 貝面絵	—	4.40	(2.6)0	肥前京焼	17c後～ 18c中		I-49	
5	33-11	S2・3 W5	SD5 下層	磁器	中碗	口縁～ 高台	密	外：不明	透明釉 染付	(9.0)0	4.40	6.70	肥前	17c後～ 18c中		I-48	
6	33-12	S2 W5・6	SD5	磁器	小皿	口縁～ 底部	密	外：草文	透明釉 染付	13.00	4.40	3.56	波佐見	17c後～ 18c後	見込蛇ノ目輪割ぎ	J-45	

第19図 SDS 溝跡出土遺物 (1)



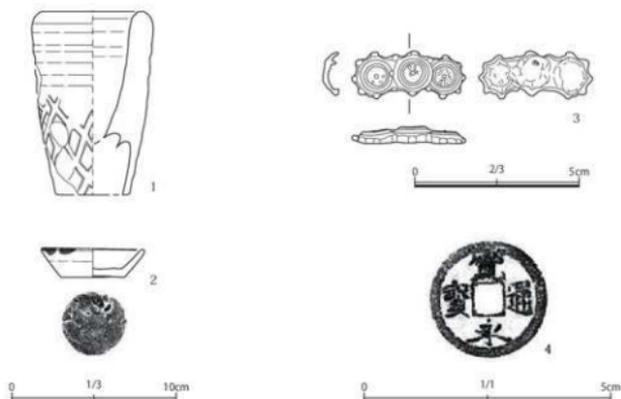
第18図 SDS溝跡平面図・断面図・立面図



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	軸差		法胆 (cm)		産地	時期	備考	登録番号
										軸差	軸付	口径	底径				
1	33-13	S1-W5・6	SD5	磁器	小皿	口縁～高台	南	外：丸文 内：月に藤輪竹文	染付透明釉	φ2.120	φ3.50	φ3.10	肥前	17c 中	初期伊万里様式	J-46	
2	34-1	S2・3・4-W5	SD5	磁器	小皿	口縁～高台	平谷組	内：藤向文 草文	染付透明釉	φ2.330	φ2.20	5.00	肥前	17c 中	初期伊万里様式	J-47	
3	34-2	S2・3-W5	SD5	磁器	中鉢	体部～高台	南	内：雷文雲芝 曲在瓦	青磁釉	—	10.00	2.50	不明	17c 後～ 18c 中	型押陶器文 か?	三田・王地山 J-49	

第20図 SDS溝跡出土遺物(2)

第2節 検出遺構と遺物



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	部位	出土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
								口径	底径	器高				
1	34-8	S2-W5	SD5	土器	埴輪	上縁～底部	やや粗	6.20	(4.40)	11.20	在地	17c後～19c	土師貫 輪軸 ナデ	166
2	34-9	S2・3・4-W5	SD5	土器	灯明皿	上縁～底部	やや粗	6.20	3.80	2.80	在地	近世期	土師貫 輪軸 左回転糸切底 縦付着	167
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)				備考	登録番号				
					長さ	幅	厚さ	重量						
3	34-10	S2・3・4-W5	SD5	日貫	3.45	1.50	0.50	5.35	南車造 銅製		N-10			
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	銭貨名	初铸年	法量 (cm・g)			備考	登録番号				
						外径	内径	重量						
4	34-11	S2・3-W5	SD5 下層	寛永通宝	寛永 13 年 (1636)	2.39	0.56	2.85	古寛永 銅銭		N-21			

第 21 図 SD5 溝跡出土遺物 (3)

(2) 土坑

1) SK18 土坑 (第 22 図、図版 11-4・5)

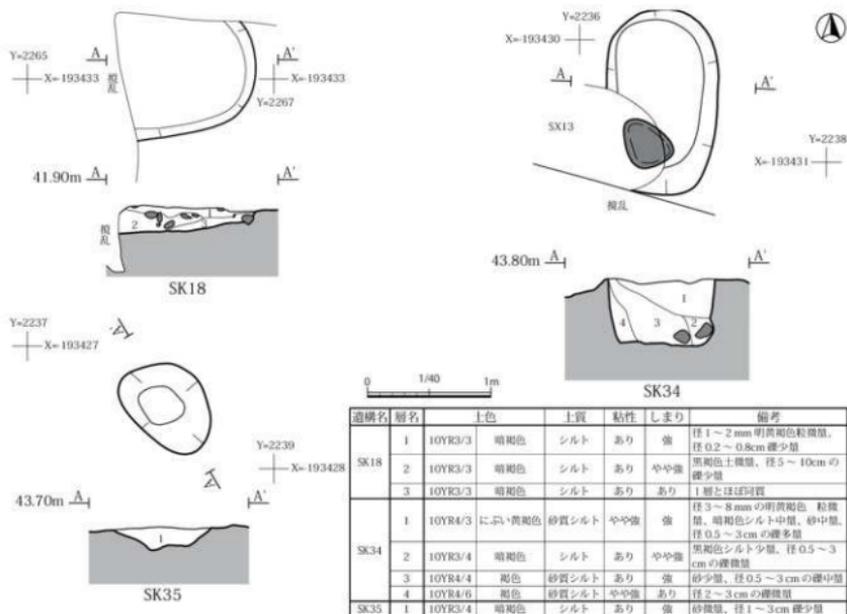
S4-W4 グリッドに位置し、北側と西側は擾乱により壊されており、残存規模は、長軸 128cm、短軸 122cm、深さ 28cm を測る。平面形は円形もしくは楕円形と考えられる。底面はやや起伏があり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色シルトを主体とする 3 層からなる。遺物は出土していない。

2) SK34 土坑 (第 22 図、図版 11-6・7)

S4-W7 グリッドに位置する。南西側で SX13 により壊される。規模は、長軸 152cm、短軸 91cm、深さ 50cm を測る。平面形は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。底面直上には礎盤石と考えられる径 40cm 程の礎が検出されたことから、構造物の基礎の可能性が考えられる。北側に柱痕が確認された SK40 が位置しており、同一の構造物の基礎であった可能性も考えられる。SK40 との柱間は 450cm (14 尺 8 寸) を測る。堆積土にはふい黄褐色砂質シルトと暗褐色砂質シルトと褐色砂質シルトを主体とする 4 層からなる。遺物は出土していない。

3) SK35 土坑 (第 22 図、図版 11-8)

S3-W7 グリッドに位置する。規模は、長軸 84cm、短軸 60cm、深さ 19cm を測る。平面形は不整楕円形で、断面形は底面に起伏を有する不整形を呈する。堆積土は暗褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。



第22図 SK18・34・35土坑平面図・断面図

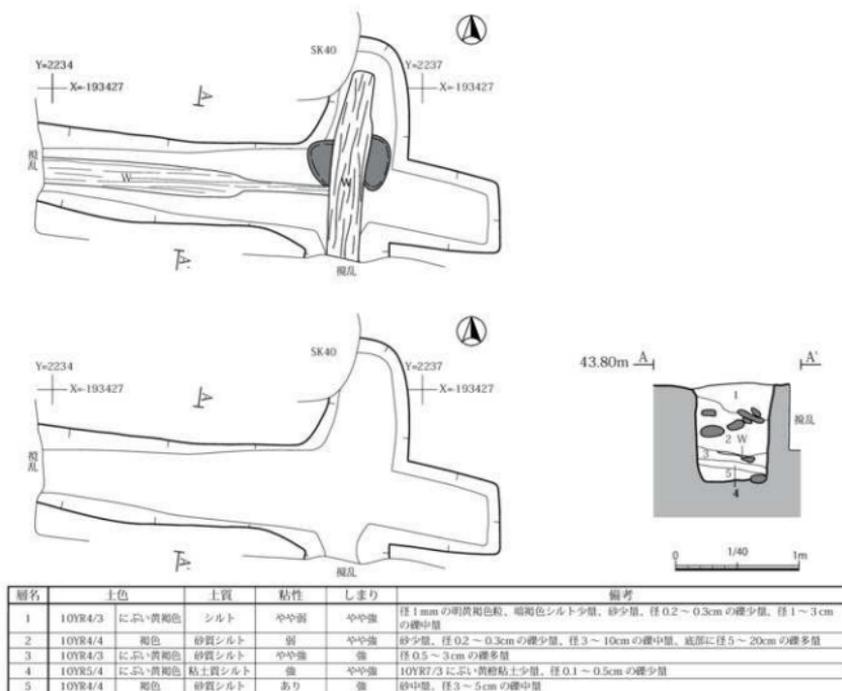
4) SK39土坑(第23図、図版12-1~4)

S3-W7グリッドに位置する。西側と南側は掘乱に、北側は一部SK40により壊されており、残存規模は、長軸372cm、短軸68cm、深さ78cmを測る。平面形は長方形のプランが交差する十字形を呈する。底面は起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は方形を呈する。検出面から深さ55cmの堆積土3層上面で長さ232cm、幅20cm、厚さ2cm程の木質の一部が東西方向に、長さ153cm、幅30cm、厚さ2cm程の木質の一部が南北方向に横たわるように検出された。これらは構造物の基礎の一部を形成していると推測される。堆積土は、木質を境に上層はにぶい黄褐色シルトと褐色砂質シルトの2層、下層はにぶい黄褐色の砂質シルトと粘土質シルト、褐色砂質シルトの3層からなる。遺物は18世紀後葉から19世紀前葉の肥前産磁器の碗・火入、19世紀代の大堀相馬産陶器の土瓶が出土している。

5) SK40土坑(第24図、図版12-5・6)

S3-W7グリッドに位置する。南東側でSK39を一部壊す。規模は、長軸131cm、短軸103cm、深さ100cmを測る。平面形は不整形形を呈する。底面は礫層に達し、やや起伏を有する。壁は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出面から深さ70cmのところまで径40cmの柱痕と思われる痕跡が確認できたことから、構造物の柱穴の一部と推測される。柱の上部を抜き取った後に埋め戻されたと考えられ、その柱の痕跡が一部残存していたと推測される。南側に底面直上から径40cm程の礎盤石が検出されたSK34が位置しており、同一の構造物の基礎であった可能性も考えられる。堆積土は灰黄褐色砂質シルトと暗褐色砂質シルトを主体とする5層からなり、柱痕部分は黒褐色の粘土質シルトで木質を微量に含む。遺物は18世紀中葉から19世紀前葉の肥前産磁器の皿、瀬戸・美濃産磁器の端反碗、大堀相馬産陶器の土瓶、棒状の鉄製品が出土している。

第2節 検出遺構と遺物



第23図 SK39土坑平面図・断面図

6) SK42土坑 (第24図、図版12-7)

S3-W7グリッドに位置する。北側は視乱により壊されており、残存規模は、長軸145cm、短軸62cm、深さ15cmを測る。平面形は長方形で、断面形は底面がほぼ平坦なU字形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

7) SK47土坑 (第24図、図版12-8)

S4-W5グリッドに位置する。規模は、長軸110cm、短軸95cm、深さ11cmを測る。平面形は円形で、断面形は底面が平坦な皿形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とする単層で、礫が多量に含まれる。遺物は出土していない。

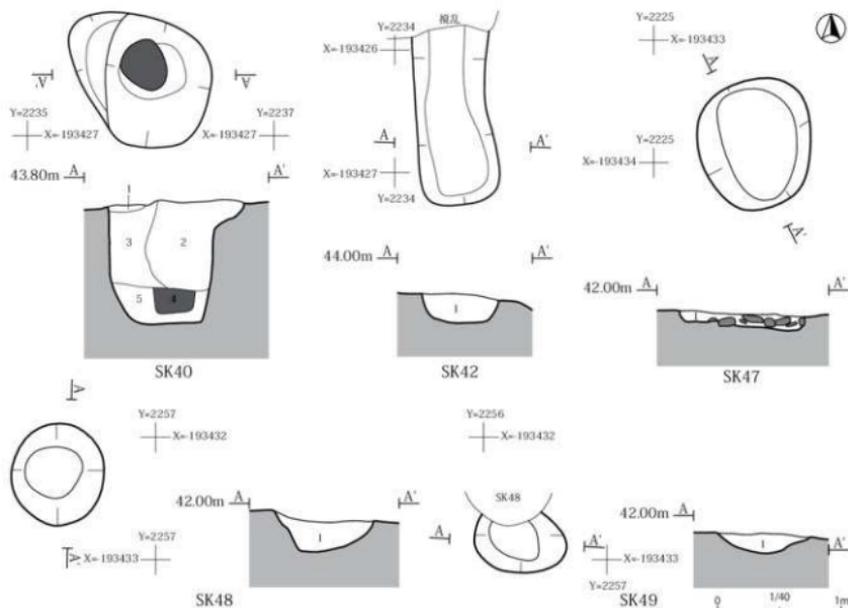
8) SK48土坑 (第24図)

S4-W5グリッドに位置する南側でSK49を壊す。規模は、長軸83cm、短軸75cm、深さ22cmを測る。平面形は円形で、断面形は不整形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

9) SK49土坑 (第24図)

S4-W5グリッドに位置する。北側はSK48により壊されており、残存規模は、長軸75cm、短軸51cm、深さ16cmを測る。

平面形は円形もしくは楕円形と考えられ、断面形は皿形を呈する。堆積土は灰黄色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SK40	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	やや弱	強	径2～3cmの礫中量
	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	あり	あり	径1～2mmの明黄褐色粒少量、径1～3cmの礫中量
	3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	あり	あり	径0.1～0.5cmの礫中量、径1～10cmの礫中量
	4	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	強	やや強	木炭燼粒、柱状か
	5	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	あり	強	径0.5～3cmの礫中量
SK42	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	やや強	強	径1～2mmの明黄褐色粒微量、径0.1～0.3cmの礫微量、径1～5cmの礫少量
SK47	1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	やや強	あり	赤褐色粒中量、径2～15cmの礫中量
SK48	1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	やや強	やや弱	赤褐色粒少量、径2～5cmの礫少量
SK49	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	やや強	あり	径2～5cmの礫少量

第24図 SK40・42・47・48・49土坑平面図・断面図

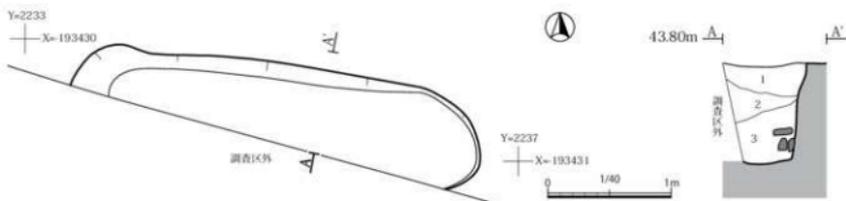
(3) 性格不明遺構

IV層上面では、大型土坑状遺構(SX13)が性格不明遺構として検出された。

1) SX13 性格不明遺構(第25図、図版13-1・2)

S4-W7グリッドに位置し、南側は調査区外に続き、東側でSK34を壊す。残存規模は、長軸329cm、短軸74cm、深さ80cmを測る。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に分層され上層に褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの2層、下層に褐色シルトが堆積する。遺物は18世紀中葉から19世紀前葉の肥前産磁器の皿、瀬戸・美濃産磁器の碗、在地産土師質土器の小皿、鉄釘、鋸が出土している。

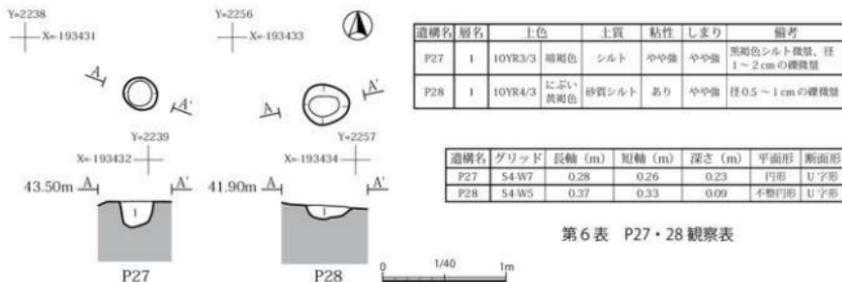
第2節 検出遺構と遺物



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
1	10YR4/4	褐色	シルト	やや弱	強	径0.3～0.8cmの礫中量, 径1～2cmの礫少量
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	弱	径0.1～0.3cmの礫中量, 径1～3cmの礫少量
3	10YR4/4	褐色	シルト	やや強	やや弱	径0.1～0.8cmの礫中量, 径3～10cmの礫少量

第25図 SX13 性格不明遺構平面図・断面図

(4) ビット (第26図、第6表)

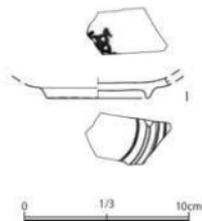


第6表 P27・28 観察表

第26図 P27・28 平面図・断面図

(5) IV層出土遺物 (第27図、図版34-12)

IV層から97点の破片が出土した。内訳は陶器54点、磁器23点、土師質土器4点、金属製品1点、瓦1点、縄文土器14点である。陶器は、17世紀中葉から後葉の肥前産や京・信楽産の碗、18世紀代の大塚・小野相馬産の碗、在地産の播鉢等が見られる。磁器は、17世紀後葉から18世紀中葉の肥前産の碗、陶磁器以外では、在地産の皿、灯明皿、板状瓦が見られる。全体的には17世紀後葉から18世紀中葉にまとまりが見られる。

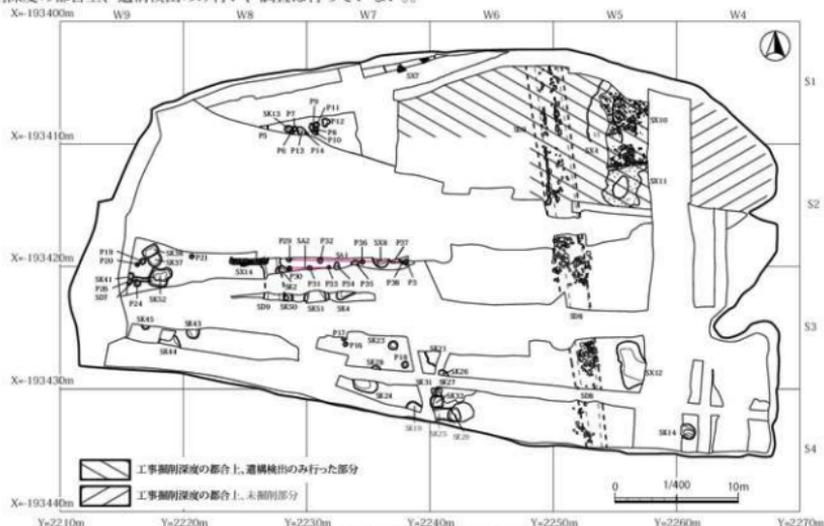


図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	輪軸			産地	時期	備考	登録番号	
										輪付	口径	法距 (cm)					
1	34-12	S4-W4	IV層	磁器	小皿	休部～高台	南	外：黒織文内：五弁花	透明釉	染付	—	6.00	(1.30)	肥前	17c 後～18c 中	五弁花のみコンニャク印刷	J-34

第27図 IV層出土遺物

3 Ⅲ層上面検出遺構

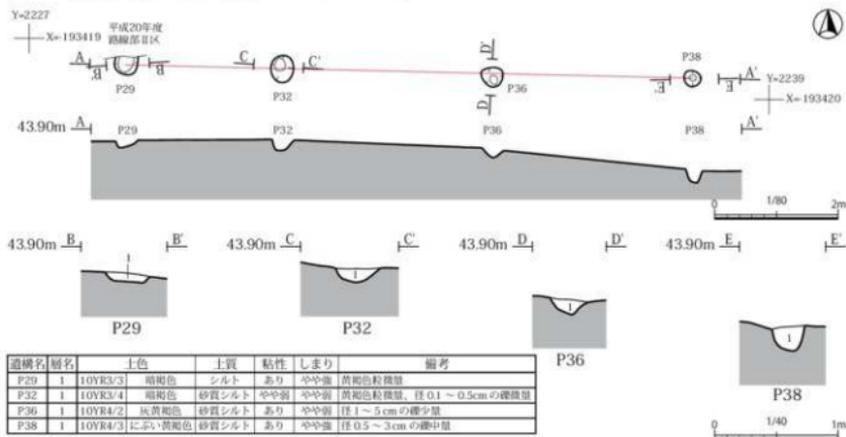
Ⅲ層上面で検出された遺構は、柱列跡2条、溝跡3条、土坑24基、性格不明遺構6基、ピット22基である。遺構は、調査区全面にわたり、特に西側に多く見られる。今回調査で最も多くの遺構が検出された。市道部1区の一部は工事掘削深度の都合上、遺構検出のみ行い、調査は行っていない。



第28図 Ⅲ層上面検出遺構配置図

(1) 櫛列

1) SA1 柱列跡 (第29図、図版13-7・8、14-1・2)



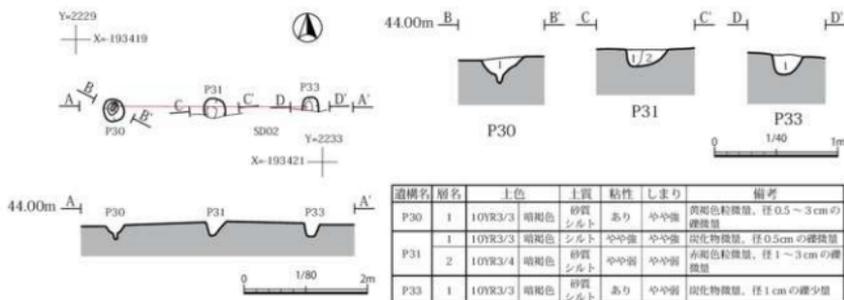
第29図 SA1 柱列跡平面図・断面図

第2節 検出遺構と遺物

S2-W7・8グリッドに位置する。東西に並ぶP29・P32・P36・P38の4基で構成される柱列跡である。P29は平成20年度調査の路線部Ⅱ区に続いている。規模は長さ917cm、柱間寸法は西から250cm（8尺2寸）、346cm（11尺4寸）、322cm（10尺6寸）を測る。柱穴の規模は長軸28～44cm、短軸27～37cm、深さ5～22cmを測る。主軸方向はN-88°-Wを示す。各柱穴とも平面形は概ね円形で、断面形はU字形及び皿形である。堆積土にはぶい黄褐色、暗褐色、灰黄褐色砂質シルトを主体とする単層で、柱痕は見られない。遺物は出土していない。

2) SA2 柱列跡（第30図、図版14-3～5）

S3-W7・8グリッドに位置する。東西に並ぶP30・P31・P33の3基で構成される柱列跡である。P31とP33はSD2に壊される。規模は長さ315cm、柱間寸法は西から155cm（5尺1寸）、160cm（5尺2寸）を測る。柱穴の規模は長軸26～44cm、短軸22～33cm、深さ11～20cmを測る。P30は中央北寄りに長軸14cm、短軸6cm、底面からの深さ7cmを測る柱痕が確認された。主軸方向はN-89°-Eを示す。各柱穴とも平面形は概ね円形で、断面形はU字形及び不整形である。堆積土はP30とP33は暗褐色砂質シルトを主体とする単層、P31は暗褐色砂質シルトとシルトの2層からなる。遺物は出土していない。



第30図 SA2 柱列跡平面図・断面図

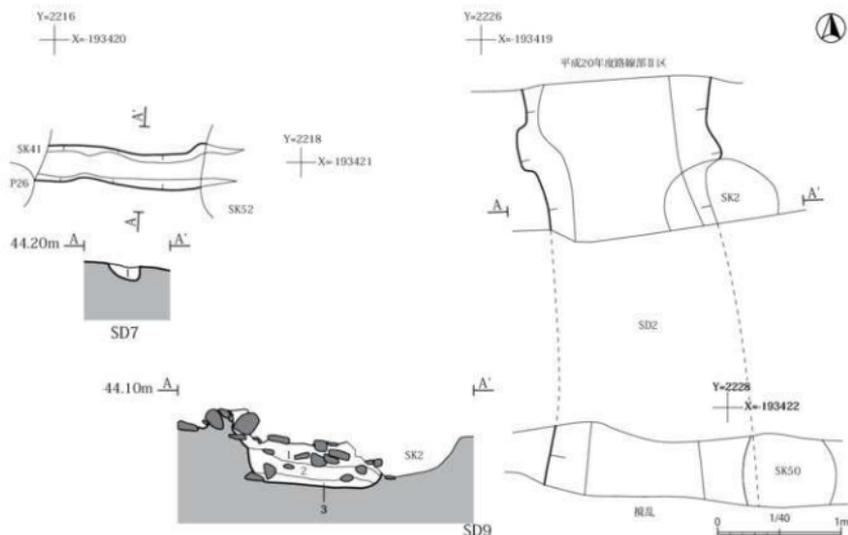
(2) 溝跡

1) SD7 溝跡（第31図、図版14-6）

S3-W9グリッドに位置し、東西に延びる溝状の遺構である。西側はSK41により壊され、東側はSK52により上部を壊される。残存規模は、長さ163cm、上端幅27～35cm、下端幅14～21cm、深さ最大15cmを測る。主軸方向N-86°-Wを指す直線状である。底面はほぼ平坦で、断面形は皿形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。遺物は出土していない。

2) SD9 溝跡（第31図、図版14-7・8）

S3-W8グリッドに位置し、南北に延びる溝状の遺構である。北側は平成20年度調査の路線部Ⅱ区へ続いている。南側は掘乱に、東側はSK2及びSK50により壊される。残存規模は、長さ340cm、上端幅137～167cm、下端幅86～110cm、深さ36～58cmを測る。主軸方向N-4°-Wを指す。底面は起伏を有し、断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトと灰色シルトと灰褐色砂の3層からなり、礫が多量に含まれる。遺物は出土していない。



遺跡名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SD7	1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	暗褐色シルト少量、径0.2～0.3cmの礫多量
	2	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	径2～20cmの礫多量
SD9	1	5Y4/1 灰色	シルト	やや強	やや弱	径2～10cmの礫多量
	2	7.5YR4/2 灰褐色	砂	弱	やや弱	径2～20cmの礫多量
	3	7.5YR4/2 灰褐色	砂	弱	やや弱	径2～20cmの礫多量

第31図 SD7・9 溝跡平面図・断面図

(3) 土坑

1) SK2 土坑 (第32図、図版15-1・2)

S3-W8 グリッドに位置する。南側は擾乱により壊されており、西側はSD9を壊し、残存規模は、長軸92cm、短軸52cm、深さ34cmを測る。平面形はほぼ円形と考えられる。西側で段を有し、断面形は不整形を呈する。堆積土は暗灰黄色砂質シルトと暗灰黄色シルトの2層からなる。遺物は18世紀末から19世紀中葉の肥前産磁器の碗や瀬戸・美濃産磁器の碗等が出土している。

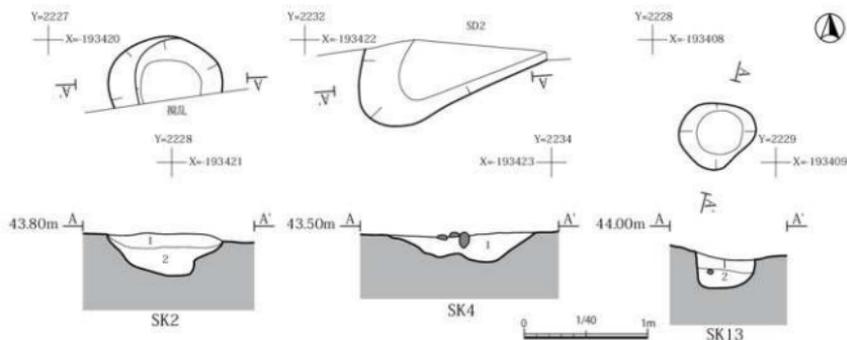
2) SK4 土坑 (第32図、図版15-3)

S3-W7 グリッドに位置する。北側はSD2により壊されており、残存規模は、長軸155cm、短軸69cm、深さ20cmを測る。平面形は不整形で、断面形は不整形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

3) SK13 土坑 (第32図、図版15-4・5)

S1-W8 グリッドに位置する。規模は、長軸55cm、短軸53cm、深さ27cmを測る。平面形は円形で、断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする2層からなり、下層には黄褐色粘土が多量に含まれる。遺物は出土していない。

第2節 検出遺構と遺物



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SK2	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	やや弱	やや弱	黄褐色土ブロック微量、炭化物少量、径2~3cmの礫微量
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	やや強	あり	赤褐色粘機層、炭化物微量
SK4	1	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	やや強	やや弱	径2~10cmの礫少量
	2	10YR3/1	黒褐色	シルト	あり	やや強	径3~8mmの黄褐色粘土少量、径0.3~0.5cmの礫少量
SK13	1	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや強	あり	黄褐色粘土多量、径1~3cmの礫少量
	2	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや強	あり	

第32図 SK2・4・13土坑平面図・断面図

4) SK14土坑 (第33図、図版15-6・7)

S4-W4 グリッドに位置する。西側は攪乱により壊されており、残存規模は、長軸 167cm、短軸 120cm、深さ 28cm を測る。平面形は不整形形を呈する。底面は南側にピット状の窪みが見られ、やや起伏があり、断面形は不整形を呈する。堆積土は暗オリーブ褐色シルトを主体とする3層からなり、中層に黒褐色シルト層が帯状に堆積する。遺物は出土していない。

5) SK19土坑 (第33図、図版15-8、16-1)

S4-W7 グリッドに位置する。南側と東側は攪乱により壊されており、残存規模は、長軸 127cm、短軸 70cm、深さ 9cm を測る。平面形は楕円形と考えられ、断面形は皿形を呈する。堆積土は黒褐色シルトと褐色砂質シルトの2層からなる。遺物は出土していない。

6) SK21土坑 (第33図、図版16-2)

S3-W6 グリッドに位置する。北側と東側は攪乱により壊されており、残存規模は、長軸 152cm、短軸 121cm、深さ 12cm を測る。平面形は不整形で、断面形は底部がほぼ平坦な逆台形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

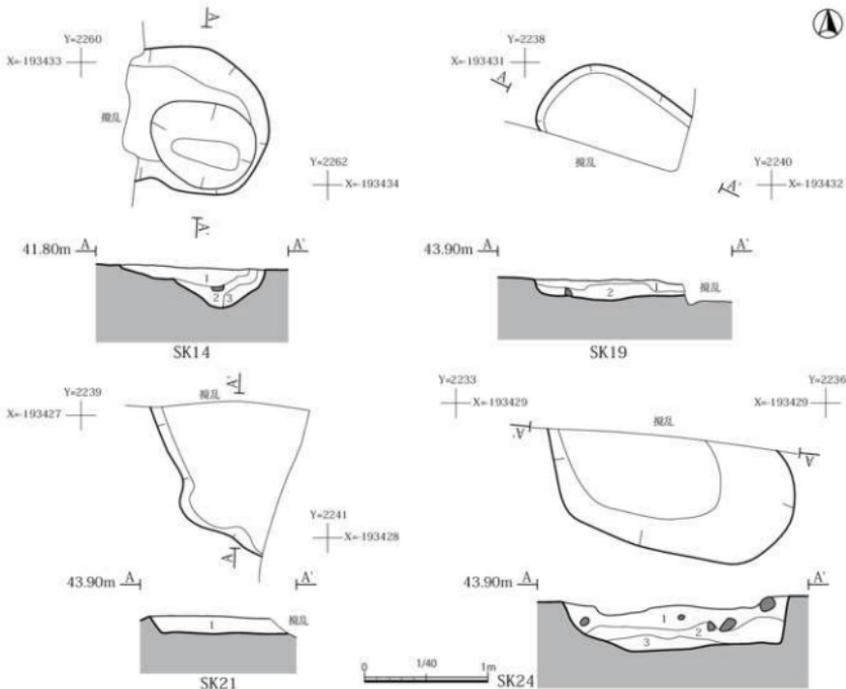
7) SK23土坑 (第34図、図版16-3・4)

S3-W7 グリッドに位置する。規模は、長軸 74cm、短軸 73cm、深さ 31cm を測る。平面形は不整形形で、断面形は底面にやや起伏を有するU字形を呈する。堆積土は暗褐色砂質シルトと黒褐色シルトを主体とする3層からなる。遺物は出土していない。

8) SK24土坑 (第33図、図版3-4、16-5)

S3・4-W7 グリッドに位置する。北側は攪乱により壊されており、残存規模は、長軸 186cm、短軸 105cm、深さ

32cmを測る。平面形は不整楕円形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色シルトと褐色砂質シルトを主体とする3層からなる。遺物は出土していない。



第33図 SK14・19・21・24土坑平面図・断面図

9) SK25 土坑 (第34図、図版16-6)

S4-W6グリッドに位置する。東側はSK5により壊され、西側でSK29を壊す。残存規模は、長軸116cm、短軸103cm、深さ17cmを測る。平面形は円形で、断面形は底部がほぼ平坦な皿形を呈する。堆積土は灰黄褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

10) SK26 土坑 (第34図、図版16-7)

S3-W6グリッドに位置する。南側は掘乱により壊されており、残存規模は、長軸77cm、短軸41cm、深さ26cmを測る。

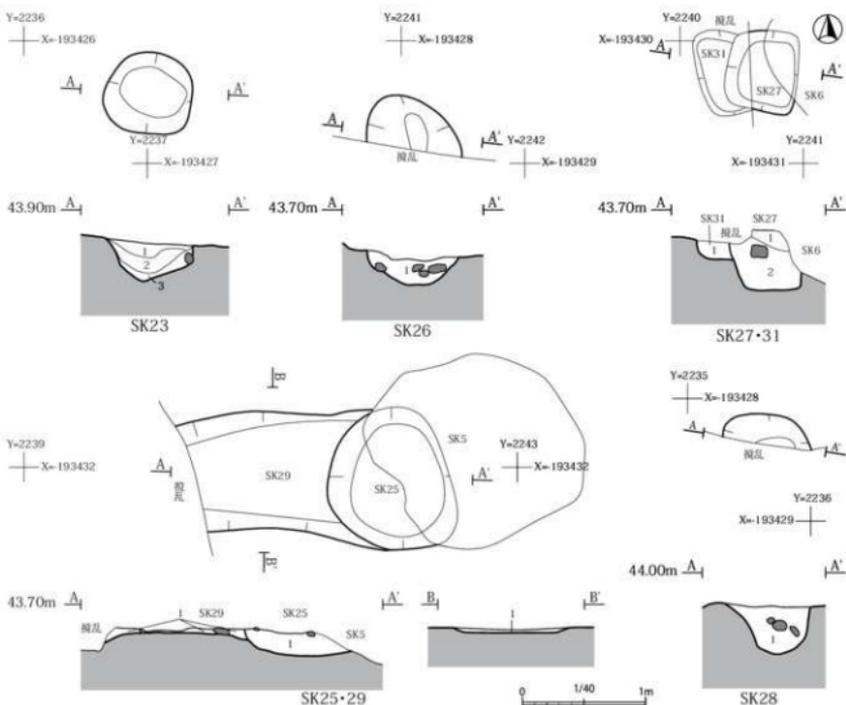
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SK14	1	2.5YR3/3 暗オリーブ褐色	シルト	やや強	やや強	径0.3～0.5cmの礫少量、径1～5cmの礫少量
	2	2.5YR3/1 黒褐色	シルト	あり	強	暗褐色シルト少量、径0.5～1cm 礫少量
	3	2.5YR3/3 暗オリーブ褐色	シルト	強	やや強	径2～3mm明赤褐色粒少量、径2～3mm明黄褐色粒少量、径0.5～2cm 礫少量
SK19	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	やや強	やや強	赤褐色砂質粒少量、褐色砂質粒少量、径1～3cmの礫少量
	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	やや強	あり	赤褐色砂質粒少量、径1～5cmの礫少量
SK21	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	弱	強	径1～2mmの白色粒少量、径5mmの炭化物少量、径0.2～0.5cmの礫少量
	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	あり	強	径3～8mmの明黄褐色粒少量、褐色粘土少量、径1～5cmの礫中量
SK24	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	やや弱	強	径1～3cmの礫少量
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	あり	暗褐色シルト少量、砂少量

第2節 検出遺構と遺物

平面形は円形と考えられ、断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

11) SK27 土坑 (第34図、図版16-8、17-1)

S4-W6グリッドに位置する。西側は上部が擾乱により、東側はSK6により壊される。また、西側でSK31を壊す。規模は、長軸68m、短軸59m、深さ48mを測る。平面形は方形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土にはふい黄褐色と暗オレンジ褐色シルトの2層からなる。遺物は18世紀後葉から19世紀中葉の肥前産磁器、19世紀代の大塚相馬産陶器の碗・皿・土瓶が主体で、他に小野相馬産陶器の碗、瀬戸・美濃産陶器の火鉢、瓦等が出土している。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SK23	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	あり	やや強	径2～3mmの明黄褐色粒、微量径0.2～0.3cmの礫微量、径5～10cmの礫微量
	2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	やや強	強	砂微量、径1～5cmの礫中量
	3	10YR2/3	黒褐色	シルト	やや強	強	暗褐色シルト少量、径1～5cmの礫微量
SK25	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	やや強	径1～3mmの明黄褐色粘微量、径0.2～0.5cmの礫中量、径1～5cmの礫微量
SK26	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	あり	強	径0.2～0.3cmの礫中量、径5～10cmの礫微量
SK27	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや弱	強	暗褐色シルト少量、径5mmの炭化物微量
	2	2.5Y3/3	暗オレンジ褐色	シルト	あり	強	径3～10mmの炭化物中量、径0.2～0.3cmの礫微量
SK28	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	強	径2～5mmの明黄褐色粘少量、径0.2～0.3cmの礫中量、径5～10cmの礫微量
SK29	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや強	強	径0.5～1cmの礫中量
SK31	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	やや強	径0.5～2cmの礫少量

第34図 SK23・25・26・27・28・29・31 土坑平面図・断面図

12) SK28 土坑 (第 34 図、図版 17-2)

S3-W7 グリッドに位置する。南側は掘乱により壊されており、残存規模は、長軸 69cm、短軸 25cm、深さ 30cm を測る。平面形は円形と考えられ、断面形は U 字形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

13) SK29 土坑 (第 34 図、図版 17-3)

S4-W6 グリッドに位置する。西側は掘乱により、東側は SK25 により壊される。残存規模は、長軸 160cm、短軸 113cm、深さ 4cm を測る。平面形は長方形もしくは楕円形と考えられ、断面形は底面が平坦な皿形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

14) SK31 土坑 (第 34 図、図版 17-4)

S4-W6 グリッドに位置する。上部は削平され、東側は SK27 により壊される。残存規模は、長軸 73cm、短軸 38cm、深さ 15cm を測る。平面形は不整形円形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

15) SK32 土坑 (第 35 図、図版 17-5・6)

S4-W6 グリッドに位置する。北側は SK31 により一部壊されており、残存規模は、長軸 102cm、短軸 87cm、深さ 30cm を測る。平面形は方形で、断面形は底面が平坦な逆台形を呈する。堆積土は暗褐色シルトを主体とする 5 層からなる。遺物は肥前産磁器の小皿、19 世紀代の大塚相馬産陶器の土瓶と在地産土師質土器の灯明皿が出土している。

16) SK37 土坑 (第 35 図、図版 17-7・8)

S2-W9 グリッドに位置する。北西側は SK38 により壊されており、残存規模は、長軸 111cm、短軸 91cm、深さ 20cm を測る。平面形は円形と考えられ、断面形は底面がほぼ平坦な皿形を呈する。堆積土は黒褐色シルトと黒色シルトの 2 層からなる。遺物は出土していない。

17) SK38 土坑 (第 35 図、図版 18-1・2)

S2-W9 グリッドに位置する。南東側で SK37 を壊す。規模は、長軸 133cm、短軸 80cm、深さ 38cm を測る。平面形は方形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルトと褐色シルトの 3 層からなる。遺物は出土していない。

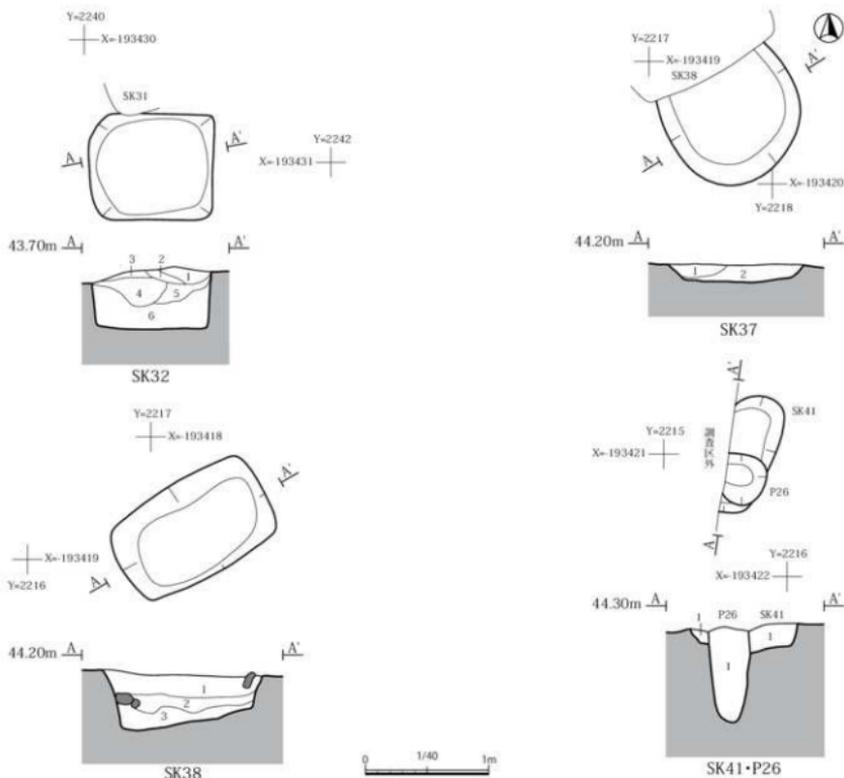
18) SK41 土坑 (第 35 図、図版 18-3)

S3-W9 グリッドに位置する。西側は調査区外へ続き、南側は P26 により壊される。調査区内での規模は、長軸 101cm、短軸 42cm、深さ 30cm を測る。平面形は不整形楕円形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

19) SK43 土坑 (第 36 図、図版 18-4)

S3-W8 グリッドに位置する。北側は掘乱により壊されており、残存規模は、長軸 102cm、短軸 72cm、深さ 24cm を測る。平面形は円形もしくは楕円形と考えられ、断面形は皿形である。堆積土はにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

第2節 検出遺構と遺物



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SK32	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	やや弱	強	径1mmの明黄褐色粒微量。径1～3cmの礫微量
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト	あり	やや強	径1～2mmの明黄褐色粒微量
	3	10YR3/4	暗褐色	シルト	弱	やや強	径1mmの明黄褐色粒微量。径0.5～3cmの礫微量
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	強	径1～2mmの明黄褐色粒微量。径0.5～2cmの礫少量
	5	10YR3/4	暗褐色	シルト	あり	強	径1～2mmの明黄褐色粒微量。黒褐色シルト少量。径0.3～0.5cmの礫微量
	6	7.5YR3/3	暗褐色	シルト	あり	強	径1～5cmの礫中量
SK37	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径2～3mmの炭化物微量
	2	10YR2/1	黒色	シルト	強	やや強	径2～3mmの明黄褐色粒微量。黒褐色シルト少量
SK38	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや弱	やや強	径5～20mmのにぶい黄褐色シルトブロック少量。径1～3cmの礫少量
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	やや強	暗褐色シルト少量
	3	10YR4/1	褐色	シルト	あり	やや強	にぶい黄褐色、明赤褐色、明黄褐色シルトなどが混ざる
SK41	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや強	強	砂少量。径0.5～2cmの礫中量
P26	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	あり	強	径1～mmの明黄褐色粒微量。径1～5cmの礫多量

第35図 SK32・37・38・41・P26土坑平面図・断面図

遺構名	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重視別係	備考
P26	S3-W9	41	31	50	円形	U字形	SK41→P26	

第7表 P26観察表

20) SK44 土坑 (第36図、図版18-5)

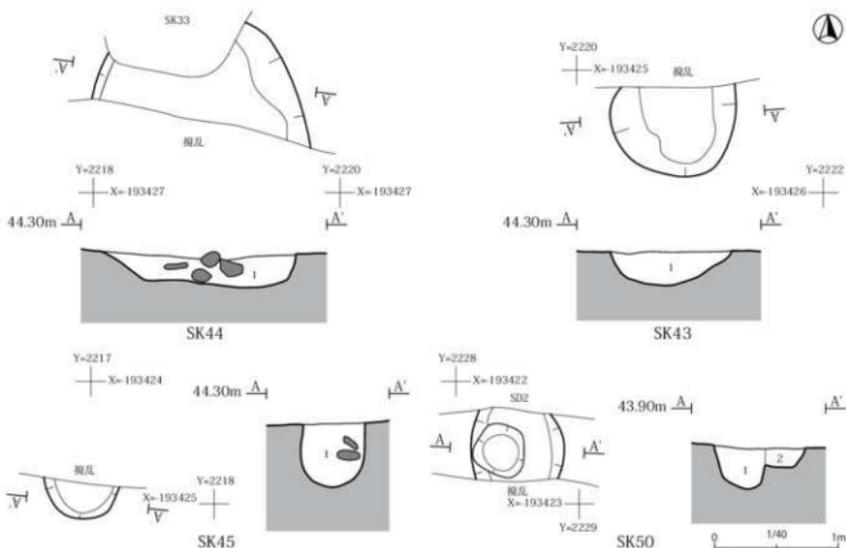
S3-W9 グリッドに位置する。南側は掘乱により、北側はSK33により壊される。残存規模は、長軸176cm、短軸73cm、深さ24cmを測る。平面形は円形もしくは楕円形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗オリーブ褐色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

21) SK45 土坑 (第36図、図版18-6)

S3-W9 グリッドに位置する。北側は掘乱により壊されており、残存規模は、長軸61cm、短軸29cm、深さ32cmを測る。平面形は円形と考えられ、断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

22) SK46 土坑 (第37図、図版18-7・8)

S3-W9 グリッドに位置する。西側はSD7を壊す。規模は、長軸190cm、短軸140cm、深さ82cmを測る。平面形は不整形を呈する。底面北側に長軸144cm、短軸90cm、深さ42cmの不整形の掘り込みが見られる。堆積土は上層が灰黄褐色と黒褐色砂質シルトの2層、中層が暗灰色シルトと黄褐色砂の2層、下層が灰色シルトと暗灰黄色砂礫の3層からなる。遺物は鉄釘が1点出土している。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SK43	1	10YR4/3	砂質シルト	やや強	強	径1mmの明黄褐色粘微層、黒褐色シルト少量、径3~8mm浅黄色砂ブロック微層、径3~5cmの礫少量
SK44	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト	やや強	強	礫少量、径0.1~0.5cmの礫少量、径5~15cmの礫中量
SK45	1	10YR3/2	黒褐色シルト	やや強	あり	径1~2mmの明黄褐色粘微層、灰黄褐色シルト少量、径3~15cmの礫中量
SK50	1	10YR3/2	黒褐色砂質シルト	あり	やや強	赤褐色粘少量、黄褐色砂質粘少量、径1~3cmの礫中量
SK50	2	2.5Y4/2	暗灰黄色シルト	やや強	やや強	赤褐色粘中量、径3~5cmの礫少量

第36図 SK43・44・45・50土坑平面図・断面図

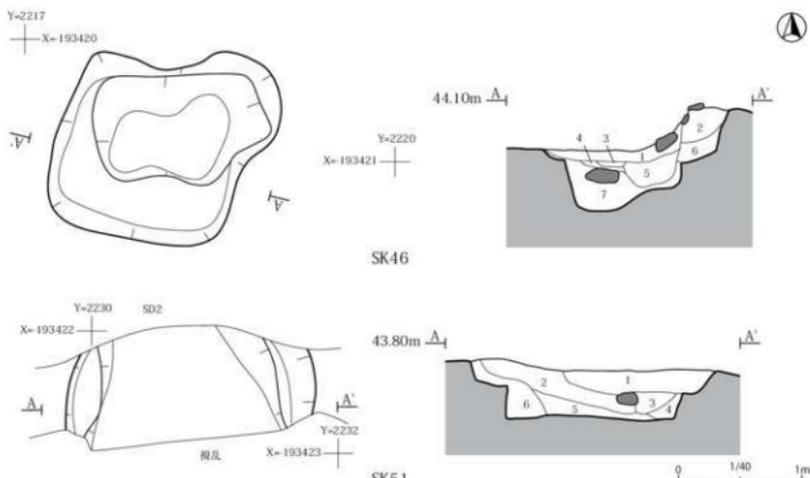
第2節 検出遺構と遺物

23) SK50 土坑 (第 36 図、図版 19-1・2)

S3-W8 グリッドに位置する。南側は攪乱により、北側はSD2により壊される。残存規模は、長軸 75cm、短軸 60cm、深さ 23cmを測る。平面形は円形と考えられ、断面形は不整形を呈する。また、底面西側に径 40cm、深さ 32cmの円形のビット状の陥込みが見られ、柱の抜き取り痕と推測される。堆積土は暗灰黄色シルトと黒褐色砂質シルトの2層からなる。遺物は出土していない。

24) SK51 土坑 (第 37 図、図版 19-3・4)

S3-W7・8 グリッドに位置する。南側は攪乱により、北側はSD2により壊される。残存規模は、長軸 206cm、短軸 94cm、深さ 33cmを測る。平面形は不整形と考えられる。底面は平坦で半ばで段を有する。断面形は不整形を呈する。堆積土は上層が灰黄色、黒褐色、暗灰黄色砂質シルトの3層からなり、下層が灰色、黄灰色のシルトの2層、壁際に黒褐色シルトが堆積する。遺物は在地産土師質土器の小皿が出土している。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SK46	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや強	あり	黄色粒少量、径1~5cmの礫中量
	2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	やや強	やや強	黄色粒少量、径1~3cmの礫微量
	3	N3/0	暗灰色	シルト	やや強	やや強	赤褐色粒微量
	4	2.5Y5/3	黄褐色	砂	やや弱	あり	赤褐色粒中量
	5	N4/0	灰色	シルト	やや強	あり	炭化物微量、径2~4cmの礫微量
	6	N4/0	灰色	シルト	やや強	やや強	赤褐色粒中量、径1~3cmの礫中量
	7	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂礫	弱	やや強	径2~25cmの礫多量
SK51	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや強	やや強	黄褐色シルトブロック少量、炭化物少量、径1~5cmの礫少量
	2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	やや強	やや強	赤褐色粒微量、黄褐色シルトブロック少量、炭化物少量、径1~15cmの礫少量
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	やや強	やや強	赤褐色粒微量、黄褐色粒微量、炭化物微量、径1~3cmの礫微量
	4	5Y5/1	灰色	粘土	強	あり	赤褐色粒中量、径2~5cmの礫少量
	5	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	強	強	赤褐色粒中量、径1~5cmの礫少量
	6	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	強	やや強	黄褐色土ブロック中量、径2~10cmの礫中量

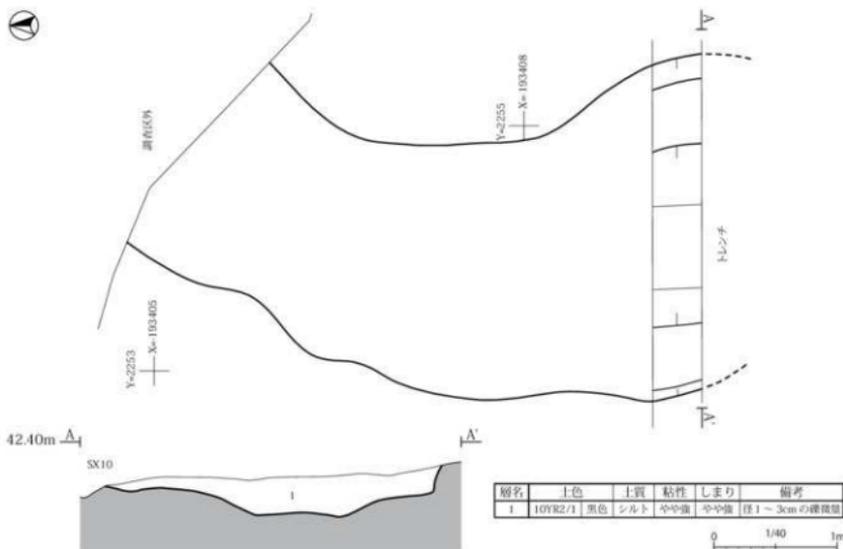
第 37 図 SK46・51 土坑平面図・断面図

(4) 性格不明遺構

Ⅲ層上面では、溝状遺構(SX4)1基、大型土坑状遺構2基(SX7・SX12)、土坑状遺構1基(SX8)、礫範囲(SX10・SX11)、石組の構造物基礎(SX14)の7基が性格不明遺構として検出された。

1) SX4 性格不明遺構 (第38図、図版19-5)

S1-W5 グリッドに位置する。北側は調査区外へ延び、南側は攪乱により壊される。平面プランは確認できたが、工事掘削深度の都合上、検出状況の記録のみで掘削は行っていない。南側でトレンチ掘削を行い、断面で形状及び堆積状況を確認した。残存規模は、長軸 485cm、短軸 290cm、深さ 24cm を測る。平面形は南北に延びる溝状で、北東に向かって緩やかに屈曲している。底面はやや起伏があり、断面形は不整形である。堆積土は黒色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。



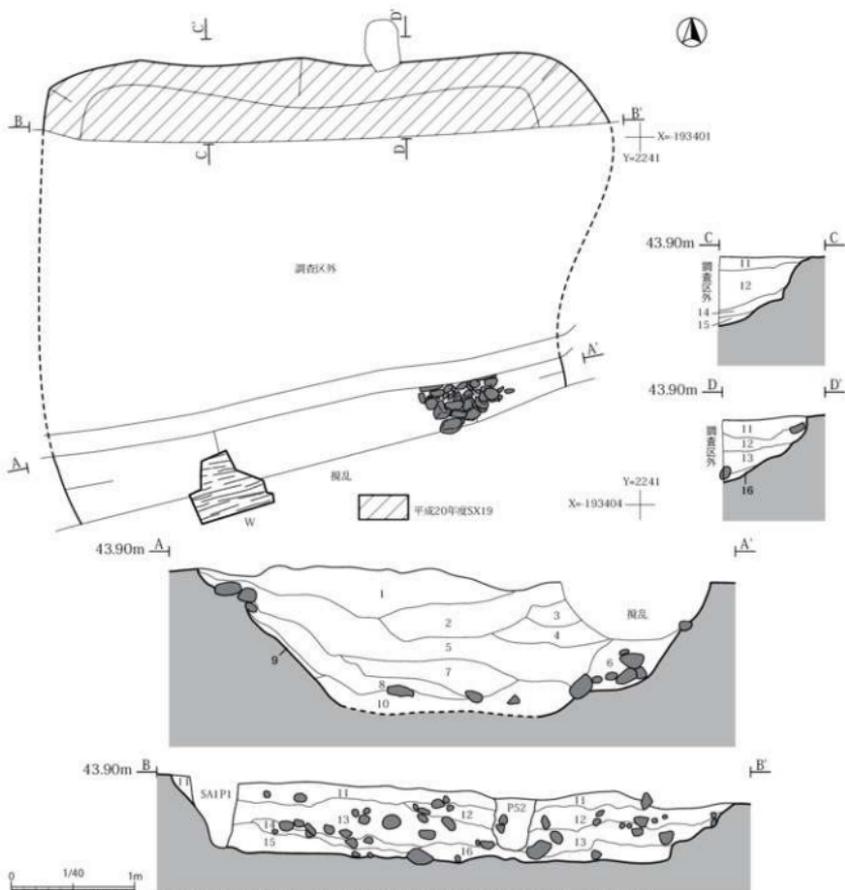
第38図 SX4 性格不明遺構平面図・断面図

2) SX7 性格不明遺構 (第39~41図、図版19-6~8、20-1・2、35、36-1)

S1-W6・7 グリッドに位置する。南側は攪乱により壊される。平成20年度の迂回路部で検出されたSX19から続く遺構と考えられる。残存規模は、長軸 414cm、短軸 48cm、深さ最大 119cm を測る。平面形は平成20年度調査と整合すると隅丸方形で、壁はやや起伏を持ちながら緩やかに立ち上がり、断面形は不整形を呈する。東側では検出面から深さ 58cm のところで、 68×38 cm の範囲に径 10~19cm、厚さ 8~12cm の円礫が集中する部分を検出した。また、西側では検出面から深さ 90cm のところで、 60×52 cm の範囲に樽・桶の側板を含む木片が出土した。堆積土は 10 層に分層され、上層に粘性の弱い黒褐色シルト、黒褐色砂質シルト、暗褐色シルトを主体とする 4 層、中層に粘性のある黒褐色砂質シルトを主体とする 2 層、下層に粘性の強い黒褐色、黒色シルトを主体とする 4 層が堆積する。全体に炭化物が含まれている。

遺物は 17 世紀後葉から 19 世紀中葉の肥前産磁器の碗・皿、19 世紀代の瀬戸・美濃産磁器の碗、19 世紀代の大塚相馬産陶器の碗・皿・土瓶が主体的に見られるが、概ね 18 世紀後葉から 19 世紀中葉にまとまりが見られる。他に小野相馬産、肥前産、瀬戸・美濃産陶器、岸窯播鉢、在地産土師質土器の皿・灯明皿・火鉢、瓦、砥石、金銀金の煙管等が出土している。

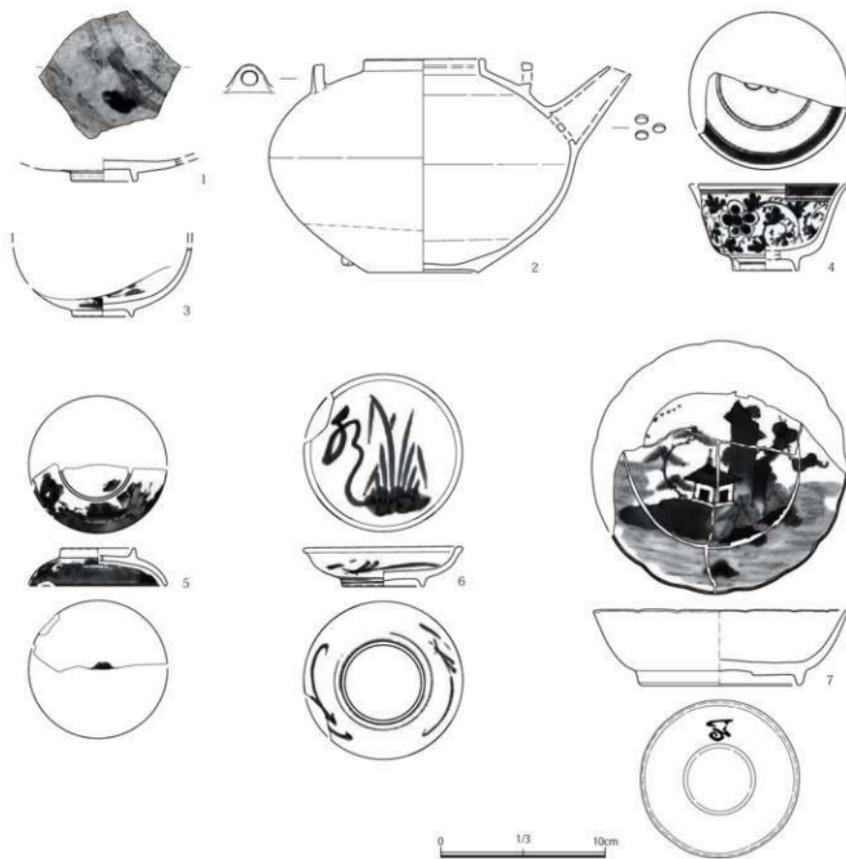
第2節 検出遺構と遺物



※平成20年度SX19の平面図とB-B'、C-C'、D-D'の断面図は、仙台市文化財調査報告書第385集「川内B遺跡」より、一部加筆して転載。

遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
平成 22年度 SX7	1	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや弱	あり	黄褐色粘微層、炭化物少量、径0.5～2cmの礫微層
	2	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	弱	強	黄褐色粘少量、炭化物微層、径3～5cmの礫微層
	3	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	弱	やや弱	炭化物微層、径1～5cmの礫微層
	4	10YR3/3	暗褐色	シルト	弱	あり	黄褐色粘微層、炭化物微層、径1～3cmの礫微層
	5	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	やや強	弱	黄褐色粘中層、炭化物微層、径1～10cmの礫微層
	6	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径10～20cmの礫多量
	7	10YR3/2	黒褐色	シルト	あり	あり	黄褐色粘少量、径3～10cmの礫少量
	8	10YR2/1	黒色	シルト	強	やや強	黄褐色粘微層、炭化物微層
	9	7.5YR3/1	黒褐色	シルト	やや強	あり	黄褐色粘微層
	10	10YR3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや強	白色粘微層、黄褐色粘微層、径5～7cmの礫微層
平成 20年度 SX19	11	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	やや強	あり	径5～20mmの小礫少量、炭化物少量
	12	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	やや強	あり	径5～20mmの小礫、径10～20cmの礫少量
	13	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	やや強	あり	径5～20mmの小礫、径10～20cmの礫少量
	14	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	あり	やや強	
	15	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	径5～20mmの小礫、径10～20cmの礫少量
	16	10YR2/1	黒色	砂質シルト	あり	やや強	径5～20mmの小礫、径10～20cmの礫少量

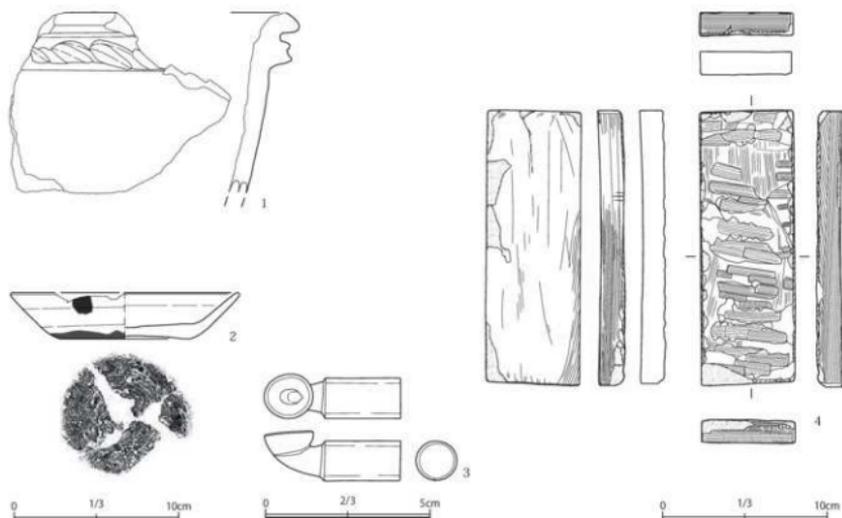
第39図 SX7性格不明遺構平面図・断面図



採取番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	軸差 軸付	法量 (cm)		産地	時期	備考	登録番号	
											口径	底径					器高
1	35-1	S1-W7	SX7 下層	陶器	中皿		体部～高台	砂中密	内：風景文	—	—	—	大塚相馬	19c		I-46	
2	35-2	S1-W7	SX7 下層	陶器	土瓶		口縁～底部	砂中密	黒線軸	7.00	6.70	13.50	大塚相馬	19c	底部保存箱 足貼付	I-47	
3	35-3	S1-W7	SX7 上・中層	磁器	中皿	浅半球碗	体部～高台	密	外：草花文	透明釉 染付	—	3.10	(4.30)	肥前	17c 後～ 18c 後	J-41	
4	35-4	S1-W7	SX7 上・中層	磁器	小碗	端反碗	口縁～高台	密	外：五弁地唐印門 内：太閤文 二重 團扇三草文	透明釉 染付	(9.50)	(3.90)	5.30	瀬戸・美濃	19c		J-40
5	35-5	S1-W7	SX7 下層	磁器	小碗蓋	広東碗蓋	揃み～口縁	密	外：家屋風景文 内：富士文	透明釉 染付	(8.30)	(4.40)	揃み径	2.30	肥前	18c 後～ 19c 中	J-44
6	35-6	S1-W7	SX7 上・中層	磁器	小皿		体部～高台	砂中密	外：唐草文 内：文字乱漢文	透明釉 染付	9.30	4.90	2.45	肥前	18c 後～ 19c 中	J-42	
7	35-7	S1-W7	SX7 下層	磁器	五寸皿	輪花皿	口縁～高台	砂中密	内：一層風景文	透明釉 染付	(15.50)	9.20	3.10	肥前	18c 後～ 19c 中	龍ノ目形高台 既履 龍ノ尻印 「龍？」(朱書)	J-43

第40図 SX7 性格不明遺構出土遺物 (1)

第2節 検出遺構と遺物

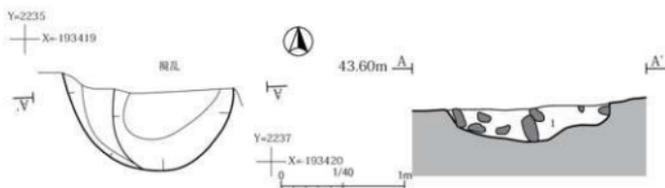


図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	部位	出土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
								口径	底径	高さ				
1	35-8	S1-W7	SX7上層	土器	火鉢	口縁～体部	粗	(37.40)	—	(11.30)	在埋	19c	土師質 外面黒色化 輪轆 菊付	1-62
2	35-9	S1-W7	SX7上・中層	土器	灯明籠	口縁～底部	中や粗	(13.70)	(7.80)	2.80	在埋	近世期	土師質 黒色化 輪轆 回転糸切底	1-61
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・φ)			備考			登録番号			
3	35-10	S1-W7	SX7	埋骨	長さ	幅	厚さ	重量				N-12		
					4.15	—	—	9.95	兼首 金鍍金 火鉢径1.50cm 幅合部径1.20cm 兼脚					
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・φ)				石材	備考	登録番号			
4	36-1	S1-W7	SX7上・中層	礎石	長さ	幅	厚さ	重量	粘板岩	長方形	K-3			
					16.80	5.80	1.50	306.0						

第41図 SX7 性格不明遺構出土遺物(2)

3) SX8 性格不明遺構 (第42図、図版20-3)

S2-W7 グリッドに位置する。北側は平成20年度の路線部Ⅱ区へ延びる。調査区内での規模は、長軸133cm、短軸58cm、深さ28cmを測る。平面形は不明で、底面は礫層に達しておりやや起伏があり、壁はやや急角度に立ち上がり、断面形は不整形である。堆積土は暗褐色砂質シルトを主体とする単層で、礫を多量に含む。遺物は出土していない。



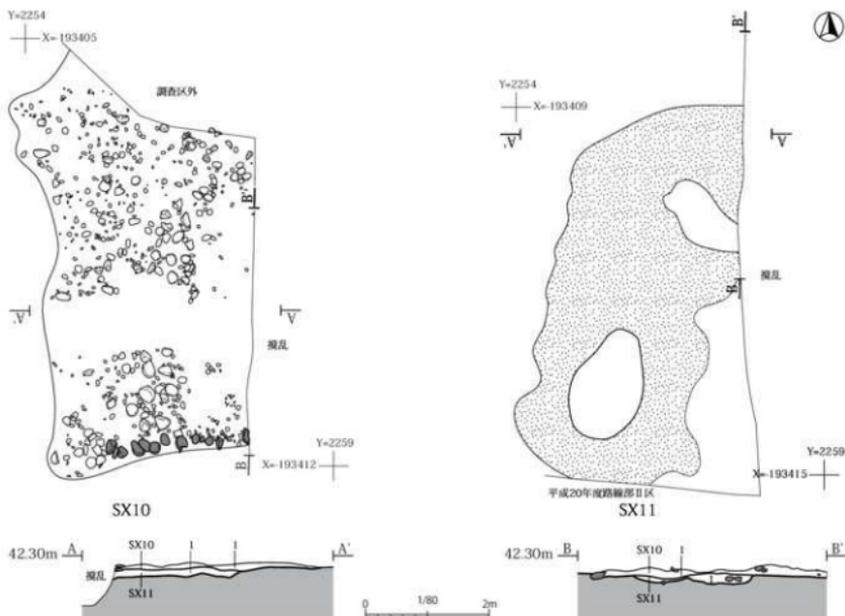
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	中や弱	中や強 黄褐色粘礫層、径1～20cmの礫多量

第42図 SX8 性格不明遺構平面図・断面図

4) SX10 性格不明遺構 (第43・44図、図版20-4～6、36-2・3)

S1・2・3-W5 グリッドに位置する。東側は境岳により壊される。遺構は東西に並ぶ石列とその北側に礫範囲が広がる。北側は平成20年度調査の迂回路部で検出された、SX11と推定される。迂回路部のSX11は北側で東西に並ぶ石列が検出されており、池のない湿地状施設の護岸にあたるものと推測している。今回調査ではその対岸にあたる石列が検出された可能性が考えられるが、いかなる施設なのかを特定する材料は得られなかった。石列と礫範囲を含む残存規模は、長軸601cm、短軸383cm、深さ16cmを測る。平成20年度調査で検出された石列から今回調査で検出された石列までの規模は、約27mを測る。平成20年度調査では石列は2層にわたって検出されているが、今回調査では上層1列のみ検出された。礫範囲には径20cmを超える大きな礫が多く見られ、その間に径1～5cmの小礫が多量に含まれる。残存する石列の規模は、長さ232cm、幅30cmを測る。検出された石列は、長さ10～28cm、幅7～18cm、厚さ5～10cmの円礫が東西に並ぶ。また、石列下層からも南側に広がる礫範囲(SX11)が検出されている。堆積土は暗オリーブ褐色シルトを主体とする単層である。

遺物は、18世紀代の肥前産磁器の皿・猪口、19世紀代の大塚相馬産陶器の土瓶、18世紀代の明石・堺産播鉢、在地産の皿・灯明皿・火鉢、瓦、硯等が出土している。



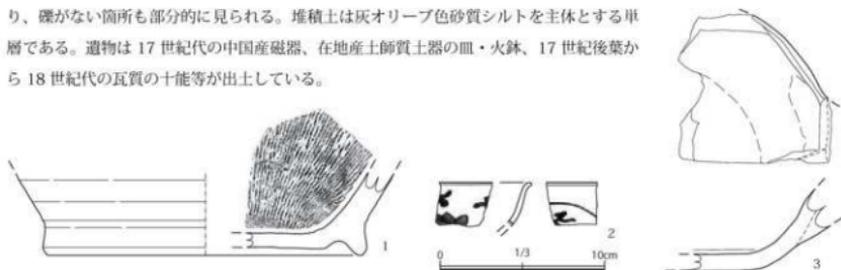
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SX10	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや弱	径1～5cmの礫少量
SX11	1	7.5YR5/2	灰オリーブ色	砂質シルト	あり	やや強 径1～3cmの礫多量

第43図 SX10・11 性格不明遺構平面図・断面図

第2節 検出遺構と遺物

5) SX11 性格不明遺構 (第43・44図、図版20-7、36-4・5)

S2-W5 グリッドに位置する。東側は掘乱により壊され、南側は平成20年度の路線部Ⅱ区へ続いている。SX10の下層より検出された。SX10の石列よりも南側に礎範囲が延びており、SX10とは別遺構と判断した。礎範囲の残存規模は、長軸538cm、短軸300cm、深さ16cmを測る。礎範囲は径1~3cmの小礫が主体となり、礫がない箇所も部分的に見られる。堆積土は灰オリープ色砂質シルトを主体とする単層である。遺物は17世紀代の中国産磁器、在地産土師質土器の皿・火鉢、17世紀後葉から18世紀代の瓦質の十能等が出土している。



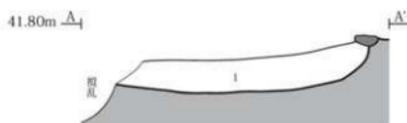
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	出土	文様	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号	
										軸長	軸幅	器高					
1	36-2	S1・2-W5	SX10	陶器	漆鉢		体部・底部	やや粗		鉄軸	—	(19.00)	(5.00)	明石・堺	18c中～	高台 櫛目歯数 12本/23mm幅	I-45
2	36-4	S1・2-W5	SX11	磁器	中皿		口縁・体部	やや粗	外:唐草文 内:蓮花白文	青花 透明釉	—	—	(2.70)	中国	17c		J-30

図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	部位	出土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
								口径	底径	器高				
3	36-5	S1・2-W5	SX11	土器	十能	底部の一部	粗	—	—	(5.10)	在地	19c	瓦質 ナデ	160

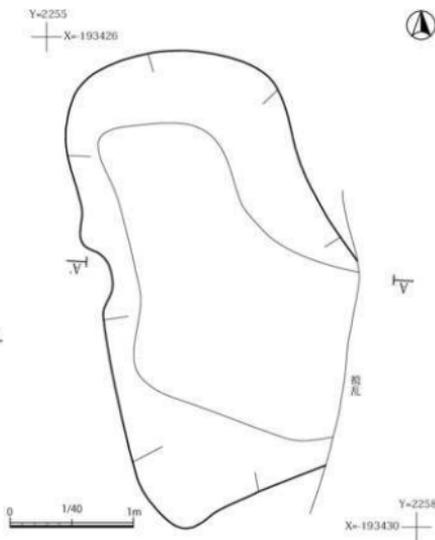
第44図 SX10・11 性格不明遺構出土遺物

6) SX12 性格不明遺構 (第45図、図版20-8)

S3-W5 グリッドに位置する。東側は掘乱により壊されており、残存規模は、長軸367cm、短軸203cm、深さ29cmを測る。平面形は隅丸長方形と考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は18世紀後葉から19世紀中葉の肥前産磁器の碗・皿、瀬戸・美濃産磁器の端反碗、大塚相馬産陶器の碗・水指蓋が出土している。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	赤褐色粘中層、径1~2mmの炭化物微量、径3~5cmの礫少量

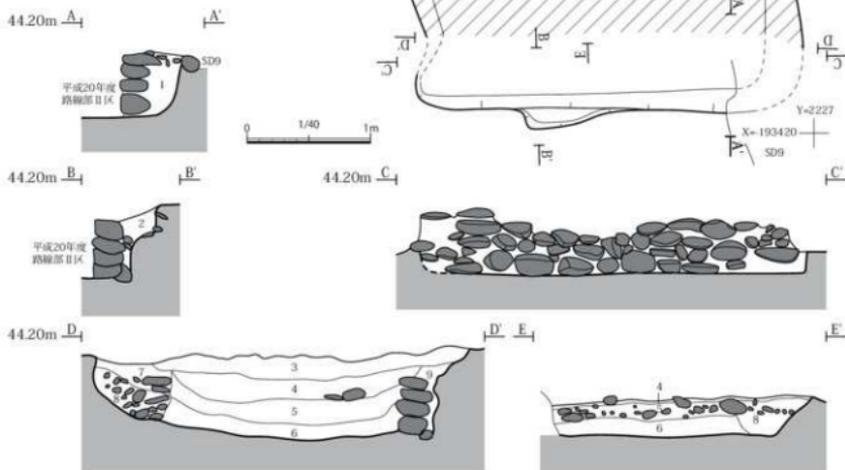


第45図 SX12 性格不明遺構平面図・断面図

7) SX14 性格不明遺構 (第46・47図、図版21-1~4)

S2-W8 グリッドに位置する石組列である。平成20年度調査の路線部Ⅱ区で検出された、SX7の続きである。路線部Ⅱ区 SX7は、石組の残存状況が不良であったが、今回調査では石組が良好な状態で検出された。整合すると石組を基礎とする構造物の基礎であったと推測される。今回調査で検出した規模は、長さ330cm、幅30cm、深さ54cmを測る。路線部Ⅱ区 SX7と整合した規模は、長軸330cm、短軸278cmを測る。平面形は概ね方形で、断面形は方形を呈する。残存する石組は長さ19~34cm、幅10~30cm、厚さ4~18cmの円礫を2~4段垂直に積み上げて構築されている。石組の裏込めには径3~22cmの円礫が使用され、砂礫混じりの黒褐色砂質シルトが詰められる。掘り方は上端幅38~58cm、下端幅26~30cmを測り、断面形は逆台形である。堆積土は今回調査では残存していない。遺物は出土していない。

 平成20年度SX7
 ※平成20年度SX7の平面図とD-D'、E-E'の断面図は、仙台市文化財調査報告書第385集「川内B遺跡」より、一部加筆して転載。



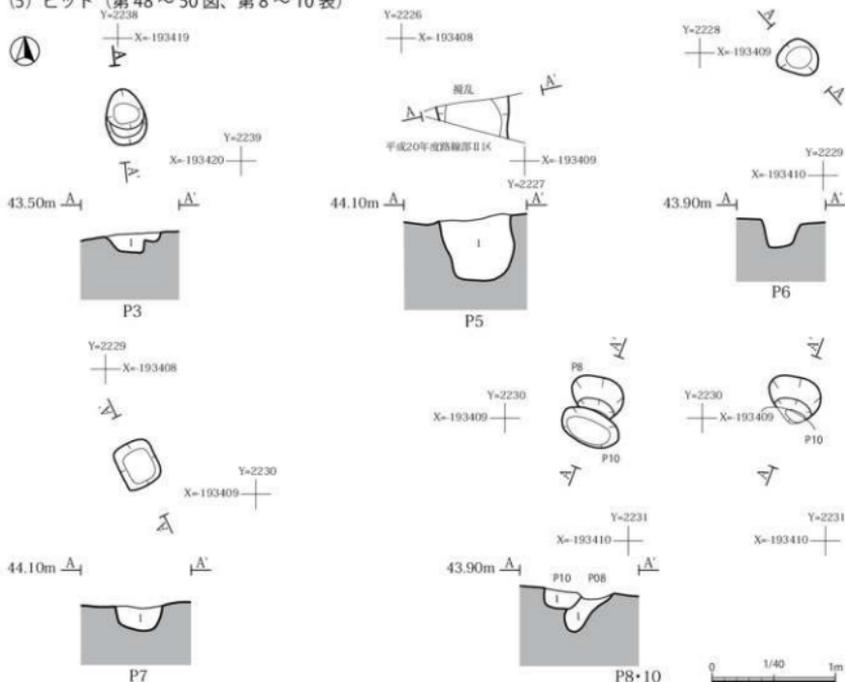
第46図 SX14 性格不明遺構平面図・断面図・立面図(1)

第2節 検出遺構と遺物

遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
平成 20年度 SX7	1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径1~5cmの礫多量
	2	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	やや弱	径2~8cmの礫多量
	3	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	なし
	4	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cmの礫多量
	5	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cmの礫多量
	6	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	10YR3.7/1 黒色シルトブロック多量
	7	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	なし
	8	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cmの礫多量
	9	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~30cmの礫多量

第47図 SX14 性格不明遺構平面図・断面図・立面図(2)

(5) ビット (第48~50図、第8~10表)

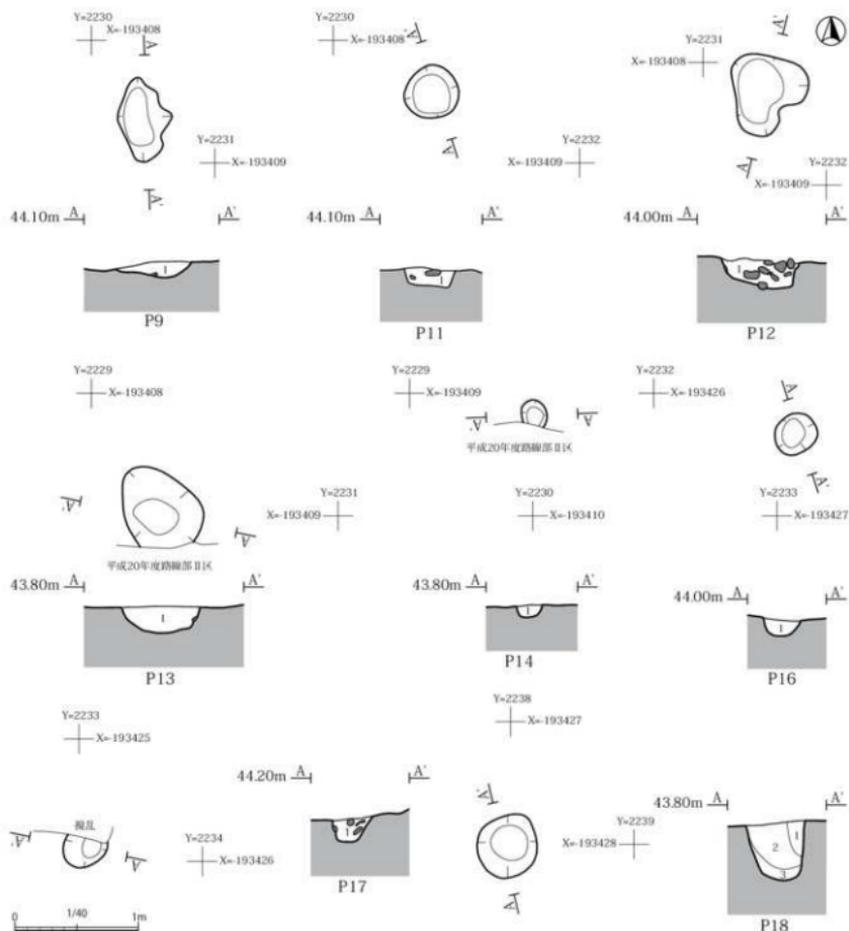


遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P3	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	あり	黄褐色和礫量、径0.5~3cmの礫少量
P5	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	あり	径0.3~0.8cmの礫多量、黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土
P7	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	あり	径3~5mmの黄褐色粘土微量、径1~2cmの礫微量
P8	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや強	黒褐色シルト少量、径1~3cmの礫微量
P10	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	弱	径3~8mmの炭化物微量、径1~3cmの礫微量

第48図 P3・5・6・7・8・10平面図・断面図

遺構名	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
P3	S2-W7	46	32	20	楕円形	U字形		
P5	S1-W8	63	35	51	不整形	U字形		観測・平成20年度踏査部Ⅱ区
P6	S1-W8	33	32	20	円形	U字形		
P7	S1-W8	41	31	15	方形	U字形		
P8	S1-W7	44	43	29	円形	不整形	P9 → P8 → P10	
P10	S1-W7	50	29	22	楕円形	U字形	P9 → P8 → P10	

第8表 P3・5・6・7・8・10観察表



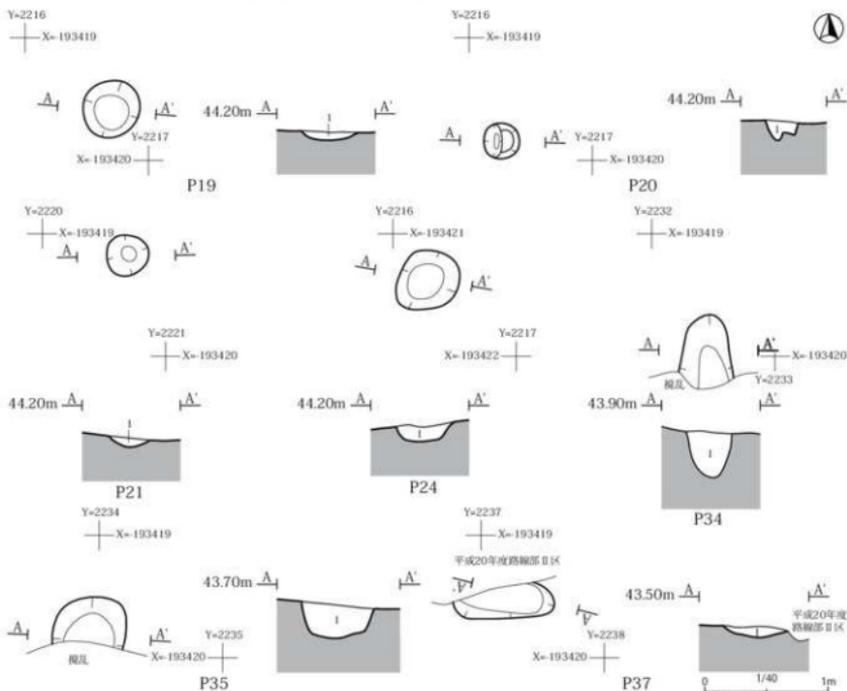
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P9	1	10YR4/6 褐色	粘土	やや強	強	径2~5mmの明褐色シルト微量、暗褐色土少量、径0.2~0.5cmの礫微量
P11	1	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	あり	強	径1~3mmの炭化物微量、径1~3cmの礫微量
P12	1	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	弱	強	明褐色シルト微量、径3~10cmの礫多量
P13	1	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	弱	強	明褐色シルト微量、径3~10cmの礫多量
P14	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	やや弱	やや強	径2~4cmの礫少量
P16	1	10YR3/2 暗褐色	砂質シルト	あり	やや強	明褐色砂質土微量、径2~3cmの礫少量
P17	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	あり	あり	炭化物微量、径2~10cmの礫少量
P18	1	10YR4/6 褐色	シルト	やや強	やや弱	褐色シルト少量
	2	10YR4/4 褐色	シルト	あり	強	暗褐色シルト少量、径1~3cmの礫少量
	3	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	やや弱	強	径0.5~1cmの礫微量

第49図 P9・11・12・13・14・16・17・18 平面図・断面図

第2節 検出遺構と遺物

遺構名	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
P9	S1-W7	70	44	7	不整形	皿形	P9 → P8 → P10	
P11	S1-W7	44	43	11	円形	皿形		
P12	S1-W7	66	65	22	不整形	不整形		
P13	S1-W8	(75)	59	22	不整形円形	皿形	平成20年度発掘部Ⅱ区	
P14	S1-W7・8	25	(18)	7	円形	U字形	平成20年度発掘部Ⅱ区	
P16	S3-W7	36	35	13	円形	U字形		
P17	S3-W7	37	(25)	13	円形	皿形		覆瓦
P18	S3-W7	55	50	48	円形	U字形		

第9表 P9・11・12・13・14・16・17・18 観察表



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
P19	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	あり	暗褐色シルト少量
P20	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	やや強	強	
P21	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	あり	強	径1~2mmの暗褐色粒微量、黒褐色シルト少量
P24	1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	強	径5mmの褐色シルトブロック微量、径0.3~0.5cmの礫微量
P34	1	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	黄褐色粒微量、径1~10cmの礫微量
P35	1	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	径1~10cmの礫微量
P37	1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径2~5cmの礫少量

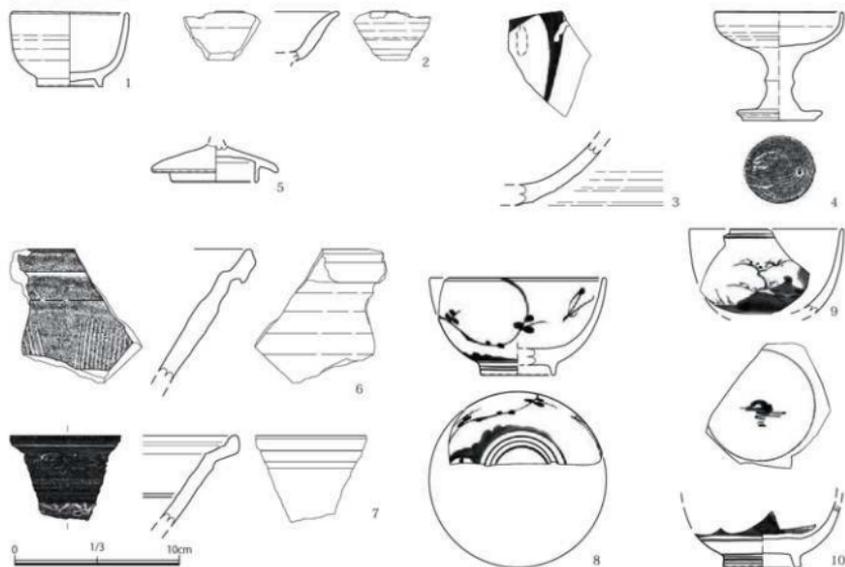
第50図 P19・20・21・24・34・35・37 平面図・断面図

遺構名	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
P19	S2-W9	47	46	6	円形	不整形		
P20	S2-W9	29	29	11	円形	不整形		
P21	S2-W8	39	38	5	円形	皿形		
P24	S3-W9	56	49	47	円形	皿形		
P34	S2・3-W7	40	43	36	不整形円形	U字形	P34 → SD02	
P35	S2-W7	59	(39)	24	不整形円形	U字形	P35 → SD02	
P37	S2-W7	42	(27)	7	不整形円形	皿形	平成20年度発掘部Ⅱ区	

第10表 P19・20・21・24・34・35・37 観察表

(6) Ⅲ層出土遺物 (第51・52図、図版36-6～14、37-1～12)

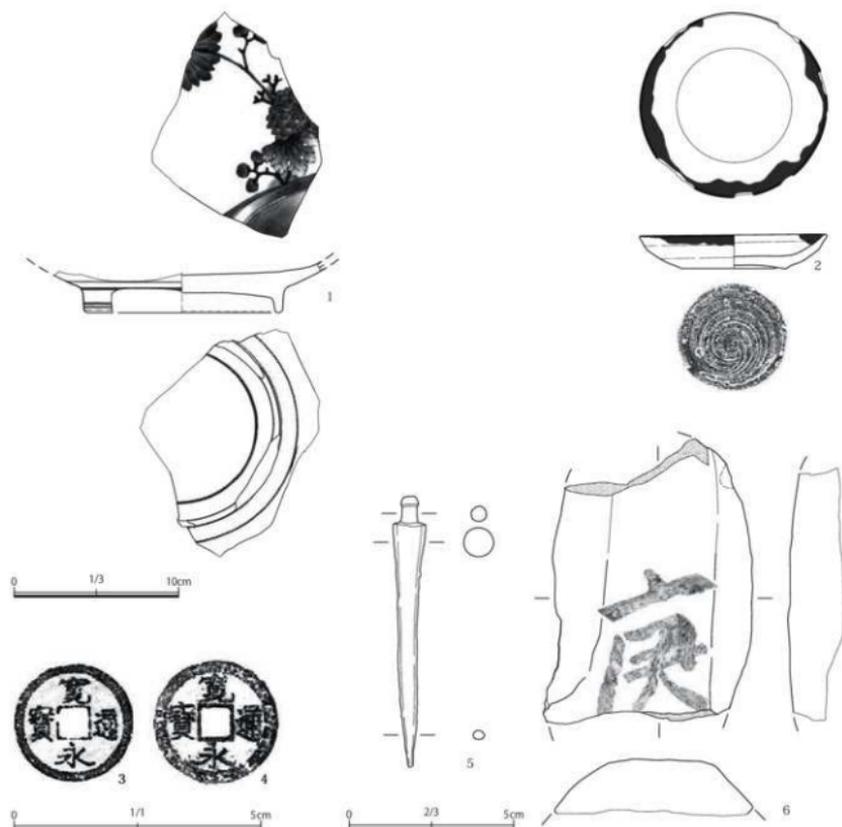
Ⅲ層から374点の破片が出土した。内訳は陶器169点、磁器112点、瓦質土器7点、土師質土器32点、炆器1点、土製品1点、石器・石製品5点、金属製品26点、銭貨12点、瓦5点、自然遺物1点、縄文土器3点である。陶器は、17世紀中葉から18世紀中葉の肥前産の碗、皿、鉢、京・信楽産の碗、17世紀後葉から18世紀後葉の瀬戸・美濃産の碗、皿、18世紀中葉から19世紀前葉の大塚相馬産の土瓶、碗、在地産の播鉢が主体を占める。磁器は、17世紀後葉から18世紀中葉の肥前産の碗、皿、19世紀代の瀬戸・美濃産の碗、17世紀台の中国産の皿が主体を占める。陶磁器以外では、在地産の皿、灯明皿、瓦質の蚊遣り等が見られ、金属製品は煙管や飾り金具、鉄釘等、銭貨は古寛永通宝と新寛永通宝が見られる。他に、瓦、土製品の人形、硯等の石製品が見られる。全体的には18世紀中葉から19世紀前葉にまともが見られる。



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	胎厚 (cm)		産地	時期	備考	登録番号	
										口径	底径					器高
1	36-6	S3-W6	Ⅲ層	陶器	小碗		口縁～高台	や今粗		灰釉	7.00	4.00	4.60	瀬戸・美濃	17c後～18c後	I-39
2	36-7	S3・4-W6・7	Ⅲ層	陶器	小皿		口縁～体部	や今粗		灰釉	—	—	3.00	瀬戸・美濃	17c中～後	I-36
3	36-8	S3・4-W5	Ⅲ層	陶器	大皿		体部	や今粗	内：不明	透明釉 鉄絵	—	—	(3.35)	肥前	17c後～18c中	I-37
4	36-9	S3-W6	Ⅲ層	陶器	仏教器		口縁～底面	や今密		灰釉	7.70	4.40	6.70	瀬戸・美濃	17c後～18c後	石臼転糸切底 I-40
5	36-10	S3-W6	Ⅲ層	陶器	土瓶蓋		縁み～口縁	や今粗		黒緑釉	7.80	5.00	2.20	大塚相馬	19c	縁み欠損 I-43
6	36-11	S3・4-W6・7	Ⅲ層	陶器	鉢鉢		口縁～体部	粗		鉄絵	—	—	(8.20)	瀬戸・美濃	17c後～18c前	縁目傷数 I-38
7	36-12	S3-W6	Ⅲ層	陶器	大鉢		口縁～体部	粗	内：蓮弁・花文	透明釉 白泥	—	—	(5.40)	肥前	17c中～18c中	縁目 I-41
8	37-2	S3-W5	Ⅲ層	磁器	中碗	くろわんか手	口縁～高台	密	外：梅枝文	染付 透明釉	10.50	(4.00)	6.00	肥前	17c後～18c中	I-32
9	37-3	S3-W5	Ⅲ層	磁器	中碗		口縁～体部	密	外：一原風草文	染付 透明釉	(9.20)	—	(5.20)	肥前	17c中～18c後	I-33
10	37-4	S3-W6	Ⅲ層	磁器	中碗		体部～底面	密	外：不明 内：一原風草文	染付 透明釉	(8.80)	4.40	(4.70)	瀬戸・美濃	19c	I-35

第51図 Ⅲ層出土遺物(1)

第2節 検出遺構と遺物



国取番号	写真国取番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	軸差		法量 (cm)			産地	時期	備考		
										給付	透明軸	口径	底径	器高					
1	37-5	S3-W6	遺層	磁器	中皿		体部~高台	密	外: 團縁文 内: 菊花文	受付	透明軸	—	(11.60)	(3.10)	肥前	17c 後~18c 中	J-36		
2	37-6	S3-W6	遺層	土器	灯明皿		口縁~底部	中~空密				11.20	6.40	2.10	在地	近世期	土師製 団縁糸切底 全面油漉 口縁タール付着	148	
3	37-10	S3-W5	遺層	銭貨	寛永通宝		寛永 13 年 (1636)			外径	穿径	重量	2.38	0.61	2.70	古寛永	銅銭	N-17	
4	37-11	S3-W6	遺層	銭貨	寛永通宝		寛永 13 年 (1636)			2.52	0.56	3.05				古寛永	銅銭	N-22	
5	37-12	S2・3-W5	遺層	不明						法量 (cm・g)									
										長さ	幅	厚さ	重量						
										8.30	—	—	19.10	最大径 1.00cm	円錐形	片端突出部	銅製	N-9	
6	37-8	S3-W6	遺層	不明						法量 (cm・g)									
										長さ	幅	厚さ	重量						
										18.50	(6.00)	(1.80)	69.0	陶板片	灰	滑漉			K-3

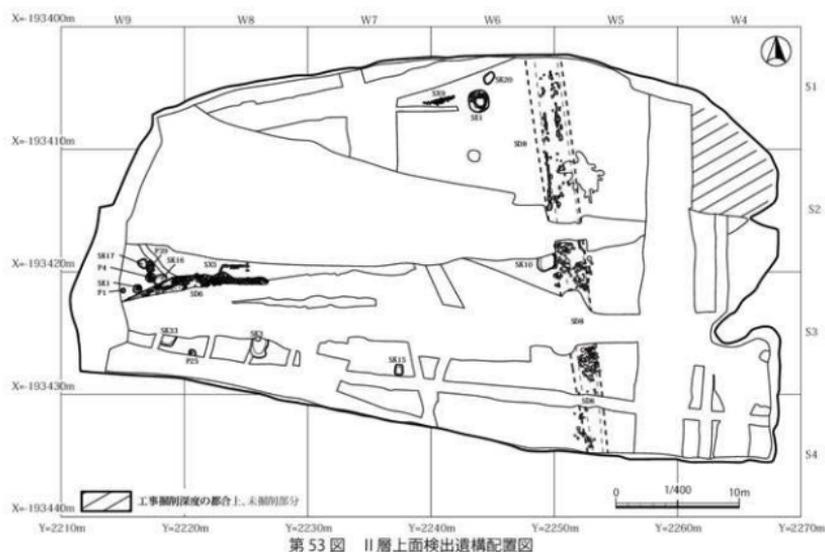
第 52 図 Ⅲ層出土遺物 (2)

4 II層上面検出遺構

II層上面で検出された遺構は、溝跡2条、井戸跡1基、土坑9基、性格不明遺構3基、ピット4基である。遺構は、市道部1区北側とII区西側で多く検出された。

(1) 溝跡

1) SD6 石組溝跡 (第54～56図、図版21-5～8、22-1・2、38-1～3)

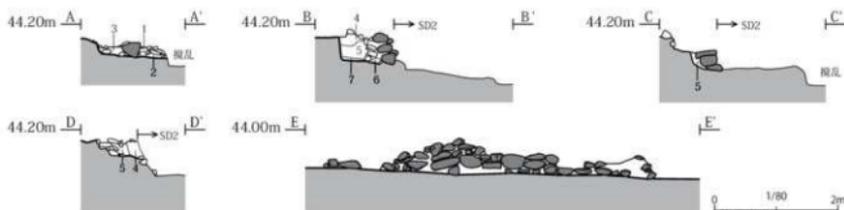


第2節 検出遺構と遺物

S3-W8・9 グリッドに位置し、南側に向かって僅かに弧を描きながら東西に延びる石組の溝跡である。西側は調査区外へ延び、南側は掘乱及びSD2に壊される。主軸方向はN-88°-Eを指す。残存規模は、長さ10.36m、幅36～81cm、深さ42～47cmを測り、断面形は方形である。東側はSD2と重複するが、軸方向と重複状況から、本遺構を造り替えてSD2が構築された可能性も考えられる。

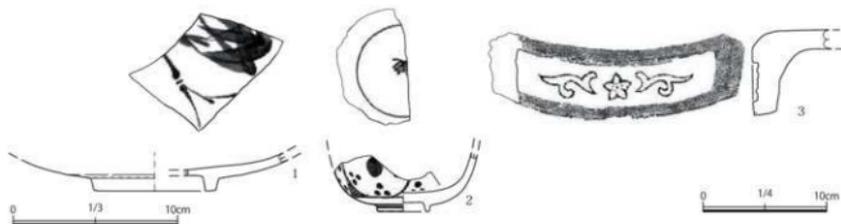
石組は長さ14～47cm、幅14～54cm、厚さ10～18cmの円礫を1段から3段積み上げて構築されている。石組の裏込めには径6～15cmの円礫が使用され、砂礫混じりの砂質シルトやシルトが詰められる。底面はほぼ平坦である。掘り方は上端幅173～224cm、下端幅131～182cm、深さ50～57cmを測り、断面形は逆台形である。堆積土は灰黄褐色の砂質シルトとシルトが主体で、礫が多量に含まれている。

遺物は18世紀中葉から19世紀中葉の肥前産磁器の碗、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器の皿・水滴、大塚相馬産陶器の碗・皿、小野相馬産陶器の皿、17世紀後葉から18世紀後葉の肥前産陶器の皿の他、瓦、煙管、銭貨（新寛永通宝）等が出土している。SD2が構築される直前までは機能していたと推測される。



部位	現在	土色	土質	粘性	しまり	備考
埋積土	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	径0.3～0.5cmの礫微量、径1～10cmの礫中量
	2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	弱	微量、径1～3cmの礫中量
構築土	3	10YR5/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	やや強	砂少量、径5～15cmの礫多量
	4	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径2～15cmの礫中量
	5	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	やや弱	径2～20cmの礫中量
構築土	6	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	やや強	あり 径2～10cmの礫少量
	7	10YR3/1	黒褐色	砂	やや弱	あり 赤褐色粒多量、径1～3cmの礫少量

第55図 SD6溝跡断面図・立面図



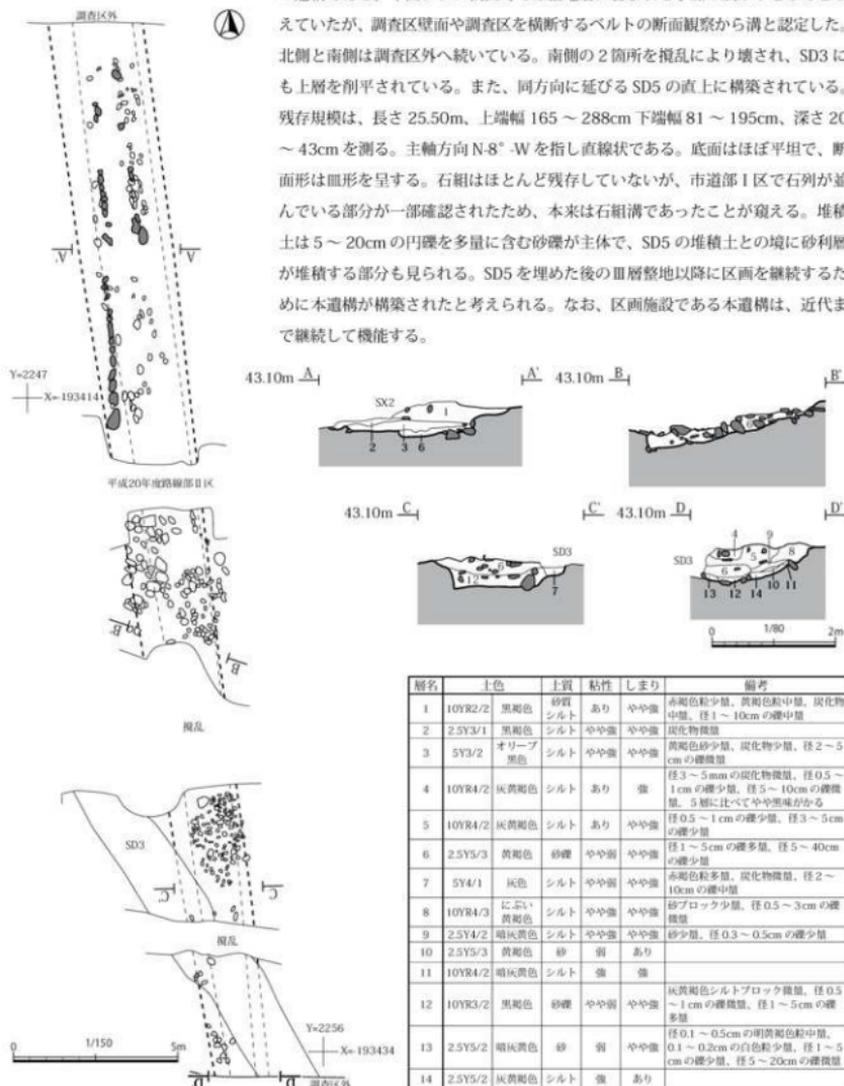
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	胎土	文様	軸差		法距 (cm)		産地	時期	備考	登録番号
										口径	底径	口高	底高				
1	38-1	S3-W8	SD6	陶器	中碗		体部～高台	やや密	西：竹文	透明釉 鉄軸	—	(6.20)	(2.30)	肥前	17c 後～18c 後	二次焼結	J-31
2	38-2	S3-W8	SD6	磁器	小碗	半球碗	体部～高台	密	外：麻子・丸文 内：一重線に黒虫文	染付 透明釉	—	(3.10)	(3.70)	肥前	18c 中～19c 中		J-28

図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	部位	法距 (cm)			備考	登録番号				
						長さ	幅	厚さ						
3	38-3	S3-W8	SD6	粘平・斜紋	文様紙	—	(20.80)	1.90	文様部のみ残存	杉紙文と唐草文の組み合わせ	瓦当高7.20cm	文様幅3.10cm	台地	H-3

第56図 SD6溝跡出土遺物

2) SD8 溝跡 (第 57・58 図、図版 4-8、22-3・4、38-4～11)

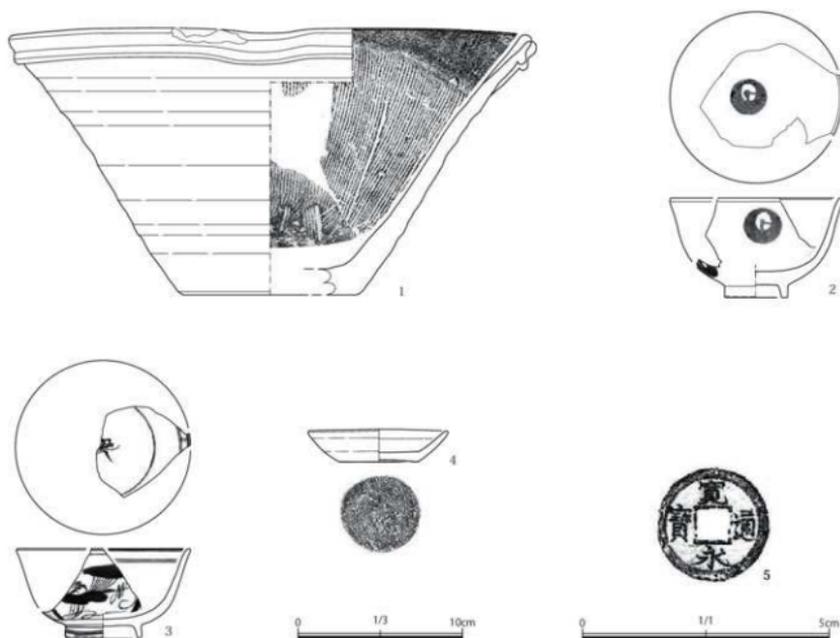
S1・2・3・4・W5・6 グリッドに位置し、北西から南東に向かって延びる溝状の遺構である。平面プラン検出時では整地層に含まれる小礫の広がりととしてとらえていたが、調査区壁面や調査区を横断するベルトの断面観察から溝と認定した。北側と南側は調査区外へ続いている。南側の2箇所を掘削により壊され、SD3にも上層を削平されている。また、同方向に延びるSD5の直上に構築されている。残存規模は、長さ 25.50m、上端幅 165～288cm 下端幅 81～195cm、深さ 20～43cm を測る。主軸方向 N-8°-W を指し直線状である。底面はほぼ平坦で、断面形は皿形を呈する。石組はほとんど残存していないが、市道部 I 区で石列が並んでいる部分が一部確認されたため、本来は石組溝であったことが窺える。堆積土は 5～20cm の円礫を多量に含む砂礫が主体で、SD5 の堆積土との境に砂利層が堆積する部分も見られる。SD5 を埋めた後のⅢ層整地以降に区画を継続するために本遺構が構築されたと考えられる。なお、区画施設である本遺構は、近代まで継続して機能する。



第 57 図 SD8 溝跡平面図・断面図

第2節 検出遺構と遺物

遺物は、17世紀代の中国産磁器や初期伊万里、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器の端反碗、17世紀後葉から18世紀中葉の肥前産陶器、19世紀代の大瀬相馬・小野相馬産陶器等が出土している。製作年代は概ね磁器が17世紀末から19世紀中葉、陶器は19世紀代のもが主体である。他に、瀬戸・美濃産、京・信楽系陶器、在地産、堤産、岸産播鉢、在地産土師質・瓦質土器、瓦、土製品、煙管等の金属製品、銭貨（新寛永通宝）等が出土している。また、幕末から近代にかけてのガラス製のワインボトルや近代以降の板ガラスも出土している。



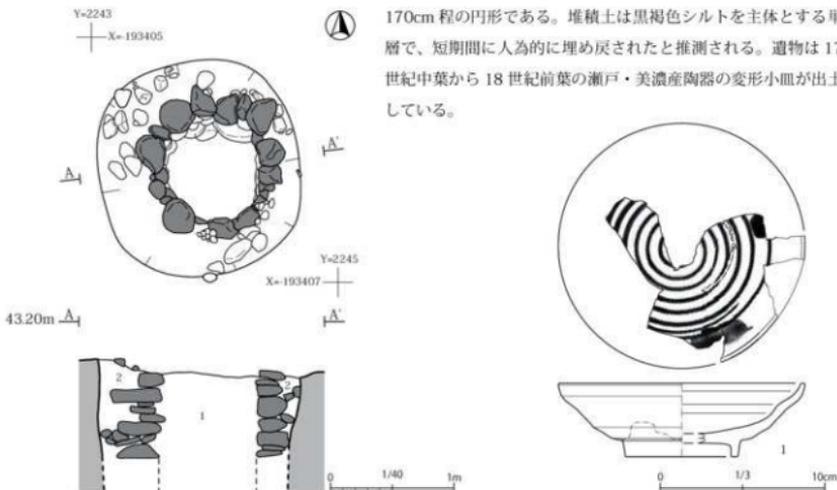
図録番号	写真図録番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	釉薬	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
											口径	底径	器高				
1	38-4	S2・3・4 W5	SD8	陶器	播鉢	口縁～ 底部	やや粗			粉付	31.00	10.60	16.30	堤	19c	片口 見込筒 翻日歯数 16本 / 33mm幅	I-44
2	38-5	S2・3・4 W5	SD8	磁器	中碗	口縁～ 高台	密	外：鶴文散し 内：鶴文	染付 透明釉		10.40	3.80	6.10	肥前	17c後～ 18c中	コンニャク印判	J-37
3	38-6	S2・3・4 W5	SD8	磁器	小碗	端反碗 高台	密	外：草花文	染付 透明釉		10.50	4.40	5.50	瀬戸・ 美濃	19c		J-38
図録番号	写真図録番号	グリッド	遺構	種別	器種	部位	胎土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号			
								口径	底径	器高							
4	38-7	S3・4 W5	SD8	土器	小皿	口縁～ 底部	やや粗	—	4.80	2.00	在地	近世期	土師質 回転糸切底	I-65			
図録番号	写真図録番号	グリッド	遺構	銭貨名	初鑄年	法量 (cm・g)			備考	登録番号							
						外径	厚径	重量									
5	38-10	S2・3・4 W5	SD8	寛永通宝	延宝元年 (1672)	2.31	0.63	2.60	新産本 瀬戸	N-20							

第58図 SD8溝跡出土遺物

(2) 井戸

1) SE1 井戸跡 (第59図、図版22-5、23-1~3、38-12)

S1-W6グリッドに位置する石組の井戸である。規模は、石組内径75cmを測り、深さは工事掘削深度の都合上、検出面から80cmまでの掘削に止まった。石組は長さ10~30cm、幅8~30cm、厚さ4~17cmのやや扁平な円礫を積み上げ、裏込には径1~5cmの円礫が使用され、砂礫混じりの砂質シルトやシルトが詰められる。掘り方は上端径170cm程の円形である。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層で、短期間に人為的に埋め戻されたと推測される。遺物は17世紀中葉から18世紀前葉の瀬戸・美濃産陶器の変形小皿が出土している。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
1	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	強	径2~3mm 明黄褐色粒少量、径0.3~0.8cmの礫中量、径5cmの礫微量
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	強	黒褐色シルト少量、砂中量、径1~5cmの礫多量

図録番号	写真図録番号	グリッド	遺構	種類	器種	部位	胎土	文様	軸差 (cm)			産地	時期	備考	図録番号		
									軸差	口径	底径						
1	38-12	S1-W6	SE1	陶器	小皿	口縁~高台	粗	内: 瀬文	灰胎	鉄絵	(14.70)	6.80	4.50	瀬戸・美濃	17c中~18c前	見込取付口跡 髹付重むね跡	1-32

第59図 SE1 井戸跡平面図・断面図・出土遺物

(3) 土坑

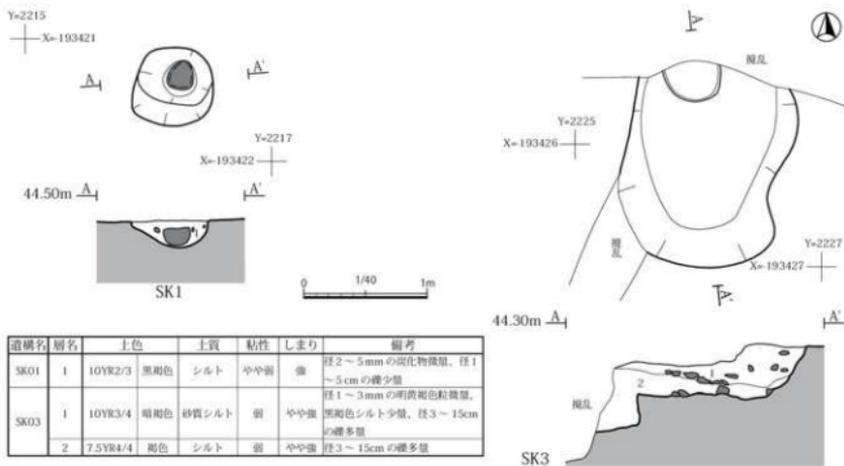
1) SK1 土坑 (第60図、図版23-4)

S3-W9グリッドに位置する。規模は、長軸66cm、短軸64cm、深さ14cmを測る。平面形は円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、南側で緩やかな段を有する。断面形は皿形を呈する。底面直上で径20cm、厚さ14cmの礎石と考えられる円礫が検出されたことから、構造物の柱基礎の性格をもつと考えられる。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

2) SK3 土坑 (第60図、図版23-5・6)

S3-W8グリッドに位置する。北側及び南西側は視乱により壊され、残存規模は、長軸135cm、短軸135cm、深さ25cmを測る。平面形は不整形円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北側でピット状の掘り込みが見られる。断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色砂質シルトと褐色シルトの2層からなる。遺物は17世紀中葉の瀬戸・美濃産陶器の長石軸中皿等が出土している。

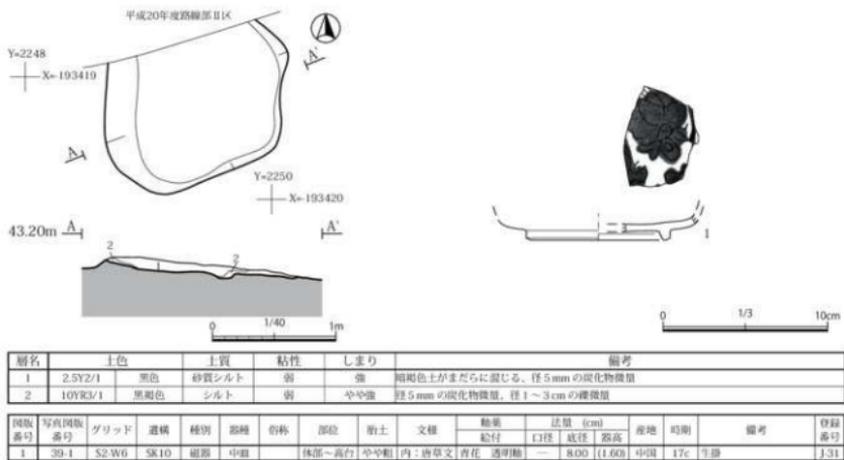
第2節 検出遺構と遺物



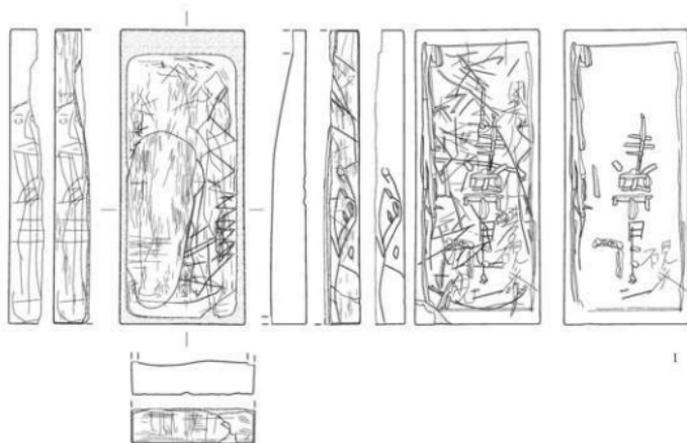
第60図 SK1・3土坑平面図・断面図

3) SK10土坑 (第61図、図版23・7・8、39-1・2)

S2-W6グリッドに位置する。北側は平成20年度の路線部Ⅱ区へ続いている。調査区内での規模は、長軸168cm、短軸120cm、深さ5cmを測る。平面形は不整形形で、断面形は底部が平坦な皿形を呈する。堆積土は黒色砂質シルトを主体とする2層からなる。遺物は17世紀代の中国産磁器の中皿、19世紀代の大塚相馬産陶器の土瓶蓋、在地産土器・土製品、石製品の礎等が出土している。



第61図 SK10土坑平面図・断面図・出土遺物



図版 番号	写真図版 番号	グリッド	遺構	種類	法量 cm・g				石材	備考	図録 番号
					長さ	幅	高さ	重量			
1	302	S2-W6	SK10	礎	1800	750	220	550.0	粘板岩	長方形 側面および底面に線刻、ヘラ彫あり 左側面に人物像 遺面に「寅年」「福」と判読	K-4

第62図 SK10土坑出土遺物(2)

4) SK15土坑(第63図、図版24-1・2)

S3-W7グリッドに位置する。規模は、長軸86cm、短軸66cm、深さ23cmを測る。平面形は方形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は褐色砂質シルトを主体とする3層からなる。遺物は18世紀後葉から19世紀中葉の肥前産磁器の白磁壺蓋、瀬戸・美濃産磁器の碗、在地産土師質土器等が出土している。

5) SK16土坑(第63図、図版24-3・4)

S3-W9グリッドに位置する。東側は攪乱により壊されており、残存規模は、長さ119cm、短軸65cm、深さ53cmを測る。平面形は不整楕円形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする4層からなる。遺物は在地産土師質土器、瓦、雁首銭、鉄釘等が出土している。

6) SK17土坑(第63図、図版24-5)

S2-W9グリッドに位置する。南東側はP39により壊されており、残存規模は、長軸82cm、短軸69cm、深さ10cmを測る。平面形は不整楕円形で、断面形は皿形を呈する。堆積土は暗オリーブ褐色シルトを主体とする単層で、上層には径3～10cmの礫が散在して見られる。遺物は出土していない。

7) SK20土坑(第63図、図版24-6)

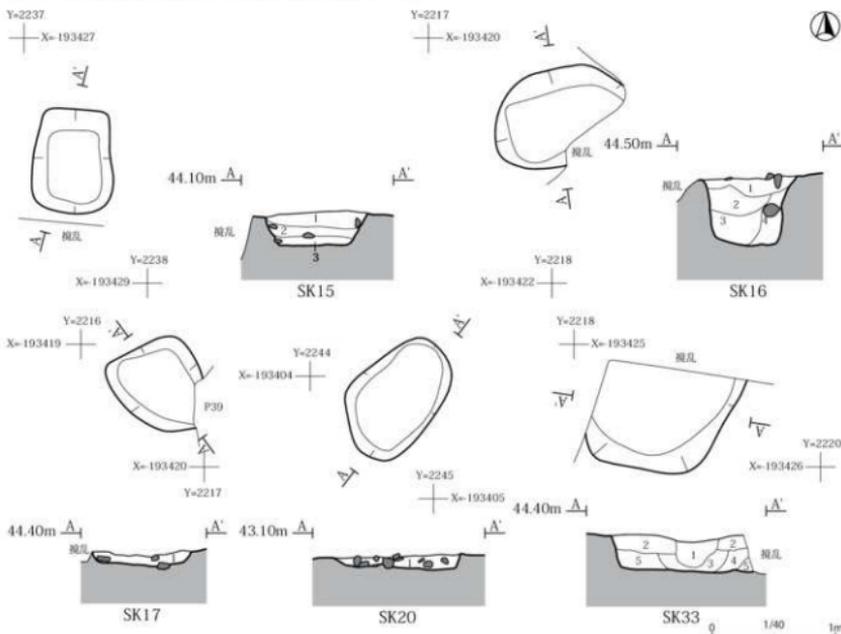
S1-W6グリッドに位置する。規模は、長軸105cm、短軸76cm、深さ9cmを測る。平面形は不整楕円形で、断面形は皿形を呈する。堆積土は褐色砂質シルトを主体とする単層で、径5～10cmの礫を多量に含む。遺物は出土していない。

8) SK33土坑(第63図、図版24-7・8)

S3-W9グリッドに位置する。北側と西側は攪乱により壊されており、残存規模は、長軸137cm、短軸95cm、深さ

第2節 検出遺構と遺物

28cmを測る。平面形は円形もしくは楕円形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトと黒褐色シルトを主体とする5層からなる。遺物は出土していない。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SK15	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	やや弱	強	径2～5mmの明黄褐色粘土微量、径3～8mmの黄褐色粘土微量、径0.3～0.5cmの礫少量、径1～5cmの礫少量
	2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	やや弱	強	径1～5cmの礫少量、径1～3mmの明黄褐色粘土微量、径0.1～0.5cmの礫少量、1層より砂質が強く、3層より粘が強い
	3	10YR4/4	褐色	砂質シルト	やや弱	強	2層とはほぼ同一 やや茶色味がかった色調
SK16	1	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや強	強	灰黄色粘土微量、径0.2～0.8cmの礫少量、径5～10cmの礫少量
	2	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	あり	強	径1～2mmの明黄褐色粘微量、径2～5mmの炭化物微量、径0.3～1cmの礫中量、径5～10cmの礫少量
	3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	あり	強	明黄褐色粘土微量、径3～5cmの礫少量、径0.5～0.8cmの礫少量
	4	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	あり	強	オリーブ褐色粘土少量、径3～5mmの炭化物微量、径1～3cmの礫少量
SK17	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	あり	強	径2～5mmの炭化物微量、径3～10cmの礫中量
SK20	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	弱	強	径2～3mm明黄褐色粘、少量径0.2～0.3cmの礫中量、径5～10cmの礫多量
	1	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	やや強	強	砂微量、径0.3～0.8cmの礫多量、径2～3cmの礫少量
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト	あり	強	非常に黄褐色シルト少量、径0.5～1cmの礫少量
SK33	3	10YR4/2	灰黄褐色	砂	弱	やや強	径0.5～2cmの礫中量
	4	2.5Y3/2	暗オリーブ褐色	砂質シルト	やや弱	強	径1～3cmの礫少量
	5	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	強	径1～5mmの明黄褐色粘微量、径2～3cmの礫中量

第63図 SK15・16・17・20・33土坑平面図・断面図

(4) 性格不明遺構

II層上面では、石列遺構(SX5・SX9)の2基が性格不明遺構として検出された。

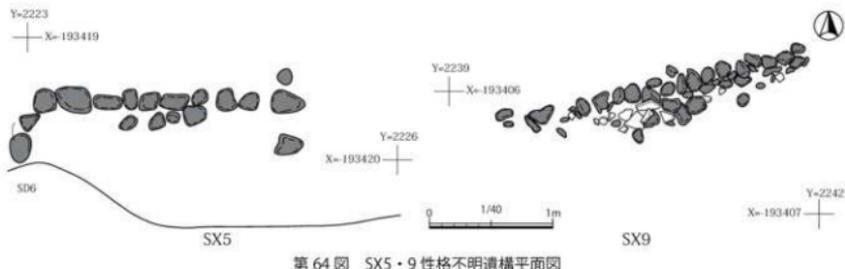
1) SX5 性格不明遺構 (第64図、図版25-1)

S2-W8 グリッドに位置する。東西方向に並ぶ石列である。北側は平成20年度の路線部II区へ延びているが、平成20年度調査では検出されていない。南側はSD6に隣接する。残存規模は、長軸407cm、短軸71cmを測り、西側で南に屈折し、

SD6に接する。石列は長さ10～28cm、幅8～20cm、厚さ5～10cmの扁平な円礫が使用されている。掘り込みは確認されず、石を並べて敷いている状況のみ検出された。

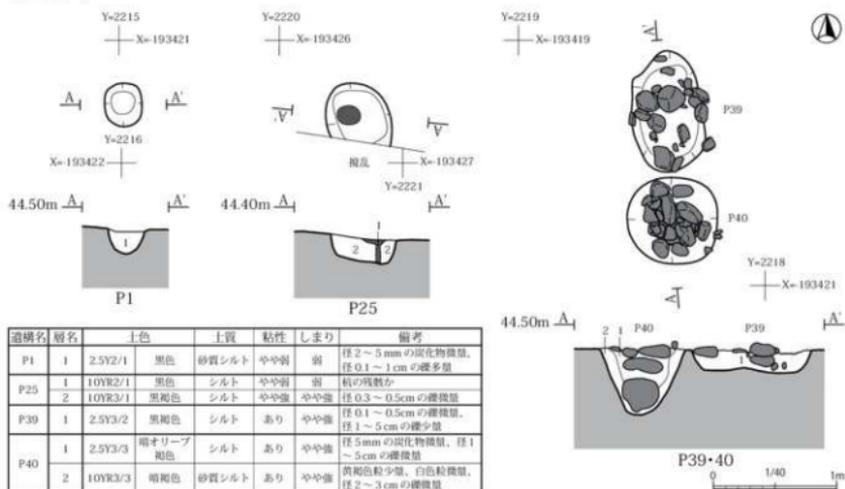
2) SX9 性格不明遺構 (第64図、図版25-2)

S1-W6・7グリッドに位置する。東西方向に並ぶ石列状の遺構である。規模は、長軸257cm、短軸50cmを測る。掘り込みは無く、径10～33cmの円礫と瓦が集中する。石列上部にも礫の広がりが検出されたが、規則性をもたないため礫を除去した後、石列状の平面形が検出された。性格は不明である。



第64図 SX5・9 性格不明遺構平面図

(5) ピット



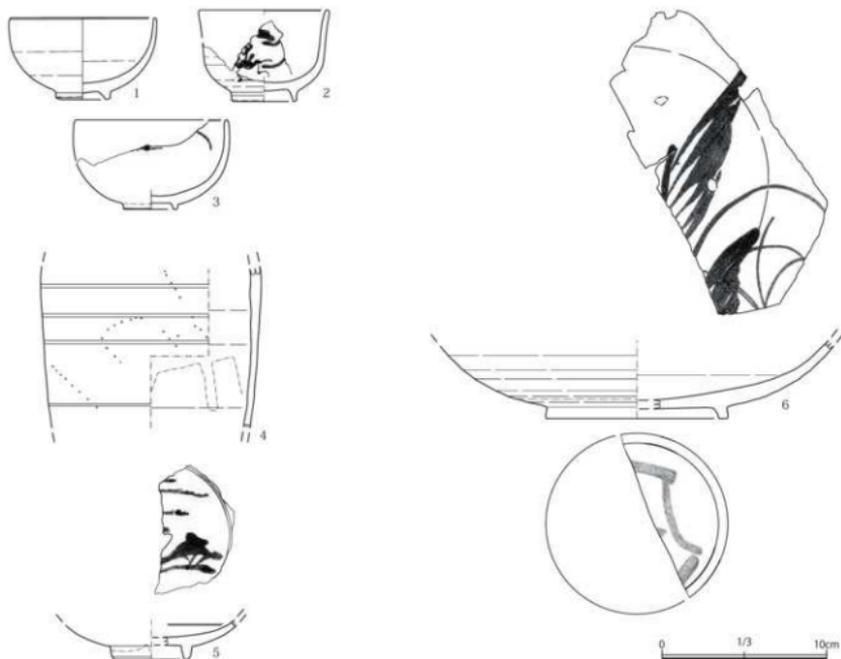
第65図 P1・25・39・40 平面図・断面図

番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
P1	S3-W9	36	31	18	円形	U字形		
P25	S3-W8	53	(47)	14	楕円形	皿形		覆瓦
P39	S2-W9	99	57	8	円形	皿形	SK17→P39	長さ4～22cm、幅3～16cm、厚さ4～8cmの円礫が含まれる。また、長さ22cm、幅20cm、厚さ11cmの礫層石を有する。
P40	S3-W9	72	71	22	楕円形	皿形		長さ9～24cm、幅5～13cm、厚さ4～11cmの円礫が含まれる。また、上層に長さ35cm、幅30cm、厚さ11cmの礫層石を、下層に長さ35cm、幅31cm、厚さ11cmの礫層石を有する。

第11表 P1・25・39・40 観察表

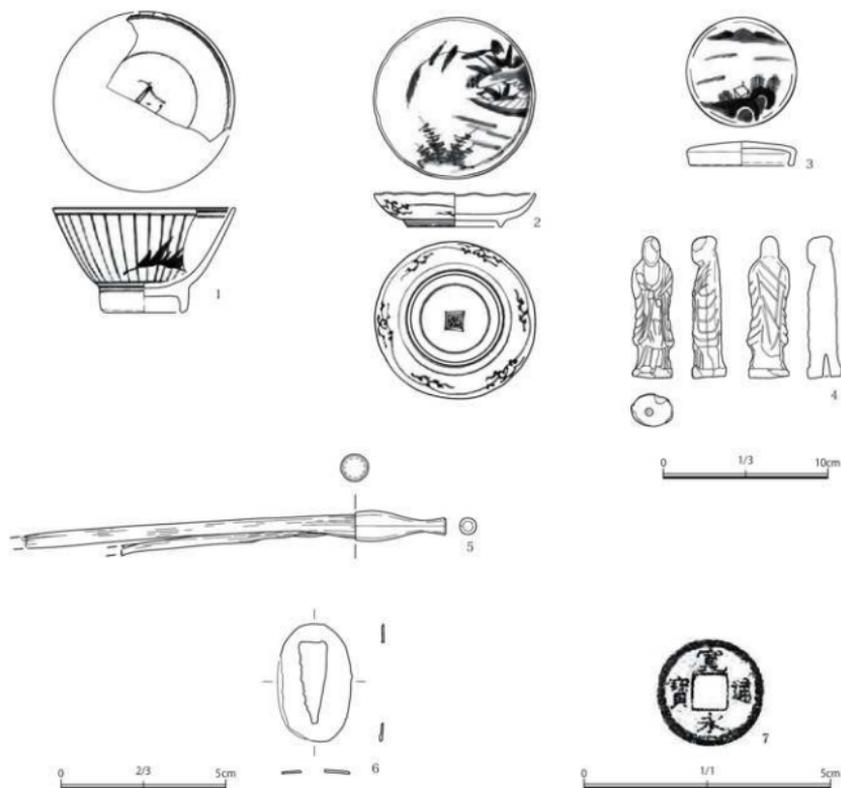
(6) II層出土遺物 (第66・67図、図版39-3～7、40-1～12)

II層から687点の破片が出土した。内訳は陶器329点、磁器180点、瓦質土器11点、土質土器73点、炆器2点、土製品3点、石器・石製品3点、金属製品26点、銭貨21点、瓦23点、自然遺物4点、縄文土器12点である。陶器は、18世紀後葉から19世紀代の大塚相馬産の土瓶、碗、皿が多く、次いで小野相馬産の皿、瀬戸・美濃産の皿、播鉢、17世紀後葉から18世紀後葉の肥前産の碗、皿、鉢、在地産の播鉢等が多くを占める。また、京・信楽産の碗や常滑産の大甕も僅かに出土している。磁器では、18世紀後葉から19世紀代の肥前産の碗、皿、19世紀代の瀬戸・美濃産の碗、皿が主体的に見られる。また、砥部産の十節手の小坏片が1点見られる。陶磁器以外では、在地産の皿、灯明皿、火鉢、瓦質の蚊遣り、堤産の焙烙等が見られ、金属製品では、煙管、鉄釘、銭貨では新寛永通宝が見られる。他に、瓦、土製品の人形、石製品が少量見られる。全体としては19世紀前半にまとまが見られる。



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	法部 (cm)			産地	時期	備考	登録番号		
										口径	底径	器高						
1	39-3	S1・Z-W6・7	II層	陶器	小碗	口縁～高台	中～密			灰釉	9.00	3.30	5.00	大塚相馬	18c 後～		126	
2	39-4	S3・4-W6	II層	陶器	小碗	口縁～高台	中～密	外: 走馬文	灰釉 鉄絵 鉄絵	(6.80)	(3.40)	5.60	大塚相馬	19c	全面絵		128	
3	39-5	S3-W9	II層	陶器	中碗	半球碗	口縁～高台	粗	外: 草文か?	灰釉 鉄絵	9.30	3.30	5.50	大塚相馬	19c			125
4	39-6	S3・4-W6	II層	陶器	中碗	高田徳利	体部	中～粗		灰釉	—	—	—	瀬戸・美濃	18c 後～ 19c 中	瀬戸町書 点刷 文字内容不明 (丹前か?) 5～7合		130
5	39-7	S3・4-W6	II層	陶器	小碗	体部～高台	中～粗	内: 草木文	灰釉 鉄絵	—	(4.70)	(2.20)	大塚相馬	18c 末～			129	
6	40-1	S3-W5	II層	陶器	大皿	体部～高台	中～密	内: 草文	透明釉 鉄絵	—	(11.00)	(4.80)	肥前	17c 後～ 18c 後	足込ハリ鉢 高台内準書「オウ平に口」		127	

第66図 II層出土遺物(1)

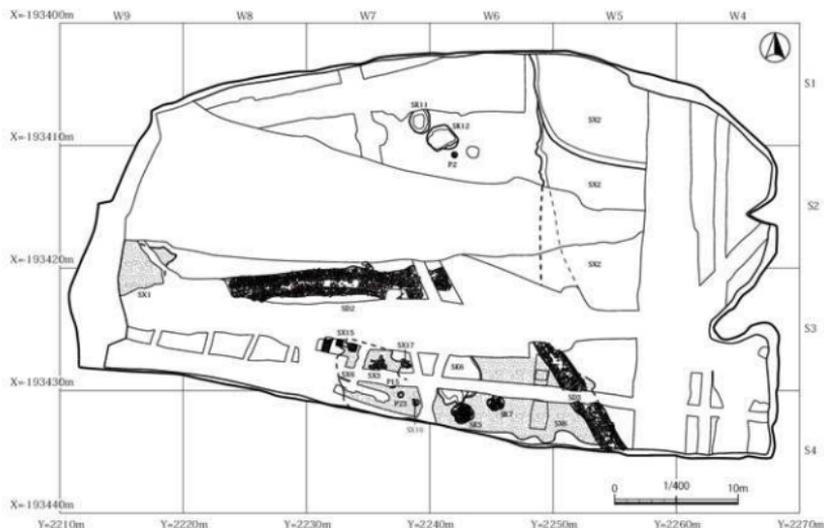


図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	部位	素材	文様	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号	
								軸径	口径	高さ					
1	40-4	S4-W6	II層	磁器	中碗	広東陶	口縁～高台 密 外：龍騎地に雲文 内：二重回線文 昆虫文	透明釉 染付	10.90	4.90	6.40	肥前	10c		J-26
2	40-5	S3-W5	II層	磁器	小皿	輪花皿	口縁～高台 密 外：唐草文 内：身草文	透明釉 染付	9.70	5.70	2.10	肥前	17c 後～ 18c 中	底：二重内に波線 口縁段付者 灯明皿に 利用か?	J-25
3	40-6	S4-W6	II層	磁器	合子蓋	口縁～底面	密 外：一層山水文	透明釉 染付	6.60 上部径	5.80 下部径	1.50	肥前	18c 後～ 19c 中		J-27
4	40-8	S4-W4	II層	人形	頭～体部	やぶ彫	8.70 2.10 2.50 39.45	土師器 古地	地味隆 前後貼り合せ					P-1	
5	40-10	S1-W5	SX02下層	煙管		12.90	— — 3.65	吸口・羅字	吸口部長さ2.75cm 同径0.55cm 接合部径0.85cm 割製					N-5	
6	40-11	S3・4-W6	II層	切貝		3.60 (径1.5)	0.08 2.30	穿径 縦2.50cm×横0.70cm	割製					N-11	
7	40-12	S3-W5	II層	新永通宝	錢	延宝元年(1672)	2.17 0.68 1.30	新永通 割銭						N-16	

第67図 II層出土遺物(2)

5 1層上面検出遺構

1層上面で検出された遺構は、溝跡2条、土坑4基、性格不明遺構4基、ピット8基である。遺構は、主に市道部Ⅱ区から検出され、すべて近代以降のものである。



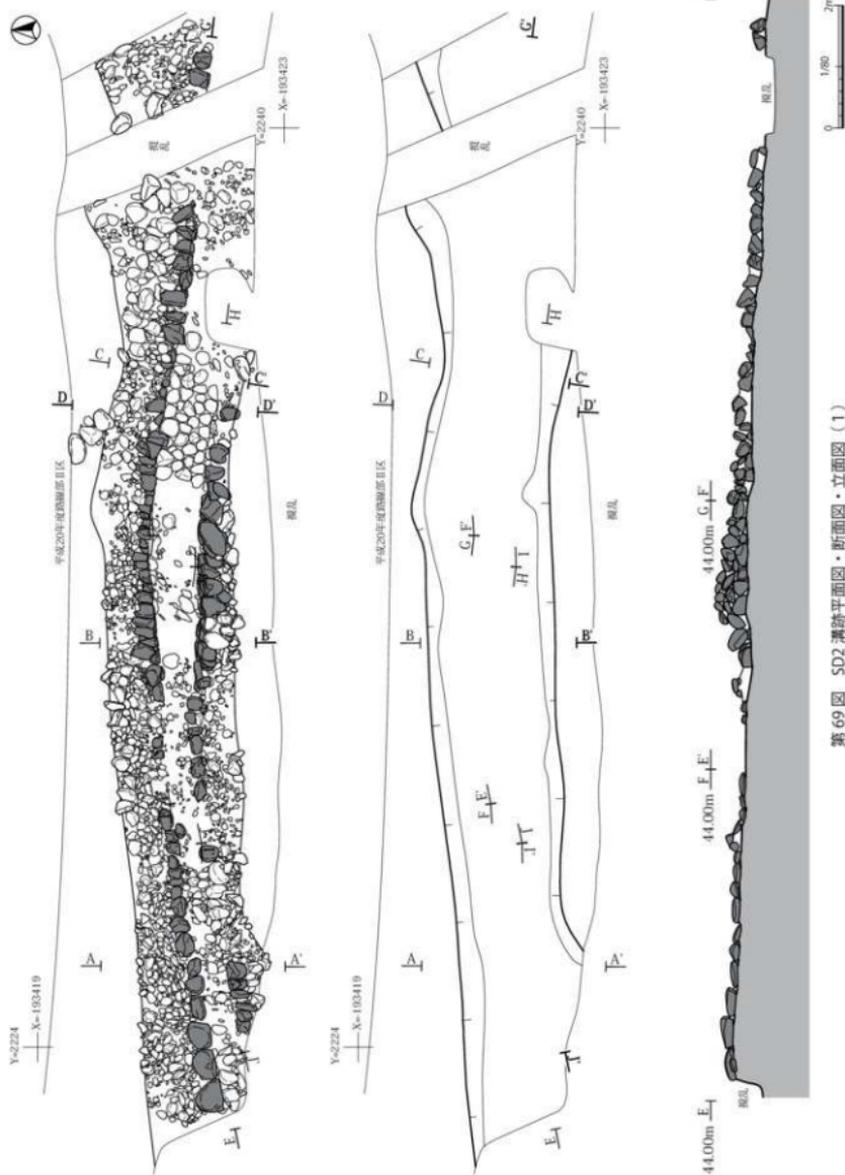
第68図 1層上面検出遺構配置図

(1) 溝跡

1) SD2 石組溝跡 (第69～72図、図版26-6～8、27-1～5、28-1・2、41)

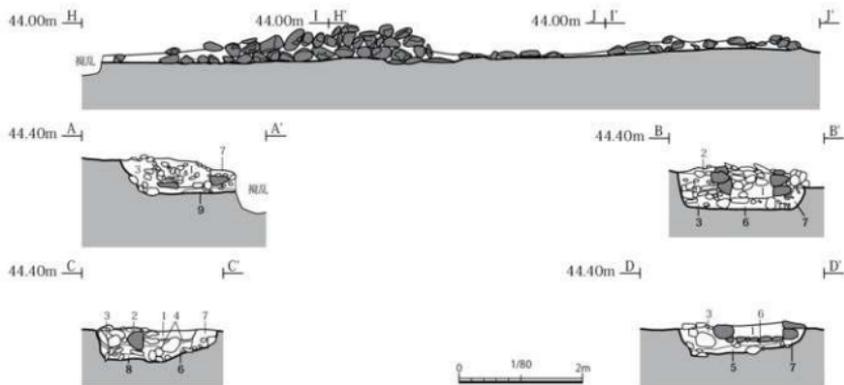
S3-W6・7・8グリッドに位置する。極僅かに弧を描きながら東西方向に延びる石組の溝跡である。西側と東側は攪乱により壊される。主軸方向は西側でN-78°E、東側でN-83°Wを指す。残存規模は、長さ18.40m、幅38～80cm、深さ15～52cmを測り、断面形は方形を呈する。東へ向かって緩やかに低く傾斜する。東側は攪乱により壊されているが、石組の構造から、南東側に位置するSD3に本来接続していたと推測される。

石組は長さ18～65cm、幅10～53cm、厚さ10～25cmの円礫や亜角礫を垂直に2段から3段積み上げ構築されている。円礫は端を打ち欠いて面を作り、その面を内側にして積んでいる。亜角礫は平坦面を内側にしてそのまま積まれている。中には積んだ後、凹凸を打ち欠いて面を調整しているものもある。また、積んだ礫を安定させるため、上下に接地する部分を打ち欠いて平坦にしているものも見られる。石組を構成している礫と同様な礫が、検出段階では周囲に多量に散乱しており、また堆積土中にも多量に含まれていることから、さらに上段に礫が積まれていた可能性がある。石組の裏込めには径5～20cmの円礫が使用され、砂礫混じりの砂質シルトやシルトが詰められる。底面はほぼ平坦であるが、中央東寄りの長さ18c5m、幅80cmの範囲で、底石と考えられる長さ9～30cm、厚さ6～10cmの扁平な円礫が敷き詰められている。掘り方は上端幅172～224cm、下端幅128～180cm、深さ50～70cmを測り、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層で、礫が多量に含まれる。堆積状況から、短期間に人為的に埋められたと推測される。



第 69 図 SD2 溝跡平面図・断面図・立面図 (1)

第2節 検出遺構と遺物



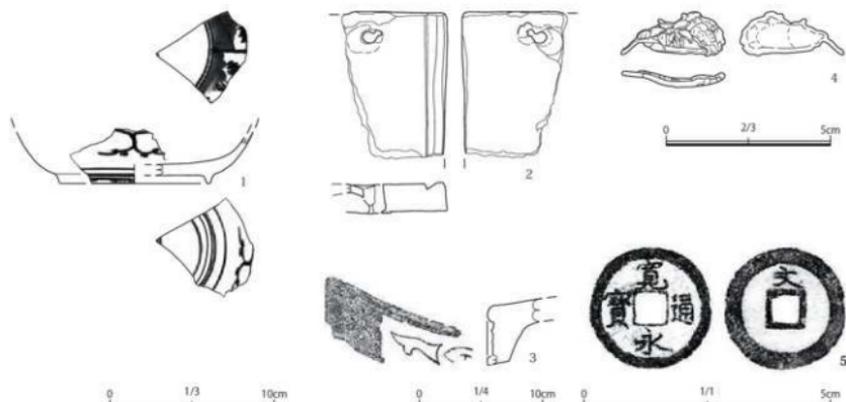
部位	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
埋積土	1	2.5YR3/2	黒褐色	シルト	あり	やや強	径1~8mmの明黄褐色粒積層, 径5mmの炭化物積層, 径0.5~2cmの礫少量, 径5~20cmの礫中量
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	弱	強	
	3	10YR3/3	暗褐色	シルト	あり	やや強	径1~5mmの明黄褐色粒積層, 径0.1~0.5cmの礫少量, 径5~30mmの礫多量
	4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	あり	やや強	径2~3mmの明黄褐色粒積層, 砂礫層, 径0.5~3cmの礫少量
埋積土	5	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや強	あり	径3~5cmの礫少量
	6	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂礫	弱	やや強	にぶい黄褐色シルト少量, 砂中量, 径0.3~1cmの礫中量, 径1~5cmの礫多量
	7	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	強	径1~3mmの明黄褐色粒積層, 径0.1~10cmの礫中量
	8	2.5Y6/3	にぶい黄褐色	粘土	強	強	径5~10cmの礫多量
	9	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫	弱	強	灰黄褐色シルト積層, 径3~5cmの礫積層

第70図 SD2溝跡平面図・断面図・立面図(2)



図録番号	写真図録番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	出土	文様	軸差 (cm)			産地	時期	備考	登録番号	
										口徑	底径	器高					
1	41-1	S3-W7	SD2 掘り方	陶器	胴開口	口縁~底部	やや密			胎差	5.80	4.30	3.50	瀬戸・美濃	18c 後~19c 中	環状溝み	I-19
2	41-2	S3-W7	SD2 掘り方	陶器	胴鉢	胴部~底部	やや粗			胎差	—	(10.40)	(3.20)	在地	不明	柳川陶数7本/17mm幅	I-20
3	41-4	S3-W7	SD2 掘り方	磁器	小碗	端反側	体部~高台	密	外:刺突梅文	透明胎	(8.80)	4.00	4.20	瀬戸・美濃	19c		J-20
4	41-5	S3-W7	SD2 掘り方	磁器	中碗	体部~高台	密	外:花文 内:二重環線に五弁花	透明胎 染付	—	(4.80)	(3.20)	肥前	18c 後~19c 中	底:内に溝筋	J-21	

第71図 SD2溝跡出土遺物(1)



図録番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	出土	文様	施装 胎付	法量 (cm)			発地	時期	備考	図録番号
											口径	底径	高さ				
1	41-6	S3-W7	SD2	磁器	小皿		体部～ 高台	密	外:唐草文 内:区別刷物文	透明陶 染付	—	(9.10)	(3.20)	壁前	18c 後～ 19c 中		J-22
2	41-7	S3-W8	SD2	板状瓦	—		(12.00)	(8.60)	2.60	面風北か?	穿孔 (1)	遺状沈殿	在地				H-5
3	41-8	S3-W8	SD2	軒平瓦	文様区		(14.60)	(12.20)	5.40	文様幅 2.70cm	透かし唐草文	在跡					G-1
4	41-9	S3-W7	SD2	行貨			長さ 3.15	幅 1.25	厚さ 0.30	重量 3.30	銅製						N-6
5	41-10	S3-W7	SD2	釧り方	東米産定	寛文 8 年 (1668)		外径 2.52	口径 0.59	厚さ 2.85	新米未	背「文」	銅製				N-19

第72図 SD2 溝跡出土遺物 (2)

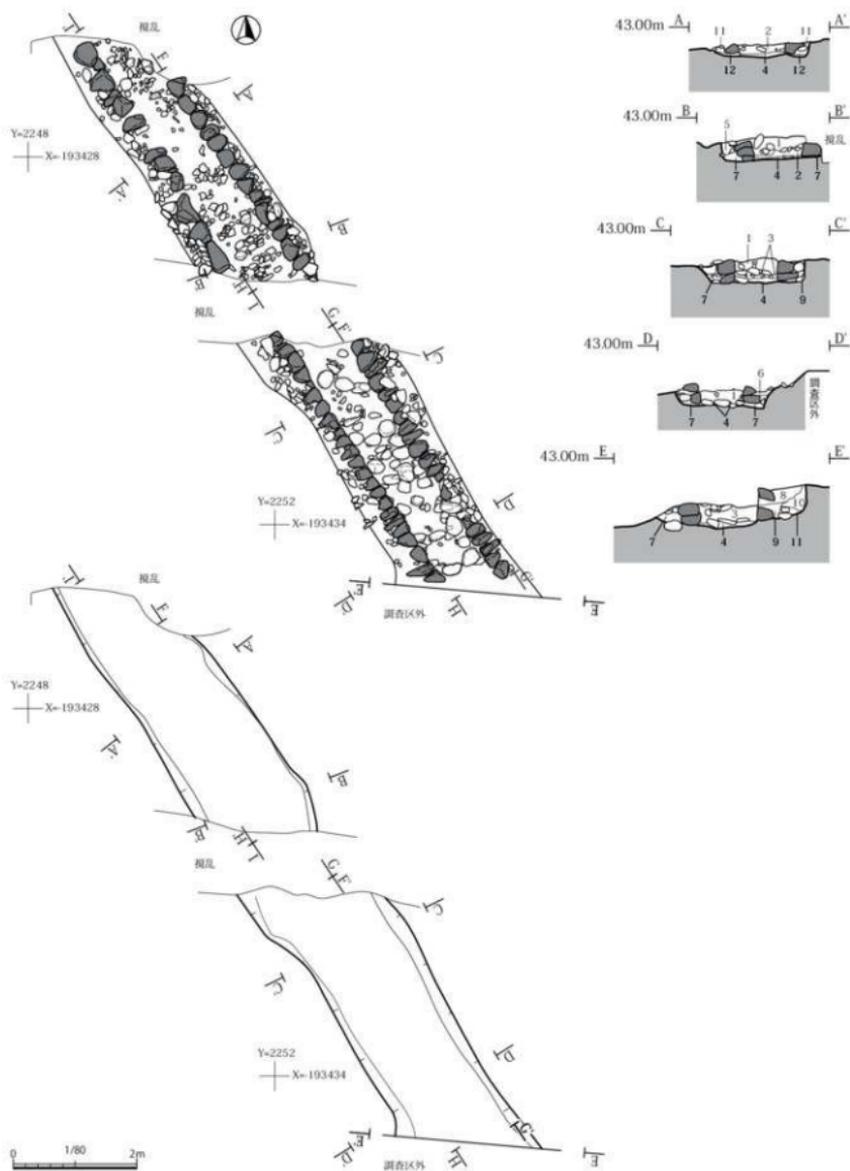
遺物は18世紀後葉から19世紀中葉の肥前産磁器の碗・皿、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器の碗・皿、19世紀代の大塚相馬産陶器の碗・皿・土瓶が主体である。他に、小野相馬産陶器の碗・皿、18世紀後葉から19世紀中葉の瀬戸・美濃産陶器の碗、在地産陶器の甕・鉢、在地産土器、瓦、煙管等の銅製品、銭貨（古・新寛永通宝）、鉄釘等が出土している。また、近代以降の板ガラス・ガラス瓶等のガラス製品や骨角製のハブラシ、磁器の罫子も出土している。板ガラスは構築土中からも出土しており、遺構の構築年代・廃絶年代ともに近代以降と考えられる。

2) SD3 石組溝跡 (第73・74図、図版28-4・5、29-1～4)

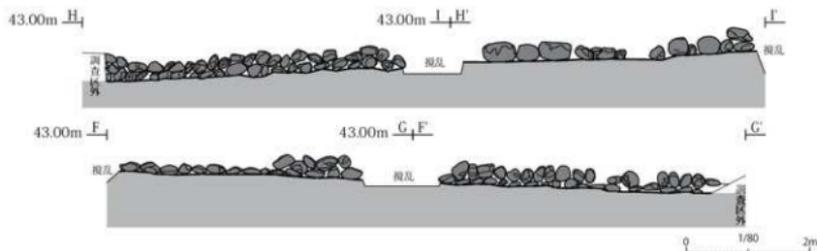
S3-4-W5-6グリッドに位置する。北西から南東に向かって延びる直線状の石組の溝跡である。北側は調査区外へ続き、南側と中央部分は攪乱により壊される。主軸方向はN-33°-Wを指す。残存規模は、長さ10.80m、幅60～79cm、深さ14～37cmを測り、断面形は方形を呈する。南へ向かって緩やかに低く傾斜する。北側は攪乱されているが、石組に使用された礫や構築状況から、本来は北西側に位置するSD2に接続していた同一の遺構であったと推測される。

石組は長さ24～32cm、幅12～61cm、厚さ11～23cmの円礫や垂角礫を垂直に1段から2段積み上げ構築されている。また、西側の石組は東側の石組よりも大きな礫が使用されており、径50cmを超える礫を使用している部分も確認できた。これは、整地層が西から東に向かって下り傾斜していることから、土留めの機能も兼ねていた可能性が考えられる。石組の裏込めには径6～17cmの円礫が使用され、砂礫混じりの砂質シルトやシルトが詰められる。底面は

第2節 検出遺構と遺物



第73図 SD3溝跡平面図・断面図



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
堆積土	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや弱	強	褐色粒、褐色粉、炭化物少量、径2～10cmの礫少量
	2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	褐色土ブロック少量、径2～15cmの礫中量
	3	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	径5～20cmの礫多量
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	径0.1～5cmの礫少量、径5～20cmの礫微量
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや弱	径2～5cmの礫中量
	6	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	やや強	径1～2mmの炭化物微量、径1～3cm礫少量
	7	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや強	やや強	径1mmの白色粒微量、径1～5cmの礫少量、径5～10cmの礫中量
	8	7.5YR4/4	褐色	砂質シルト	やや強	やや強	径0.5～1cmの礫多量、径3～5cmの礫微量
構築土	9	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	強	強	径1～10mmの両面黄褐色粘土少量、径1～5mmの炭化物微量、径0.5～3cmの礫少量、径5～10cmの礫微量
	10	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	やや強	やや強	径2～3mmの炭化物粒子微量
	11	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	強	やや強	砂質、径1～5cmの礫少量
	12	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	やや強	径0.1～0.3cmの礫少量

第74図 SD3 溝跡立面図

ほぼ平坦であるが、底石と考えられる長さ5～30cm、厚さ5～10cmの扁平な円礫が部分的に確認された。掘り方は上端幅154～174cm、下端幅130～154cm、深さ17～41cmを測り、断面形は逆台形である。堆積土にはぶい黄褐色砂質シルトと黒褐色砂質シルトを主体とし、底面直上にはにぶい黄褐色の砂が3～9cm程堆積している。SD2と同様に、短期間に人為的に埋められたと推測される。

遺物は17世紀末から18世紀後葉の肥前産磁器の碗・皿、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器の碗・皿、19世紀代の大塚相馬産陶器の碗・皿・土瓶が主体である。他に、小野相馬産、肥前産、瀬戸・美濃産陶器、19世紀以降の京・信楽産陶器の碗、備前産妬器の小瓶も少量が見られる。また、在地産土器、瓦、鉄釘等が出土している。SD2同様、近代以降の板ガラス・ガラス瓶等も出土している。さらに瀬戸・美濃産磁器の銅版絵付け、型紙絵付けの碗が出土している。

(2) 土坑

1) SK5 土坑 (第75図、図版29-5～7)

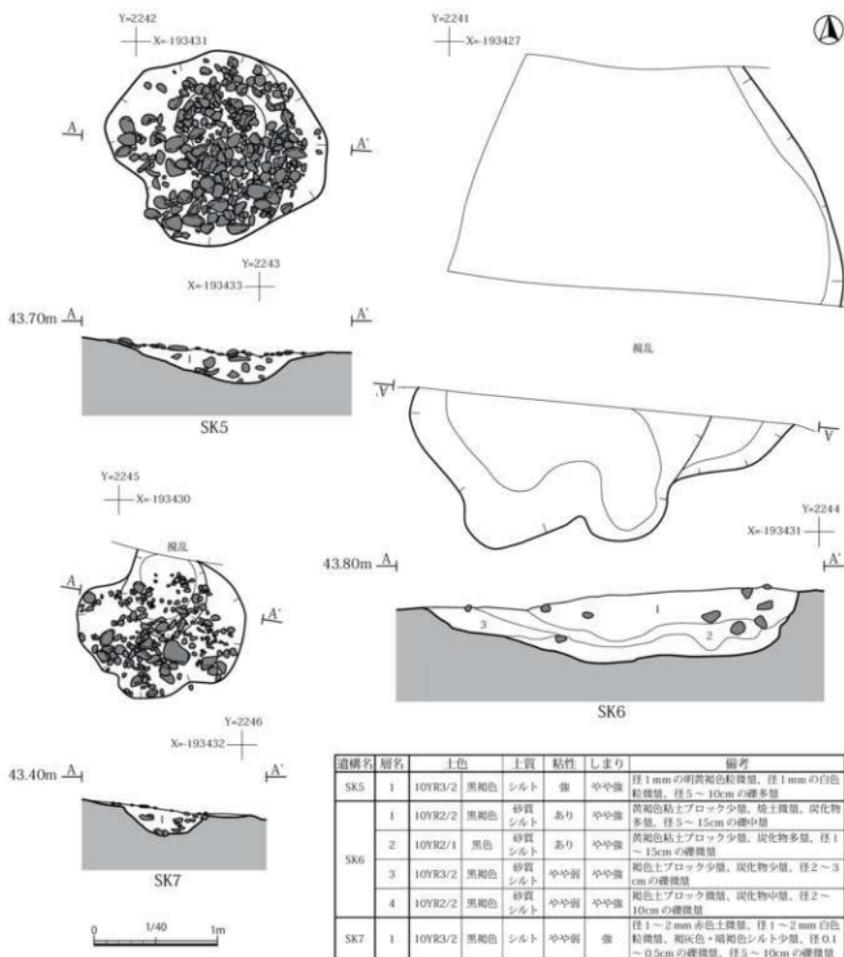
S4-W6グリッドに位置する。規模は、長軸184cm、短軸161cm、深さ24cmを測る。平面形は不整形で、断面形はV字形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層で、径5～10cmの礫が多量に含まれる。礫によって一時に埋められた様相を呈する。遺物は出土していない。

2) SK6 土坑 (第75・76図、図版29-8、42-1～11)

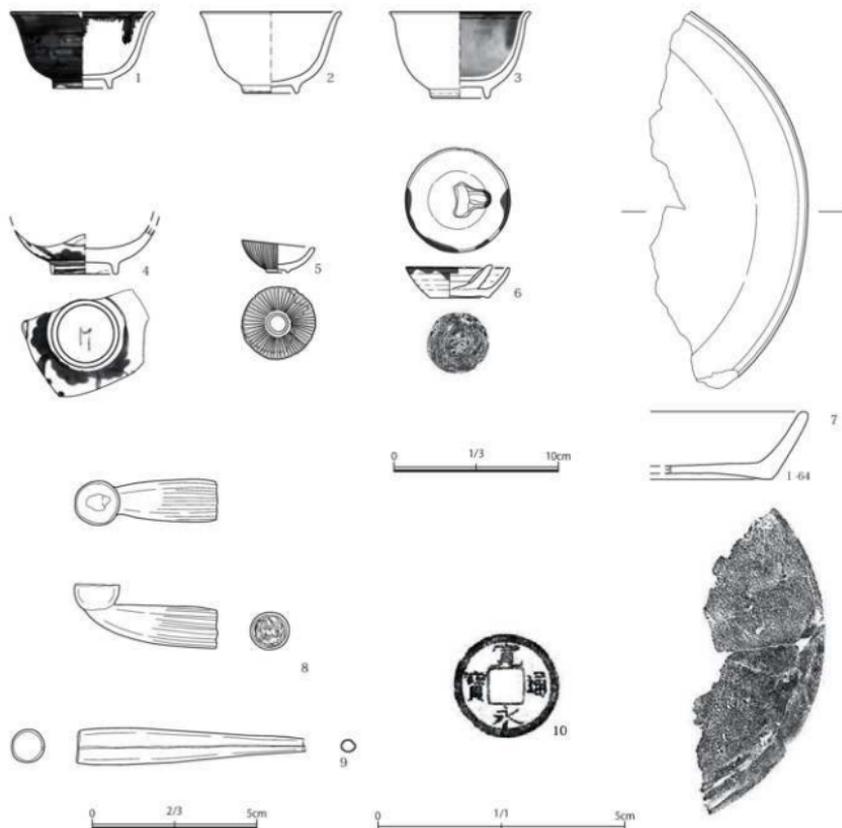
S3・4-W6グリッドに位置する。北・西側及び中央南寄りを掘乱により壊され、残存規模は、長軸388cm、短軸368cm、深さ33cmを測る。平面形は不整形を呈する。底面は全体に起伏があり、南側ではやや起伏が激しい。東側では一部緩やかな段を有しながら立ち上がる。断面形は不整形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とする4層からなる。遺物は17世紀後葉から18世紀中葉の肥前産磁器の碗・皿、19世紀代の大塚相馬産陶器の碗・土瓶、在地産土師質・瓦質土器、堤産の焙烙等が主体的に出土している。他に、煙管等の金属製品や新瓦永通宝、鉄釘も出土しているが、近代以降のガラス製品も出土している。

3) SK7 土坑 (第75図、図版30-1～3)

S4-W6 グリッドに位置する。北側は損乱により壊されており、残存規模は、長軸 135cm、短軸 118cm、深さ 23cm を測る。平面形は円形を呈する。壁は礫が集中する上部で緩やかに浅く立ち上がり、断面形は不整形である。堆積土は黒褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。



第75図 SK5・6・7 土坑平面図・断面図



図録番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	軸差		法量 (cm)		産地	時期	備考	登録番号	
										給付	口径	直径	器高					
1	42-1	S3-W6	SK6	陶器	小碗	端反碗	口縁～高台	中～空密	内：流し掛け	鉄輪	今の本輪	Ø8.60	Ø3.60	4.70	大塚相馬	19c前～中	内面流し掛け	133
2	42-2	S3-W6	SK6	陶器	小碗	端反碗	口縁～高台	中～空密	内：流し掛け	鉄輪	—	Ø8.40	3.00	5.00	大塚相馬	19c前～中	—	134
3	42-3	S3-W6	SK6	陶器	小碗	端反碗	口縁～高台	中～空密	内：流し掛け	鉄輪	—	Ø8.40	Ø3.40	5.30	大塚相馬	19c前～中	内面流し掛け	135
4	42-4	S3-W6	SK6	磁器	中碗	—	体部～高台	附	外：草花文	透明釉 染付	—	3.80	Ø3.00	—	肥前	17c後～18c中	—	J29
5	42-5	S3-W6	SK6	磁器	紅錆口	—	口縁～高台	附	外：聖徳聖文	白磁輪	4.50	1.30	2.00	肥前	17c後～18c中	—	J30	

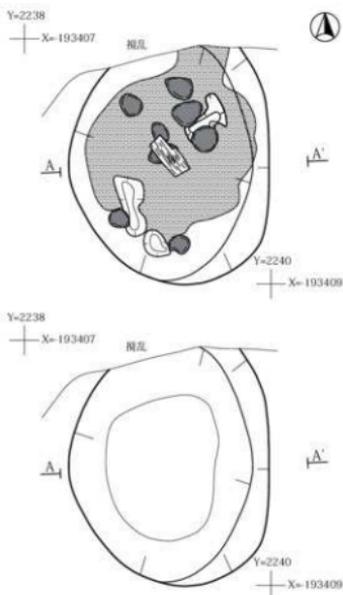
図録番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	部位	胎土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
								口径	底径	器高				
6	42-6	S3-W6	SK6	土器	煮鍋	口縁～底部	中～空粗	6.20	3.10	2.00	在池	近世期	土師質 輪軸 染付 凹輪糸切底 口縁・舌部染付首	163
7	42-7	S3-W6	SK6	土器	切捨	口縁～底部	中～空粗	(29.20)	(23.20)	4.20	在池	19c	土師質 内面塗煙 火消磁蓋の可能性あり	164

図録番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)			備考	登録番号
					長さ	幅	重量		
8	42-0	S3-W6	SK6	押骨	4.30	—	6.75	裏面 外面染線文 羅字残存 割製 火置径140cm 接合部径120cm	N7
9	42-10	S3-W6	SK6	押骨	(6.90)	—	8.40	横口 全面割製金 割製 接合部径100cm 横口径Ø3.40cm	N8

図録番号	写真図版番号	グリッド	遺構	銭貨名	初鑄年	法量 (cm・g)			備考	登録番号
						外径	穿径	重量		
10	42-11	S3-W6	SK6	養老通宝	延宝元年(1672)	2.12	0.67	1.60	新橋末 割製	N18

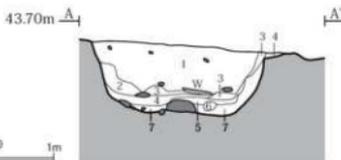
第76図 SK6 土坑出土遺物

第2節 検出遺構と遺物

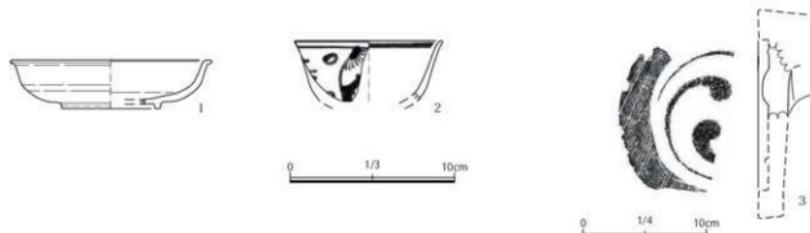


4) SK11 土坑 (第77図、図版30-4～7、42-12～15)

S1-W7 グリッドに位置する。北側は擾乱により壊されており、残存規模は、長軸 187cm、短軸 170cm、深さ 55cm を測る。平面形は楕円形を呈する。底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がり、東側では上部で段を有し、緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形を呈する。検出面から深さ 40cm のところで、厚さ 4～8cm のにぶい黄色粘土が北東側の壁に張り付くように検出された。粘土層直上からは、木片も出土している。堆積土は粘土層を境に上層、下層ともに黒褐色シルトを主体としている。遺物は 19 世紀代の瀬戸・美濃産磁器の碗、19 世紀代の大塚相馬産陶器の碗・皿・土瓶が多くを占める。また、小野相馬産陶器の碗・皿、在地産陶器の甕・搦鉢、在地産土師質・瓦質土器、堤産の焙烙の他、瓦、鉄釘等が出土している。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
1	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや弱	強	径 1～2mm の白色粒中量、3層との境ににぶい黄色粘土層。径 1～3mm の炭化物少量、径 5～10mm の炭化物微量、径 2～5mm の礫微量
2	2.5Y2/1	黒色	砂質土	弱	やや強	黒褐色土ブロック少量
3	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	強	強	黒褐色シルト中量
4	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	強	やや強	にぶい黄褐色粘土微量、径 5～10mm の炭化物中量、径 1～3cm の礫微量
5	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや強	やや強	径 3～5mm の明赤褐色粘土微量、木片少量
6	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	やや弱	やや強	径 2～3mm の明赤褐色粒微量
7	2.5Y3/4	黒褐色	シルト	あり	やや強	径 3～10mm のにぶい黄褐色粘土少量、径 1～10mm の炭化物少量、径 0.3～1cm の礫微量



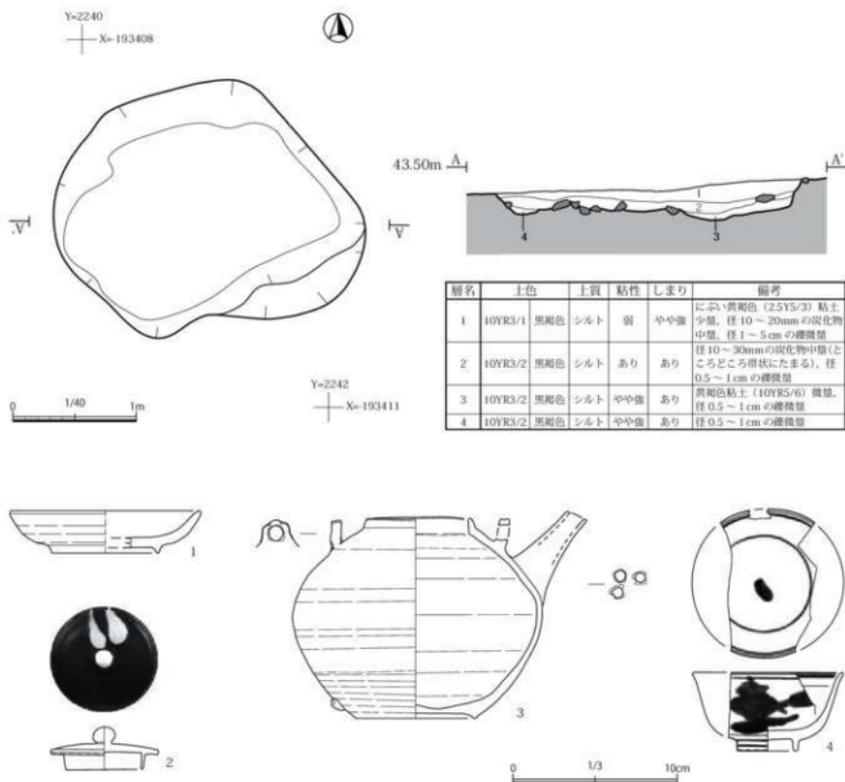
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	粘土	文様	施装 (cm)			産地	時期	備考	登録番号		
										軸差	口径	底径						
1	42-12	S1-W7	SK11	陶器	小皿		口縁～高台	やや密	風輪	(12.00)	(6.00)	3.00	大塚相馬	19c	現込ハリ跡	J-21		
2	42-14	S1-W7	SK11	磁器	小碗	端反碗	口縁～体部	密	外:花文内:太陽輪	漆明軸	染付	(8.80)	—	(3.70)	瀬戸・美濃	19c	積層	J-23

図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	部位	法量 (cm)		備考	登録番号
						長さ	幅		
3	42-15	S1-W7	SK11	軒瓦	瓦当部	(4.50)	—	2.00(瓦当厚)瓦当のみ残存 右三巴 在地 瓦当径(13.00) 文様区径(11.60)	F-1

第77図 SK11土坑平面図・断面図・出土遺物

5) SK12土坑 (第78図、図版30-8、31-1、43-1~5)

S1・2・W6・7グリッドに位置する。規模は、長軸258cm、短軸200cm、深さ22cmを測る。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈する。南東側で一部緩やかな段を有する。堆積土は黒褐色シルトが主体であるが、北側の堆積土中に径5~30cmの礫が多量に含まれる。また、上層には部分的に炭化物が帯状に見られる。遺物は17世紀末から19世紀中葉の肥前産磁器の碗・皿、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器の端反碗、19世紀代の大塚相馬産陶器の碗・皿・土瓶が多くを占める。また、小野相馬産の碗・皿、在地産土師質・瓦質土器、堤産の焙烙の他、釣針状の金属製品、鉄釘、火打石等が出土している。



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	類別	器種	名称	部位	胎土	文様	軸量			産地	時期	備考	登録番号
										軸付	口径	底径				
1	43-1	S1-W6	SK12	陶器	小皿	口縁~高台	やや粗	灰胎	(11.60)	(6.40)	2.60	瀬戸・美濃	17c後~18c後	底面跡	J-22	
2	43-2	S1-W6	SK12	陶器	土瓶蓋	組み~口縁	やや密	黒胎 白胎	4.60	—	2.60	大塚相馬	19c		J-24	
3	43-3	S1-W6	SK12	陶器	土瓶	口縁~底部	やや密	灰胎	6.20	7.20	12.20	大塚相馬	19c	底部隠存足彫付	J-23	
4	43-4	S1-W6	SK12	磁器	小碗	端反碗	口縁~高台	密	外:草正文 内:太田紋文 一重線彫に流麗文	9.00	3.70	4.80	瀬戸・美濃	19c		J-24

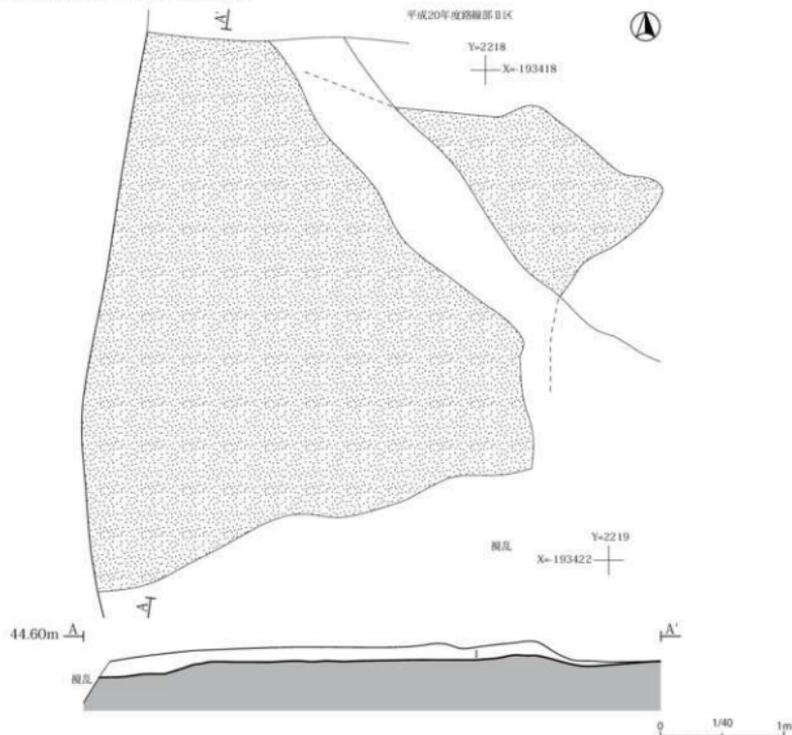
第78図 SK12土坑平面図・断面図・出土遺物

(3) 性格不明遺構

I層上面では、整地または水利施設(SX1)、整地に伴う遺物廃棄遺構(SX2)、柱穴基礎(SX3・16・17)、構造物基礎(SX15)、道路状遺構(SX6)の7基が性格不明遺構として検出された。

1) SX1 性格不明遺構(第79図、図版31-2)

S2-W9 グリッドに位置する。西側は調査区外へ延び、北側は平成20年度の路線部Ⅱ区へ続いている。南側は掘乱により壊され、東側は溝状の掘乱により壊される。残存規模は、長軸226cm、短軸121cm、層厚19～30cmを測る。平面形は不整形を呈し、掘り込みは無く、径1～3cmの玉砂利が堆積する範囲を遺構とした。堆積土は黒色シルトを主体とする単層で、下層に玉砂利が多量に含まれる。近代の整地層の一部と捉えることもできるが、近代の石組溝であるSD2が南側掘乱部分に延びてくる可能性もあるとすると、SD2に関連する水利施設の可能性も考えられる。遺物は18世紀後葉から19世紀中葉の肥前産磁器の碗・皿や瀬戸・美濃産磁器の碗、19世紀以降の大塚相馬産陶器の碗・鉢・土瓶、銭貨(新寛永通宝)が出土している。また、近代以降の遺物として肥前産磁器の型紙絵付けの碗・皿、瀬戸・美濃産磁器の銅版絵付けの皿が出土している。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR2/1	黒色シルト	やや弱	やや密	下層に径1～3cmの礫多量

第79図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

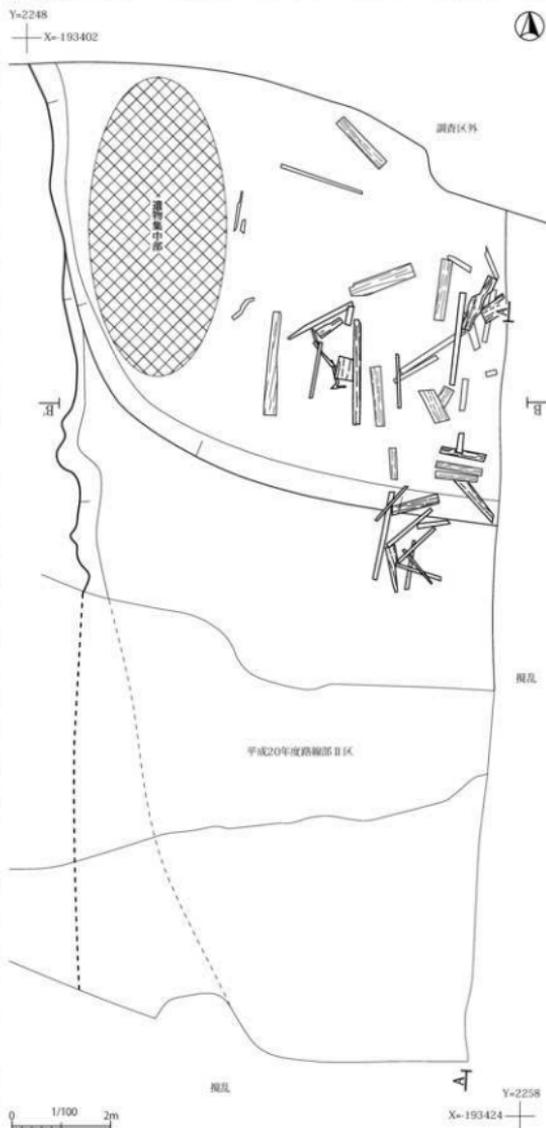
2) SX2 性格不明遺構 (第80～90図、図版2-1、6-4～8、31-3～7、43-6～12、44～49、50-1～9、52・53)

S1・2・3-W5・6 グリッドに位置する。北側は調査区外へ延び、東側と南側は擾乱により壊される。また、中央南寄りで平成20年度の路線部Ⅱ区を挟む。残存規模は、長軸20.50m、短軸8.80m、深さ10～48cmを測る。平面形は不整形を呈し、壁はやや起伏を持ちながら緩やかに立ち上がり、断面形は不整形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北側では緩やかに10cm程低くなる傾斜が見られる。堆積土は上層にふい黄褐色シルト、西側の立ち上がり際に暗褐色シルト、下層に褐色と暗オリーブ褐色のシルトが堆積する。

本遺構の埋め戻し過程を見ると、まず北側の僅かに一段低くなっている部分に比較的含有物の少ない土(3層)が埋め戻される。本層の上には近代以降の陶器質瓦や近代以降の丸釘が刺さった木材がほぼ同レベルで散乱しており、ある程度平坦面を意図した埋め戻し状況が見られる。次に、遺構北西側に多量の遺物が廃棄される(2層)。近代以降の屋根替えに伴った一括廃棄と考えられよう。最後に、遺構東側部分から南側全体にわたり、整地するように埋め戻しが行われている(1層)。

遺構は、近代以降に遺物廃棄のため掘削して埋め戻したのか、近世期の傾斜部分を近代以降に埋めたのかは不明であるが、少なくとも検出面及び出土遺物からは、近代以降に廃絶された遺構と考えられる。

遺物は17世紀代から近代までのものが多量に出土している。内訳は、磁器1284点、陶器2417点、土器531点、炆器5点、瓦79点、石製品25点、土



第80図 SX2 性格不明遺構遺物・木材廃棄位置図

第2節 検出遺構と遺物



第81図 SX2 性格不明遺構平面図・断面図

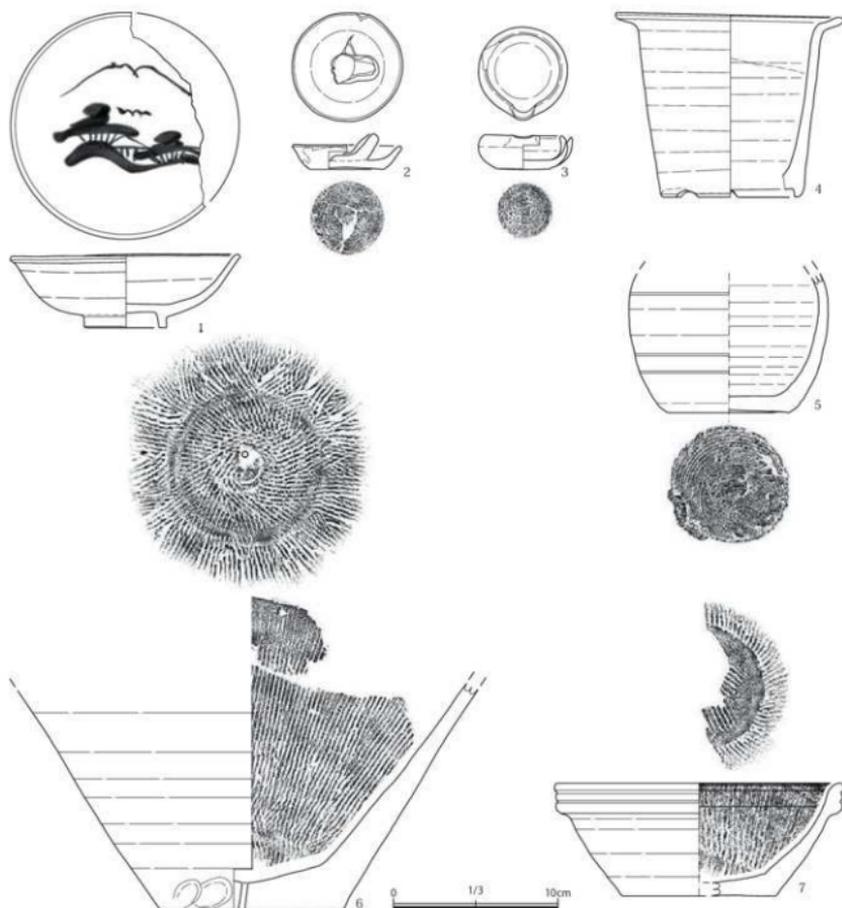
製品 18 点、銅製品 23 点、鉄製品 44 点、銭貨 24 点、ガラス製品 16 点、貝類 8 点、獣骨 8 点、植物遺体 10 点、鉛製品 2 点、骨角製品 1 点、自然遺物 3 点、縄文土器 4 点、剥片 1 点の総計 4502 点である。これらの遺物は、概ね遺構西側の upper 部分から集中して出土した。遺物の傾向としては、18 世紀後葉から 19 世紀前葉の肥前産、瀬戸・美濃産磁器、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の大塚相馬、小野相馬産陶器が多くを占め、他に京・信楽産、志戸呂産、萩焼と思われる陶器も少量出土している。また、17 世紀代の中国産磁器も見られる一方、近代以降の型紙給付けの磁器やガラス製品も僅かに出土しており、出土遺物に時期幅が見られる。



発掘番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	胎土	文様	胎体 (cm)		産地	時期	備考	登録番号		
										胎体	口径					口径	底径
1	43-6	S1-W5	SX2 上層	陶器	中碗		口縁～高台	中々粗	外：流し掛け	灰釉 鉄胎	10.40	5.20	6.70	大塚相馬	18c 末～	鉄胎流し掛け 小野相馬?	1-1
2	43-8	S1・2-W5	SX2 上層	陶器	中碗		口縁～高台	中々密	内：流し掛け	灰釉	11.80	4.20	5.80	大塚相馬	18c 末～	内面流し掛け	1-3
3	43-7	S1-W5	SX2 上層	陶器	中碗		口縁～高台	中々粗		灰釉	11.40	4.60	7.70	大塚相馬	18c 末～	見込ハリ跡 高台埋付着 小野相馬?	1-2
4	43-0	S1-W5	SX2 上層	陶器	中碗	襷反碗	口縁～高台	中々密	外：鳥文	灰釉 鉄胎	11.20	4.20	5.80	大塚相馬	19c	口縁一部押圧	1-7
5	43-10	S1-W5	SX2 上層	陶器	中碗	平筒碗	口縁～高台	密		鉄胎	9.40	4.50	6.90	大塚相馬	19c		1-8
6	43-11	S2・3-W5	SX2 上層	陶器	仏歯器		口縁～底部	密		鉄胎	7.00	4.20	6.10	大塚相馬	19c		1-9
7	44-3	S1-W5	SX2 上層	陶器	小皿		口縁～高台	粗		灰釉	14.10	5.20	3.50	小野相馬	18c 代～	見込ハリ跡 目輪割付 高台埋付着	1-4
8	44-2	S1-W5	SX2 上層	陶器	中皿		口縁～高台	密	内：宝珠文	灰釉 鉄胎	22.1	7.70	5.80	大塚相馬	18c 後葉～		1-6

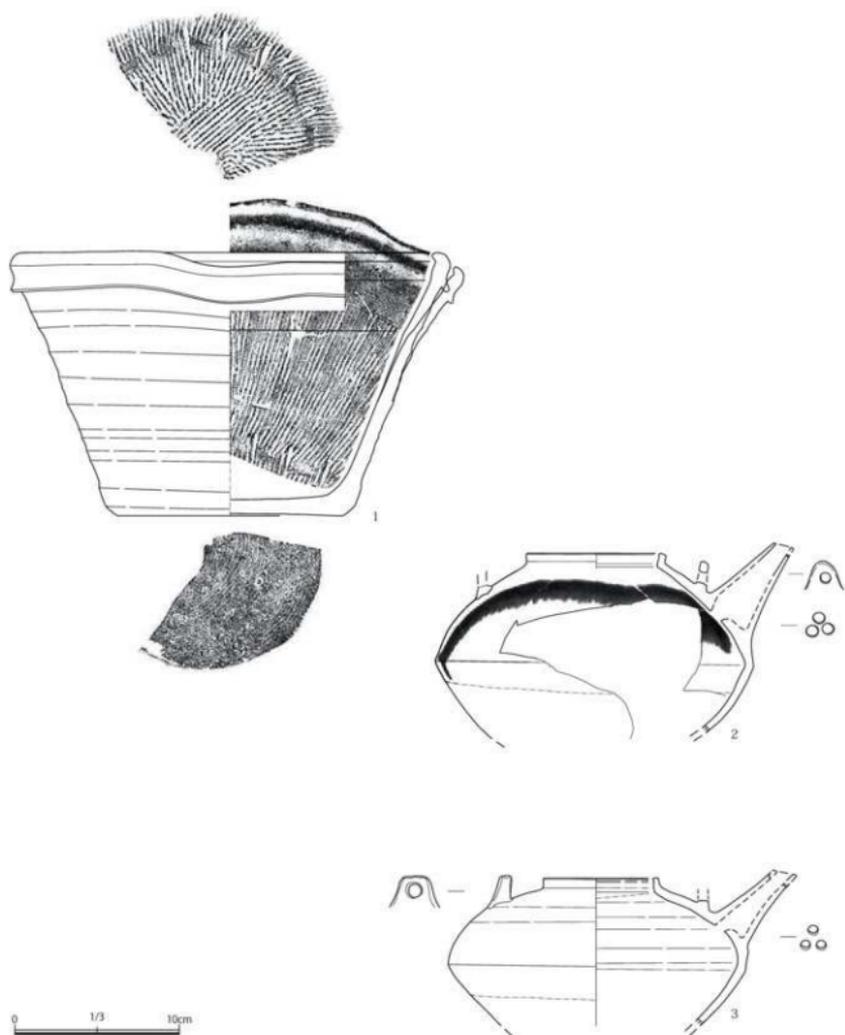
第 82 図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (1)

第2節 検出遺構と遺物



図版番号	写真図版番号	グッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	胎素 粘付	法筭 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
											口径	底径	器高				
1	44-4	S1-W5	SX2 上層	陶器	小皿	口縁～高台	中々粗	内：一層風浪文	灰釉 鉄絵	13.80	4.80	4.50	大塚粗馬	18c 末～		1-5	
2	43-12	S2-W5	SX2 上層	陶器	灯明皿	口縁～底部	中々粗		鉄釉	6.50	4.50	2.20	大塚粗馬	19c	天部架付 右回転糸切底	1-16	
3	44-1	S2-W5	SX2 上層	陶器	油差	口縁～底部	中々粗		鉄釉 (4.65)	(3.20)	(2.15)	大塚粗馬	19c	右回転糸切底	1-17		
4	44-6	S1・2-W5	SX2 上層	陶器	桶木鉢	口縁～底部	密		鉄釉	13.80	8.40	11.30	大塚粗馬	19c	高台内打ち跡迄	1-12	
5	44-5	S1・2-W5	SX2 上層	陶器	中皿	口縁～底部	粗	外：渦し跡付	鉄釉	—	7.40	(8.60)	大塚粗馬	19c	鉄釉面七掛け 右回転糸切底	1-18	
6	45-1	S1・2-W5	SX2 上層	陶器	鉢鉢	口縁～底部	中々粗		無釉	—	11.00	(13.90)	在地	不明	鉢口面数 14 本 / 40mm 幅 底部穿孔 (φ 6mm)	1-13	
7	45-2	S1-W5	SX2 上層	陶器	鉢鉢	口縁～底部	粗		鉄釉	17.50	9.40	6.90	在地	不明	鉢口面数 9 本 / 23mm 幅	1-15	

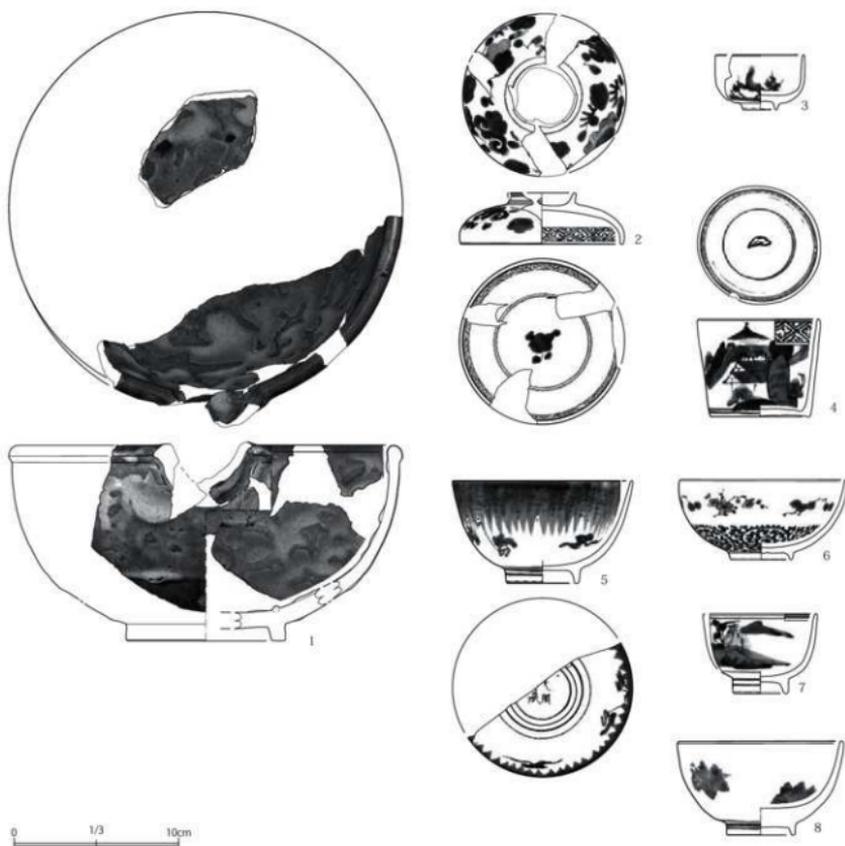
第83図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (2)



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	軸差			産地	時期	備考	登録番号	
										軸差	口径	底径					器高
1	45-3	S1・2-W5	SX2 上層	陶器	漆鉢	口縁～底部	粗			鉄軸	(25.20)	(13.70)	(16.20)	在地	不明	片口：瓣目数13本/30mm 軸：同軸未切断	I-14
2	46-1	S1・2-W5	SX2 上層	陶器	土瓶	口縁～体部	密	再：流し掛け	灰胎	鉄軸	8.50	—	(10.90)	大塚相馬	19c	鉄軸流し掛け	I-10
3	46-2	S1-W5	SX2 上層	陶器	土瓶	口縁～体部	やや密			鉄軸	(6.50)	—	(10.20)	大塚相馬	19c		I-11

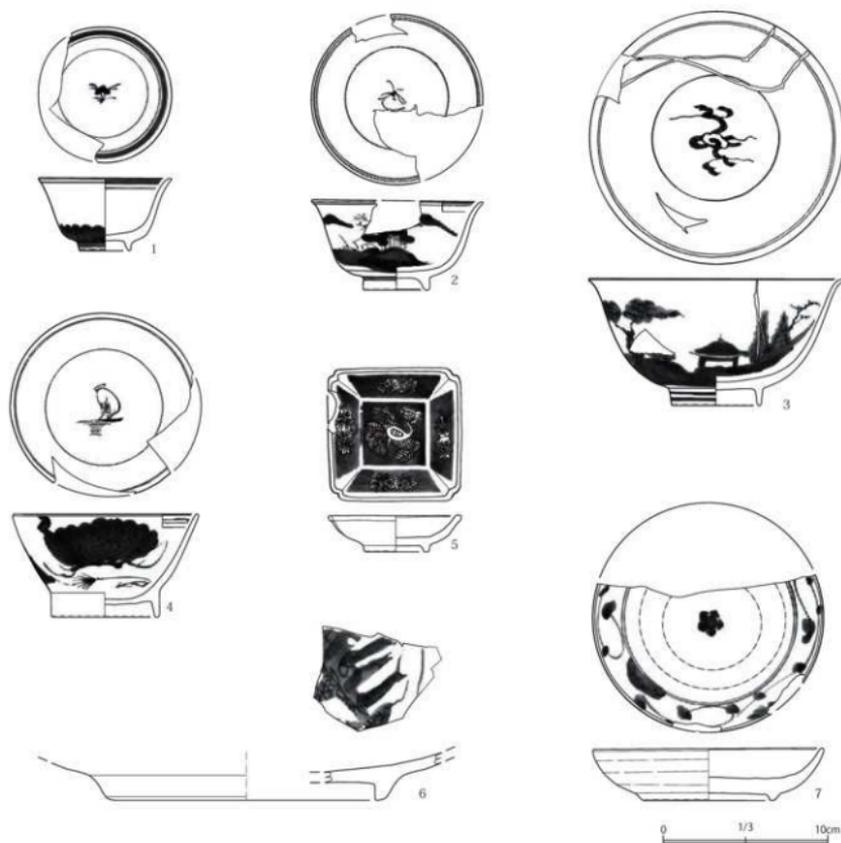
第84図 SX2 性格不明遺構出土遺物(3)

第2節 検出遺構と遺物



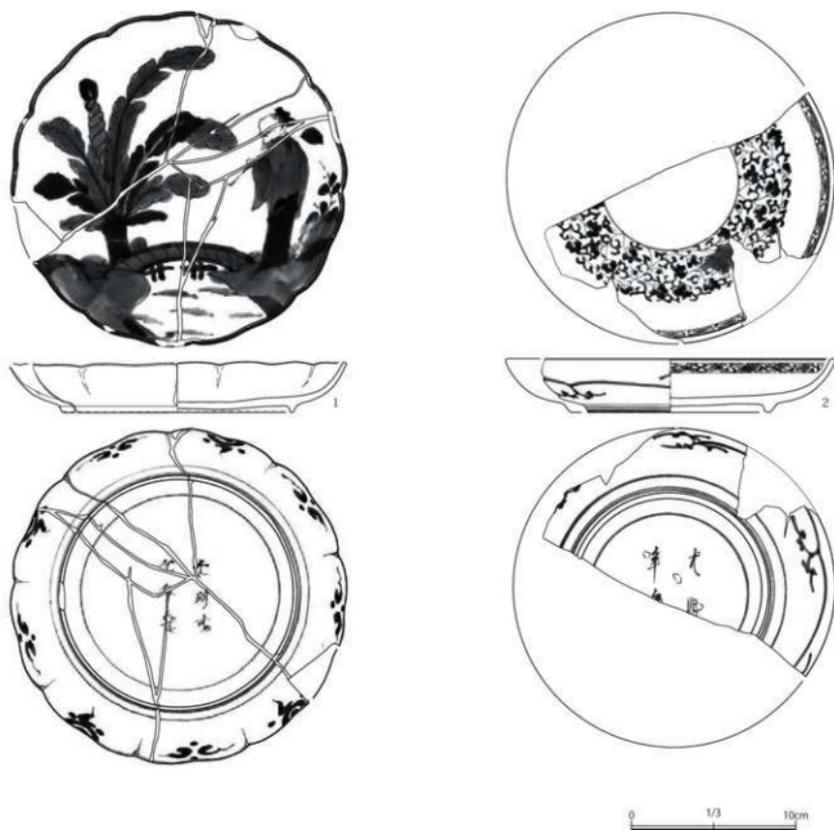
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	胎土	文様	軸量			産地	時期	備考	登録番号	
										胎輪	口径	底径					器高
1	46-3	S1・S2・W5	SX2 上層	陶器	片口		口縁～ 体部	粗	内外面輪散し	灰胎	Ø2.90	Ø9.60	12.0	在池	不明	I-42	
2	46-4	S1・S2・W5	SX2 上層	磁器	中碗蓋	つまみ～ 口縁		密	外：花文 内：四方障 二重線彫に花文	透明釉 染付 土胎付(赤)	10.00	4.20	3.10	肥前	18c 後～ 19c 中	J-13	
3	46-5	S1-W5	SX2 上層	磁器	小鉢	口縁～ 高台		密	外：草花文	透明釉 染付	5.40	2.10	3.40	肥前	18c 後～ 19c 中	蛇ノ目凹形高台	J-6
4	46-6	S1-W5	SX2 上層	磁器	猪口	口縁～ 底部		密	外：扉扉風豆文 内：四方障 一重線彫に雲文	透明釉 染付	7.40	6.00	6.00	肥前	17c 後～ 18c 後		J-7
5	46-7	S2-W5	SX2 上層	磁器	中碗	口縁～ 高台		密	外：面障文	透明釉 染付 鉄胎	11.00	4.40	6.30	肥前	17c 後～ 18c 中	口縁 底：一重線彫 に「大明二層」	J-15
6	46-8	S1-W5	SX2 上層	磁器	小碗	半球碗		密	外：松梅文 懸書草文	透明釉 染付	10.00	3.80	4.90	肥前	17c 後～ 18c 中		J-1
7	46-9	S1-W5	SX2 上層	磁器	小碗	筒丸形 湯飲碗		密	外：一輪山水文 帆掛舟 内：一重線彫	透明釉 染付	7.00	3.40	4.90	肥前	19c 前～		J-5
8	46-10	S1-W5	SX2 下層	磁器	中碗			密	外：釈文散し	透明釉 染付	10.20	4.20	6.75	肥前	17c 後～ 18c 中	底：彫し大明年製	J-16

第 85 図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (4)



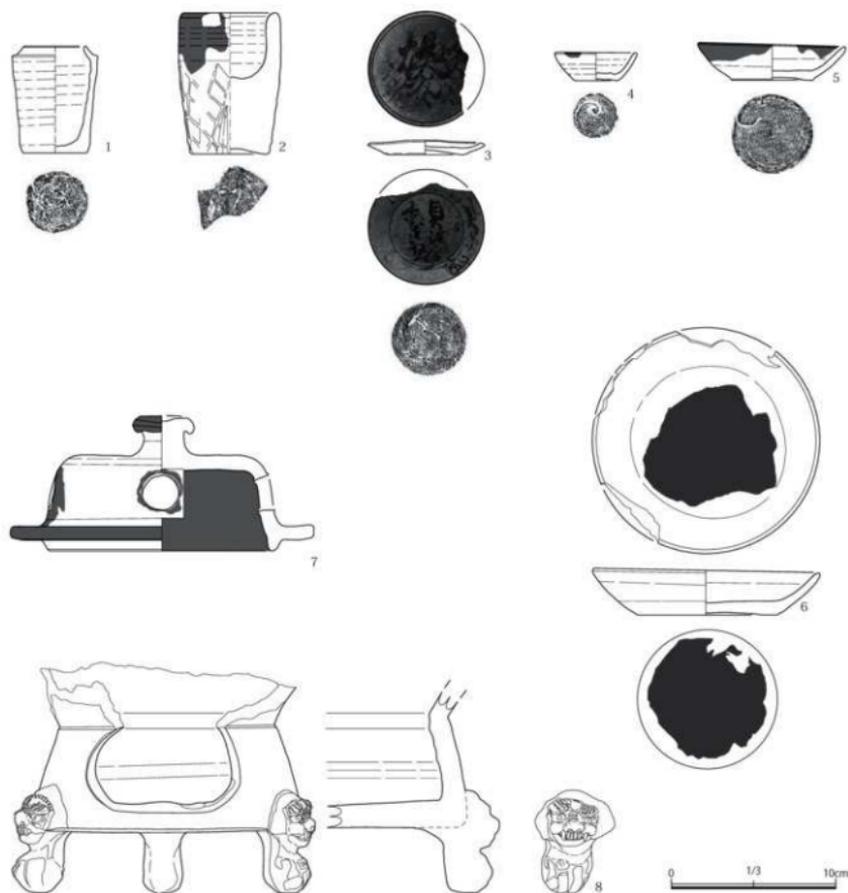
図版番号	写真図版番号	グリップ	遺構	種類	器種	名称	部位	胎土	文様	釉薬 給付	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
											口径	底径	器高				
1	46-11	S1-W5	SX2 上層	磁器	小碗	織反碗	口縁～ 高台	密	外：透丹文 内：丸形蓮 花文	染付 透明釉	8.00	3.00	4.50	瀬戸・ 美濃	19c前～		J-3
2	46-12	S1-W5	SX2 上層	磁器	中碗	織反碗	口縁～ 高台	密	外：一段山水文 内：二重線 一重線間に虫文	染付 透明釉	10.40	4.10	5.50	肥前	19c前～		J-4
3	47-1	S1-W5	SX2 上層	磁器	大碗		口縁～ 高台	密	外：一段山水文 内：二重線 一重線間に雲文	染付 透明釉	15.50	5.50	7.80	肥前	17c後～ 18c後	焼練	J-8
4	47-2	S2-W5	SX2 上層	磁器	中碗	辻東碗	口縁～ 高台	密	外：稻村露文 内：二重線 一重線間に雙文	染付 透明釉	10.20	6.60	6.30	肥前	18c後～ 19c中		J-2
5	47-4	S1-W5	SX2 上層	磁器	小皿	形押小皿	口縁～ 高台	密	内：菊の葉地に 花文、風見文	染付 透明釉	8.10	4.00	2.50	瀬戸・ 美濃	19c前～ 中	型押陶瓦文、調切	J-11
6	47-3	S1・2 -W5	SX2 上層	磁器	大皿		体部～ 高台	中冷密	内：水草文	透明釉 上給付 (青)	—	(16.00)	(2.90)	中国	17c代	生跡 高台跡目	J-12
7	47-5	S1-W5	SX2 上層	磁器	小皿	くらわん か手	口縁～ 高台	密	内：唐草文 五弁花	染付 透明釉	13.90	8.00	3.20	肥前	18c中～ 18c後	足込宛ノ目輪陶瓦 五弁 花のみヨコエナリ自刷	J-10

第86図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (5)



図録番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	名称	部位	胎土	文様	胎差		産地	時期	備考	登録番号		
										口径	底径					器高	
1	47-6	S2-W5	SX2 上層	磁器	中皿	輪花皿	口縁～底部	密	外：空珠文 内：庭内唐人 担瓶文	透明釉 染付 鉄軸	20.50	14.10	3.10	肥前	17c 後～ 18c 後	口縁 鉄軸 底：一重圓縁に大明瓦 化年製	J-9
2	48-1	S2-W5	SX2 上・下層	磁器	中皿	口縁～ 高台	密	外：空珠文 内：四方唐文 担瓶文	透明釉 染付	19.70	12.00	3.30	肥前	18 c 後～ 19 c 中	底：一重圓縁に「大明年製」	J-14	

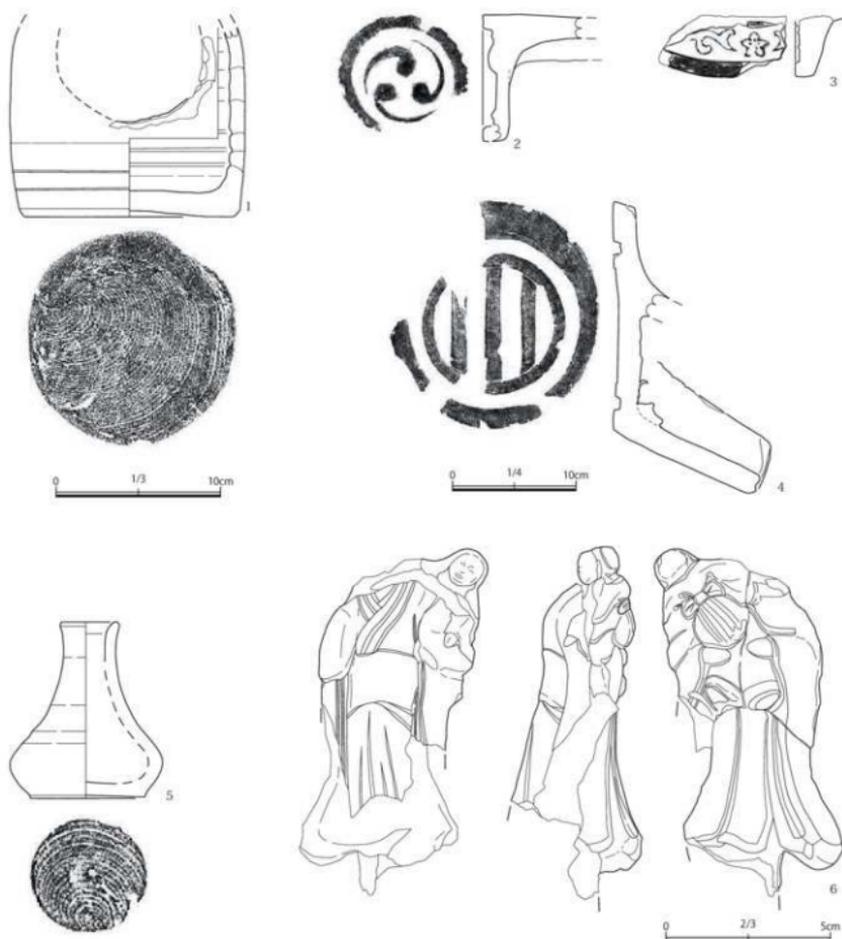
第 87 図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (6)



採取番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	部位	胎土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
								口径	底径	器高				
1	48-2	S2・3-W5	SX2	土器	横磁器	口縁~底部	中卒粗	3.70	3.70	6.60	在地	19c	磁器 横磁 同軸糸切底 蓋受有り	140
2	48-3	S2-W5	SX2 上層	土器	横磁器	口縁~底部	中卒粗	(5.70)	(4.70)	8.65	在地	17c 末~19c	土器質 横磁 十字 同軸糸切底 笠押銀目文	155
3	48-4	S1-W5	SX2 上層	土器	小皿	口縁~底部	中卒粗	6.80	4.50	1.40	在地	近世前期	土器質 茶器 横磁 同軸糸切底	159
4	48-5	S2-W5	SX2 上層	土器	灯明皿	口縁~底部	中卒粗	4.80	2.60	1.80	在地	近世前期	土器質 極小皿 1線型付着 横磁 同軸糸切底	153
5	48-6	S2-W5	SX2 下層	土器	灯明皿	口縁~底部	中卒粗	0.90	4.80	2.30	在地	近世前期	土器質 1線型付着 横磁 同軸糸切底	152
6	48-7	S1-W5	SX2 上層	土器	灯明皿	口縁~底部	粗	13.70	8.30	2.85	在地	近世前期	土器質 全面油滷	154
7	49-1	S1-W5	SX2 下層	土器	蚊遣り蓋	口縁~底部	粗	—	13.60	8.20	在地	18c 末~	瓦質 横磁 葉付 穿孔4箇所 (φ22mm) 内面ターム付着	157
8	49-2	S1-W5	SX2 上層	土器	蚊遣り蓋	体部~脚足	粗	—	17.20	(14.20)	在地	18c 末~	瓦質 横磁 葉付 穿孔3箇所 土部欠損	158

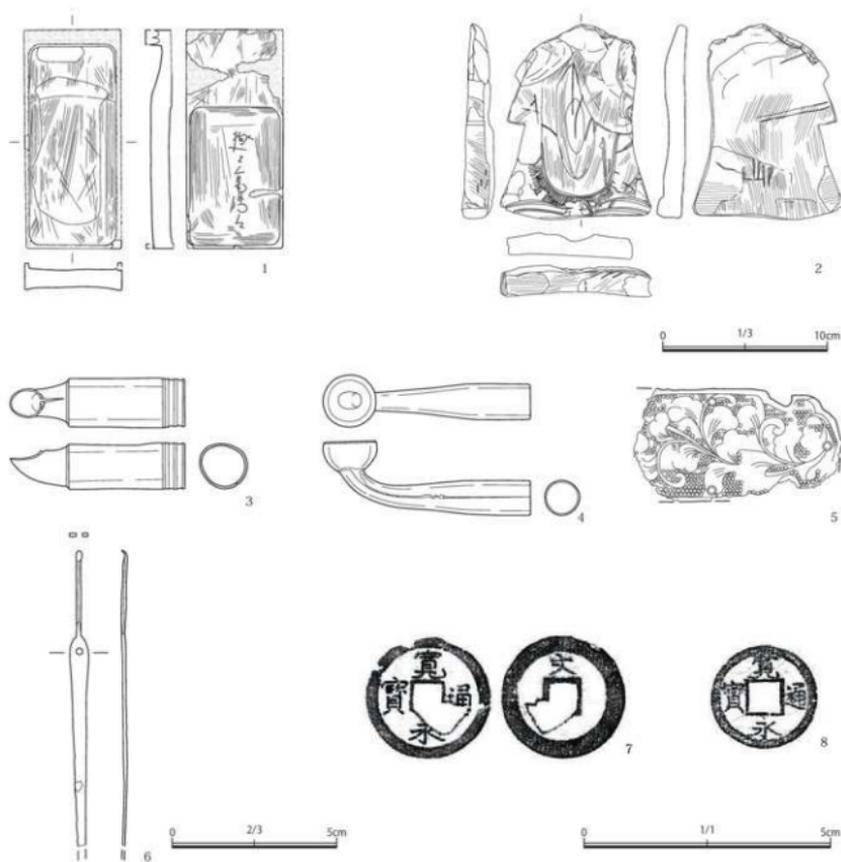
第88図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (7)

第2節 検出遺構と遺物



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	部位	粘土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号							
								口径	口径	器高											
1	49-3	S1-W5	SX2 上層	土器	火入	体部~底部	粗	—	12.80	11.6	在地	古墳期	土師製 外面黒色化 轆轤 右側部切断 上部欠損一部に磨行面	1-56							
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	部位	法量 (cm)			備考					登録番号							
						長さ	幅	厚さ													
						2	49-4	S1-W5	SX2 上層	軒瓦	小巴区	(8.00)	(10.40)		1.70	小巴のみ残存 瓦当径 10.40cm 文様区径 7.80cm 右二巴 在地					H-2
						3	49-5	S2-W5	SX2 上層	軒平・軒瓦	文様区	(10.30)	(5.00)		(1.50)	支脚部のみ残存 粘壁文と青草文の組み合わせ 文様幅 3.00cm 在地					H-1
4	49-6	S2-W5	SX2 上層	舟状器	—	23.80	—	1.70	三つ両文 高さ 11.00cm 瓦当径約 18.50cm 胎厚 15.40cm 文様径 (11.30)cm 在地					H-4							
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	部位	粘土	法量 (cm・g)			備考		登録番号									
							長さ	幅	厚さ	重量											
5	49-7	S1-W5	SX2 上層	ミニチュア	口縁~底部	中々粗	—	—	—	45.40	土師製 在地 胎をモチーフ 轆轤 非粘系切底 器高 (5.40)cm 底径 3.50cm 口縁部欠損		P-3								
6	50-1	S2-W5	SX2 下層	人形	頭~体部	—	(10.60)	4.70	3.20	67.04	土師製 在地 童子背負い像(子守像) 前後貼り合せ 中空		P-2								

第 89 図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (8)

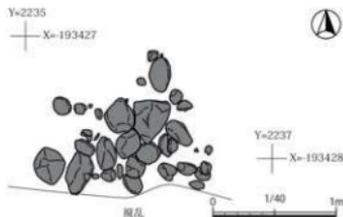


図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)				石材	備考	登録番号
					長さ	幅	厚さ	重量			
1	50-2	S1-W5	SX2上層	甕	14.00	5.90	1.70	223.7		表面「二」(高島) 刺刺 長方形	K-1
2	50-3	S2・3-W5	SX2上層	甕	11.90	9.20	1.80	209.0	粘板?	変形 人形をモチーフか?	K-2
3	50-4	S1-W5	SX2上層	押針	(5.30)	—	—	12.05	板首 接合部径1.40cm 火痕欠損 刺製		N-3
4	50-5	S1-W5	SX2上層	押針	6.30	—	—	11.80	板首 火痕径1.60cm 接合部径1.05cm 刺製		N-2
5	50-6	S1-W5	SX2上層	飾り金具	(6.35)	3.45	—	4.20	開裂時花文 金鍍金 刺製		N-1
6	50-7	S1-W5	SX2上層	簪	(9.05)	0.60	0.15	2.00	耳かき幅0.20cm 先端部欠損 刺製		N-4
7	50-8	S3-W5	SX2上層	東永徳宝	寛文8年(1668)	2.51	0.58	2.00	新寛永 背「文」 刺銭		N-15
8	50-9	S1-W5	SX2上層	東永徳宝	延宝元年(1672)	2.16	0.63	2.10	新寛永 刺銭		N-14

第90図 SX2 性格不明遺構出土遺物(9)

3) SX3 性格不明遺構 (第91図、図版31-8)

S3-W7 グリッドに位置し、南側は掘乱により壊される。残存する規模は、長軸 146cm、短軸 119cm を測る。平面形は不整形で、掘り込みは無く、径 10～33cm の円礫が集中する範囲の遺構である。掘り込みは確認できなかったが、整地の際に上部が掘乱もしくは削平され、柱穴基礎の底面にあたる礫だけが残存していた可能性も考えられる。遺物は出土していない。



第91図 SX3 性格不明遺構平面図

4) SX6 性格不明遺構 (第92図、図版2-5～8、3-1～5、32-1)

S3・4-W5・6・7 グリッドに位置する。南西側は調査区外に延び、西側と北側は掘乱により壊され、中央部分も溝状の掘乱により壊される。残存規模は、長軸 23.05m、短軸 610cm を測る。平面形は不整形で、径 1～24cm の礫が厚さ 4～18cm に堆積する。堆積土は、東側は褐色砂、暗褐色シルトの2層からなり、西側にはふい黄褐色砂質シルト、暗オリーブ褐色、黄褐色粘土質シルトの3層からなる。いずれの層もしまりが極めて強い。平面検出状況や堆積土のしまり具合から、近代以降の道路直下の小礫範囲と考えられる。遺物は出土していない。

5) SX15 性格不明遺構 (第93図、図版32-2～4)

S3-W7 グリッドに位置する。西側の溝状遺構、中央の方形遺構、東側の方形遺構の3基で構成される近代以降の構造物の基礎である。周囲を掘乱に壊されているため、建物の復元には至らなかった。いずれも円礫が充填されている点で共通している。規模は長さ 220cm、柱間寸法は西から 100cm (3尺3寸)、120cm (3尺9寸) を測る。西側の溝状遺構は、北側と南側を掘乱により壊される。残存規模は、長軸 119m、短軸 49cm、深さ 32cm を測る。平面形は長方形で、断面形は方形を呈する。中央の方形遺構は、長軸 64cm、短軸 63cm、深さ 10cm を測る。平・断面形ともに方形を呈する。東側の方形遺構は、長軸 74cm、短軸 58cm、深さ 16cm を測る。平・断面形ともに方形を呈する。堆積土はいずれも円礫と褐色の砂礫を主体とする単層である。長さ 5～39cm、幅 3～26cm、厚さ 4～18cm の円礫の間に径 0.3～0.8cm の砂礫が含まれる。遺物は出土していない。

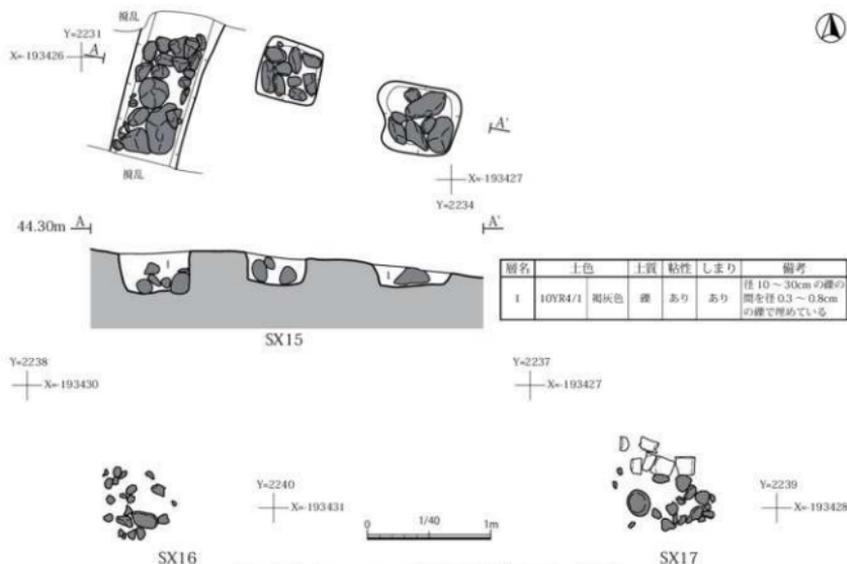
6) SX16 性格不明遺構 (第93図、図版32-5)

S4-W7 グリッドに位置する。規模は、長軸 67cm、短軸 56cm を測る。平面形は不整形で、掘り込みは無く、長さ 5～22cm、幅 3～12cm、厚さ 5～10cm の円礫が集中する。掘り込みは確認できなかったが、整地の際に上部が掘乱もしくは削平され、柱穴基礎の底面にあたる礫だけが残存していた可能性も考えられる。遺物は出土していない。

7) SX17 性格不明遺構 (第93図、図版32-6)

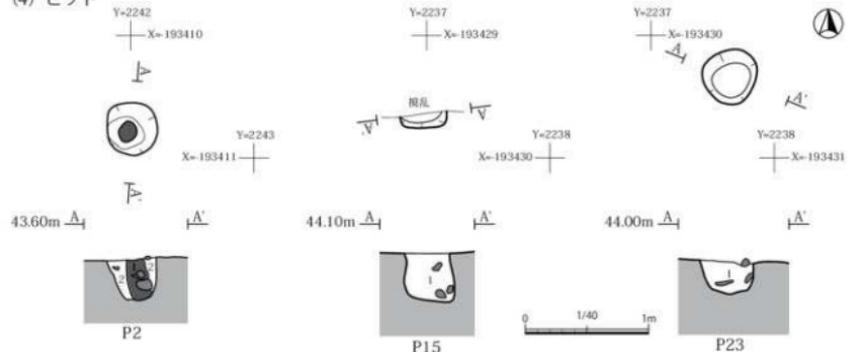
S3-W7 グリッドに位置する。規模は、長軸 87cm、短軸 74cm を測る。平面形は不整形で、掘り込みは無く、長さ 6～22cm、幅 4～18cm、厚さ 5～10cm の円礫及び瓦が集中する。掘り込みは確認できなかったが、整地の際に上部が掘乱もしくは削平され、柱穴基礎の底面にあたる礫だけが残存していた可能性も考えられる。

第2節 検出遺構と遺物



第93図 SX15・16・17 性格不明遺構平面図・断面図

(4) ビット



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P2	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	あり	径2～3mmの炭化物微粒、径5～10cmの礫微粒、柱状
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	径1～2mmの白色粘微粒、径1～5cmの礫微粒
P15	1	10YR4/4	褐色	シルト	あり	径1mmの白色粘少量、径0.3～0.8cmの礫少量、径3～10cmの礫少量
P23	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	明鉄砂質粘微粒、径5～15cmの礫少量

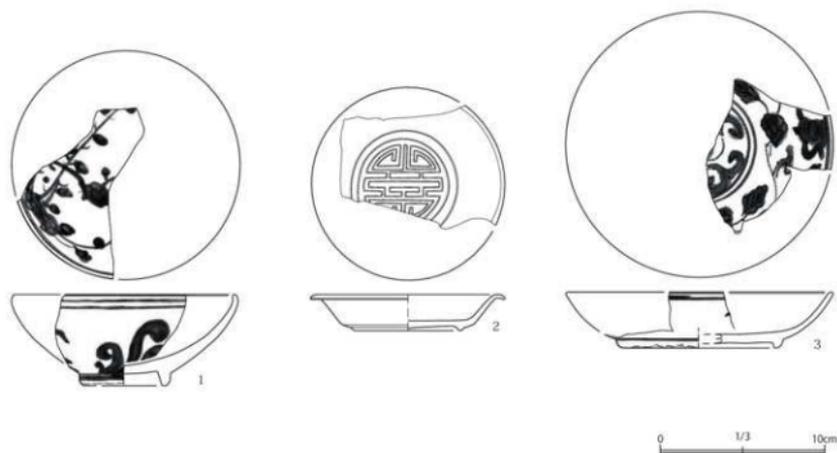
第94図 P2・15・23 平面図・断面図

番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
P2	S2-W6	44	41	33	円形	U字形		
P15	S3-W7	38	12	33	楕円形	U字形	視孔	
P23	S2-W9	46	45	24	円形	U字形		

第12表 P2・15・23 観察表

(5) 1層出土遺物 (第95図、図版50-10～11、51-1～3)

1層から380点の破片が出土した。内訳は陶器173点、磁器121点、瓦質土器14点、土師質土器22点、石器・石製品2点、金属製品19点、銭貨1点、瓦9点、ガラス製品9点、自然遺物2点、縄文土器8点である。陶器は、19世紀代の大塚相馬産の土瓶、碗、皿、17世紀中葉から18世紀後葉の肥前産の皿、碗、鉢、17世紀後から19世紀代の瀬戸・美濃産の皿、掃鉢、在地産の掃鉢が主体的に見られる。磁器では、19世紀代の肥前産の皿、碗、瀬戸・美濃産の端反碗が主体的に見られ、近代以降の型紙絵付けの碗も僅かに見られる。また、17世紀代の中国産の皿も見られる。陶磁器以外では、在地産の皿、灯明皿、瓦質の蚊遣り、堤産の焙烙が主体的に見られる。金属製品では、煙管、飾り金具、鋌、鉄釘、銭貨では寛永通宝(新寛永)が1点見られる。他に、瓦、近代以降の板ガラスが少量見られる。



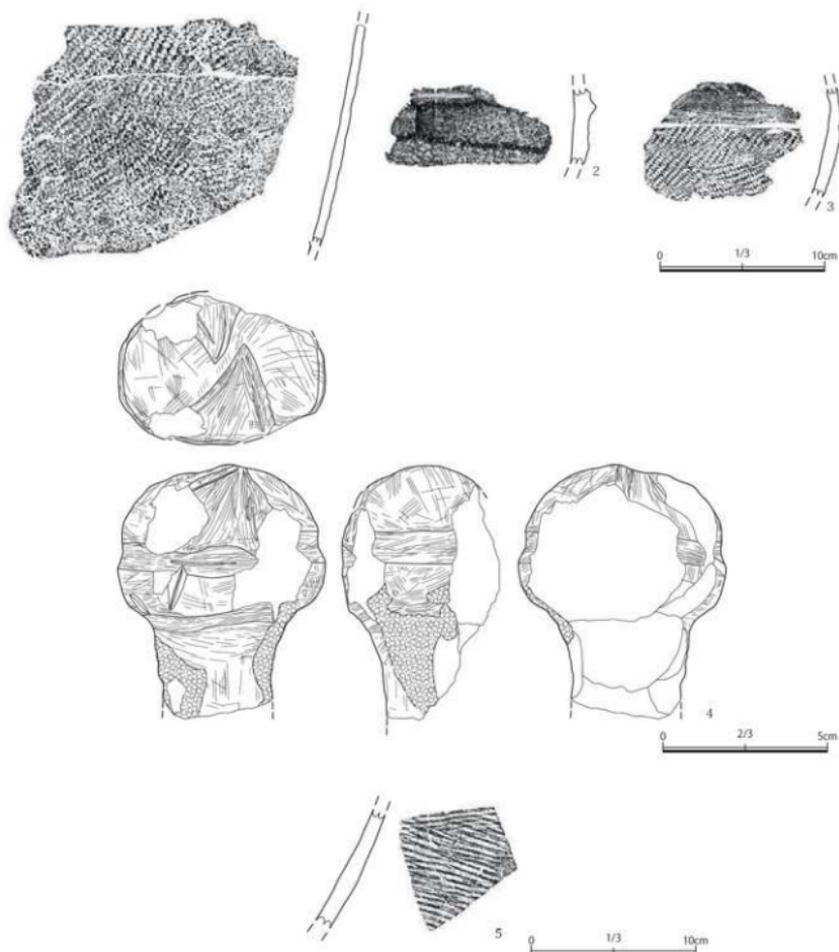
図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	当土	文様	釉薬			産地	時期	備考	登録番号	
										胎付	口径	底径					器高
1	50-10	S2-W6	1層	磁器	小皿		口縁～高台	中や密	外：新文 内：花文	青花 透明釉	(3.6)	(5.20)	5.60	中国	17c代		J-19
2	50-11	S2-W4	1層	磁器	小皿	寿文皿	口縁～高台	密	内：丸に寿字	透明釉	(11.80)	(6.60)	2.20	肥前	19c中		J-17
3	51-1	S2-W6	1層	磁器	小皿		口縁～高台	中や密	外：御縁文 内：唐花立文	青花 透明釉	(16.40)	(9.40)	(3.40)	中国	17c代	高台砂目 高台内敷射状肌	J-18

第95図 1層出土遺物

6 近世以前の出土遺物 (第96図、図版51-4～8)

近世以前の遺物は193点の破片が出土した。内訳は陶器1点、石器13点、石製品1点、縄文土器178点である。陶器は珠洲焼で、中世の遺物はこれのみである。石器はすべて剥片で、縁辺に微細刻線が見られるものもあるが製品は無い。石材は頁岩が主である。石製品は石棒で時期は不明である。縄文土器はV層からまとまって出土しているが、遺構に伴うものではない。ほとんどが磨滅しており、流入土に混入して運ばれてきたものと思われる。土器の文様は擦り消し縄文と沈線が見られ、縄文時代後期の南境式が主である。

第2節 検出遺構と遺物



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	法量 (cm)			時期	備考	登録番号
						口径	底径	高さ			
1	51-4	S2-W5	V層	織文土器	深鉢	—	—	(13.10)	後期		A-1
2	51-5	S2-W5	V層	織文土器	深鉢	—	—	(4.80)	中期		A-2
3	51-6	S2-W5	V層	織文土器	深鉢	—	—	(6.70)	後期		A-3

図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)				石材	備考	登録番号
					長さ	幅	厚さ	重量			
4	51-7	S2-W6	II層	石棒	7.80	6.30	6.30	231.0	安山岩		K-6

図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	器種	名称	部位	胎土	文様	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
										口径	底径	高さ				
5	51-8	S3・4-W5	III層	陶器	甕	体部				—	—	(7.3)		中世		I-71

第96図 近世以前出土遺物

第3節 出土遺物と検出遺構について

1 出土遺物について

本調査区からは、陶器、磁器、瓦質土器、土師質土器、土製品、石製品、金属製品、銭貨、木製品、瓦等が出土した。出土遺物は、同一個体を確認し、接合した後の総数で8624点を数える。今回調査では近代の遺構も検出されたことから、集計の際には近代の遺物も含めた。各基本層及び各基本層上面検出遺構から出土した遺物の集計は第13表の通りである。

	陶器	磁器	瓦質土器	土師質土器	布器	土製品	石器・石製品	金属製品	銭貨	木製品	瓦	ガラス製品	骨角製品	自然遺物	縄文土器	合計
I層上面遺構出土	2785	1478	115	489	7	19	33	181	38	1	159	56	2	37	5	5405
I層中出土	173	121	14	22	0	0	2	19	1	0	9	9	0	2	8	380
II層上面遺構出土	227	104	9	51	0	4	5	15	5	0	150	10	0	0	2	582
II層中出土	329	180	11	73	2	3	3	26	21	0	23	0	0	4	12	687
III層上面遺構出土	212	122	2	41	1	2	4	6	0	10	24	0	0	0	6	430
III層中出土	169	112	7	32	1	1	5	26	12	0	5	0	0	1	3	374
IV層上面遺構出土	196	187	3	83	2	2	3	9	2	4	41	0	0	5	5	542
IV層中出土	54	23	0	4	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	14	97
V層中出土	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	121	123
VI層上面遺構出土	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4
合計	4146	2327	161	796	13	31	56	283	79	15	412	75	2	50	178	8624

第13表 出土遺物数量一覧表

(1) 陶磁器

1) 出土層別産地分類

近世の陶磁器は、17世紀代～19世紀後葉までのものが出土している。近代では型紙絵付けや銅板絵付けの磁器片が少量出土している。それらを含めた接合後の破片数は、陶器4146点、磁器2327点、合計で6473点を数え、出土層別産地別に分類した集計は第14表、第97図の通りである。なお、これら陶磁器の半数強を占める3701点は、I層上面検出遺構のSX2から出土している。

各基本層は、調査区外から搬入されて整地された土層の可能性が高く、各層の出土遺物の年代がそのまま整地時期を示すとは考え難い。したがって、各層の年代に関しては、主体を占める遺物の年代幅を考慮し、最も新しい遺物の時期を下限とすることによって示した。

VI層上面検出遺構とV層中に、陶磁器の出土はほとんど見られない。VI層上面検出遺構では、17世紀中葉～後葉の肥前産陶器が1点出土しているのみである。V層中では縄文土器が出土したのみで陶磁器は出土しなかった。

IV層中(17世紀後葉～18世紀中葉)では、肥前産陶磁器と大塚相馬産陶器がほとんどを占める。瀬戸・美濃産陶磁器はほとんど見られないが、IV層上面検出遺構からは見られるようになる。また、小野相馬産陶器も少量ながら見られるようになり、岸窯陶器の採掘も見られるようになる。その他の産地では、京・信楽産陶器も見られるようになる。

III層中(18世紀中葉～19世紀前葉)では、肥前産陶磁器の占める割合に減少傾向が見られるようになり、代わって大塚相馬産陶器の点数及び割合に増加傾向が表われる。III層上面検出遺構では大塚相馬産陶器の占める割合が50%を超え、肥前産磁器がこれに次ぐ。その他の産地では、18世紀中葉以降の明石・堺産陶器も1点見られる。

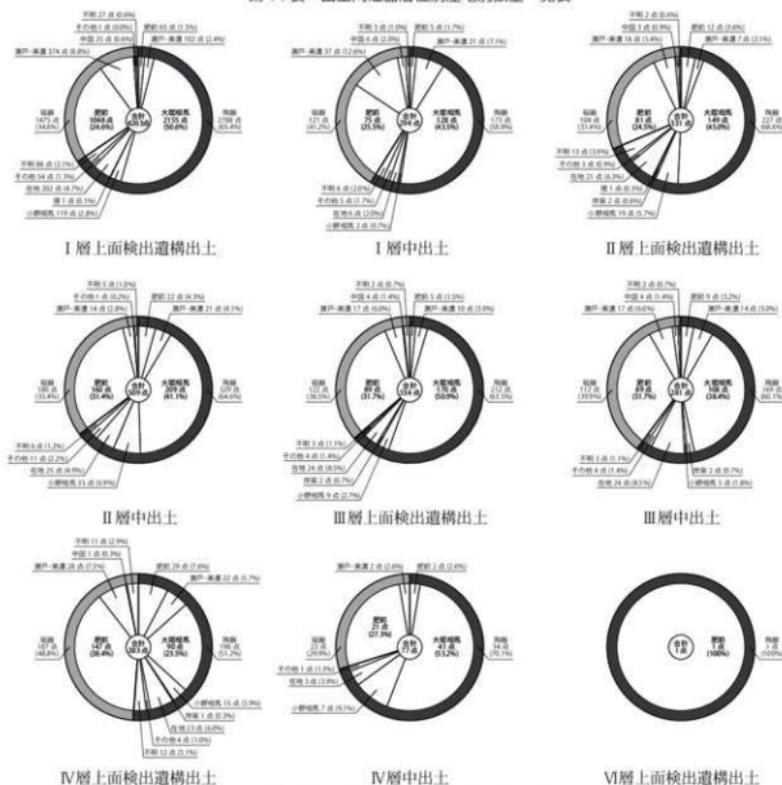
II層中(19世紀前半)では、大塚相馬産陶器と肥前産磁器の出土量がピークを向かえ、小野相馬産陶器と瀬戸・美濃産陶磁器が少量ながら一定量を占める。その他の産地では、砥部焼と思われる磁器も1点見られる。II層上面検出遺構では相変わらず大塚相馬産陶器の割合が半数を保つが、肥前産磁器の割合が減少し、少量ながら瀬戸・美濃産磁器の点数が増加してくる。その他の産地では、堤産陶器、京・信楽産陶器、京焼陶器、信楽産陶器、また、常滑産陶器の大甕も見られる。

I層中(近代)でも大塚相馬産陶器の出土量は安定し、肥前産磁器は出土量を減少させ、瀬戸・美濃産磁器は点数を増加させていく。また、その他の産地では、京・信楽産陶器が見られる。I層上面検出遺構のほとんどの出土遺物は、

第3節 出土遺物と検出遺構について

産地・種別 出土層	肥前		肥後・美濃		和州		伊原	埴	在本地 陶磁器	中国			不明		合計
	陶器	磁器	陶器	磁器	大甕和瓦	小甕和瓦				磁器	陶器	磁器	陶器	磁器	
I層 上面検出遺構出土	65	1048	102	374	2155	119	0	3	202	25	54	1	88	27	4263
割合	1.5%	24.6%	2.4%	8.8%	50.6%	2.8%	0.0%	0.1%	4.7%	0.6%	1.3%	0.0%	2.1%	0.6%	100.0%
I層 中出土	5	75	21	37	128	2	0	0	6	6	5	0	6	3	294
割合	1.7%	25.5%	7.1%	12.6%	43.5%	0.7%	0.0%	0.0%	2.0%	2.0%	1.7%	0.0%	2.0%	1.0%	100.0%
II層 上面検出遺構出土	12	81	7	18	149	19	2	1	21	3	3	0	13	2	331
割合	3.6%	24.5%	2.1%	5.4%	45.0%	5.7%	0.6%	0.3%	6.3%	0.9%	0.9%	0.0%	3.9%	0.6%	100.0%
II層 中出土	22	160	21	14	209	35	0	0	25	0	11	1	6	5	509
割合	4.3%	31.4%	4.1%	2.8%	41.1%	6.9%	0.0%	0.0%	4.9%	0.0%	2.2%	0.2%	1.2%	1.0%	100.0%
III層 上面検出遺構出土	5	101	10	15	170	9	2	0	12	1	2	0	2	5	334
割合	1.5%	30.2%	3.0%	4.5%	50.9%	2.7%	0.6%	0.0%	3.6%	0.3%	0.6%	0.0%	0.6%	1.5%	100.0%
III層 中出土	9	89	14	17	108	5	2	0	24	4	4	0	3	2	281
割合	3.2%	31.7%	5.0%	6.0%	38.4%	1.8%	0.7%	0.0%	8.5%	1.4%	1.4%	0.0%	1.1%	0.7%	100.0%
IV層 上面検出遺構出土	29	147	22	28	90	15	1	0	23	1	4	0	12	11	383
割合	7.6%	38.4%	5.7%	7.3%	23.5%	3.9%	0.3%	0.0%	6.0%	0.3%	1.0%	0.0%	3.1%	2.9%	100.0%
IV層 中出土	2	21	0	2	41	7	0	0	3	0	1	0	0	0	77
割合	2.6%	27.3%	0.0%	2.6%	53.2%	9.1%	0.0%	0.0%	3.9%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
V層 中出土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
割合	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
VI層 上面検出遺構出土	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
割合	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	150	1,722	197	505	3,050	211	7	4	316	40	84	2	130	55	6,473
割合 合計	2.3%	26.6%	3.0%	7.8%	47.1%	3.3%	0.1%	0.1%	4.9%	0.6%	1.3%	0.0%	2.0%	0.8%	100.0%

第14表 出土陶磁器層別産地別数量一覧表



第97図 出土陶磁器層別産地別割合

前記のSX2からのものである。SX2は近代以降の屋根替えに伴い多量の遺物が廃棄された遺構と考えられ、出土遺物の占める産地の割合は概ね19世紀以降を示している。また、SX2からは三田・王子山産と思われる磁器や志戸呂産陶器、萩焼と思われる陶器が僅かに見られる。

中国産の磁器は40点出土している。IV層以降に見られるようになるが、半数以上の25点はSX2からの出土で、希少な中国産の磁器が近代に至り廃棄されるまで受け継がれてきたことが窺える。

2) 機能別産地別分類

本調査区から出土した陶磁器類は、機能別に食膳具、喫茶・飲酒・喫煙具、調理具、灯明具、貯蔵具、化粧道具、信仰・調度具、暖房具、加熱具、遊興具、文房具、その他に分類される。第15表はそれをさらに産地別に分類した集計である。なお、ここでは、瓦質土器及び土師質土器も集計に加えた。

食膳具は、碗、皿の出土量が圧倒的に多く、産地も多様である。碗では特に、大堀相馬産陶器、肥前産、瀬戸・美濃産磁器の出土量が多く、次いで小野相馬産、肥前産、瀬戸・美濃産陶器が続く。また、中国産磁器の碗も1点見られる。皿では、肥前産磁器と在産土師質土器のかわりけ小皿の量が多い。中国産磁器は32点見られ、中国産器種のほとんどを占める。鉢では、肥前産陶磁器と大堀相馬産陶器が多く見られ、中国産磁器も7点見られる。その他、碗蓋、猪口、蓋物、段重が見られるが、肥前産磁器が多い。

喫茶・飲酒・喫煙具は、肥前産の磁器の瓶、杯、火入が多く見られ、瀬戸・美濃産磁器がそれに次ぐ。また、土瓶は大堀相馬産がほとんどを占める。

調理具及び灯明具は、陶器と土師質土器に見られる。調理具では搦鉢は在産産がほとんどで、瀬戸・美濃産陶器も少量だけ見られる。鍋は大堀相馬産に多く、焙烙は埴産がほとんどである。灯明具では在産土師質土器の灯明皿が多く、大堀相馬産陶器も少量見られる。乗燭は大堀相馬産と在産土師質土器に見られる。また、在産瓦質土器の瓦灯傘が1点見られる。

貯蔵具は、在産陶器の裏、壺が多く、他に瀬戸・美濃産陶器や大堀相馬産陶器、肥前産磁器で少量見られる。焼塩壺と火消壺に関しては、在産土師質土器のみに見られる。

化粧道具は、肥前産磁器のうがい茶碗、合子、紅猪口等が少量見られる。また、大堀相馬産や小野相馬産陶器の鬘水入、油壺、油差も僅かに見られる。

信仰・調度具は、大堀相馬産陶器の仏飯器、香炉、仏花瓶、豆裏、豆壺が少量ながら各種見られる。また、香炉に関しては肥前産磁器で見られる。

暖房具及び加熱具は、土師質土器と瓦質土器がほとんどを占めるが、火鉢に関しては瀬戸・美濃産陶器のものが見られる。

遊興具は大堀相馬産陶器と在産土師質土器が多く、文房具は肥前産磁器の水筒が少量ながら見られる。

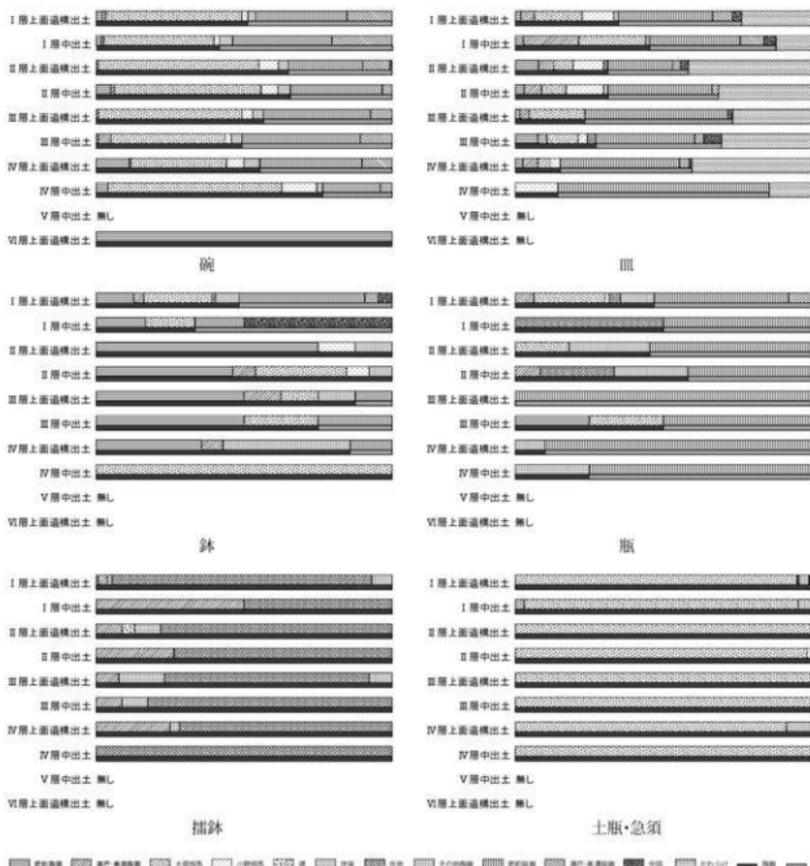
3) 器種別の変遷

機能別に分類した結果、食膳具の碗、皿、鉢、喫茶・飲酒・喫煙具の瓶、土瓶、調理具の搦鉢が他の器種に比べて多くを占めていることがわかった。そのため、これら6つの器種について、基本層及び各層上面検出遺構で集計を行った(第16・17表、第98図)。

碗は、今回調査で最も多く見られた器種である。IV層中では大堀相馬産陶器が最も多く58.8%を占めるが、IV層上面検出遺構では肥前産磁器の量が増加して、大堀相馬産陶器の占める割合と2分する。III層中でも同様に推移し、III層上面検出遺構とII層中段階では大堀相馬産陶器が再び大きな割合を占める。II層上面検出遺構でも大堀相馬産陶器の割合が約半分を占めるが、瀬戸・美濃産磁器も少ないながら、占める割合が増加傾向を示す。I層中及びI層上面検出遺

器種	機能・用途	Ⅱ										Ⅲ									
		Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3	Ⅱ-4	Ⅱ-5	Ⅱ-6	Ⅱ-7	Ⅱ-8	Ⅱ-9	Ⅱ-10	Ⅲ-1	Ⅲ-2	Ⅲ-3	Ⅲ-4	Ⅲ-5	Ⅲ-6	Ⅲ-7	Ⅲ-8	Ⅲ-9	Ⅲ-10
Ⅰ層上蓋遺構出土		10	27	2	1	20	2	1	2	7	27	20	2	2	19	2	1	2	20	27	
Ⅰ層中出土		122	40	2	1	12	1	1	1	1	122	40	2	1	12	1	1	1	1	122	
Ⅱ層上蓋遺構出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅱ層中出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅲ層上蓋遺構出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅲ層中出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅳ層上蓋遺構出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅳ層中出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅴ層上蓋遺構出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅴ層中出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅵ層上蓋遺構出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	
Ⅵ層中出土		15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	15	

第17表 出土陶磁器産地別機能別数量表(2)



第98図 器種・機能・層位ごとの陶磁器産地割合

第3節 出土遺物と検出遺構について

皿は、Ⅳ層段階からⅠ層上面検出遺構まで肥前産磁器と在地産のかわらけが一定量を占める。次いで、碗に比べて出土量は少ないが、大堀相馬産・小野相馬産陶器がⅣ層上面検出遺構段階から見られるようになる。また、碗同様、幕末から近代にかけて瀬戸・美濃産磁器の増加傾向が見られるが、肥前産磁器は減少傾向が見られない。中国産磁器はそのほとんどが皿で、半数以上はSX2からの出土である。

鉢は、Ⅳ層上面検出遺構段階から肥前産陶器で見られる。肥前産磁器や瀬戸・美濃産陶器、大堀相馬産陶器が各段階から少ないながら出土するが、出土量のほとんどはSX2からの出土である。また、中国産磁器の鉢も7点見られるが、全て近代以降の整地層及びSX2からの出土である。

瓶は、Ⅳ層段階以降、肥前産磁器で見られる。瀬戸・美濃産の陶磁器や大堀相馬産の陶器も少量ながら見られるが、これもほとんどがSX2から出土したものである。

土瓶は、大堀相馬産陶器の出土量が圧倒的に多い。Ⅳ層上面検出遺構段階から、各層とも90%以上の高い割合を占める。その他の産地では、肥前産磁器、瀬戸・美濃産陶磁器、小野相馬産陶器、堤産陶器等でも僅かに見られるが、これもほとんどがSX2から出土したものである。

捕鉢は、在地産がほとんどである。瀬戸・美濃産陶器でもⅣ層上面検出遺構段階以降少量ながら見られ、その他の産地では、岸窯や堤産陶器、明石・堺産陶器が僅かに見られる。

4) 補修痕のある陶磁器

今回調査で、焼継による補修痕のある磁器が56点、漆による補修痕のある陶磁器が8点確認された(第18表)。その内の46点はSX2からの出土である。焼継による補修痕のある磁器は、肥前産と瀬戸・美濃産の食膳具の碗・皿・鉢がほとんどである。SX2からは17世紀後葉から18世紀末葉の肥前産の大碗や輪花皿等が出土している。焼継の技法は寛政2年(1790)年頃から普及したようで、18世紀末以前に製作された磁器も焼継の技術がもたらされると補修しながら使用したようである。また、19世紀代の瀬戸・美濃産端反碗や広東碗にも見られ、大堀相馬産陶器の流通が活発化してくると、肥前産や瀬戸・美濃産磁器も補修しながら使用したことが読み取れる。これは、大堀相馬産陶器にほとんど補修して使用した痕跡が見られないことから、陶器は一度破損しても補修せずに廃棄するという消費者意識が働いていたように感じられる。

漆による補修痕のある陶磁器は、瀬戸・美濃産と大堀相馬産陶器の皿と肥前産磁器の皿に見られる。陶器総点数4146点に対し僅かに8点という集計からも、陶器に関しては補修して使用する概念が希薄であったことが読み取れる。

		食膳具						喫茶・飲酒・喫煙具		化粧道具		合計
		碗	碗蓋	皿	猪口	鉢	蓋物・蓋	瓶	杯	うがい茶碗	髷水入	
漆継	陶器	瀬戸・美濃			1							1
		大堀相馬			3							3
	不明							1				1
	磁器	肥前			3							3
焼継	磁器	肥前	16	2	4	1	8			1		32
		瀬戸・美濃	17	1	2		1	1		1		23
	不明										1	1
合計			33	3	13	1	9	1	1	1	1	64

第18表 焼継・漆継陶磁器産地別機能別数量

(2) 土師質土器

1) 墨書土器について

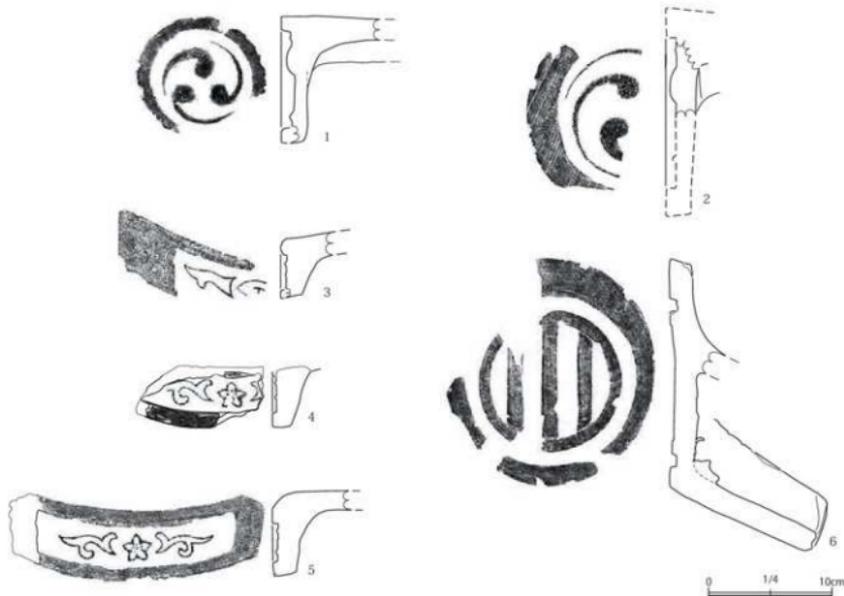
近代以降の遺物廃棄遺構であるSX2から墨書されたかわらけが1点出土している(第99図)。内面には中央に「煖火(あるいは炎)」、その周囲に「火」の文字が重なるように墨書されている。底面には「口器 貞次郎 直口」の文字が確認できるが意味は不明である。本来、祭祀または呪術的な要素や、地鎮のような信仰に関わる遺物の可能性が考えられるが、一括廃棄された遺物群中から出土したことから、廃棄の際に混入した可能性が高い。

(3) 瓦

瓦は破片数で412点出土している。内訳は丸瓦70点、軒丸瓦3点、軒平瓦1点、棧瓦14点、軒棧瓦12点、平・棧瓦202点、伏間瓦18点、鳥伏間1点、輪違瓦8点、鬼瓦6点、袖瓦1点、なまこ瓦20点、塀瓦(板状瓦)21点、近代陶器質瓦10点、不明瓦20点である。各段階とも丸瓦と平・棧瓦の占める割合が多いが、時期が下るにつれて丸瓦の占める割合が低くなり、平・棧瓦の占める割合が高くなる傾向が見られる。また、平・棧瓦は破片のためどちらも特定はできないが、平成20年度の調査では棧瓦はIV層(今回III層)以上の土層からのみ出土しており、IV層上面検出遺構の特定できない平・棧瓦は、平瓦の可能性が高いと考えられる。



第99図 墨書のある土器



第100図 瓦

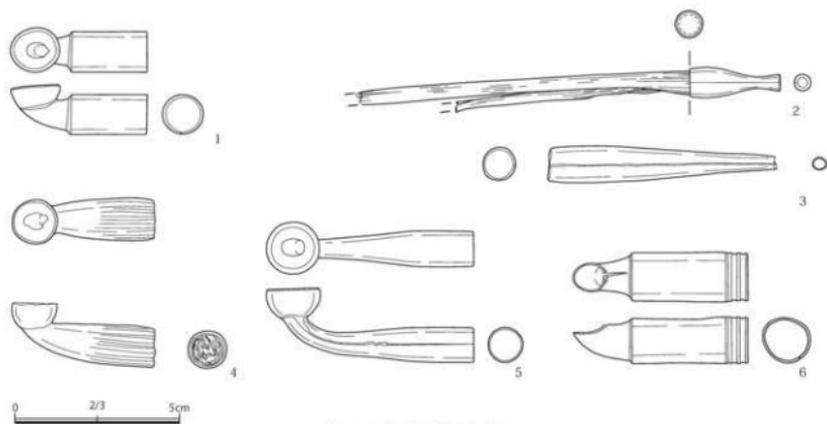
第3節 出土遺物と検出遺構について

軒丸瓦、軒棧瓦の瓦当文様には、右三巴文（第100図-1・2）が見られる。軒平瓦、軒棧瓦の瓦当文様には、透かし唐草文（第100図-3）、栴檀文と唐草文の組み合わせ（第100図-4・5）が見られる。また、鳥伏間の瓦当文様には、伊達家の家紋である三引両文（第100図-6）が見られる。瓦当は外区と内区の間を溝を巡らし、内区に三引両文が施されている。仙台城二の丸跡第7地点において三引両文の鳥伏間が出土しているが、外区と内区の間を溝で仕切ってはならず、他の軒丸瓦の三引両文も同様である。江戸の製品を模倣して在地で製作した可能性が考えられる。

(4) 金属製品

1) 煙管

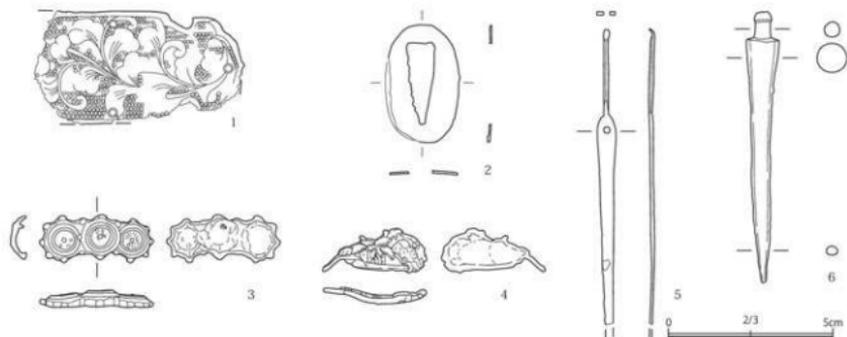
銅製の羅字煙管が33点出土している。雁首が18点、吸口が15点で、Ⅳ層上面検出遺構段階以降から出土している。煙管は、古泉弘氏がⅠ～Ⅵ段階の分類（江戸遺跡研究会2001）を行っている。その分類に当てはめるとⅢ層中のものは、Ⅱ～Ⅳ段階に相当する。Ⅲ層上面検出遺構のSX7からは、Ⅴ段階（19世紀代）に相当する金鍍金が施された雁首（第101図-1）が出土している。Ⅱ層中、Ⅱ層上面検出遺構のものは、概ねⅣ～Ⅴ段階（第101図-2）に相当する。Ⅰ層中のものはⅥ段階に相当する近代以降で、Ⅰ層上面検出遺構のものは、概ねⅣ～Ⅵ段階に相当する。SK6からは、Ⅳ段階に相当する銀鍍金が施された吸口（第101図-3）やⅥ段階に相当する雁首（第101図-4）が出土している。また、SX2からはⅣ段階（第101図-5）やⅤ段階（第101図-6）に相当する雁首が出土している。このように、煙管は年代を降って変化する古泉氏の分類にほぼ整合する。



第101図 各段階の煙管

2) 銅製品

煙管以外の銅製品は43点出土している。種類は多様で、飾り金具、摘金具、把手金具、覆金具、切羽、目貫、簪、釣針状製品、S字状製品、蓋物蓋、小柄、鉾、水滴、雁首銭、板状・円筒状・帯状の不明銅製品が見られる。飾り金具では、唐草文が陽刻され、金鍍金が施されたもの（第102図-1）が見られる。刀に使用される金具として、刀の鐔の表裏がそれぞれ柄と鞘に接する部分に添える薄い金具である切羽（第102図-2）が見られる。また、刀の身が柄から抜けないように柄と茎の穴に差し止める釘を覆う金具である目貫では、歯車を3つ連ねた意匠のもの（第102図-3）や動物を模ったと考えられるもの（第102図-4）が見られる。簪では、先端部が耳かきになっているもの（第102図-5）が見られる。その他、片端に突出部を有する円錐形の用途不明な銅製品（102図-6）も見られる。



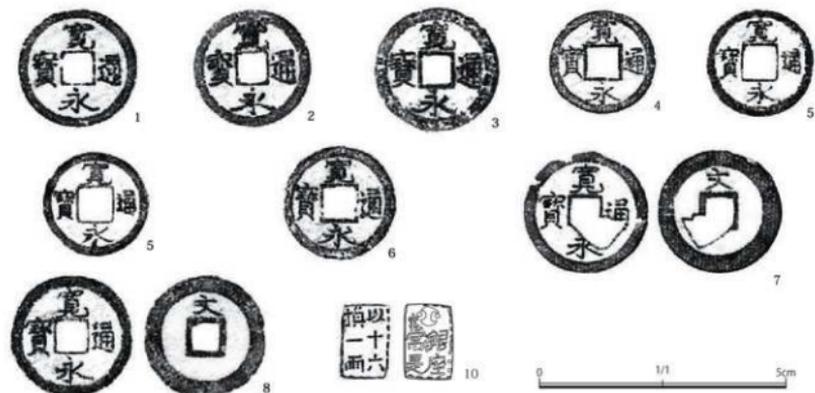
第102図 各種銅製品

3) 鉄製品他

鉄製品は203点出土している。その内132点は頭巻釘であるが、他に丸釘、角釘、刀子、鏝、鋸、錘、鉄鍋、蝶番、把手金具、雨樋の支え金具、鉤状製品、バケツ状製品、棒状製品、円盤状製品、鉄滓、板状・塊状・帯状、環状、円筒状の不明鉄製品が見られる。頭巻釘を主体とする鉄製品の半数以上の141点は、近代以降の遺構である1層上面検出遺構から出土している。SD2から54点、SD3から4点、SK6から23点、SK11から8点、SK12から8点、SX2から44点出土している。また、1層上面検出遺構を除くと、鉄製品は比較的遺構よりも基本層からの出土が多い傾向が見られる。

(5) 銭貨

銭貨は79点出土している。内訳は、寛永通宝が76点、渡来銭が2点、錆による劣化が激しく文字を判読できな



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	銭貨名	初録年	法量 (cm・g)			備考	図録番号
						長径	寸径	重量		
1	S1-14	S3-W6	表上	一朱銀	文政12年(1829)	1.53	0.98	2.60	文政南園一朱銀 表:「以十六 機一高」裏:「(分銅) 御座 重星」	N-13

第103図 銭貨

第3節 出土遺物と検出遺構について

ったものが1点である。寛永通宝は、初鑄年寛永13年(1636)の古寛永(第103図-1~3)が12点、初鑄年延宝元年(1672)の新寛永(第103図-4~9)が64点見られる。渡来銭は、熙寧元宝(北宋銭)が1点と劣化が激しく判読が困難であるが、熙寧元宝と思われるものが1点見られる。銭貨はⅣ層段階以降から出土し、古寛永と熙寧元宝の2点が見られる。Ⅲ層段階になると古寛永8点に加え、新寛永4点が見られるようになるが、古寛永の占める割合が高い。Ⅱ層段階になると割合が逆転し、ほとんどが新寛永となり、古寛永は数点含まれる程度となる。

また、市道部Ⅱ区の表土から、初鑄年文政12年(1829)の文政南錠一朱銀(第103図-10)が出土している。表には「以十六換一兩」、裏には「(分銅) 銀座 定 常是」と書かれている。裏の「定」は陰刻で、それ以外の文字は陽刻である。

(6) 出土遺物のまとめ

陶磁器は、17世紀代には肥前産の初期伊万里様式や中国産磁器が少量見られ、近世期の出土遺物の上限を示す。18世紀前半では肥前産陶磁器が多数を占め、瀬戸・美濃産と大堀相馬産陶器がこれに続くが、18世紀後半以降は肥前産陶磁器が減少傾向を示し、大堀相馬産陶器がその量を増加させていく。19世紀前半には肥前産磁器と大堀相馬産陶器が主体を占め、これに小野相馬産陶器や瀬戸・美濃産磁器が続くようになり、19世紀後葉以降瀬戸・美濃産磁器が少量ながら次第にその割合を増加させていく。また、近代に入ると瀬戸・美濃産の型紙絵付けや銅版絵付けの磁器が僅かに見られるようになり、出土遺物の下限を示す。また、陶磁器総点数の半分強を占める3701点は、近代以降屋敷替に伴い多量の遺物が廃棄されたSX2から出土している。SX2出土陶磁器の占める産地の割合は、概ね19世紀以降の傾向を示している。

その他、土器、瓦、金属製品、銭貨等の様々な遺物からも近世から近代にかけての人々の生活を窺い知ることが出来る。

2 検出遺構について

(1) 柱列跡

Ⅲ層上面において、柱列跡2条(SA1・SA2)と石組基礎跡(SX14)が検出された。SA1とSA2は東西に並ぶ柱列である。同面(平成20年度Ⅳ層上面)では、平成20年度の路線部Ⅰ・Ⅱ区、迂回路部において柱列跡が検出されている。今回調査のSA1・SA2はいずれも礎石もしくは柱痕を伴わないものである。平成20年度調査の柱列跡は、礎石や柱痕を伴い建物跡の可能性が示されているが、今回調査の柱列跡は掘り込みも浅く建物跡を形成するものではない。ただし、主軸方向は平成20年度調査の柱列跡がN87～90°-Wを指し、今回調査の柱列跡はN88～89°-Wを指すように柱列の方向はほぼ同軸を意識していることがわかる。また、柱間寸法はSA1が8尺から11尺程とやや広く、SA2が5尺程と狭い。平成20年度調査のほぼ同軸を示す柱列では、路線部Ⅱ区SA2の柱間寸法が6尺から7尺程、SA3が2尺から6尺程、迂回路部SA1が5尺から8尺程である。柱間寸法を比較すると一貫性は見られないが、各ピットの掘り込みが浅い点から、路線部Ⅱ区のSA2に類似性が見られる。性格としては、何かしらの境界を意識して簡易的に設けられた柵状の柱列と推測される。また、SA1・SA2の西側に位置する溝状のSD7も東西にほぼ同軸の主軸方向を示しており、境界を意識した溝状遺構の可能性が考えられる。

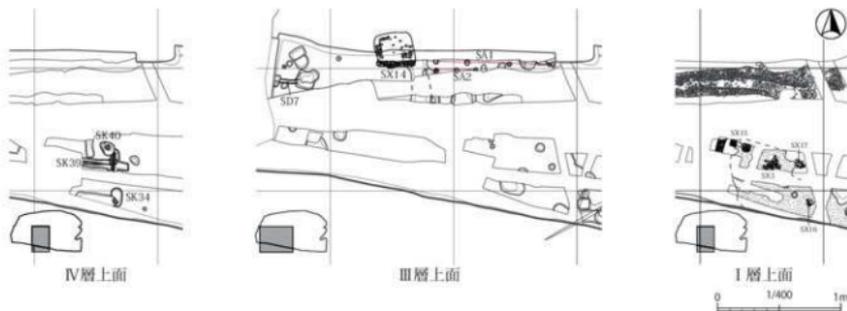
(2) 建物跡

今回調査では、明確に建物跡を形成する掘立柱建物跡や礎石建物跡等の遺構は検出されなかった。ただし、構造物としての基礎や列を成さない礎石を有する土坑等は数基検出された。ここでは、明確ではないが建物跡としての可能性を示す遺構についてまとめる。

Ⅳ層上面において、木材を基礎とする構造物跡SK39が検出された。溝状の掘り込みに木材を横たえて基礎としていたと考えられ、木質の一部が検出された。南側と西側が攪乱に壊されていたため規模は明確でない。また、SK39の北側で重複するSK40と南側に位置するSK34も柱痕や礎石が伴い規模も比較的大きいため、構造物を形成していた痕跡の一部と考えられる。

これらⅣ層上面で検出された一連の遺構は、19世紀前葉の遺物が出土していることから、Ⅳ層が整地される下限である18世紀中葉以降、Ⅲ層が整地される下限である19世紀前葉頃まで継続した屋敷の南側に位置する構造物の基礎跡であったと推測される。

Ⅲ層上面において、石組を基礎とする構造物跡SX14が検出された。北側は、平成20年度調査路線部Ⅱ区でもSX7として検出されている。底面が同レベルを示すことや最大で4段の段差が積まれていることから同一遺構であると考えられる。石組によって強固に基礎が造られていることから、土蔵のような建物が推測される。



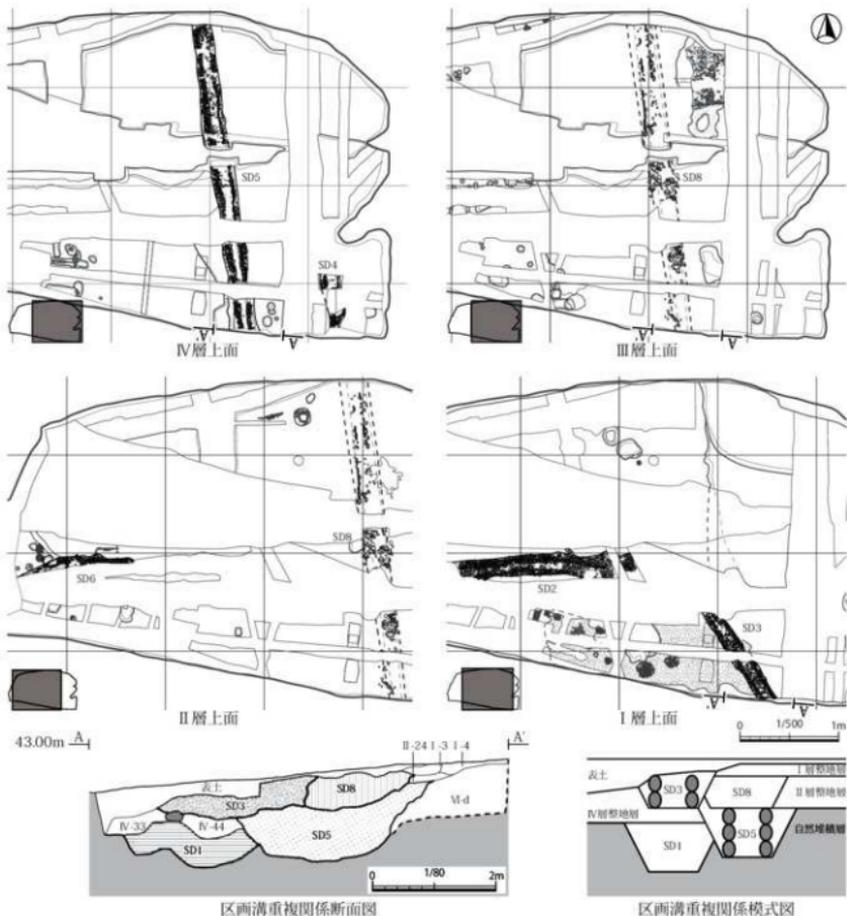
第104図 各面で検出された柱列跡・建物跡

第3節 出土遺物と検出遺構について

また、I層上面では近代以降の構造物跡であるSX15や柱穴基礎の痕跡と考えられるSX3・16・17が何かしらの建物基礎と推測されるが、検出された痕跡に規則性が見られないことや周囲が掘乱に壊されていることで全体が把握できないことから、復元には至らなかった。

(3) 区画施設

平成20年度調査において屋敷地を区画していたと考えられる南北に延びる溝跡（迂回路部SD3・路線部Ⅱ区SD1）が検出されており、その続きが今回調査でも検出された。今回調査区は、近世期には屋敷地が2つに亘っていたと考えられる。この区画施設としての溝跡は、埋め戻し・構築を繰り返しながら近代まで継続していたと考えられる。ここで



第105図 区画施設の変遷

は近世期から近代に至るまでの区画施設としての溝跡の変遷を検討したい。

今回調査のIV層上面で検出されたSD5は、平成20年度調査で検出された南北に延びる石組溝の続きである。主軸方向は今回調査のSD5がN-8°-W、平成20年度の調査迂回路部SD3・路線部Ⅱ区SD1がN-10°-Wとほぼ直線を維持している。石組は最大で3段積まれ、規模・形状から見ても一連の石組溝と考えられる。また、底面は北から南に向かって低く緩やかに傾斜しており、区画施設であると同時に排水施設の役割も果たしていたことが理解できる。平成20年度調査では、17世紀代から18世紀中葉の遺物が出土しており、18世紀前葉から中葉に機能し、18世紀後葉には整地する際に埋められたものとされている。今回調査の出土遺物は、18世紀代にまとまりが見られるが、19世紀代の遺物も見られる。それを踏まえると、機能していた時期は18世紀前葉から後葉、埋められた時期はⅢ層が整地される下限である19世紀前葉頃と捉えたい。

また、IV層上面ではSD5の東側で石組溝の可能性が高いSD4が一部検出されている。周囲を擾乱により壊され、全体が把握できなかったが、SD5に並行して南北に延びている様相が窺える。SD4とSD5の二列の溝が並行して区画機能を果たしていたか、屋敷替えに伴い区画溝の造り替えが行われた可能性があげられる。しかし、残存状況が不良で延長状況が不明であるため、性格は特定できない。

19世紀前葉にⅢ層が整地されると、SD5の直上にSD8が構築される。SD8は堆積土中に5～20cm程の円礫が多量に含まれており、石組の構築部材が含まれている可能性が考えられる。調査区北側では石列が一部確認されており、SD8を埋める際に人為的な石組の取り壊しが行われた可能性が考えられる。また底面には黄褐色の砂礫が堆積しており、溝が存在したひとつの特徴を示している。

平成20年度調査では、このSD8の延長部は検出されておらず、区画施設としての溝は18世紀後葉の整地の際に途絶えている。そこでSD8の延長部分にあたる平成20年度調査の迂回路部の全体図や、調査区壁面、調査区を横断するベルトの断面図や写真を改めて精査した。Ⅲ層では延長上にSX9、SX17、SX22がある(第113図)。SX9は溝状を呈する遺構として、SX17とSX22は石組みの遺構として報告されている。これらはどれも堆積土に5～20cm程の円礫を多量に含み、SD8の堆積土と共通する。Ⅱ層では延長上に石列遺構があり、南北に延びる3条の石列を呈する遺構として報告されている(第114図)。この石列は今回調査で確認したSD8北側の石列の延長上にある。IV層上面遺構の迂回路部SD3の直上には、明瞭ではないが窪みのような落ち込みが帯状にあり、そこに礫が多量に堆積している。これらがSD8の続きである可能性が考えられる。

SD8の出土遺物は17世紀代から19世紀代のもまで見られ、19世紀代の遺物が主体となる。SD8は19世紀前半の整地層であるⅡ層上面からも掘り込みが確認できる。従って、出土遺物と整地の時期を考慮すると、SD8が機能していた期間は、SD5が埋められSD8が構築される19世紀前葉頃からⅠ層が整地される近代までであろう。

以上のように、近世期にはSD5の石組溝とその直上に構築されたSD8が屋敷を区画する機能を果たしていた。近代になると、屋敷を分割していた区画施設は埋められ、これまでの南北の地割が失われ、敷地は統合される。それを示すように、近世期の区画施設であったSD8を斜めに切る方向で、近代の石組溝であるSD3が構築される。SD3は途中を擾乱に壊されるが、西側に位置する石組溝SD2に接続すると想定され、区画施設というよりも南側に位置する千貫沢に排水する機能が強い施設と考えられる。

また、SD2は、Ⅱ層上面で検出されたSD6を造り替えて構築されている様相が窺える。SD6は調査区西側に位置しており、軸はSD2とほぼ同様であるが、SD2の軸が西側でやや南に振れるため、造り替え以前のSD6の北側の石組が検出された。SD6の出土遺物には近代のものが含まれないため、近代以前に埋められたと考えられる。近代以降にSD6を造り替え、SD2が構築されたと推測される。

SD2は構築土中より板ガラスが出土しており、近代以降に構築されたことが理解される。また、SD3からは銅版絵付けの碗の破片が出土しており、少なくとも明治30年頃より以降に廃絶されたと考えられよう。

(4) 検出遺構のまとめ

今回調査で検出された遺構は、Ⅰ～Ⅳ、Ⅵの基本層上面で検出され、基本層ごとにⅠからⅥ期に区分される。また、各基本層出土遺物から、17世紀代から近代の各時期に該当すると考えられる。以下に各期の概略を述べる。

〈Ⅰ期：Ⅵ層上面〉：17世紀後葉以前

市道部Ⅱ区の東側で、溝状遺構SD1が検出された。SD1の堆積土中からは円礫が多量に出土したが、石組等の規則性は見られなかった。遺物は17世紀中葉から後葉の肥前産陶器の兵器手碗が出土しており、今回調査において最も古い時期の遺構である。他に、性格は不明だが円形で掘り込みの浅い土坑やピットが検出された。

〈Ⅱ期：Ⅴ層上面〉：(17世紀後葉)

Ⅴ層は、市道部Ⅰ区の西から東へ向かって低く傾斜する自然堆積層の傾斜変換部分直上に一部堆積が確認され、縄文土器が出土した。Ⅴ層上面で遺構は検出されなかった。

〈Ⅲ期：Ⅳ層上面〉：17世紀後葉～18世紀中葉

市道部Ⅰ・Ⅱ区の東側で石組の溝跡SD5が南北に延びる。平成20年度調査の路線部Ⅱ区SD1と迂回路部SD3と繋がり、屋敷の区画施設と考えられる。出土遺物から18世紀前葉から後葉に機能し、19世紀前葉にⅢ層を整地する際、埋められたものと考えられる。市道部Ⅱ区中央では、横たえた木材を基礎とする構造物跡と考えられるSK39や礎石・柱痕を伴う比較的規模の大きいSK34・SK40が検出された。これらは屋敷の南側に位置する建物施設に伴うものであると推測されるが、復元には至らなかった。

〈Ⅳ期：Ⅲ層上面〉：18世紀中葉～19世紀前葉

市道部Ⅱ区西側では東西に並ぶ櫛状の柱列跡SA1・SA2が検出された。その西側では平成20年度調査路線部Ⅱ区SX7に繋がる石組を基礎とする構造物跡であるSX14が検出された。調査区東側では、Ⅳ層で検出された区画施設と考えられるSD5が埋められた後に、溝跡SD8が構築される。出土遺物からSD5が埋められ、Ⅲ層が整地される19世紀前葉から近代まで区画施設として機能し、近代以降に埋められたものと考えられる。市道部Ⅰ区SD5の東側では、礫が集中するSX10・SX11が検出された。他には、調査区西側で土坑、ピットが複数検出された。

〈Ⅴ期：Ⅱ層上面〉：19世紀前半

市道部Ⅱ区の西側で石組の溝跡SD6が検出された。これは上層で検出される近代の石組溝SD2と軸がほぼ同様で重複しており、SD2はSD6を造り替えて構築された可能性が考えられる。東側では溝跡SD8がⅡ層の整地の際にも埋められず区画施設として継続して機能する。市道部Ⅰ区中央では石組の井戸跡SE1が検出された。他には、土坑・ピット等が散在して検出された。

〈Ⅵ期：Ⅰ層上面〉：近代

市道部Ⅱ区でSD8を斜めに切る方向で、近代の石組溝であるSD2・SD3が構築される。屋敷を分割していた区画施設は埋められ、これまでの南北の地割が失われ、敷地は統合される。市道部Ⅰ区東側では多量の遺物が廃棄されたSX2が検出された。これは近代以降の屋敷替えに伴った一括廃棄と考えられ、近代以降に遺物廃棄のため掘削して埋め戻したもののなか、近世期の傾斜部分を近代以降埋めたのかは不明であるが、少なくとも検出面及び出土遺物からは近代以降に廃絶された遺構と考えられる。また、市道部Ⅱ区では近代以降に道路の拡幅が行われたと考えられ、転圧を受けた小礫範囲のSX6が検出された。その下面からは幾つかの建物施設に伴うと推測される礫集中部や土坑等が検出されたが、復元には至らなかった。

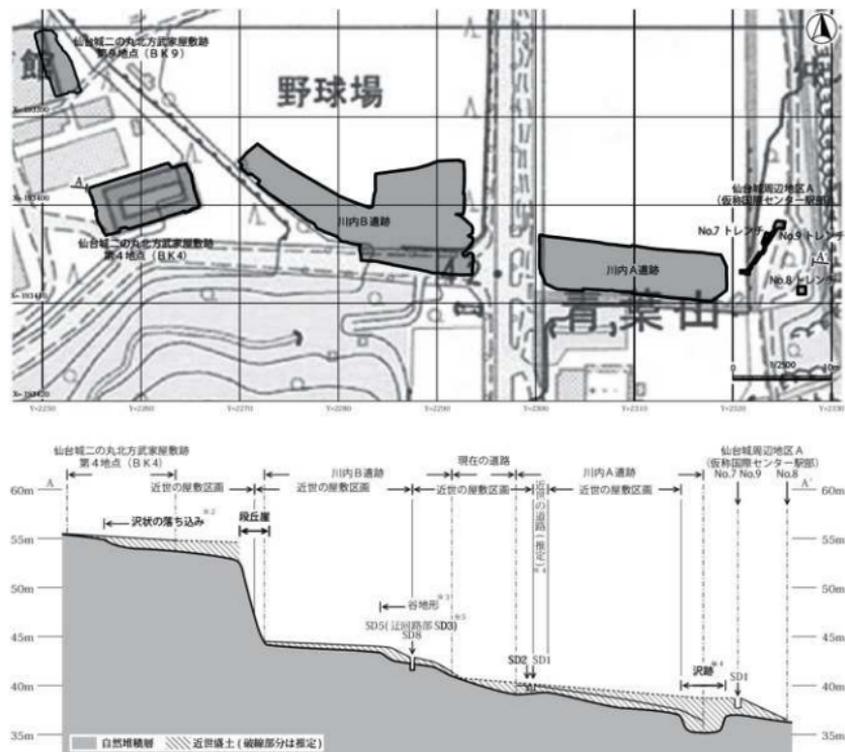
以上のように、当該地は近世期には、仙台藩上級家臣の屋敷地が置かれ、南北方向の地境を意識して土地が利用されてきたことが判明した。近代に入ると屋敷地は終焉を迎え、これまでの地割が失われ、敷地は統合され、軍の施設として利用されることとなる。

第4節 まとめ

川内B遺跡は、平成20年度調査で2,390m²、今回調査で1,120m²の合計3,510m²の調査が行われた。平成20年度調査では、近世の建物跡や区画溝が検出され、絵図などの史料と合わせて二つの屋敷地があることがわかった。今回調査でも、屋敷境の区画溝は検出され、新たに近世を通じて屋敷境の区画溝が機能している可能性が考えられた。ここでは、平成20年度調査と今回調査の成果を合わせて、川内B遺跡全体の土地利用のあり方を概観する。

1 川内B遺跡周辺の地形

川内B遺跡の西側には仙台城跡があり、隣接する辺りでは、平成6年度に東北大学埋蔵文化財研究センターによって、仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点、第9地点（以下BK4、BK9と略す）の調査が行われている。東側には川内A遺跡があり、平成17年度に調査が行われている。また川内A遺跡のさらに東側では、平成17・18年度に試掘調査が行われている。これら周辺の調査成果から、木遺跡の立地について述べていく。



第107図 周辺の調査地点と自然地形及び整地層断面模式図

※1 仙台市文化財調査報告書第302集「仙台市高遊鉄道東西線関係遺跡発掘調査(2)概発掘報告書」、同第316集「仙台市高遊鉄道東西線関係遺跡発掘調査(3)概発掘報告書」、同第312集「川内A遺跡」、同第385集「川内B遺跡」、「東北大学埋蔵文化財調査年報13」と、今回の調査成果から作成した。段丘崖については「東北大学埋蔵文化財調査年報21」を参考にした。地図は国土地理院の1万部の1地形図「青葉山」を使用した。
 ※2 「東北大学埋蔵文化財調査年報13」記載 ※3 仙台市文化財調査報告書第385集「川内B遺跡」記載 ※4 仙台市文化財調査報告書第312集「川内A遺跡」記載
 ※5 遺構名は「平成22年度調査の遺構名(平成20年度調査の遺構名)」の順で表記

遺跡周辺を概観すると、西が高く東が低い傾斜になっている（第107図）。西から順に見ていくと、BK4が最も高い位置に立地している。BK4の自然堆積層はローム層を中心として、所々に段丘礫層が露出している。また自然堆積層上で西から東に向かって沢状の落ち込みが確認されている。近世の整地はこの沢を埋め立てるために行われている。川内B遺跡との間には高さ約8mの段丘崖があり、BK9で段丘崖の一部が検出されている。BK4の屋敷地と川内B遺跡西側の屋敷地は、この段差を境に分かれている。

川内B遺跡内で自然堆積層は谷地形を形成し、一段落ち込み東へと続いている。ここに区画溝があり、屋敷地が分かかれ、東側の屋敷地は川内A遺跡まで続いている。

川内A遺跡は全体的に東に向かって低く、緩い傾斜になっている。東側には沢があり、近世を通じて徐々に埋め立てられている。川内A遺跡は近代に削平されており、整地層の遺存状態が悪い。特に西側の一部では近代の整地層の直下が自然堆積層になっており、この辺りは自然堆積層がもう少し高かった可能性がある。遺跡の西側では区画溝が検出されていて、区画溝を境に川内A遺跡内で東西に屋敷地が分かれる。検出されていないが、絵図から区画溝の脇には近代の道路があったと推定される。川内A遺跡西側の屋敷地は、川内B遺跡東側の屋敷地の続きで、この屋敷地の大部分は現在の道路の下にある。川内A遺跡東側の屋敷地は、沢までと考えられる。

川内A遺跡の東側の試掘トレンチでも東に向かって低く、緩い傾斜になっている。試掘トレンチNo.7・9で、川内A遺跡の沢の続きは確認されていない。ここでは溝が検出されているが、区画溝かは不明である。

これらの地形から川内B遺跡周辺の屋敷地は、自然地形の変換点を境に、区切られていることがわかる。第1章第4節で述べたように、川内B遺跡周辺では江戸時代を通じて、屋敷地の統合・分割などの変更が行われていない。その要因の一つとして、屋敷境に段差が存在したため、容易に屋敷境を変更できなかったからではないかと推定される。

2 川内B遺跡の自然地形と近世の整地層

川内B遺跡は広瀬川の河岸段丘上の傾斜地に立地し、近世に整地が行われても、その傾斜は残存し続けている。ここでは、今回調査と隣接する平成20年度路線部Ⅱ区と迂回路部を合わせて、自然地形と近世の整地層について述べていく。

まず、今回調査と平成20年度調査の基本層について整理する。平成20年度調査では基本土層をⅠ～Ⅶ層に分類し、Ⅰ・Ⅱ層が近現代の整地層、Ⅲ～Ⅵ層が近世の整地層、Ⅵ層が自然堆積層となっている（第19表）。近世の遺構はⅢ～Ⅵ層から検出し、Ⅰ～Ⅴ期の5

期に区分している。今回調査では自然堆積層から近世の整地層、近現代の整地層までをⅠ～Ⅵ層に大別し、Ⅰ～Ⅵ期に区分した（第20表）。平成20年度調査と今回調査の基本層の年代観を比較すると、今回調査の近代整地層であるⅠ層は平成20年度調査の近代整地層のⅡ層に対応し、近世の整地層であるⅡ層はⅢ層、Ⅲ層はⅣ層、Ⅳ層はⅤ層、自然堆積層であるⅥ層はⅦ層に対応する。各層の出土遺物から見た年代観にはやや時期

期	基本土層	年代観
I期	Ⅶ層上面	17世紀後葉以前
II期	Ⅵ層上面	17世紀後葉
III期	V層上面	18世紀前葉～18世紀中葉
IV期	Ⅳ層上面	18世紀後葉～19世紀中葉
V期	Ⅲ層上面	19世紀中葉以降

第19表 平成20年度調査の基本土層

期	基本土層	年代観
I期	Ⅵ層上面	17世紀後葉以前
II期	V層上面	(17世紀後葉)
III期	Ⅳ層上面	17世紀後葉～18世紀中葉
IV期	Ⅲ層上面	18世紀中葉～19世紀前
V期	Ⅱ層上面	19世紀前半
VI期	I層上面	近代

第20表 今回調査の基本土層

期	基本土層		整合後の年代観
	今回調査	平成20年度調査	
I期	Ⅵ層上面	Ⅶ層上面	17世紀後葉以前
II期	V層上面	Ⅵ層上面	(17世紀後葉)
III期	Ⅳ層上面	V層上面	17世紀後葉～18世紀中葉
IV期	Ⅲ層上面	Ⅳ層上面	18世紀中葉～19世紀中葉
V期	Ⅱ層上面	Ⅲ層上面	19世紀前葉～19世紀中葉
VI期	I層上面	Ⅱ層上面	近代

第21表 基本土層対応関係表

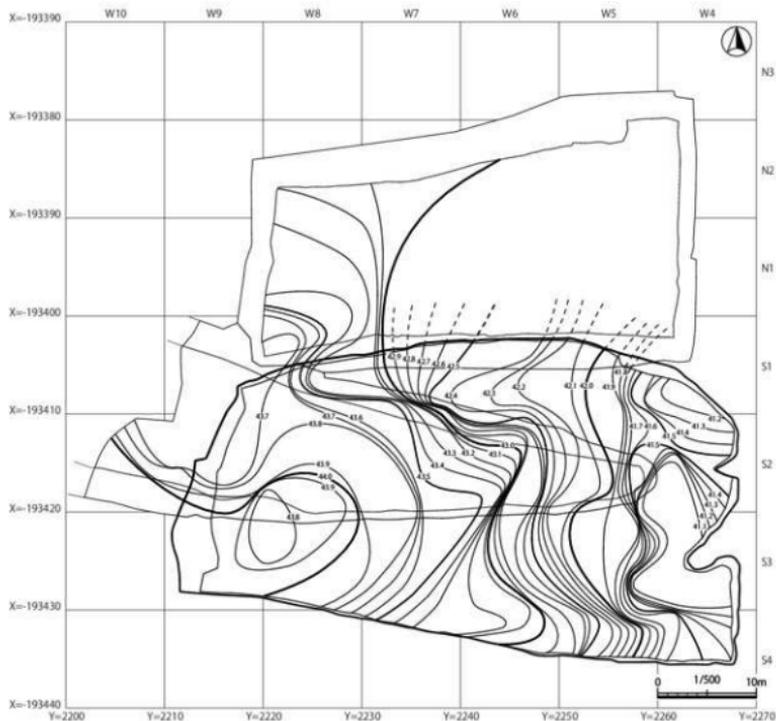
第4節 まとめ

差が見られ、平成20年度調査より今回調査の方で四半世紀ほど時期が上っている。これを踏まえてやや年代幅を持たせて全体の基本層の年代を整合してみると、第21表のようになる。

自然堆積層はS3-W8グリッド周辺が最も高く、S1-W4、S3-W4周辺が最も低く、全体的には南西から北東へ傾斜している（第108図）。S1-W9・S3-W9グリッドでは周囲から緩やかに低くなっている。S1-W7・S2-W6グリッドでは、自然堆積層が急激に落ち込み、N2-W6グリッドの北壁に見られる落ち込みへと続くようである。落ち込みの肩は大きく弧を描き、S1-W5～7グリッドは帯状に低く、落ち込みの底となっている。この地形について平成20年度調査では谷地形と報告されている。谷地形は本遺跡が立地する仙台下町段丘より、1段高い北西にある仙台中町段丘と、2段高い南西にある仙台上町段丘からの傾斜に起因すると考えられる（第2図）。

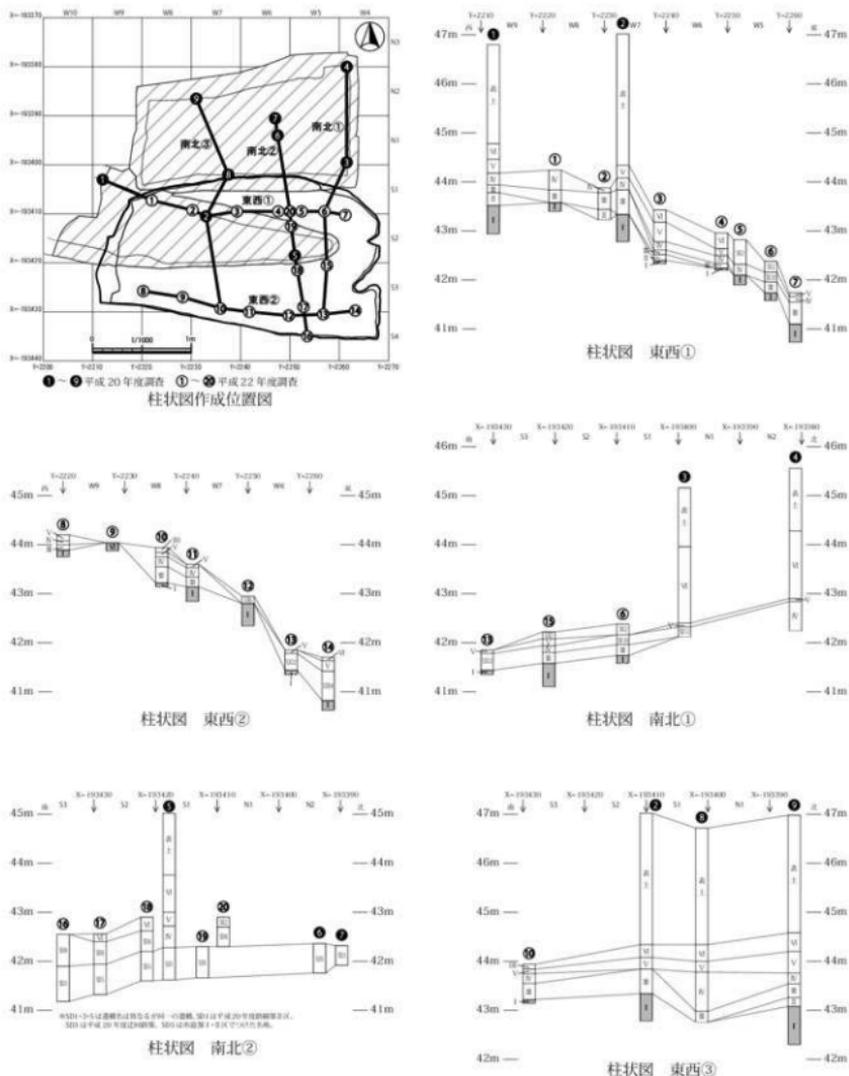
この谷地形の入り口付近を境に、近世の屋敷地は東西に分かれ、整地層も異なる。柱状図の東西①・②は二つの屋敷地を横断、南北①は東側の屋敷地を縦断、南北②は区画溝のSD5・8、南北③は西側の屋敷地を縦断する形で作成した。

西側の屋敷地では、Ⅱ期から整地が見られる。Ⅱ期にはS1-W9グリッド周辺と、S1-W6～W7グリッド周辺に局所的に見られる（第109図 東西①）。浅い窪地を埋めるだけの、比較的小規模な整地にとどまる。Ⅲ期には区画溝のSD05が作られ、またS1～S3-W8～W9グリッド周辺では平坦面が作られる。Ⅳ期にはⅢ期の平坦面がS2・S3-W7グリッド周辺まで広がる（第109図 東西②）。またSD5からSD8へ区画溝の造り替えが行われ、それに伴い区画溝



第108図 自然堆積層等高線図

の西側の、S1-W6～W7グリッド周辺にある窪地が埋められ始める（第109図 東西①・南北②）。平成20年度調査では、Ⅳ期にN1・N2-W7・W8グリッドで土留めの杭列や、版築状の堆積が見られる。Ⅴ期にはS1-W7グリッド周辺の窪地がほぼ埋められ、W7グリッドから西側はほぼ平坦となる（第109図 南北③）。しかし、W7グリッドから



W6 グリッドにかけて傾斜は残存する。

東側の屋敷地では、Ⅲ期から整地が見られる。Ⅲ期にはS1-W4の窪地を埋めて比較的傾斜を緩くしている（第109図 東西①）。またS3・4-W4グリッドではSD4の構築に伴い、SD4の東側が整地される。しかし、東側の屋敷地では各期を通して平坦面がほとんどなく、区画溝のSD5・8から東に向かって低くなり、また北から南に向かって緩やかに低くなっている（第109図 南北①）。

区画溝SD5・8はⅢ～Ⅴ期にかけて機能し、北から南に向かって低く緩やかに傾斜している（第109図 南北②）。SD5は南側のS3・4-W5グリッドで自然堆積層を大きく開削しており、この部分の傾斜がもっとも急である。SD8も傾斜の傾向に差は見られない。しかし、溝の検出面の標高は約40～60cm、底面の標高は約60～70cmそれぞれ高くなっている。区画溝の周囲で盛土が行われ、標高が全体的に高くなったことが窺える。

3 川内B遺跡の土地利用

川内B遺跡周辺の地形や、近世の屋敷地・整地層を踏まえて、検出遺構から各期ごとに川内B遺跡の土地利用の変遷を述べていく。

I期（第110図）は17世紀後葉以前で、二の丸築城に前後してこの地に武家屋敷が作られた頃の遺構と推定される。遺構はS1・2-W8～10グリッド周辺で土坑やピッドなどが検出されている。S2-W8グリッドで柱列が検出されているが、明瞭な建物跡や、屋敷境と考えられる遺構は検出されていない。この時期には屋敷地としての活発な土地利用はされていない様である。ただしS1-W4～8以北では、掘削深度に制限があり、I期に該当する面の調査が行われていないため、全体の様相が把握しきれていないと言えない。

Ⅱ期（第111図）は17世紀後葉で、この頃より整地層が見られるようになる。整地層は調査区全体では見られなく、浅い窪地を埋めるように局所的に行われている。遺構はほぼI期と同じような広がりが見られ、S1・S2-W9～W10グリッド周辺で柱列や土坑、ピッドなどが検出されている。またN2-W6・7グリッドでは区画施設と考えられる東西軸の溝跡が検出されており、南北に土地を分けて利用していたと推定される。

17世紀中葉以降の絵図に、川内B遺跡付近では東西に二つの屋敷地が描かれている。しかし、Ⅰ・Ⅱ期では明瞭な屋敷境となる区画施設は見つかっていない。この頃は絵図とは異なり屋敷地が東西に分かれていなかったか、分かれていたが区画施設を設けず、自然地形の変換点をそのまま屋敷境に利用していたと推定される。またⅠ・Ⅱ期は遺物の出土量が少なく、近世遺構の年代の上限が定かではない。川内B遺跡周辺の調査や、絵図などの史料から、17世紀中葉には武家屋敷地として利用され始めたことと推定されることから、上限はこの辺りになるであろう。

Ⅲ期（第112図）は17世紀後葉～18世紀中葉で、この頃より活発な土地利用が見られるようになる。N2-W6グリッドからS4-W5グリッドにかけて、南北軸の石組溝が検出された。その規模や直線的な形状から、屋敷境となる区画施設と考えられる。区画溝の構築に伴い、土地改良が行われ、調査区全体で整地層が見られるようになる。西側の屋敷地では、整地によって平坦面が作られる様になる。やや範囲は狭まるが遺構はⅠ・Ⅱ期に引き続きS1-W9・10グリッド周辺で柱列や土坑、ピッドが検出されている。N1・N2-W7・8グリッドでは柱痕が多数検出されている。S3・4-W7グリッドでは礎石や礎盤板を伴う遺構が検出されている。建物の復元には至らなかったが、南北それぞれに何らかの建物があったと想定される。東側の屋敷地では、西側と比べてあまり遺構は検出されていない。自然地形を見ると東側の屋敷地があるW4・5グリッドは、西から東に向かって低い傾斜になっている。この斜面を緩やかにするためか、この辺りの整地層は厚い。しかし、平坦にはなっていない、傾斜地なのであまり利用されなかったと推定される。

Ⅰ～Ⅲ期にかけては明瞭な建物跡は見つかっていない。遺構の分布傾向を見ると偏りが見られ、西側の屋敷地の中で主体的に利用されていた場所はS1-W9・10グリッドである。調査区外になってしまうが、このグリッドに近い位置に、おそらくN1・2-W9-10グリッド周辺に主となる建物があったと推定される。

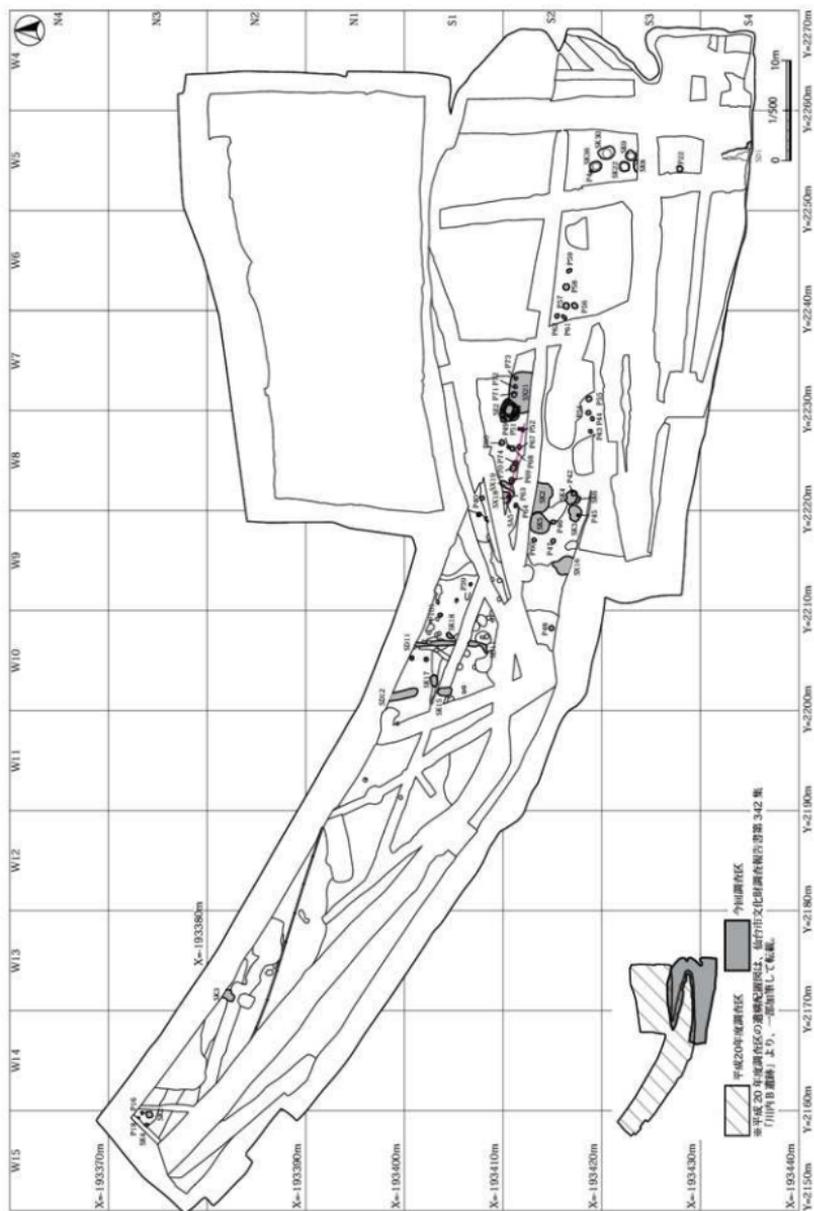
Ⅲ期(第113図)は18世紀中葉～19世紀中葉で、川内B遺跡の画期となる最も多くの遺構が検出された。Ⅲ期に引き続きⅣ期も調査区全体に整地が見られる。Ⅲ期の屋敷境の区画溝は整地に伴い一旦埋め戻され、その直上に新たに区画溝が造り替えられ、屋敷境として使用される。西側の屋敷地では平坦面が東へ拡大し、W7～9グリッド全体で多くの遺構が検出された。特にN1・2-W7-8グリッドでは台所跡と考えられるカマド跡と、1間×3間で並ぶ礎石列が検出された。主となる建物は調査区外の北西に広がる様である。またS1・2-W7～9グリッドでは柱列や土蔵などの建物跡と考えられる石組基礎が見つかっており、何らかの屋敷地内を分ける空間と建物があったと推定される。東側の屋敷地ではN1・2-W4～6グリッドで東西軸の細い石組溝や石列、杭、S1・2-W5グリッドで礎の集中する範囲などが検出された。N1・2-W4～6グリッドの遺構は平成20年度調査で、池ないしは湿地状を呈する遺構と、それに接続する可能性がある溝として報告されている。この辺りは傾斜の途中にあたり、また東側の屋敷地の中では比較的、標高が高い位置に立地している。そのため池ないしは湿地状を呈する遺構の可能性は低く、傾斜地を改善する土留めに伴う杭や石列の可能性も考えられる。

Ⅳ期(第114図)は19世紀前葉～中葉で、遺構数が急激に減少する。Ⅳ期に構築された区画溝は継続して、屋敷境として使用される。整地層は引き続き調査区全体で見られる。西側の屋敷地では平坦面がさらに東へ拡大し、それまで窪地であったS1-W6・7グリッドが埋めらる。Ⅳ期で見られたN1・2-W7-8グリッドの建物跡は見られなくなる。S3-W8・9グリッドでは東西軸の石組溝が築かれる。この石組溝はⅣ期の柱列と軸方向が似ており、Ⅳ期にS1・2-W7～9グリッドで見られた屋敷地内を分ける空間が、一部継続している様である。S1・2-W11・12グリッドではⅠ～Ⅳ期に検出された柱列跡と主軸方向を違えて、礎石を有する柱列跡が検出された。西側の屋敷地を俯瞰すると、建物の位置や主軸などから土地利用が変化した可能性が窺える。東側の屋敷地では遺構がほとんどなく、活発な土地利用は見られない。

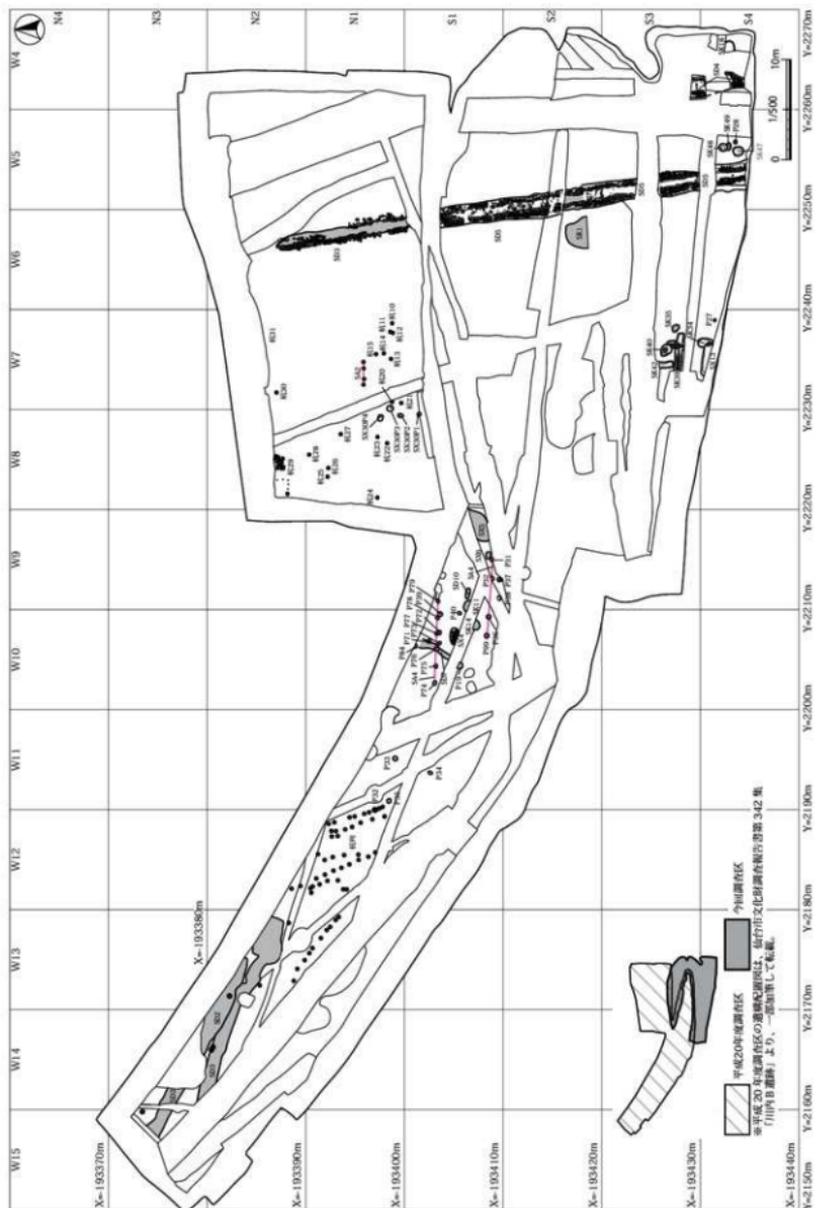
Ⅴ期(第115図)は近代で、土地利用に明瞭な変化が生じる。屋敷地を分割していた南北軸の区画溝が埋められて、東西の大きな区画は失われ、二つの屋敷地が統合される。また区画溝を斜めに横断する様に、新たに近代の石組溝が構築され、主軸の変化から土地利用が変化した様子が窺える。しかし、S3-W6～8グリッドでは近世の溝を造り替えて使用されているので、土地利用の全てが変わったわけではなく一部は継続していた様である。またS1～3-W5・6グリッドでは、多量の近世の遺物が一括廃棄された遺構が検出された。川内B遺跡周辺が武家屋敷地から陸軍用地となる過程で、廃棄されたものと推定される。

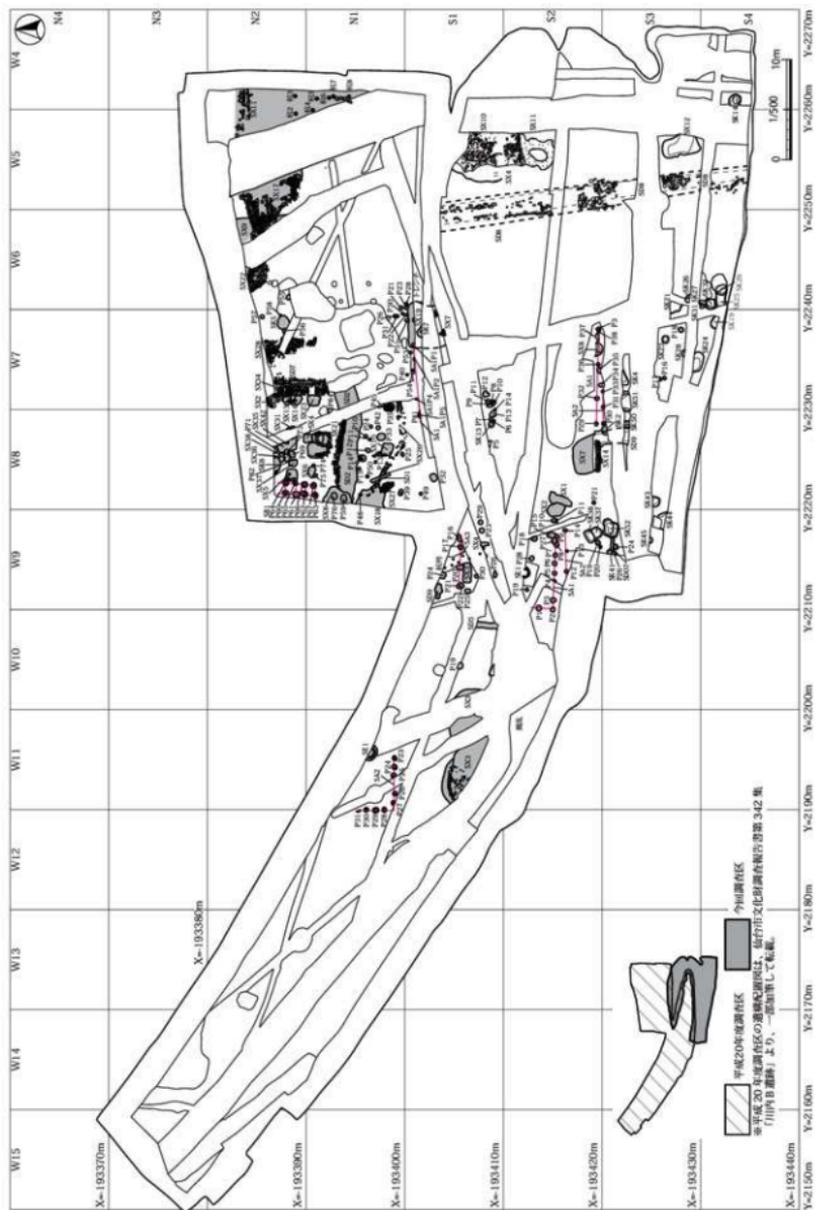
また、調査区の南側S4-W4～8グリッドでは、平成17・18年度に試掘調査が行われている。試掘坑(試掘坑№3-2、№4-1、№5、№7)から近世もしくは近代に属すると考えられる東西軸の石組溝が検出されている。石組溝は道路側溝跡の可能性が示されており、この石組溝は形状・規模・出土遺物から平成20年度の路線部Ⅰ区北西側に位置する近代に属する石組溝(SD1)に続くものと考えられる。試掘結果では石組溝の構築時期は出土遺物から19世紀中頃以降と考えられている。この石組溝の北側ないしは南側に近世期から続く道路が走っていたと推測される。なおS3・4-W5～7グリッドでは近代以降の道路跡の可能性が考えられる硬くしまった小礫範囲が広がっている。

以上のように川内B遺跡における、近世から近代にかけての土地利用の変遷が理解される。近世期には、屋敷境の区画溝が造られ、屋敷地が東西に二つ区画される。西側の屋敷地の建物跡はS1・2-W8～10、N1・2-W8グリッドに集中し、さらに調査区外のN1・2-W9・10、N3-W8～10グリッド周辺にも展開すると推定される。東側の屋敷地は一部がわかっているのみで、全容はつかめていない。近世を通じて遺構が少なく、建物跡と思われる遺構はない。屋敷地内で主として利用されていた空間はW4グリッドより東の、現在の道路下にあると推定される。近代になり武家屋敷地から第二師団用地となると、二つの屋敷地は統合され土地利用のあり方が変化する事がわかった。

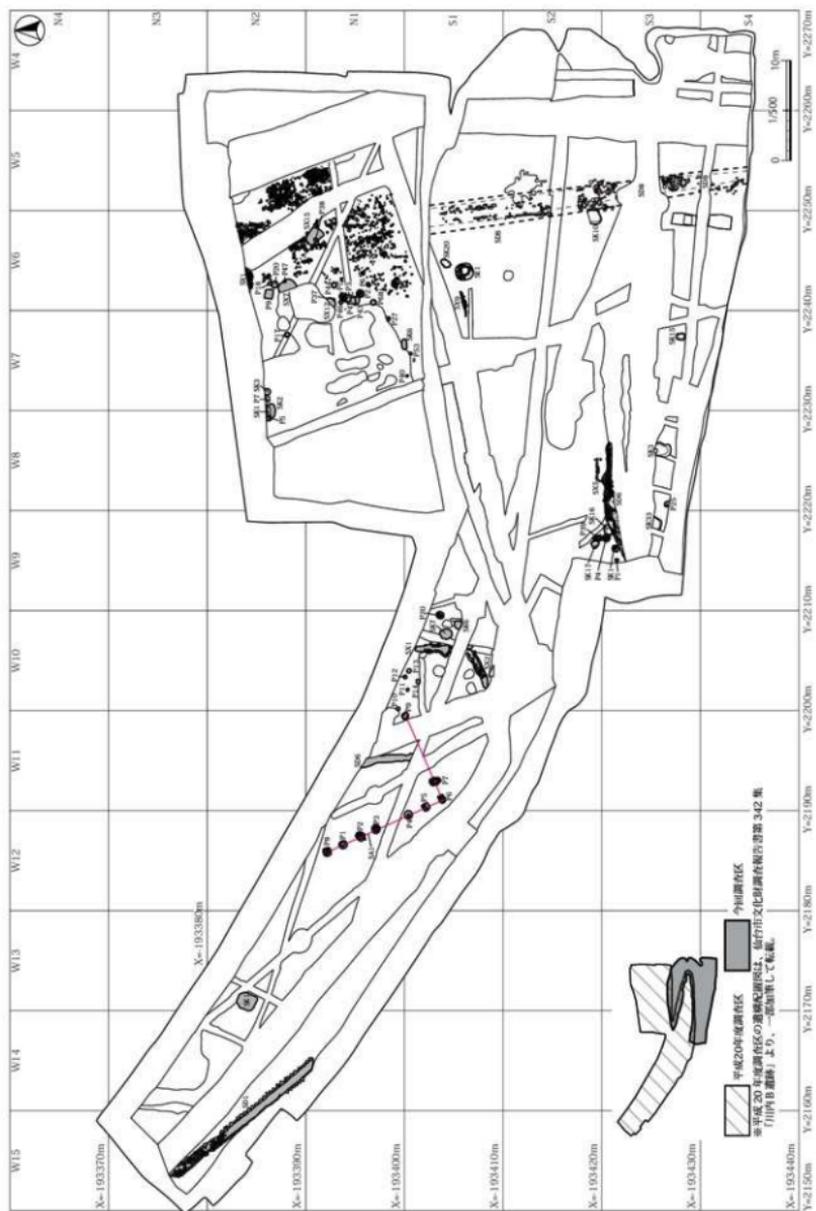


第110図 川内B遺跡全体図（I期）

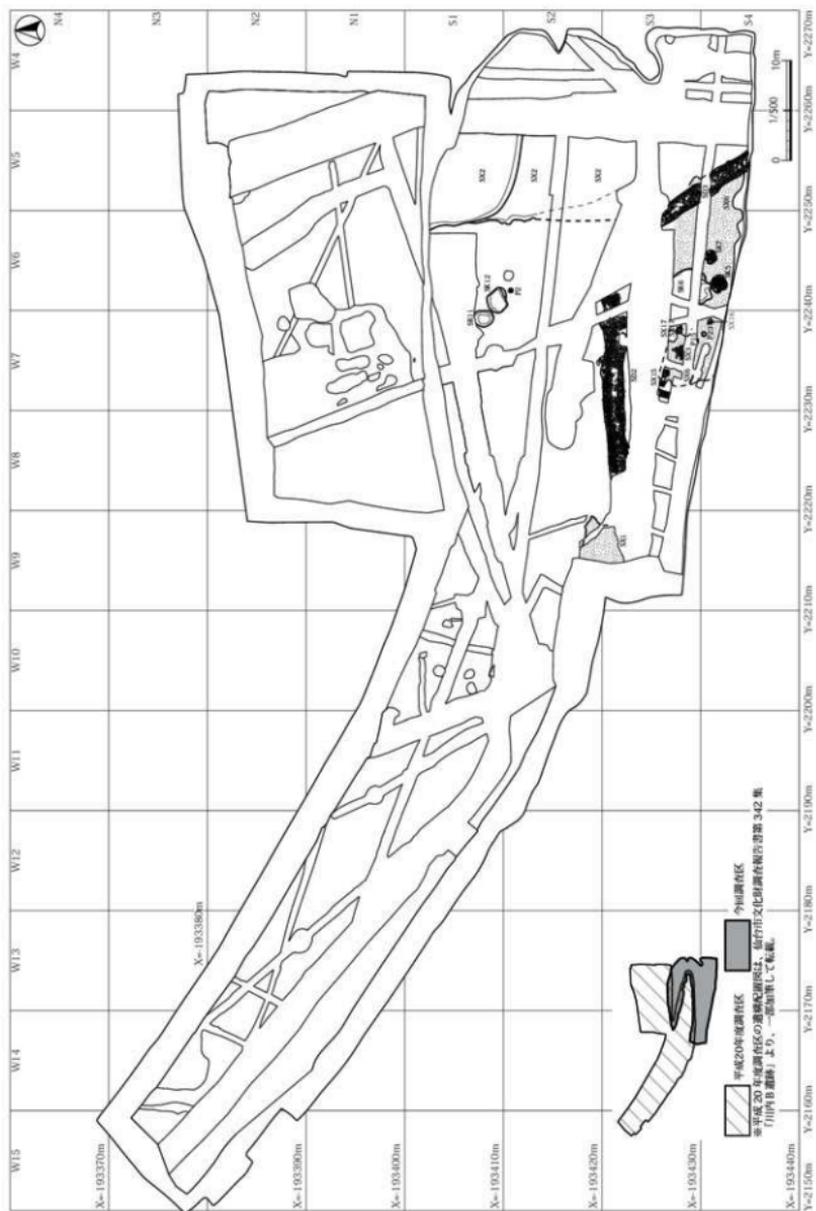




第113図 川内B遺跡全体図(IV期)



第114図 川内B遺跡全体図（V期）



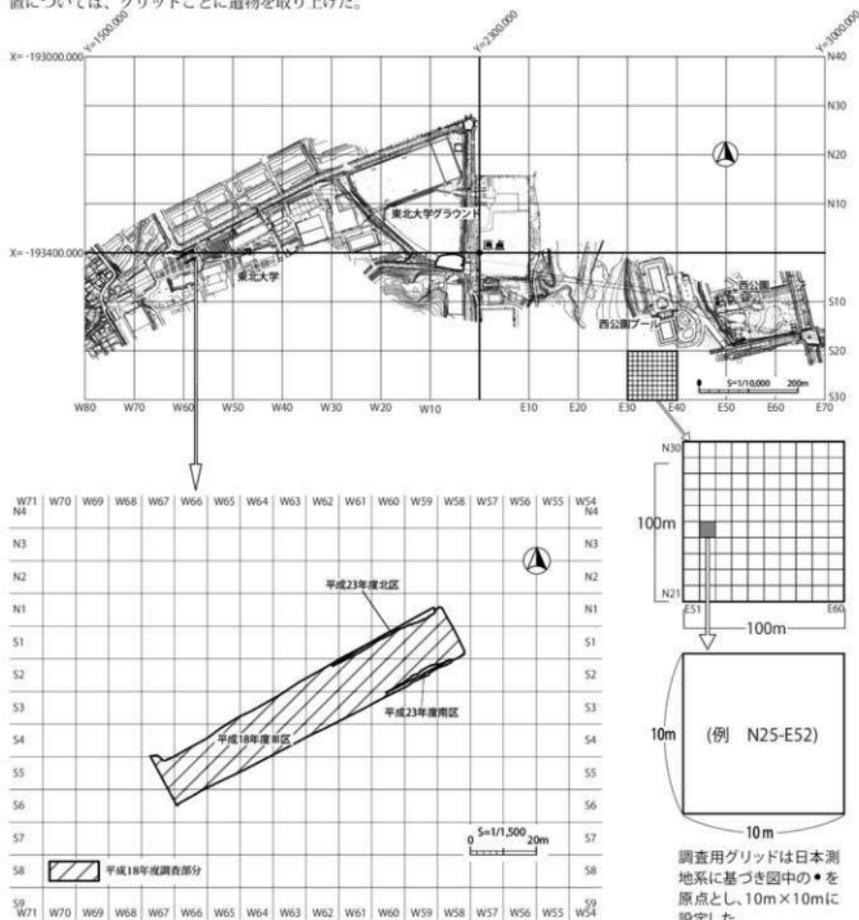
第115図 川内B遺跡全体図 (VI期)

第3章 仙台城跡

第1節 調査区グリッドの設定と基本層序

1 調査区グリッドの設定

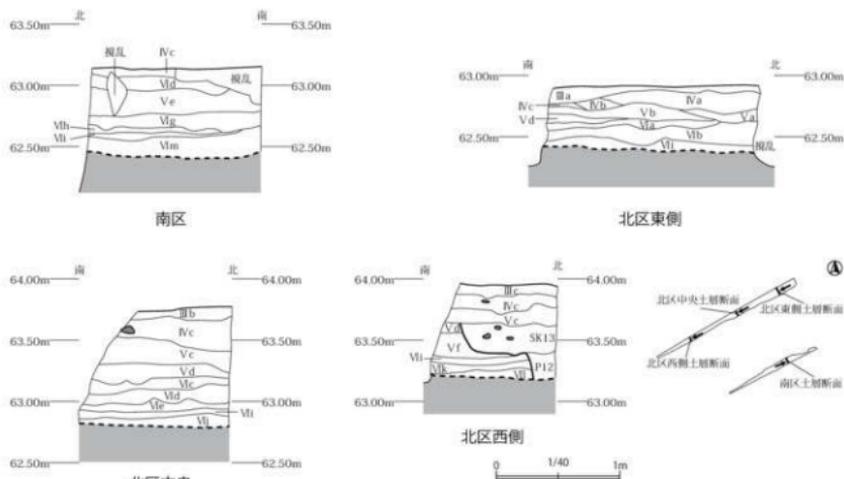
高速鉄道東西線計画路線に関わる青葉山地区、川内地区、西公園地区の全域を網羅するグリッドが既に設定されており、今回の調査でもそのグリッドに準拠して調査を実施した。日本測地系：X=-193400m、Y=23000mの座標点を原点として、10m単位の方眼を設定し、東西南北それぞれの方向へE1・W2・S3・N4というように方位記号と番号を付した。そのうえでS-N方向の番号とE-W方向の番号を組み合わせ、S1-W4といったようなグリッド名とした。遺物の出土位置については、グリッドごとに遺物を取り上げた。



第116図 仙台城跡グリッド設定図

2 基本層序

基本層序は平成18年度調査のⅢ区を踏襲し、6層に大別した。細別層は一部平成18年度調査のⅢ区と対応しない新規の層があるので、新たに層名を付けている。そのため大別層名は対応するが、細別層名は対応していない。Ⅰ・Ⅱ層は近現代の整地層、Ⅲ～Ⅴ層は近世の整地層、Ⅵ層は自然堆積層である。Ⅰ・Ⅱ層は表土として重機で掘削したので、基本土層断面にはない。Ⅲ層は黄灰色の砂質シルト層を主体とし、さらに3層に細別した。Ⅳ層は暗灰色の砂質シルトを主体とし、さらに4層に細別した。Ⅴ層は全体的にやや暗い色調のシルト～砂質シルト層を主体とし、さらに5層に細別した。Ⅵ層は自然堆積層で13層に細別した。Ⅵj層には灰白色火山灰が含まれている。



第117図 調査区壁・ベルト断面図

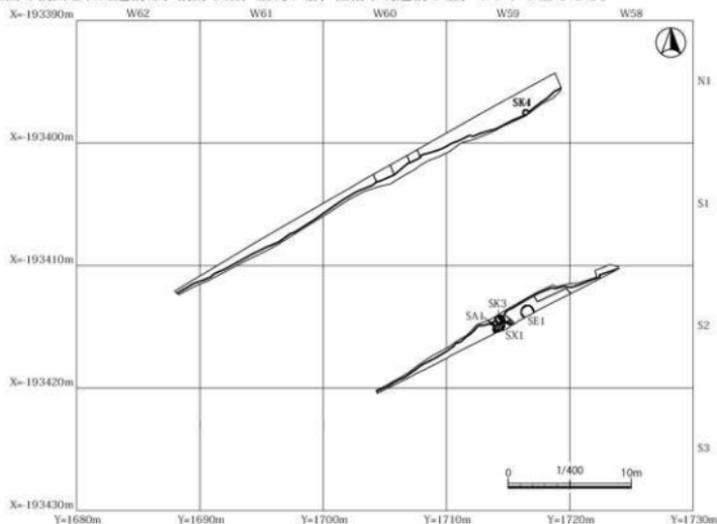
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
Ⅲa	2.5Y4/1	黄灰色 砂質シルト	やや弱	強	白色粘多量、炭化物粒子微量、径0.5cmの礫少量、径1～3cmの礫多量
Ⅲb	10YR4/2	灰黄褐色 砂質シルト	やや弱	強	径0.5～3cmの礫少量、砂少量、明黄褐色粘微量
Ⅲc	2.5Y4/2	暗灰黄色 砂質シルト	やや弱	強	明黄褐色粘微量、白色粘少量、炭化物粒子極微量、径0.3～0.5cmの礫微量
Ⅳa	2.5Y4/2	暗灰黄色 砂質シルト	あり	強	明黄褐色粘微量、白色粘中量、砂微量
Ⅳb	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色 粘土質シルト	やや強	あり	暗灰黄色シルトブロックが混じる
Ⅳc	2.5Y3/2	暗灰黄色 砂質シルト	やや弱	強	明黄褐色粘微量、白色粘少量、炭化物粘微量、径0.2～0.5cmの礫微量、径1～5cmの礫微量
Ⅳd	2.5Y6/3	にぶい褐色 砂質シルト	やや弱	やや強	白色粘微量、径0.5～2cmの礫微量、灰黄色砂少量
Ⅴa	2.5Y4/2	暗灰黄色 粘土質シルト	やや強	あり	白色粘少量、灰黄色粘土微量、径0.5～1cmの礫粘微量
Ⅴb	10YR4/2	灰黄褐色 シルト	あり	やや強	明黄褐色粘微量、白色粘微量、灰黄色砂微量、径1cmの礫微量
Ⅴc	10YR4/3	にぶい黄褐色 シルト	あり	強	白色粘微量、明黄褐色粘微量、径1～3cmの礫微量
Ⅴd	2.5Y3/2	黒褐色 シルト	あり	やや強	明黄褐色粘微量、白色粘微量
Ⅴe	2.5Y3/3	黄褐色 砂質シルト	あり	やや強	白色粘少量、灰黄色粘土微量、径0.5～1cmの礫粘微量
Ⅵa	10YR3/1	黒褐色 粘土質シルト	なし	強	
Ⅵb	10YR4/2	灰黄褐色 砂礫	弱	強	径1～3cmの礫多量
Ⅵc	7.5YR2/1	黒褐色 粘土質シルト	やや強	強	明黄褐色粘微量、白色粘微量
Ⅵd	7.5YR2/1	黒褐色 粘土質シルト	やや強	強	明黄褐色粘微量、白色粘微量、径1～5cmの礫多量
Ⅵe	2.5Y4/2	暗灰黄色 砂礫	なし	やや強	明黄褐色粘微量、径0.1～0.3cmの礫と砂からなる層
Ⅵf	2.5Y3/2	暗灰黄色 砂質シルト	なし	強	白色粘極微量、砂多量、径0.2～0.5cmの礫少量、径1～3cmの礫少量
Ⅵg	2.5Y3/2	暗灰黄色 粘土質シルト	やや強	やや強	明黄褐色粘少量、白色粘少量
Ⅵh	2.5Y3/1	黒褐色 粘土質シルト	やや強	やや強	
Ⅵi	10YR4/1	黒褐色 粘土	強	やや強	砂が多く混じる。灰白色火山灰
Ⅵj	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色 粘土質シルト	やや強	やや強	径0.3～0.8cmの礫少量
Ⅵk	2.5Y3/1	黒褐色 粘土	やや強	やや強	明黄褐色粘極微量
Ⅵl	10YR4/2	灰黄褐色 粘土	やや強	やや強	
Ⅵm	5Y3/2	オリーブ褐色 粘土	やや強	強	

第22表 調査区壁・ベルト土層観察表

第2節 検出遺構と遺物

1 V層上面検出遺構

V層上面で検出された遺構は、溝跡3条、土坑7基、性格不明遺構1基、ピット6基である。

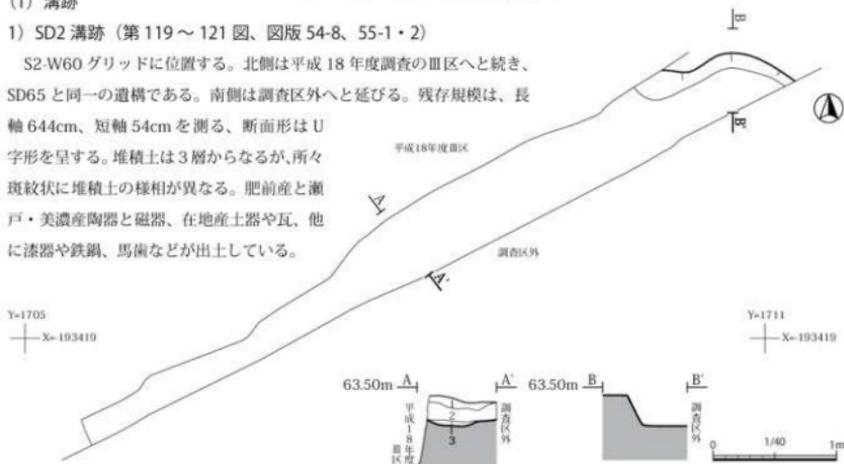


第118図 V層上面検出遺構配置図

(1) 溝跡

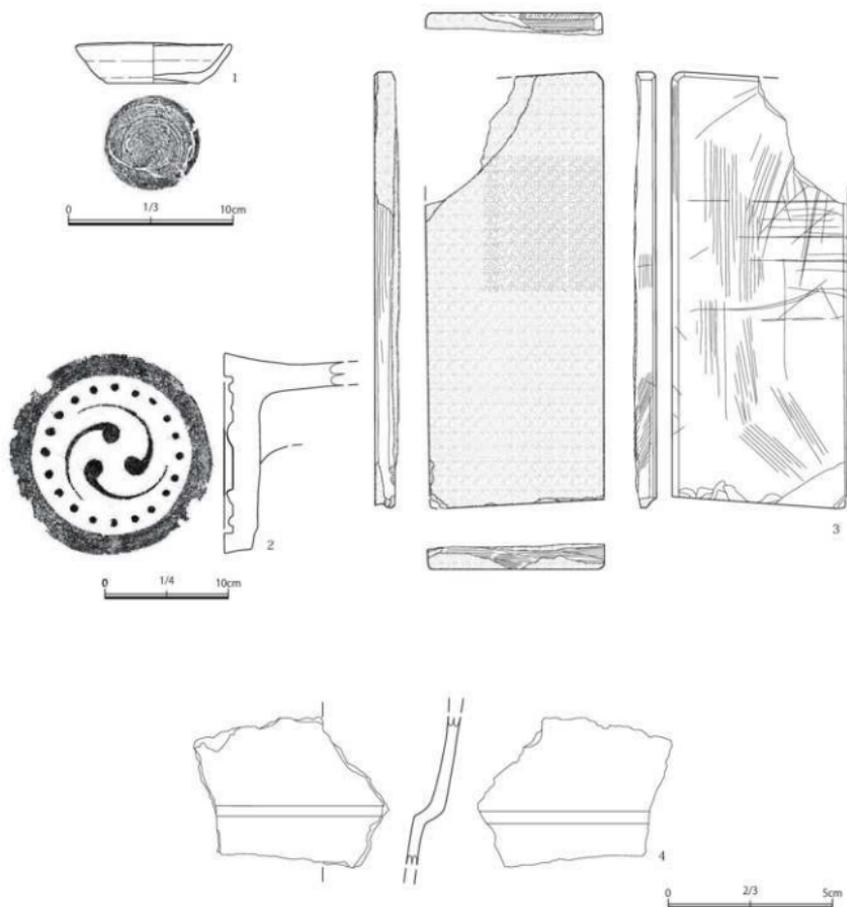
1) SD2溝跡 (第119～121図、図版54-8、55-1・2)

S2-W60グリッドに位置する。北側は平成18年度調査のⅢ区へと続き、SD65と同一の遺構である。南側は調査区外へと延びる。残存規模は、長軸644cm、短軸54cmを測る、断面形はU字形を呈する。堆積土は3層からなるが、所々斑紋状に堆積土の様相が異なる。肥前産と瀬戸・美濃産陶器と磁器、在地産土器や瓦、他に漆器や鉄鍋、馬歯などが出土している。



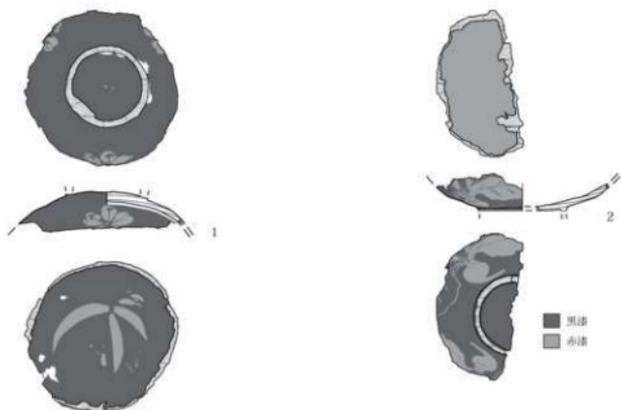
第119図 SD2溝跡平面図・断面図

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y3/3 暗灰黄色	シルト	やや弱	やや強	明黄褐色粒少量、白色粒中量、赤褐色土少量、炭化物粒子極微量
2	2.5Y5/1 黄灰色	砂質シルト	弱	やや強	明黄褐色粒少量、白色粒少量
3	5Y3/1 オリーブ褐色	粘土	強	あり	白色粘粒微量



図録 番号	写真図版 番号	グリッド	遺構	種類	細類	部位	粘土	法量 (cm)			産地	時期	備考	図録 番号	
								口径	底径	器高					
1	64-1	S2-W60	SD2	土器	小皿	口縁~底面	青	9.20	5.60	2.50	在埋	古墳期	土師質 輪軸 左側転削切底	在埋	I-2
図録 番号	写真図版 番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm)			備考	図録 番号						
					長さ	幅	厚さ								
2	64-2	S2-W60	SD2	軒丸瓦	9.60	—	2.40 (瓦当厚)	瓦当のみ残存	文様区径 12.80cm	瓦当径 16.30cm	透珠石二巴	透珠 20	在埋	F-1	
図録 番号	写真図版 番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)				石材	備考	図録 番号				
					長さ	幅	厚さ	重量							
3	64-3	S2-W60	SD2	礎石	113.20	5.35	0.80	86.0	粘板岩	長方形			K-1		
図録 番号	写真図版 番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)				備考	図録 番号					
					長さ	幅	厚さ	重量							
4	64-4	S2-W60	SD2	溝	20.80	—	—	33.05	手掘溝	口縁の一部 敷製			N-4		

第120図 SD2溝跡出土遺物(1)



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	部位	法量 (cm)			木取り	樹種	備考	登録番号
						口径	底径	器高				
1	64-5	S2-W60	SD2	漆器	体部	—	14.90	12.00	桐木地	ブナ属	輪面 内外面黒色漆 外: 花文(赤色漆) 内: 三葉文(赤色漆)	L-1
2	64-6	S2-W60	SD2	漆器	体部	—	15.20	11.60	桐木地	ブナ属	輪面 外面黒色漆 内面赤色漆 外: 輪文(赤色漆)	L-2

第121図 SD2 溝跡出土遺物(2)

2) SD3 溝跡 (第122図、図版55-3・4)

S1-W60グリッドに位置する。東側の上端は攪乱により壊され、北側は調査区外へ延び、南側は平成18年度調査のⅢ区へ続いているが、検出はされていない。残存規模は、長軸118cm、短軸80cm、深さ24cmを測る。断面形はU字形を呈する。堆積土は灰黄褐色粘土質シルトを主体とする4層からなる。遺物は出土していない。

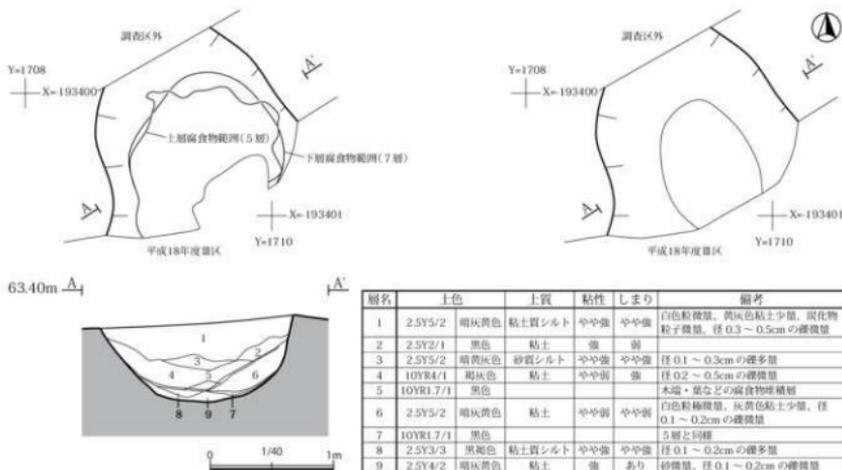
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
1	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	やや強	やや強	白色粘粒質、灰褐色土少量
2	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘質シルト	やや強	やや強	明黄褐色粘粒質、白色粘粒質、灰色粘土少量、暗褐色土中量、炭化物粒子微量
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	やや強	明黄褐色粘少量、灰色粘土少量、暗褐色土多量、炭化物粒子微量、径0.5～3cmの硬骨質、2層に比べ体系的に炭化物が多い
4	2.5YR4/1	灰色	シルト	あり	やや強	

第122図 SD3 溝跡平面図・断面図



3) SD4 溝跡 (第123図、図版55-5～8)

N1-W59・S1-W59・60グリッドに位置する。北側は調査区外へ続き、南側は平成18年度調査のⅢ区へ続き、SD54と同一の遺構である。残存規模は、長軸180cm、短軸140cm、深さ67cmを測る。SD54と合わせると長軸12.65mを測る。主軸方向はN-20°-Wを指す。断面形はU字形を呈する。堆積土は暗灰黄色粘土質シルトと暗灰黄色粘土を主体とする9層からなる。5・7層は多量の有機物からなる層で、溝が機能していた時の底面堆積物と考えられる。遺物は出土していない。



第123図 SD4 溝跡平面図・断面図

(2) 土坑

1) SK7 土坑 (第124図、図版56-1・2)

S1-W61 グリッドに位置する。北側は調査区外へ続き、南側は平成18年度調査のⅢ区へ続いているが、検出はされていない。残存規模は、長軸136cm、短軸102cm、深さ36cmを測る。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は灰黄褐色シルトを主体とする4層からなる。遺物は18世紀中葉の肥前産青磁の中鉢と、19世紀代の肥前産磁器の小皿が出土している。

2) SK8 土坑 (第124図、図版56-3)

S1-W60 グリッドに位置する。規模は、長軸76cm、短軸58cm、深さ10cmを測る。平面形は不整圓丸方形で、断面形は皿形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。

3) SK9 土坑 (第124図、図版56-4・5)

S1-W60 グリッドに位置する。規模は、長軸80cm、短軸34cm、深さ13cmを測る。平面形は不整形で、断面形はU字形を呈する。堆積土は灰色粘土質シルトと砂質シルトの2層からなる。遺物は出土していない。

4) SK10 (第124図、図版56-6・7)

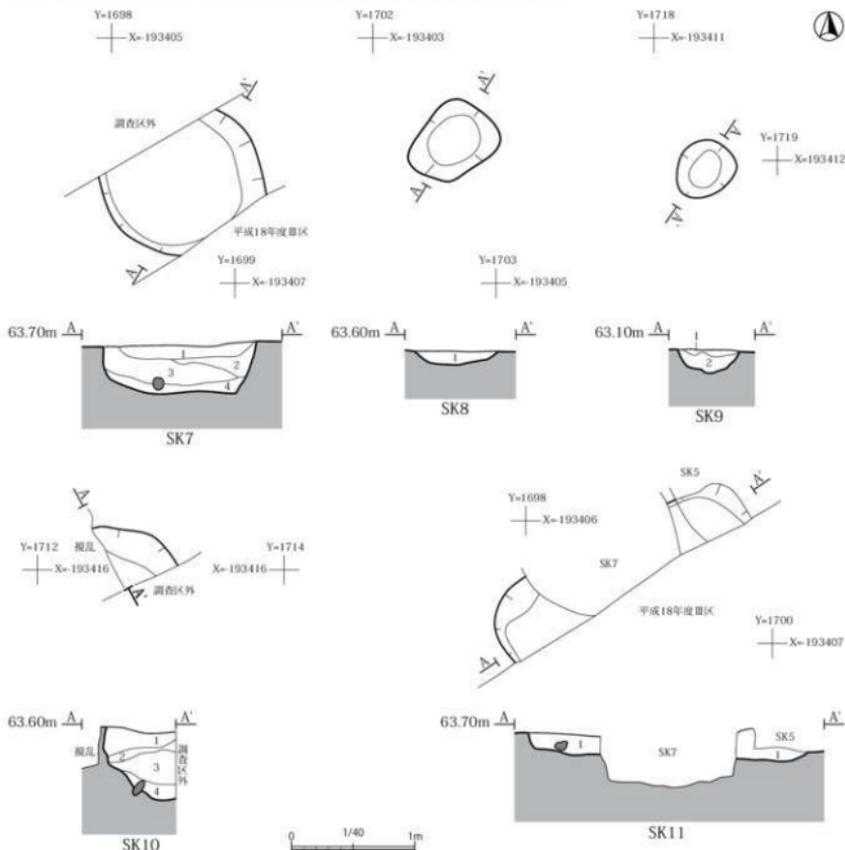
S2-W59 グリッドに位置する。西側は攪乱に壊され、南側は調査区外へ続いている。規模は、長軸53cm、短軸47cm、深さ59cmを測る。残存状態が不良なため平面形は不明で、断面形はU字形を呈する。堆積土は4層からなり、下層では黄灰色シルトが斑文状に混ざる。遺物は肥前産磁器の小皿、京・信楽産陶器の中碗、在地産土器や瓦等が出土している。

5) SK11 (第124図、図版56-8、57-1)

S1-W61 グリッドに位置する。中央をSK7に壊され、南側は平成18年度調査のⅢ区へ続いているが、検出はされて

第2節 検出遺構と遺物

いない。現存規模は、長軸225cm、短軸56cm、深さ21cmを測る。平面形は隅丸形で、断面形はU字形を呈する。堆積土には薄い黄褐色シルトを主体とする2層からなる。遺物は出土していない。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SK7	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	やや弱	僅	明黄褐色粒微層、白色粒多量、暗褐色土多量、炭化物粒子少量、径0.3~3cmの礫微層
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	やや弱	僅	明黄褐色粒微層、白色粒少量、黒褐色土微層、VIa・VI1層土がブロック状に入る
	3	2.5Y4/2 暗灰褐色	粘土質シルト	やや弱	僅	白色粒少量、灰白色土粒少量、明黄褐色土微層
	4	2.5Y4/1 灰色	砂質シルト	やや弱	やや強	明黄褐色粒微層、白色粒微層、灰白色土粒少量、炭化物粒子微層、黒褐色土少量、暗褐色土少量
SK8	1	10YR4/3 に薄い暗褐色	シルト	やや弱	あり	暗褐色土少量、暗褐色土多量、明黄褐色土微層、灰白色土少量
	2	5Y4/1 灰色	粘土質シルト	やや強	やや弱	径0.2~0.3cmの礫微層
SK10	1	2.5Y4/1 灰色	砂質シルト	あり	あり	炭化物粒子微層、径0.3~0.5cmの礫微層
	2	2.5Y4/2 暗灰褐色	シルト	弱	僅	明黄褐色粒微層、白色粒多量、赤褐色土少量、灰黄色シルト少量、炭化物粒子微層
	3	2.5Y3/2 黄褐色	シルト	弱	やや強	白色粒多量、赤褐色土微層、炭化物粒子極微層
	4	2.5Y4/1 黄褐色	シルト	弱	僅	灰黄色・オリーブ黒・黄灰色シルトが隙文状に混ざる、炭化物微層
SK11	1	2.5Y4/1 黄褐色	シルト	あり	あり	オリーブ黒・黄灰色シルトが隙文状に混ざる、赤褐色土微層
	2	10YR4/3 に薄い黄褐色	シルト	やや弱	僅	明黄褐色粒微層、白色粒少量、黒褐色土少量、暗褐色土少量、径0.5~2cmの礫微層

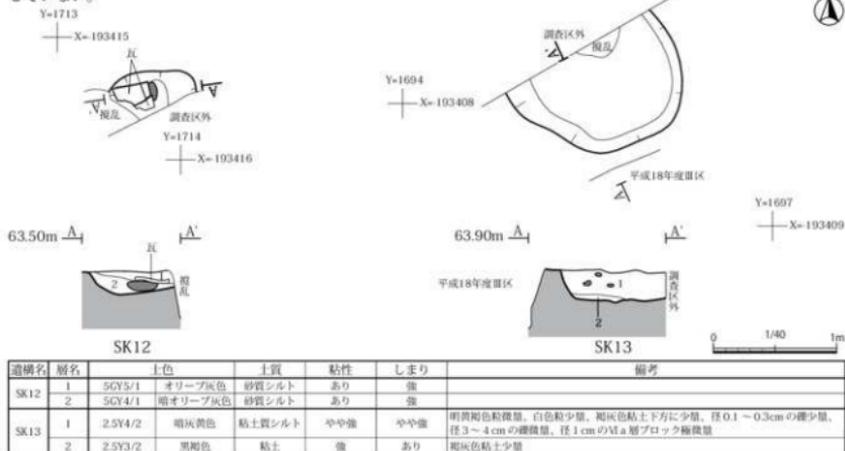
第124図 SK7・8・9・10・11土坑平面図・断面図

6) SK12 (第125図、図版57-2・3)

S2-W59 グリッドに位置する。東側は擾乱に壊され、南側は調査区外へ続いている。残存規模は、長軸71cm、短軸40cm、深さ17cmを測る。平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗オリーブ灰色砂質シルトを主体とする2層である。遺物は瀬戸・美濃産陶器や在地産瓦等が出土している。

7) SK13 (第125図、図版57-4)

S1-W61 グリッドに位置する。北側は調査区外へ続き、P12を壊す。規模は、長軸71cm、短軸49cm、深さ63cmを測る。平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗灰黄色粘土質シルトを主体とする2層からなる。遺物は出土していない。

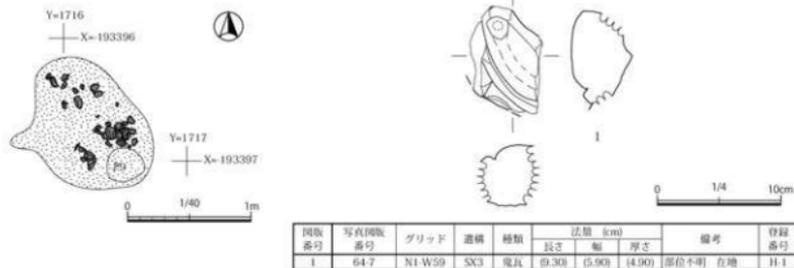


第125図 SK12・13 土坑平面図・断面図

(3) 性格不明遺構

1) SX3 (第126図、図版57-5、64-7)

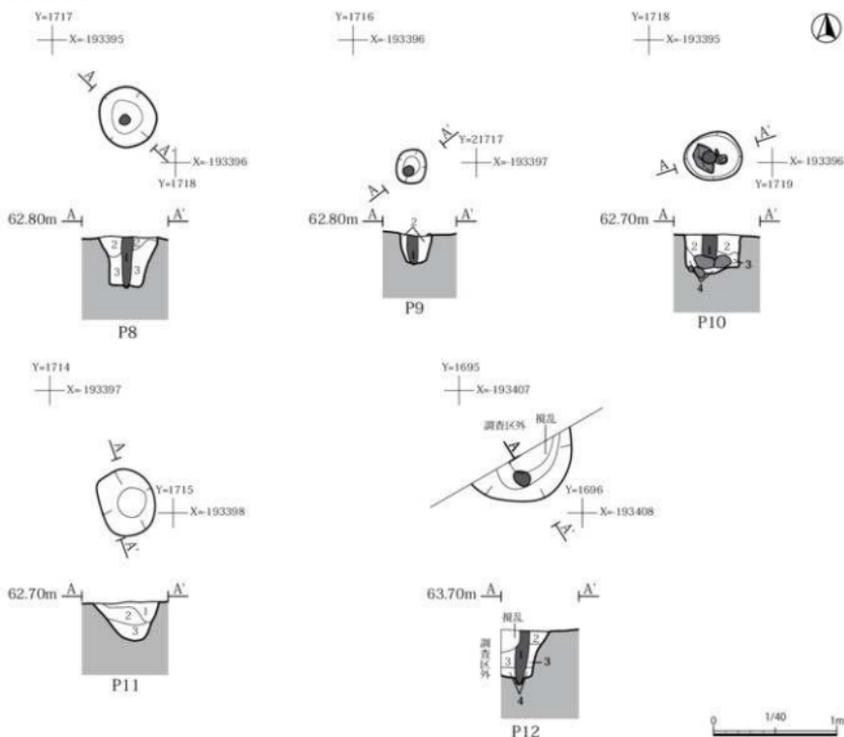
N1-W59 グリッドに位置する。規模は、長軸123cm、短軸96cmを測る。径5～10cm程の礫が密集しているが、明瞭な掘り込みはない。遺物は鬼瓦と思われる瓦の破片が出土している。



第126図 SX3 性格不明遺構平面図・出土遺物

第2節 検出遺構と遺物

(4) ビット



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P8	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	やや強	弱	白色粘粉微量, 柱状
	2	5Y2/1 黒色	シルト	やや弱	やや強	VI A層ブロックに暗灰黄色粘土質シルトブロックが混ざる
	3	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	やや弱	あり	明黄褐色粘微量, 炭化物粘粉微量
P9	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	強	弱	柱状
	2	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト	やや弱	やや強	明黄褐色粘微量, 白色粘粉量, 径0.2~0.3cmの礫微量 径0.3cmの礫微量, 柱状
P10	1	2.5Y4/2 黄灰色	粘土	強	弱	
	2	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	あり	やや強	炭化物粘粉微量, 径0.2~0.5cmの礫多量, 径1~2cmの礫粉微量
	3	2.5Y4/3 暗灰黄色	粘土質シルト	やや強	やや強	炭化物粘粉微量, 径0.2~0.5cmの礫多量, 下方に10cmの礫少量
P11	1	2.5Y4/2 オリーブ褐色	砂質シルト	あり	あり	白色粘粉少量, 炭化物粘粉微量
	2	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	やや強	やや強	白色粘粉微量, 砂多量
	3	2.5Y4/2 暗灰黄色	シルト	あり	やや強	砂少量, 柱状
P12	1	7.5GY5/1 緑灰色	砂質シルト	やや強	やや弱	鉄分中量
	2	7.5GY6/1 緑灰色	砂質シルト	あり	やや強	白色粘粉微量, 鉄分中量
	3	5BG5/1 青灰色	砂質シルト	やや強	あり	白色粘粉微量, 鉄分中量
	4	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土質シルト	強	強	

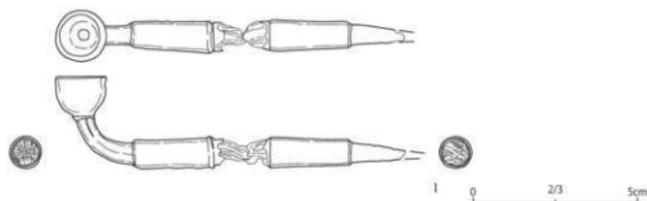
第127図 P8・9・10・11・12・14平面図・断面図

番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重埋関係	備考
P8	N1-W59	50	46	37	円形	U字形		
P9	N1-W59	31	28	25	円形	U字形		
P10	N1-W59	46	29	25	楕円形	方形		
P11	N1-W59	55	44	30	楕円形	U字形		
P12	S1-W61	91	330	51	円形	U字形	視孔	

第23表 P8・9・10・11・12・14平面図・断面図

(5) V層出土遺物 (第128図、図版58-7、64-8)

V層からは肥前産磁器や、在産土器・瓦、煙管等が出土している。

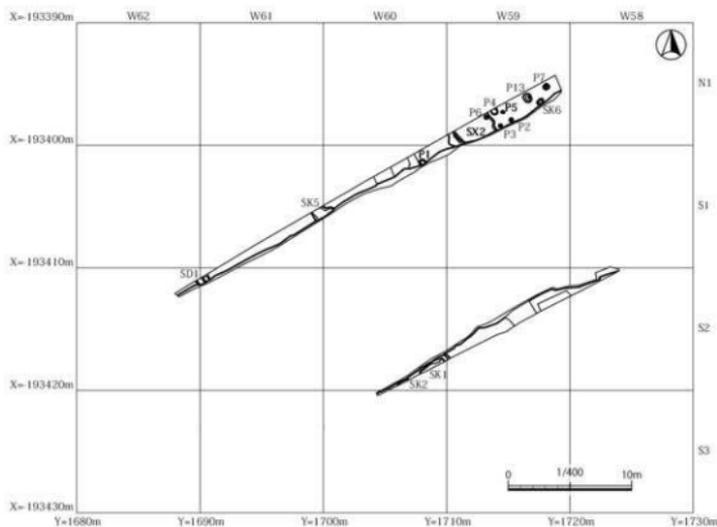


図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)			備考	収録番号
					長さ	幅	重量		
1	648	N1.W39	V層	煙管	—	—	13.10	長さ5.90cm・幅1.490cm・火筒径1.55cm・接合部径0.95cm 磁器 瀬戸	N.3

第128図 V層出土遺物

2 IV層上面検出遺構

IV層上面で検出されたは、溝跡1条、土坑4基、性格不明遺構1基、ピット8基である。



第129図 IV層上面検出遺構配置図

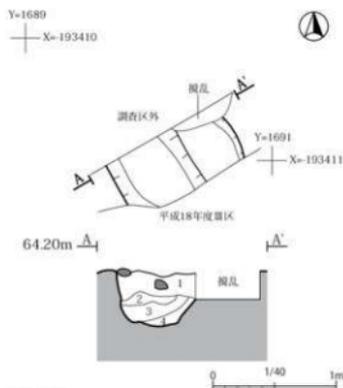
第2節 検出遺構と遺物

(1) 溝跡

1) SD1 溝跡 (第130図、図版59-2・3)

S2-W61・62グリッドに位置する。北側は調査区外へ続き、南側は平成18年度調査のⅢ区へ続いているが、検出はされていない。残存規模は、長軸102cm、短軸54cm、深さ40cmを測る。断面形はU字形を呈し、東側に段を有する。堆積土は4層からなり、上層にはぶい黄褐色シルトが主体で、下層は黄灰色粘土質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/3	ぶい黄褐色シルト	やや弱	やや強	白色粒少量、赤褐色土少量
2	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	やや強	白色粒微量、赤褐色土少量
3	2.5Y5/1	黄灰色	粘土	強	赤褐色土少量、径3cmの礫微量
4	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	やや強	赤褐色土少量



第130図 SD1 溝跡平面図・断面図

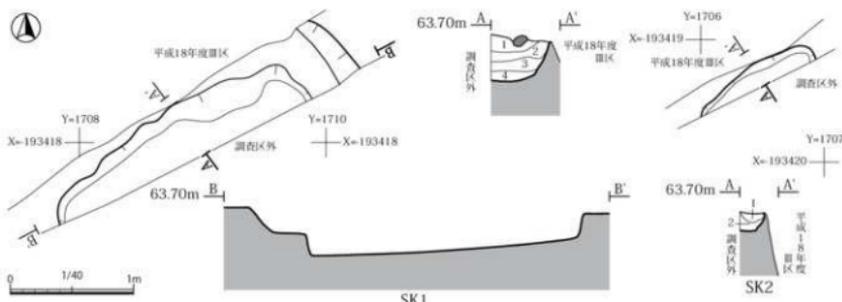
(2) 土坑

1) SK1 土坑 (第131図、図版59-4・5)

S2-W60グリッドに位置する。北側は平成18年度調査のⅢ区へ続き、南側は調査区外へ続き、東側でSK74と一致する。残存規模は、長軸273cm、短軸47cm、深さ16cmを測る。平面形は不整形で、断面形はU字形を呈する。堆積土は4層からなり、底部付近には径5～20cmの礫を多く含む。遺物は出土していない。

2) SK2 土坑 (第131図、図版59-6・7)

S2-W60グリッドに位置する。南側は調査区外へ続いている。残存規模は、長軸104cm、短軸10cm、深さ17cmを測る。平面形は楕円形で、断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とする2層からなる。遺物は岸産の播鉢や、在地産土器・瓦等が出土している。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SK1	1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや弱	あり	暗褐色土少量
	2	10YR4/1	褐色	砂質シルト	あり	やや強	炭化物微量、径1～3cmの少礫少量
	3	5Y3/2	オリブ黒色	砂質シルト	あり	やや強	ぶい赤褐色土少量、径1～3cmの少礫微量
	4	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	やや強	あり	ぶい赤褐色土微量、径0.5cmの少礫微量
SK2	1	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	あり	やや弱	褐色土粒少量、炭化物粒子極少量
	2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	やや強	やや弱	炭化物粒子少量

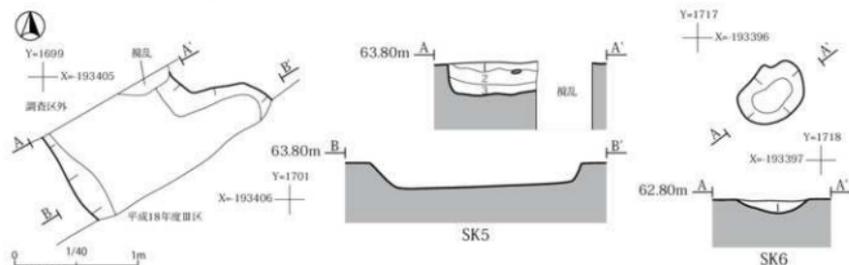
第131図 SK1・2土坑平面図・断面図

3) SK5 土坑 (第132図、図版59-8、60-1)

S1-W61 グリッドに位置する。北側は調査区外へ延び、南側は平成18年度調査のⅢ区へ続いているが、検出はされていない。残存規模は、長軸189cm、短軸88cm、深さ17cmを測る。平面形は不整形形で、断面形は方形を呈する。堆積土は暗灰黄色粘質シルトを主体とする3層からなる。遺物は出土していない。

4) SK6 土坑 (第132図、図版60-2・3)

N1-W59 グリッドに位置する。規模は、長軸59cm、短軸43cm、深さ16cmを測る。平面形は不整形円形で、断面形は皿状を呈する。堆積土は暗灰黄色粘土質シルトを主体とする単層である。遺物は出土していない。



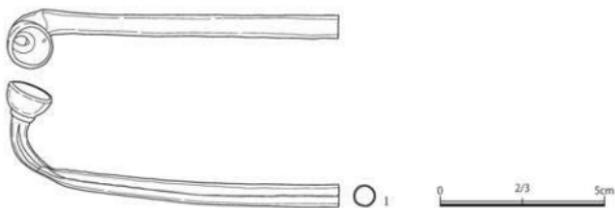
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SK5	1	10YR4/1	暗灰色シルト	やや強	やや強	赤褐色土少量、径0.3～0.5cmの礫少量
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質シルト	やや強	やや強	暗褐色土少量、径0.3～0.5cmの礫微量
	3	10YR4/2	灰黄褐色粘土	あり	やや強	暗白色粘土少量、径0.3～1cmの礫微量
SK6	1	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土質シルト	強	あり	径0.5～1cm礫多量

第132図 SK5・6土坑平面図・断面図

(3) 性格不明遺構

1) SX2 (第133・134図、図版60-4～8、61-1、64-9)

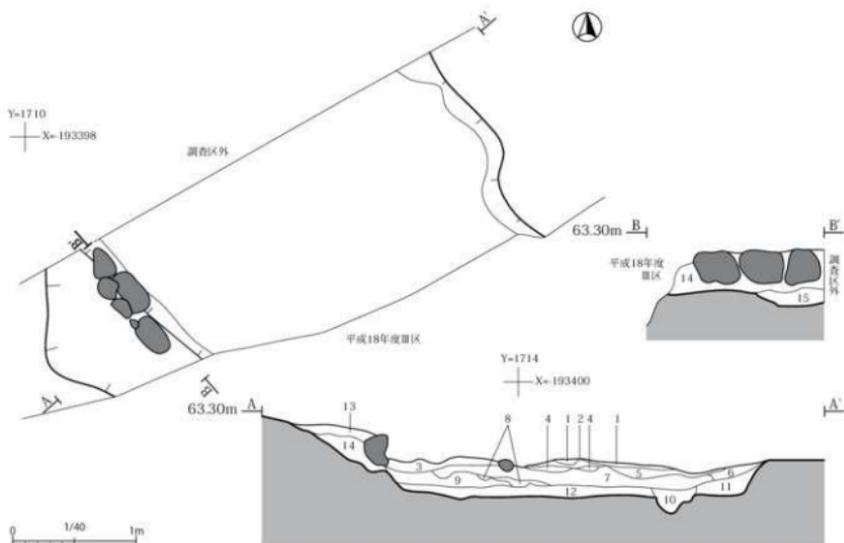
N1-W59 グリッドに位置する。北側は調査区外へ続き、南側は平成18年度調査のⅢ区へ続き、SD23の続きの可能性が考えられる。残存規模は、長軸409cm、短軸162cm、深さ29cmを測る。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈する。1・2層は整地層、3・4層は構築土、5～17層は堆積土である。堆積土の上層は砂質シルト→砂、下層は粘土が主体である。西側にのみ石組があり、径30～35cm程の河原石を扁平な面を表にして1段並べている。東側には石組がなく、抜き取った形跡も見られない。遺物は肥前産磁器や、在産陶器・土器・瓦、漆器の碗、金銀金を施した煙管等が出土している。



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種類	法量 (cm・g)			備考	作図番号
					長さ	幅	厚さ		
1	64-0	N1-W59	IV層	煙管	10.05	—	11.15	継ぎ・吸口 金銀金 鍍銀 火皿径1.40cm 接合部径0.70cm	N-2

第133図 SX2性格不明遺構出土遺物

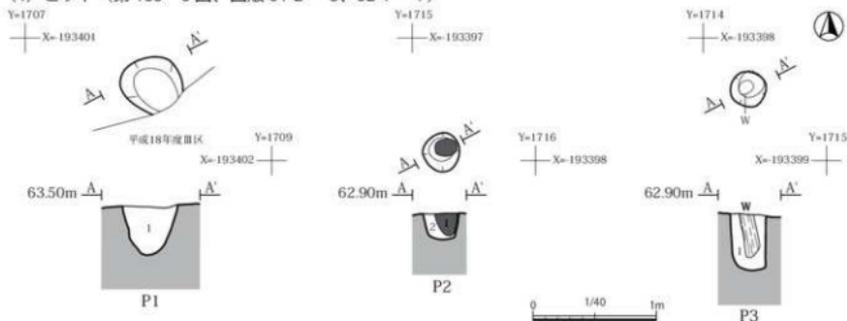
第2節 検出遺構と遺物



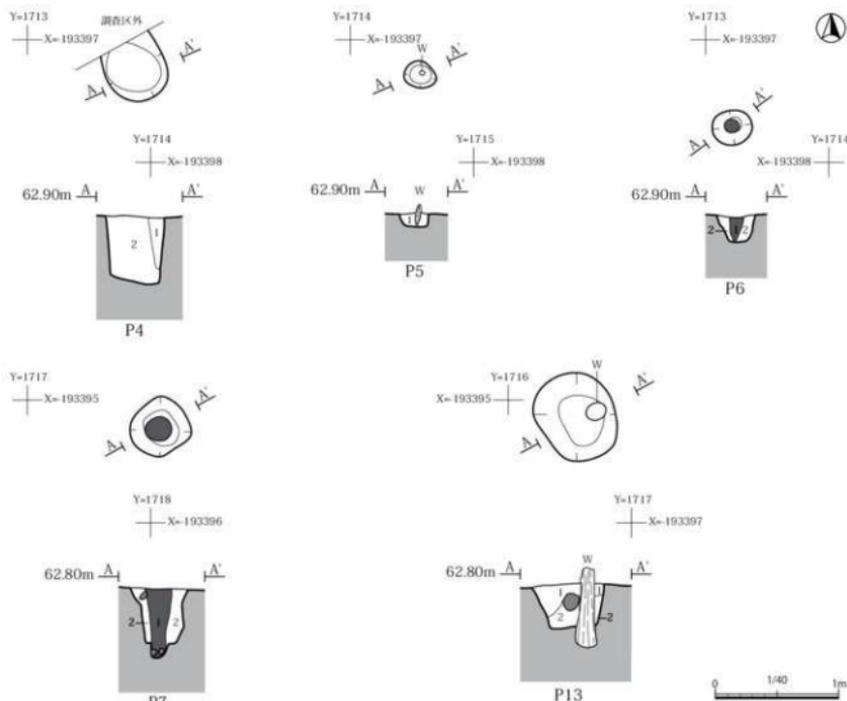
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/1 黒褐色	粘土	やや強	あり	木炭少量
2	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	やや強	あり	白色粘微層、砂微量
3	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂	無し	やや強	灰黄色砂に黄灰色シルトが多量に混じる
4	2.5Y6/2 灰黄色	砂	無し	やや強	5層の砂のみ
5	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	やや強	あり	砂多量
6	10YR4/1 暗灰色	粘土質シルト	やや強	やや強	明黄褐色粘少量、白色粘少量、暗灰黄色粘土少量、径0.2～0.5cmの礫少量
7	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	やや強	やや強	
8	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂	無し	やや強	5層とほぼ同じ
9	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土	やや強	あり	
10	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	あり	やや強	明黄褐色粘微層、白色粘微層、黄灰色砂少量、径0.2～1cmの礫少量
11	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	やや強	やや強	白色粘微層、径0.3～1cmの礫微層、下方に木炭がたまっている
12	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	やや弱	やや強	明黄褐色粘少量、白色粘少量、黄灰色砂多量、径0.1～0.3cmの礫多量、径2～3cmの礫微層
13	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	やや弱	やや強	明黄褐色粘微層、白色粘少量、炭化物粘子微層、径0.5～0.8cmの礫微層、径4cmの礫微層
14	10YR3/1 暗灰色	砂質シルト	やや弱	やや強	明黄褐色粘微層、白色粘微層、下方に暗灰黄色粘土少量、径0.2～0.5cmの礫微層
15	2.5Y3/2 暗灰黄色	粘土	やや強	あり	明黄褐色粘微層、黄灰色砂少量、11層に類似する

第134図 SX2 性格不明遺構平面図・断面図

(4) ピット (第135・6図、図版61-2～8、62-1～7)



第135図 P1・2・3平面図・断面図



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
P1	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	あり	やや強	黄褐色粒少量, 白色粘微量, 暗褐色土少量
	2	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	強	やや弱	下方に径0.3~0.5cmの礫微量, 柱痕
P2	1	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	やや強	やや強	白色粘微量, 径0.5cmの礫微量
	2	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	やや弱	やや強	明黄褐色粘微量, 白色粘微量, 炭化物粒子微量, 柱痕存
P4	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	強	やや強	炭化物粒子微量, 柱痕
	2	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	やや強	やや強	白色粘微量, 径1cmの礫微量
P5	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	やや強	あり	白色粘微量
	2	2.5Y3/2	黄褐色	粘土	強	やや弱	柱痕
P6	1	2.5Y4/1	黄灰色	粘質シルト	やや弱	強	明黄褐色粘微量, 径0.5cmの礫微量
	2	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	やや強	あり	白色粘微量, 炭化物粒子微量, 径0.2~0.3cmの礫微量, 柱痕
P7	1	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	あり	やや強	明黄褐色微量, 白色粘微量, 径5cmの礫少量
	2	5Y4/1	灰色	シルト	やや強	やや強	白色粘微量, 炭化物粒子微量, 柱痕存
P13	1	5Y3/1	灰黄色	粘土質シルト	強	やや強	径0.2~0.3cm礫微量
	2	5Y3/1	オリーブ黒色	粘土質シルト	強	やや強	

第136図 P4・5・6・7・13平面図・断面図

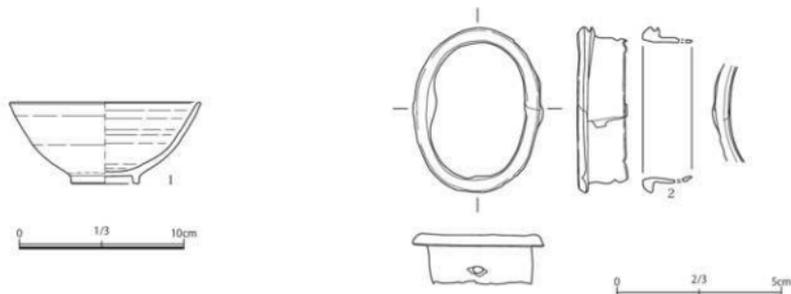
番号	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	重複関係	備考
P1	S4-W60	52	47	22	楕円形	U字形		
P2	N1-W59	32	31	17	円形	U字形		
P3	N1-W59	99	57	8	円形	皿形		粘残存
P4	N1-W59	72	71	22	楕円形	皿形		
P5	N1-W59	27	22	10	円形	U字形		粘残存
P6	N1-W59	33	26	24	楕円形	U字形		
P7	N1-W59	50	49	44	不整形円形	U字形		
P13	N1-W59	74	61	38	不整形円形	逆台形		粘残存

第24表 P1・2・3・4・5・6・7・13観察表

第2節 検出遺構と遺物

(5) IV層出土遺物 (第136図)

IV層からは肥前産や瀬戸・美濃産磁器・陶器、大塚相馬産や小野相馬産陶器、在地産土器・瓦等が出土している。



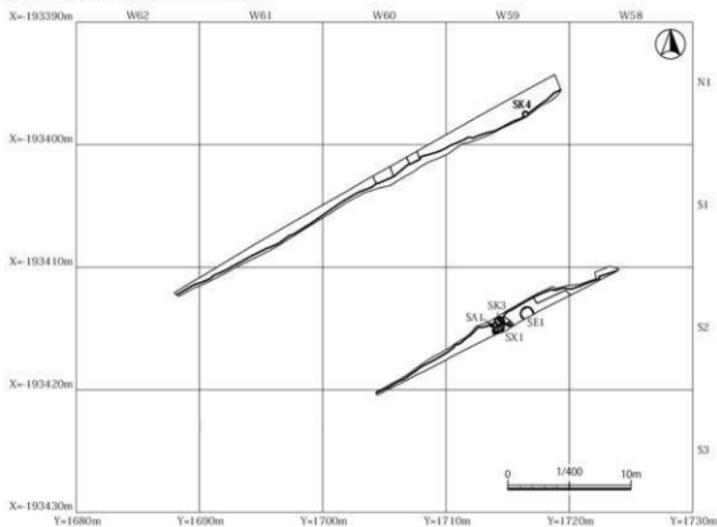
採取番号	写真採取番号	グリッド	遺構	種別	器種	部位	出土	文種	数量		法量 (cm)				産地	時期	備考	付録番号
									総付	口徑	底径	高さ	厚さ	重量				
1	64-10	北区	IV層	陶器	中碗	口縁～高台	やや密		1	11.40	3.40	5.00	大塚相馬	19c		1-1		

採取番号	写真採取番号	グリッド	遺構	種別	法量 (cm・g)				備考	付録番号
					長さ	幅	厚さ	重量		
2	64-11	N1 W59	IV層	兼金具 (引手)	5.05	3.95	0.13～0.50	18.40	外面全鍍金 天地穿孔 (φ 2mm) 割製	N.1

第137図 IV層出土遺物

3 III層上面検出遺構

III層上面で検出された遺構は、杭列1条、井戸1基、土坑2基、性格不明遺構1基である。III層からは肥前産磁器・陶器、波佐見産や京・信楽産陶器等が出土している。



第138図 III層上面検出遺構配置図

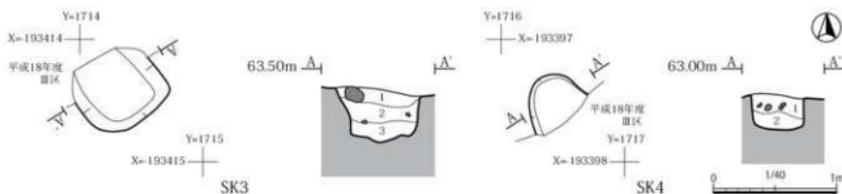
(1) 土坑

1) SK3 土坑 (第139図、図版62-8、63-1)

S2-W59 グリッドに位置する。北側は平成18年度調査のⅢ区へ延びるが、検出はされていない。SA1に壊され、SK1を壊す。残存規模は長軸69cm、短軸68cm、深さ39cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面形はU字形を呈する。堆積土は砂質シルトを主体とする3層からなる。遺物は肥前産磁器・陶器、瀬戸・美濃産や大塚相馬産陶器、在地産瓦等が出土している。

2) SK4 土坑 (第139図、図版63-2・3)

N1-W59 グリッドに位置する。南側は平成18年度調査のⅢ区へ延びるが、検出はされていない。残存規模は長軸52cm、短軸46cm、深さ21cmを測る。平面形は楕円形で、断面形はU字形を呈する。遺物は瓦が出土している。



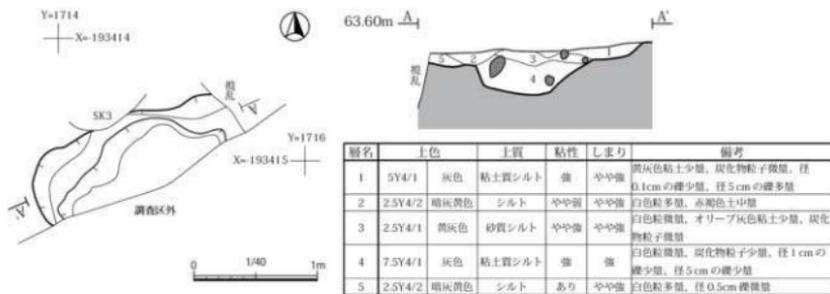
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
SK3	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	砂質シルト	あり	径0.5～1mmの白色粘少量。一部還元され黄灰色に変色
	2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	やや弱	径0.5～1mmの白色粘輪微量。径2～4cmの礫少量
	3	10YR4/0	灰色	砂質シルト	やや強	やや強	
SK4	1	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	白色粘少量
	2	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	白色粘少量。1層よりやや灰色味が強い色調

第139図 SK3・4土坑平面図・断面図

(2) 性格不明遺構

1) SX1 (第140図、図版63-4・5)

S1-W59 グリッドに位置する。北側はSK3、東側は掘乱により壊され、南側は調査区外へ続いている。残存規模は長軸167cm、短軸68cm、深さ31cmを測る。平面形・断面形ともに不整形を呈する。遺物は出土していない。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
1	5Y4/1	灰色	粘土質シルト	強	やや強	黄灰色粘土少量。炭化物粒子微量。径0.1cmの礫少量。径5cmの礫多量
2	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	やや弱	やや強	白色粘多量。赤褐色土中量
3	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	やや強	やや強	白色粘微量。オリブ灰色粘土少量。炭化物粒子微量
4	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	強	強	白色粘微量。炭化物粒子少量。径1cmの礫少量。径5cmの礫少量
5	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	あり	やや強	白色粘多量。径0.5cm礫微量

第140図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

第2節 検出遺構と遺物

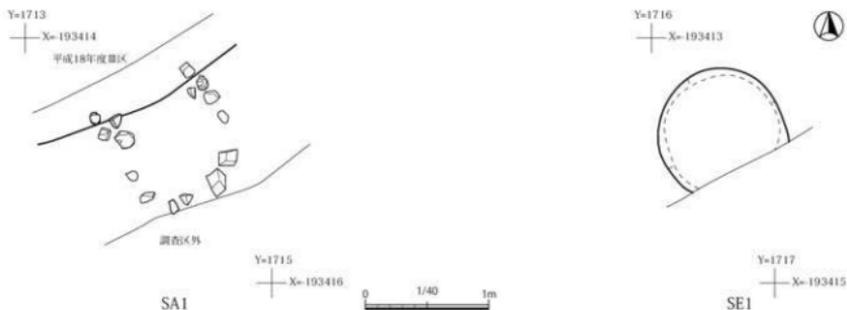
(3) 近代以降の遺構

1) SA1 柱列跡 (第141図、図版63-6)

S2-W59 グリッドに位置する。コの字状に並んでおり、長軸 100cm、短軸 40cm を測る。径 7～8 cm 程の角材が直接打ち込まれている。SK3、SX1 を壊しており、近代以降の可能性が考えられる。

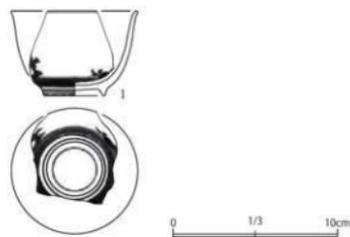
2) SE1 井戸跡 (第141図、図版63-7・8)

S2-W59 グリッドに位置する。南側は調査区外へ延びる。径 100cm の円形の素掘り井戸で、井戸側には木材を用いて、竹製の籠で止めている。近世の整地層を切る土層の中にあり、近代以降の可能性も考えられる。遺物は瀬戸・美濃産磁器、小野相馬産陶器、在地産瓦等が出土している。



第141図 SA1・SE1平面図

(4) 表採出土遺物 (第142図、図版64-12)



図版番号	写真図版番号	グリッド	遺構	種別	器種	部位	胎土	文様	軸径 (cm)			産地	時期	備考	登録番号		
									軸径	口径	底径						
1	64-12	—	表採	磁器	猪口	口縁～高台	密	外：草花文	突付	透明釉	(7.60)	3.20	5.20	肥前	17c 後～18c 中		J.1

第142図 表採出土遺物

第3節 自然科学分析

仙台城跡から出土した漆器の樹種

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、仙台城跡のSD2から出土した漆器椀(蓋)と漆器椀(椀)の2点について、木材利用を明らかにするための樹種同定を実施する。

1 試料

資料は、SD2から出土した漆器椀(蓋)と漆器椀(椀)の2点である。

2 分析方法

資料の木取りを観察した上で、破損部から木片を採取する。剃刀を用いて、木片から木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレバートとする。プレバートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

漆器椀は、2点とも落葉広葉樹のブナ属に同定された(表25)。

剖学的特徴等を記す。

・ブナ属(Fagus) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

4 考察

SD2から出土した漆器椀のうち、L-1は蓋で、内面・外面とも黒地に赤漆の紋様が描かれている。L-2は椀で、内面が赤漆、外面が黒地に蕪が描かれている。これらの木地は、いずれも横木地で、樹種は落葉広葉樹のブナ属である。ブナ属は、比較的硬で強度が高いが、加工は容易である。漆器木地としては、トチノキやケヤキと共に全国的によく利用される樹種の一つである。民俗事例では、トチノキと共に、乾燥が難しく狂いも多いが、大量に入手できるので利用量も多いとされる(橋本,1979)。

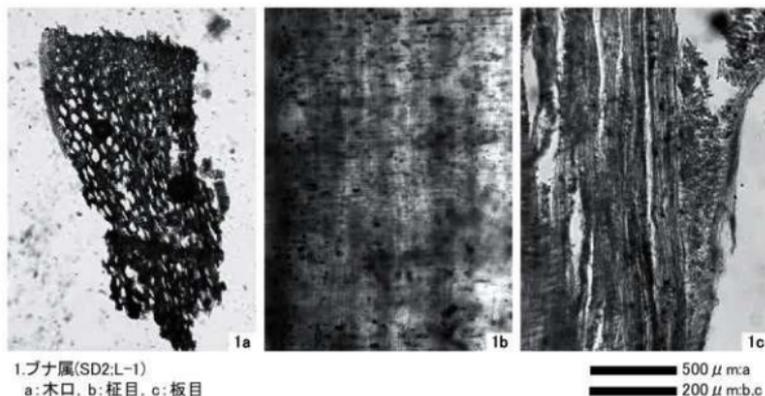
仙台城跡では、三ノ丸跡から出土した17世紀の漆器15点が全てブナ属に同定されている(光谷,1985)。また、北野(2005)の本丸跡、二ノ丸、三ノ丸跡から出土した漆器の調査では、二ノ丸跡や三ノ丸跡の資料に炭下地で赤漆にベンガラを用いる例が多いのに対し、本丸跡ではサビ下地で赤漆に水銀朱を用いる資料が多い。また、紋様の有無を示す加飾率は、三ノ丸跡出土資料で高く、本丸跡や二ノ丸跡出土資料で低い。各地点で漆器の製作技法や加飾率に違いが見られるが、いずれの地点でも木地はブナ属を主体としており、木材利用の違いは見られない。

遺構	登録番号	図版番号	写真図版	器種	木取り	樹種
SD2	L-1	第121図-1	64-5	漆器椀(蓋)	横木地	ブナ属
	L-2	第121図-2	64-6	漆器椀(椀)	横木地	ブナ属

第25表 仙台城跡出土漆器の樹種同定結果

第3節 自然科学分析

仙台市内では、仙台北跡以外の調査事例でも高田B遺跡の江戸時代後半と資料や洞ノ口遺跡の江戸時代とされる資料の多くがブナ属であり(鈴木・能城,2000;パリオ・サーヴェイ株式会社,2005)、漆器木地にはブナ属を中心とした木材利用が見られたことが推定される。これらの結果から、本地域の漆器種類の木地はブナ属を技法等に関わらずブナ属を主体としていたことが推定され、今回の結果も調和的である。



第143図 仙台北跡出土漆器木地の顕微鏡写真

引用文献

- 橋本 鉄男 1979 ろくろ.ものと人間の文化史31 法政大学出版局 444p.
- 林 昭三 1991 日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31 京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東 隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32 京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東 隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33 京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東 隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料34 京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東 隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料35 京都大学木質科学研究所 47-216.
- 北野 信彦 2005 近世出土漆器の研究.吉川弘文館 394p.
- 光谷 拓実 1985 樹種同定結果について.「仙台北三ノ丸跡発掘調査報告書」仙台北文化財調査報告書第76集 仙台市教育委員会 197-199.
- パリオ・サーヴェイ株式会社
2005 洞ノ口遺跡の自然科学分析.「洞ノ口遺跡-第1次・2次・4次・5次・7次・10次発掘調査報告書-第4分冊自然科学分析編」仙台北文化財調査報告書第281集 仙台市教育委員会 81-95.
- 島地 謙・伊東 隆夫
1982 図説木材組織.地球社 176p.
- 鈴木 三男・能城 修一
2000 仙台市高田B遺跡出土木材の樹種と木材利用.「高田B遺跡 第2分冊 分析・考察編」仙台北文化財調査報告書第242集.仙台市教育委員会.1-42.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編)
1998 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修)海青社 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第4節 まとめ

(1) 遺物

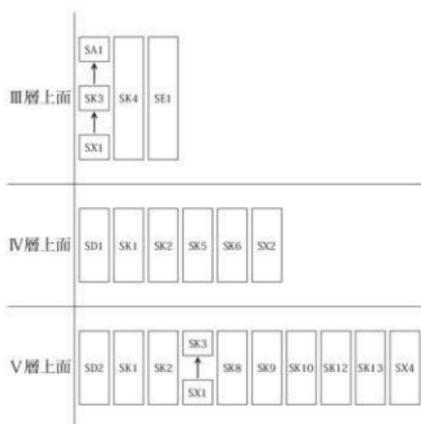
遺物は近世422点、近代以降55点の計477点が出土している。出土した遺物の多くが陶磁器と瓦で、他に土師質土器、金属製品、木製品などが出土している。産地は肥前産が最も多く、次いで瀬戸・美濃産、大塚相馬産が多い。他に岸、京・信楽、堤、小野相馬産も少数出土している。

(2) 遺構

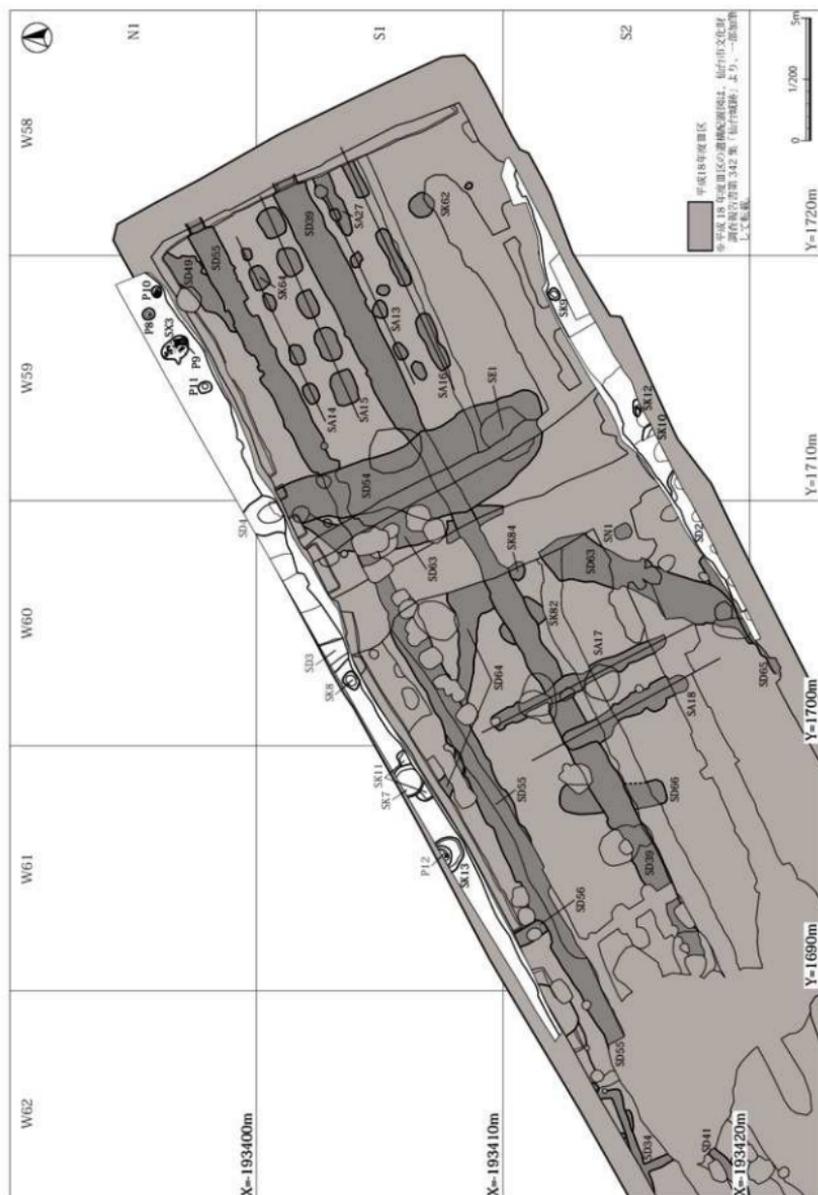
今回の調査ではⅤ層上面遺構17基、Ⅳ層上面遺構14基、Ⅲ層上面遺構5基の計36基の遺構を検出した。検出した遺構は主に、土坑とピットである。調査区が東西に細長く、幅が狭いため、遺構の一部が調査区外や平成18年度調査のⅢ区へと続いているものが多い。遺構の繋がりを確認するため、平成18年度Ⅲ区と合成した全体図を作成した(第145～147図)。平成18年度Ⅲ区では、江戸時代を通じて溝や柱列による区画施設が作られていた。今回調査でもその続きと考えられる遺構が検出されている。

Ⅴ層では平成18年度Ⅲ区で、区割り整備前の段階の遺構とされているSD64の続きであるSD4が検出されている。平成18年度Ⅲ区では区画施設として大溝跡、柱列が検出されているが、これらの遺構の延長もしくは平行する遺構はない。

Ⅳ層では区画溝とされている平成18年度SD23の続きと考えられるSX2が検出されている。また直接は繋がらないが、平成18年度SD31の南北軸の延長上でSD1が検出されている。



第144図 検出遺構時期別変遷模式図



第 145 図 仙台城跡全体図 (V層上面抽出透視)

第4章 総括

川内B遺跡

- 川内B遺跡は広瀬川右岸の河岸段丘上に立地し、調査区は仙台城跡二の丸の北側に位置する。
- 本調査は仙台市高速鉄道地下鉄東西線建設に伴い、平成22年9月14日～平成22年12月28日まで実施した。調査面積は、1,120㎡である。
- 今回調査では近世から近代にかけての遺構が検出された。遺構は柱列跡2条、溝跡9条、井戸跡1基、土坑51基、性格不明遺構17基、ビット40基で、総数120基を数える。
- 検出された遺構の様相は以下の通りである。
 - I期（17世紀後葉以前）：市道部Ⅱ区の東側で、溝状遺構SD1が検出された。
 - II期（17世紀後葉）：V層上面で遺構は検出されなかった。
 - III期（17世紀後葉～18世紀中葉）：市道部Ⅰ・Ⅱ区の東側で南北に伸びる石組の溝跡SD5が検出された。市道部Ⅱ区中央では、構造物跡と考えられるSK39やSK34・SK40が検出された。
 - IV期（18世紀中葉～19世紀前葉）：市道部Ⅱ区西側では柱列跡SA1・SA2や石組を基礎とする構造物跡SX14が検出された。調査区東側ではSD5が埋められた後に構築された溝跡SD8が検出された。市道部東側では、礎が集中するSX10・SX11が検出された。
 - V期（19世紀前半）：市道部Ⅱ区の西側で東西に伸びる石組の溝跡SD6が検出された。東側では溝跡SD8が継続して機能する。市道部Ⅰ区中央では石組の井戸跡SE1が検出された。
 - VI期（近代以降）：市道部Ⅱ区で近代の石組溝であるSD2・SD3が検出された。市道部Ⅰ区東側では多量の遺物が廃棄されたSX2が検出された。
- 出土遺物の総数は8624点である。遺物は縄文土器、石器、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品、金属製品、古銭、土製品、ガラス製品等が見られた。
- 出土した陶磁器は6473点である。産地は磁器では肥前、波佐見、瀬戸・美濃、中国産のものが見られる。陶器では大堀相馬、小野相馬、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、京焼、信楽、志戸呂、堤、常滑、明石・堺、岸窯が見られ、萩焼と思われる陶器も数点確認された。また、在地産とみられる雑鉢も多数確認された。
- 今回調査では、17世紀～19世紀の遺物や遺構が検出された。III期の18世紀前葉以降、近代に至るまで屋敷地を区画する溝跡が継続してその機能を保ち、近代に至って区画施設が埋められて、南北の地割りが失われ、敷地が統合された。また、近代以降の屋敷替えに伴って、多量の遺物が一括廃棄されたSX2は、近世から近代に移り変わり行く時代の土地利用の在り方の一端を示すと考えられる。

仙台城跡

- 仙台城跡は広瀬川右岸の河岸段丘上に立地し、調査区は仙台城跡二の丸の北側に位置する。
- 本調査は仙台市高速鉄道地下鉄東西線建設に伴い、平成22年5月18日から6月18日まで実施した。調査面積は、56㎡である。
- 今回調査では主に近世の遺構が検出された。V層上面で17基、IV層上面で14基、III層上面で5基の計36基の遺構が確認された。遺構は主に土坑とビットで、平成18年度調査に続く溝跡の一部も検出された。
- 出土遺物の総数は477点で、陶磁器と瓦が多く、他に土師質土器、金属製品、木製品などが出土している。産地は肥前産が最も多く、次いで瀬戸・美濃産、大堀相馬産が多い。他に岸、京・信楽、堤、小野相馬産も少数出土している。
- 今回調査は、平成18年度調査の北側と南側に隣接する幅1m程の調査であったため、復元に至る建物跡等の遺構は検出されなかったが、平成18年度調査で区画施設と考えられた溝跡の続きが一部検出された。

引用・参考文献

- 江戸通跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書房
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』 理工学社
- 吉賀孝 1974 『切込境』 雄山閣出版株式会社
- 坂田啓 1995 『私本仙台藩土事典』 創栄出版
- 下中直人 2000 『増補 やきもの辞典』 平凡社
- 新宿区山谷本村町通跡調査団 1995 『山谷本村町通跡 尾張藩徳川家上屋敷跡』
- 新宿区内藤町通跡調査会 1992 『内藤町通跡』
- 新宿区南山伏町通跡調査団 1997 『東京都新宿区南山伏町通跡』
- 開善内 1974 『埴崎きと陶工たち』 萬葉堂書店出版部
- 仙台市教育委員会 2005 仙台市文化財調査報告書第282集 『仙台城本丸跡1次調査 - 石垣修復工事に伴う発掘調査報告書 - 第3分冊』
- 仙台市教育委員会 2005 仙台市文化財調査報告書第289集 『仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査(1)概要報告書』
- 仙台市教育委員会 2006 仙台市文化財調査報告書第298集 『仙台城本丸跡1次調査 - 石垣修復工事に伴う発掘調査報告書 - 第2分冊』
- 仙台市教育委員会 2006 仙台市文化財調査報告書第302集 『仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査(2)概要報告書』
- 仙台市教育委員会 2007 仙台市文化財調査報告書第312集 『川内A遺跡 - 仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査報告書I -』
- 仙台市教育委員会 2007 仙台市文化財調査報告書第316集 『仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査(3)概要報告書』
- 仙台市教育委員会 2009 仙台市文化財調査報告書第336集 『茂ヶ崎城跡 - 第2次発掘調査報告書 -』
- 仙台市教育委員会 2009 仙台市文化財調査報告書第342集 『仙台城跡 - 仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査報告書II -』
- 仙台市教育委員会 2009 仙台市文化財調査報告書第349集 『仙台城本丸跡1次調査 - 石垣修復工事に伴う発掘調査報告書 - 第1分冊』
- 仙台市教育委員会 2010 仙台市文化財調査報告書第378集 『桜ヶ岡公園遺跡 - 第4次発掘調査報告書 -』
- 仙台市教育委員会 2011 仙台市文化財調査報告書第384集 『桜ヶ岡公園遺跡 - 仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査報告書IV -』
- 仙台市教育委員会 2011 仙台市文化財調査報告書第385集 『川内B遺跡 - 仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査報告書V -』
- 仙台市教育委員会 2011 仙台市文化財調査報告書第386集 『仙台城跡 - 仙台市高速鉄道東西線関係通跡発掘調査報告書VI -』
- 仙台市史編さん委員会 1993 『仙台市史 特別編1 自然』
- 仙台市史編さん委員会 1994 『仙台市史 特別編2 考古資料』
- 仙台市史編さん委員会 2001 『仙台市史 通史編3 近世1』
- 仙台市史編さん委員会 2003 『仙台市史 通史編4 近世2』
- 仙台市史編さん委員会 2004 『仙台市史 通史編5 近世3』
- 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 通史編6 近代1』
- 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城跡』
- 仙台市史編さん委員会 2007 『仙台市史 通史編7 近代2』
- 高倉淳ほか 1994 『絵図・地図で見る仙台』 今野印刷株式会社
- 吉岡一男ほか 2005 『絵図・地図で見る仙台第二輯』 今野印刷株式会社
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告第125集 『汐留遺跡III(第1分冊) - 旧汐留貨物駅跡地内の調査 -』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告第125集 『汐留遺跡III(第2分冊) - 旧汐留貨物駅跡地内の調査 -』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 東京都埋蔵文化財センター発掘調査報告第125集 『汐留遺跡III(第3分冊) - 旧汐留貨物駅跡地内の調査 -』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報4・5』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報6』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報9』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2000 『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2006 『東北大学埋蔵文化財調査年報19』 第1分冊
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2007 『東北大学埋蔵文化財調査年報21』
- 東北歴史資料館 1995 『仙台・埴の焼き物』
- 中川久夫 1990 『仙台城址およびその周辺地域の地質』 『仙台城址の自然』 仙台市教育委員会
- 中川久夫ほか 1960 『仙台付近の第四系および地形(1)』 『第四紀研究1』
- 本田勇 2003 『史料仙台伊達氏家臣団事典』 丸善仙台出版
- 松本秀明・熊谷真樹 2011 『広瀬川川沖部における完新世の河床高度変化に関する知見』 『季刊地理学』 第63巻第1号』
- 仙台市環境計画課編・松本秀明監修 2001 『せんだい空中写真集〜社の都いまむか』 仙台市環境計画課
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』 理工学社
- 大橋康二 2002 『藁藁口辞典』 平凡社

写 真 图 版



1. I区北壁面 1 (南から)



2. I区北壁面 2 (南から)



3. I区北壁面 3 (南から)



4. I区北壁面 4 (南から)



5. I区北壁面 5 (南から)



6. I区北壁面 6 (南から)



7. I区北壁面 7 (南から)



8. I区北壁面全景 (南西から)

図版1 川内B遺跡基本土層(1)

検出遺構写真



1. I区東西ベルト 1 (北から)



2. I区東西ベルト 2 (北から)



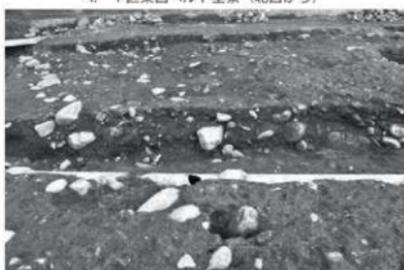
3. I区東西ベルト 3 (北から)



4. I区東西ベルト全景 (北西から)



5. II区攪乱南壁面 1 (北から)



6. II区攪乱南壁面 2 (北から)



7. II区攪乱南壁面 3 (北から)



8. II区攪乱南壁面 4 (北から)

図版2 川内B遺跡基本土層(2)



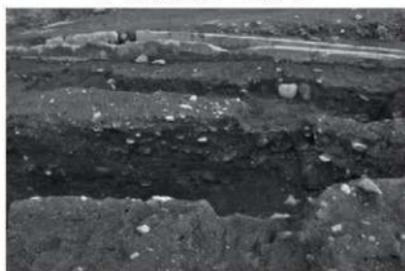
1. II区攪乱南壁面 5 (北から)



2. II区攪乱南壁面 6 (北から)



3. II区攪乱南壁面 7 (北から)



4. II区攪乱南壁面 8 (北から)



5. II区攪乱南壁面全貌 (北西から)



6. II区西側南壁面 1 (北から)



7. II区西側南壁面 2 (北から)



8. II区西側南壁面 3 (北から)

図版3 川内B遺跡基本土層(3)

検出遺構写真



1. II区西側南壁面 4 (北から)



2. II区西側南壁面 5 (北から)



3. II区西側南壁面全景 (北から)



4. III区北壁面全景 (南から)



5. II区東西ベルト 1 (北から)



6. II区東西ベルト 2 (北から)



7. II区東西ベルト全景 (北から)



8. II区東側南壁面全景 (北から)

図版4 川内B遺跡基本土層(4)



1. I区西壁面全景（東から）



2. IV区攪乱東壁面（西から）



3. II区西壁面全景（東から）



4. I区南北ベルト 1（西から）



5. I区南北ベルト 2（西から）



6. I区南北ベルト 3（西から）



7. I区南北ベルト 4（西から）



8. I区南北ベルト 5（西から）

図版5 川内B遺跡基本土層（5）

検出遺構写真



1. I区南北ベルト全景（西から）



2. II区南北ベルト全景（西から）



3. I・II区攪乱西壁面 1（東から）



4. I・II区攪乱西壁面 2（東から）



5. I・II区攪乱西壁面 3（東から）



6. I・II区攪乱西壁面 4（東から）



7. I・II区攪乱西壁面 5（東から）



8. I・II区攪乱西壁面全景（北東から）

図版6 川内B遺跡基本土層（6）



1. SD1石積出状況 (南から)



2. SD1完掘 (南から)



3. SK8完掘 (南から)



4. SK9断面 (南から)



5. SK22断面 (南から)



6. SK22完掘 (南から)



7. SK36断面 (南から)



8. SK8・9・22・30・36完掘 (南から)

図版7 川内B遺跡VI層

検出遺構写真



1. II区東側遺構完掘（南西から）



2. II区中央遺構完掘（西から）



3. SD4断面A-A'（南から）



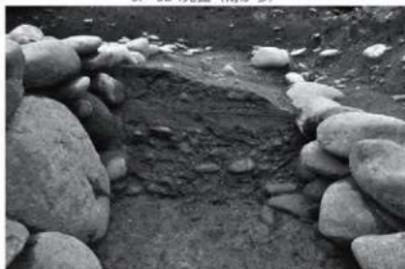
4. SD4西壁石組様出状況（東から）



5. SD4完掘（南から）



6. SD4掘り方完掘（南から）



7. SD5断面A-A'（南から）



8. SD5・8断面C-C'（北から）

図版8 川内B遺跡IV層（1）



1. SD5東壁石組検出状況 1 (西から)



2. SD5東壁石組検出状況 2 (西から)



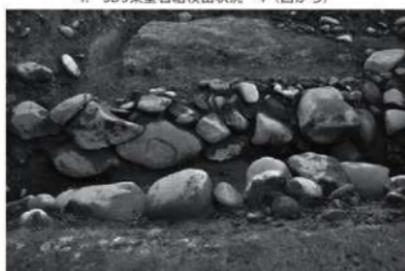
3. SD5東壁石組検出状況 3 (西から)



4. SD5東壁石組検出状況 4 (西から)



5. SD5東壁石組検出状況 5 (西から)



6. SD5西壁石組検出状況 1 (東から)



7. SD5西壁石組検出状況 2 (東から)



8. SD5西壁石組検出状況 3 (東から)

図版9 川内B遺跡IV層(2)

検出遺構写真



1. SD5西壁石組検出状況 4 (東から)



2. SD5西壁石組検出状況 5 (東から)



3. SD5完掘 (北から)



7. SD5掘り方断面A-A' (南から)



8. SD5掘り方完掘 1 (南から)

図版 10 川内B遺跡IV層 (3)



1. SD5掘り方完掘 2 (北から)



2. SD5掘り方完掘 3 (北から)



3. SD5掘り方完掘 4 (北から)



4. SK18断面 (南から)



5. SK18完掘 (南から)



6. SK34断面 (西から)



7. SK34完掘 (南西から)



8. SK35完掘 (東から)

図版 11 川内B遺跡IV層 (4)

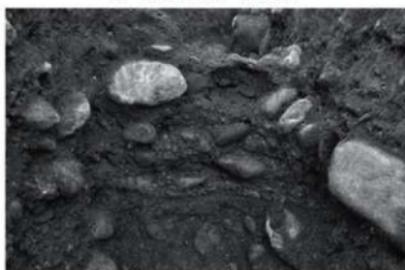
検出遺構写真



1. SK39上部断面 (西から)



2. SK39木材検出状況 (南から)



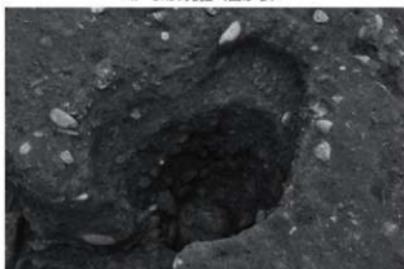
3. SK39下部断面 (西から)



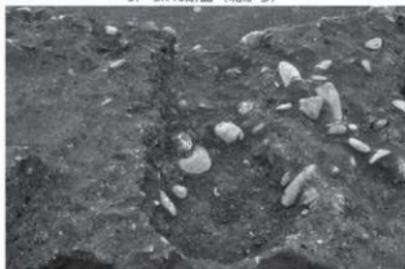
4. SK39完掘 (西から)



5. SK40断面 (北から)



6. SK40完掘 (東から)



7. SK42完掘 (南から)



8. SK47完掘 (西から)

図版 12 川内B遺跡IV層 (5)



1. 5X13断面 (東から)



2. 5X13完掘 (東から)



3. I区西側道横完掘 (西から)



4. II区中央道横完掘 (東から)



5. II区北西道横完掘 (西から)



6. II区南西道横完掘 (西から)



7. SA1P29完掘 (北から)



8. SA1P32完掘 (南から)

図版 13 川内B遺跡IV層(6) III層(1)

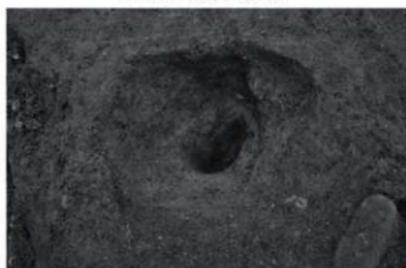
検出遺構写真



1. SA1P36完掘 (東から)



2. SA1P38完掘 (北から)



3. SA2P30完掘 (南から)



4. SA2P31完掘 (南から)



5. SA2P33完掘 (南から)



6. SD7完掘 (東から)



7. SD9断面 (南から)



8. SD9完掘 (北から)

図版 14 川内B遺跡Ⅲ層(2)



1. SK2断面 (北から)



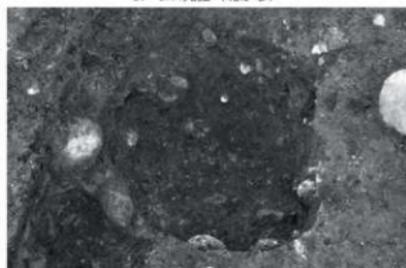
2. SK2完掘 (南から)



3. SK4完掘 (北から)



4. SK13断面 (西から)



5. SK13完掘 (西から)



6. SK14断面 (西から)



7. SK14完掘 (西から)



8. SK19断面 (南から)

図版 15 川内B遺跡Ⅲ層 (3)

検出遺構写真



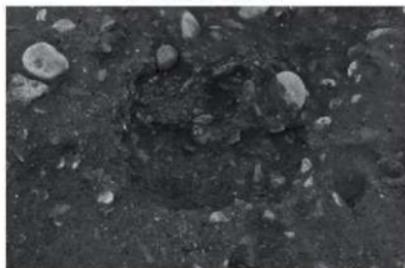
1. SK19完掘 (南から)



2. SK21完掘 (東から)



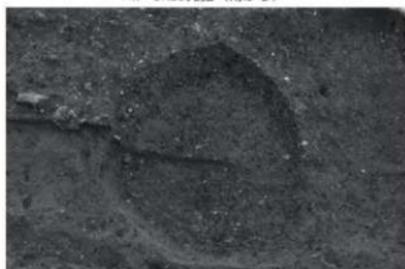
3. SK23断面 (南から)



4. SK23完掘 (南から)



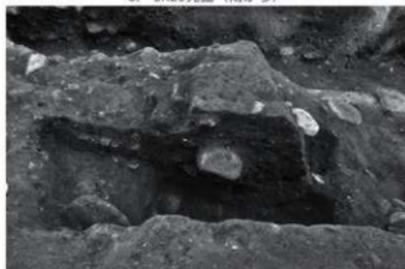
5. SK24完掘 (南から)



6. SK25完掘 (南から)



7. SK26完掘 (南から)



8. SK27・31断面 (南から)

図版 16 川内B遺跡Ⅲ層 (4)



1. SK27完掘 (南から)



2. SK28完掘 (南から)



3. SK29完掘 (南から)



4. SK31完掘 (西から)



5. SK32断面 (南から)



6. SK32完掘 (南から)



7. SK37断面 (南から)



8. SK37完掘 (南から)

図版 17 川内B遺跡III層 (5)

検出遺構写真



1. SK38断面 (南から)



2. SK38完掘 (南から)



3. SK41・P26完掘 (東から)



4. SK43完掘 (北から)



5. SK44完掘 (南から)



6. SK45完掘 (北から)



7. SK46断面 (北から)



8. SK46完掘 (南から)

図版 18 川内B遺跡Ⅲ層 (6)



1. SK50断面 (南から)



2. SK50完掘 (南から)



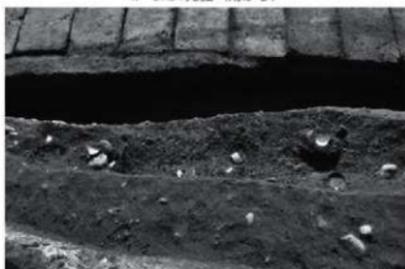
3. SK51断面 (南から)



4. SK51完掘 (南から)



5. SX4検出状況 (北から)



6. SX7遺物出土状況 1 (北から)



7. SX7遺物出土状況 2 (南から)



8. SX7遺物出土状況 3 (南から)

図版 19 川内B遺跡Ⅲ層 (7)

検出遺構写真



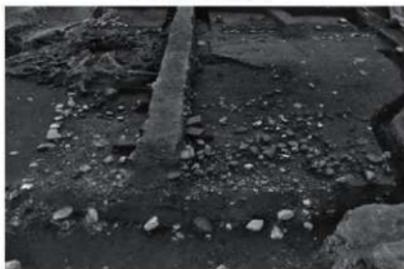
1. SX7遺物出土状況 4 (南から)



2. SX7断面 (南から)



3. SX8完掘 (北から)



4. SX10礎検出状況 (東から)



5. SX10石列検出状況 (南から)



6. SX10完掘 (東から)



7. SX11礎検出状況 (南から)



8. SX12完掘 (北から)

図版 20 川内B遺跡Ⅲ層 (8)



1. SX14南壁石組検出状況（北から）



2. SX14完掘（東から）



3. SX14断面B-B'（西から）



4. SX14掘り方完掘（東から）



5. SD6断面B-B'（西から）



6. SD6北壁石組検出状況（南西から）



7. SD6完掘（西から）



8. SD6掘り方断面B-B'（西から）

図版 21 川内B遺跡Ⅲ層（9）・Ⅱ層（1）

検出遺構写真



1. SD6東側掘り方完掘 (西から)



2. SD6西側掘り方完掘 (西から)



3. SD8北側検出状況 (北から)



4. SD8南側検出状況 (南から)



5. SE1断面 (南から)

図版 22 川内B遺跡II層(2)



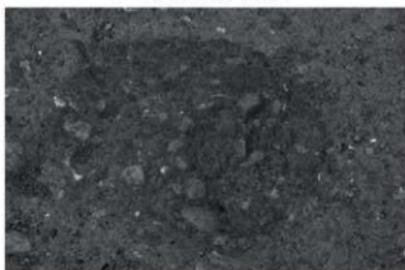
1. SE1 (検出面から約0.80m掘削) (南から)



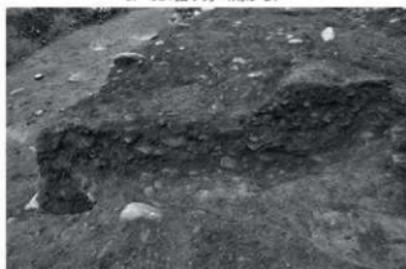
2. SE1掘り方断面 (南から)



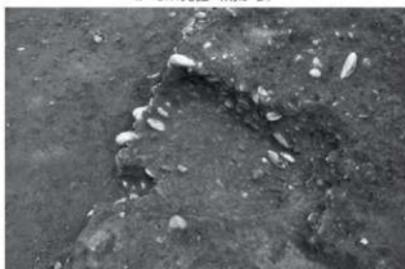
3. SE1掘り方 (南から)



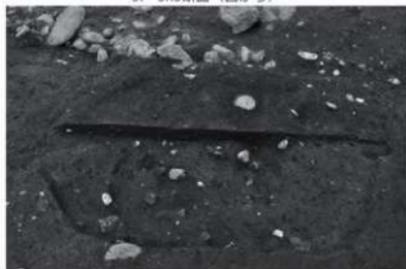
4. SK1完掘 (南から)



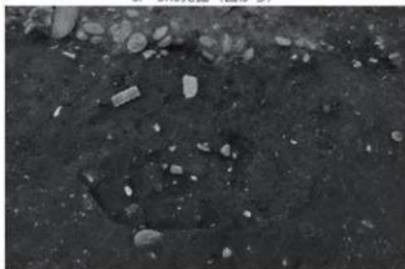
5. SK3断面 (西から)



6. SK3完掘 (西から)



7. SK10断面 (南から)



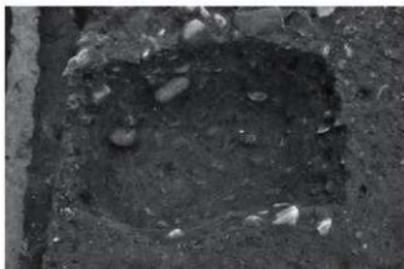
8. SK10完掘 (南から)

図版 23 川内B遺跡II層 (3)

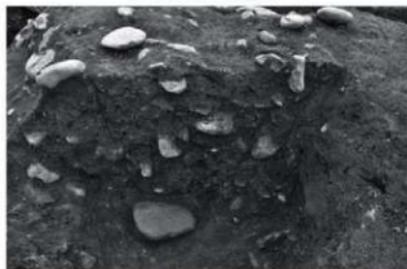
検出遺構写真



1. SK15断面 (東から)



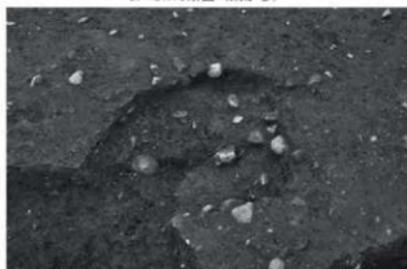
2. SK15完掘 (東から)



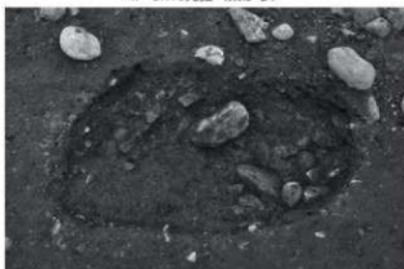
3. SK16断面 (東から)



4. SK16完掘 (東から)



5. SK17完掘 (東から)



6. SK20完掘 (東から)



7. SK33断面 (北から)



8. SK33完掘 (南から)

図版 24 川内B遺跡II層 (4)



1. SX5横出状況（北から）



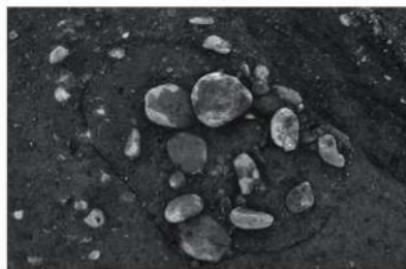
2. SX9横出状況（南から）



3. P25断面（北から）



4. P25完掘（北から）



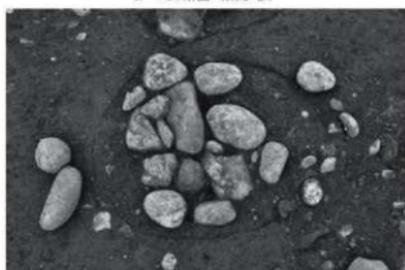
5. P39横出状況（南から）



6. P39断面（東から）



7. P39完掘（東から）



8. P40横出状況（南から）

図版 25 川内B遺跡II層（5）

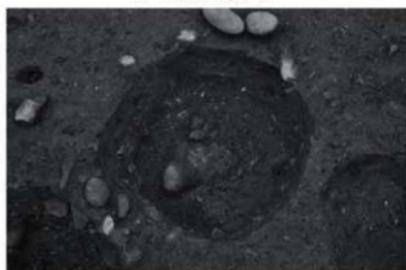
検出遺構写真



1. P40断面（東から）



2. P40礎板石検出状況（東から）



3. P40完掘（東から）



4. II区中央遺構完掘（西から）



5. III区検出状況（南から）



6. SD2検出状況（南西から）



7. SD2断面B-B'（西から）



8. SD2断面D-D'（西から）

図版 26 川内B遺跡II層（6）・I層（1）



1. SD2北壁石組検出状況（南から）



2. SD2南壁石組検出状況（北から）



3. SD2底石検出状況（南東から）



4. SD2・6完掘（西から）



5. SD2完掘全景（南から）

図版 27 川内B遺跡1層（2）

検出遺構写真



1. SD2掘り方断面B-B' (西から)



2. SD2掘り方完掘 (西から)



3. SD3検出状況 (南東から)



4. SD3断面D-D' (北西から)



5. SD3完掘 (南東から)

図版 28 川内B遺跡1層(3)



1. SD3東壁石組検出状況（北西から）



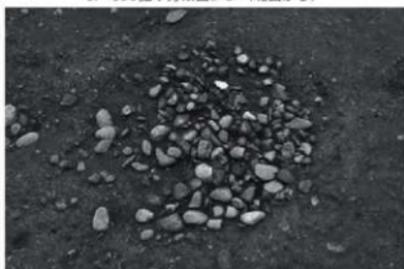
2. SD3西壁石組検出状況（北東から）



3. SD3掘り方断面D-D'（北西から）



4. SD3掘り方完掘（南東から）



5. SK5検出状況（南から）



6. SK5断面（南から）



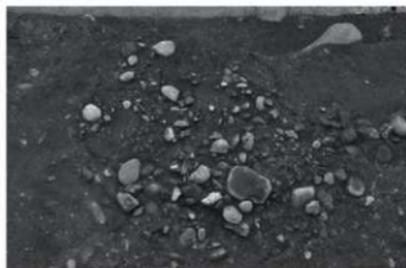
7. SK05完掘（南から）



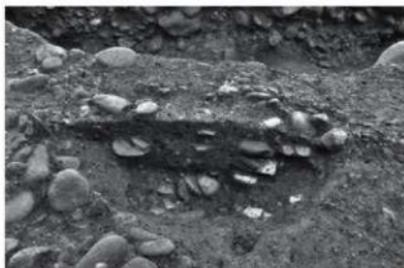
8. SK06完掘（南から）

図版 29 川内B遺跡1層（4）

検出遺構写真



1. SK7検出状況（南から）



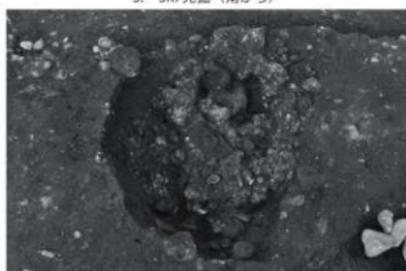
2. SK7断面（南から）



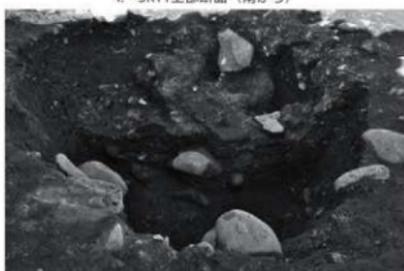
3. SK7完掘（南から）



4. SK11上部断面（南から）



5. SK11粘土検出状況（南から）



6. SK11下部断面（南から）



7. SK11完掘（南西から）



8. SK12断面（北から）

図版 30 川内B遺跡1層(5)



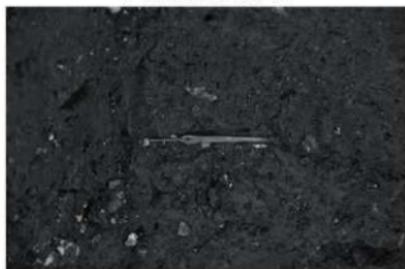
1. SK12完掘 (南西から)



4. SX1横出土状況 (東から)



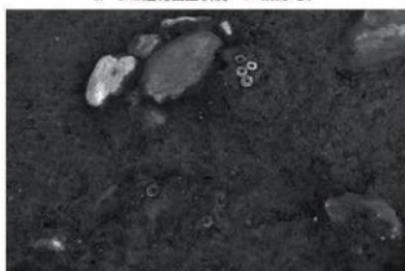
5. SX2遺物出土状況全景 (北東から)



6. SX2遺物出土状況 1 (東から)



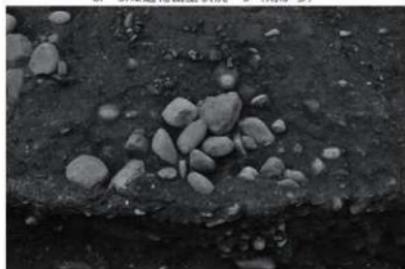
7. SX2遺物出土状況 2 (南から)



8. SX2遺物出土状況 3 (南から)



1. SX2板材出土状況 (北東から)



2. SX3横出土状況 (南から)

図版 31 川内B遺跡1層 (6)

検出遺構写真



1. SX6検出状況 (南西から)



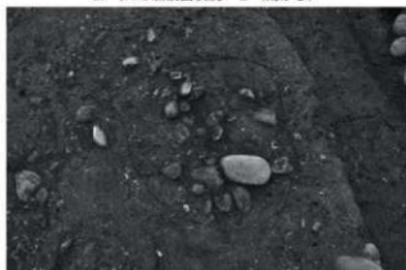
5. SX15礫検出状況 1 (南から)



3. SX15礫検出状況 2 (南から)



4. SX15礫検出状況 3 (南から)



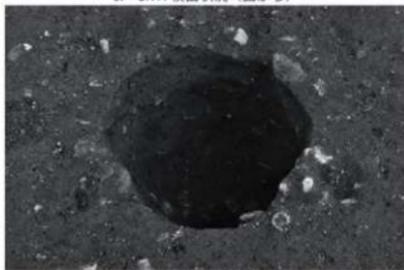
5. SX16検出状況 (南から)



6. SX17検出状況 (西から)

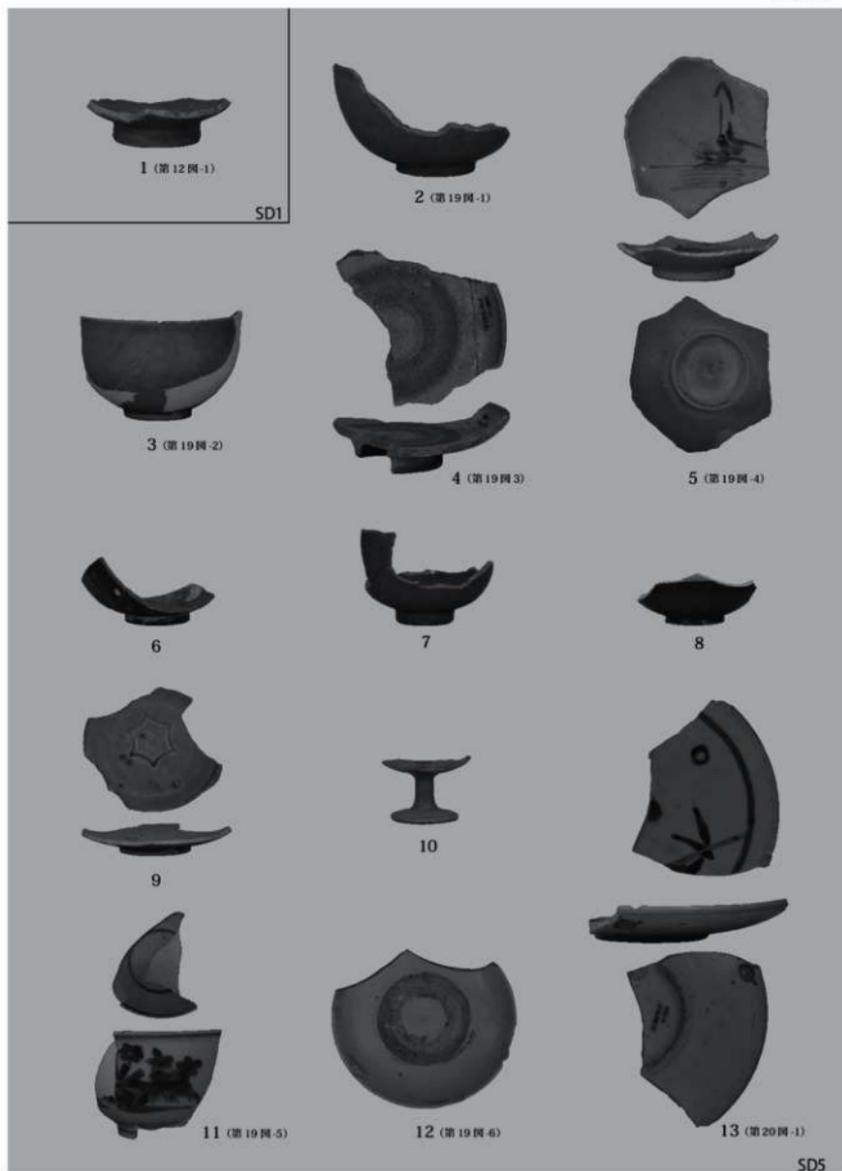


7. P2断面 (西から)

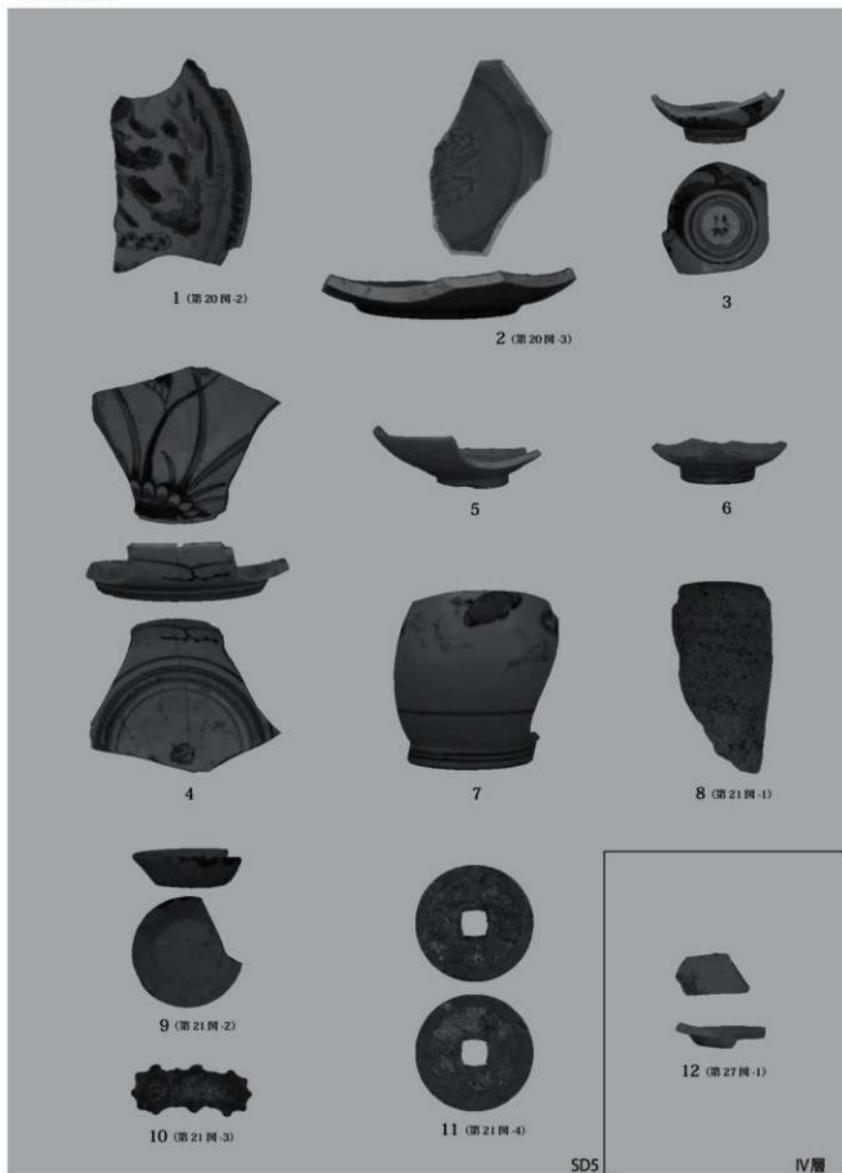


8. P2完掘 (西から)

図版 32 川内B遺跡1層(7)



図版33 川内B遺跡出土遺物(1)

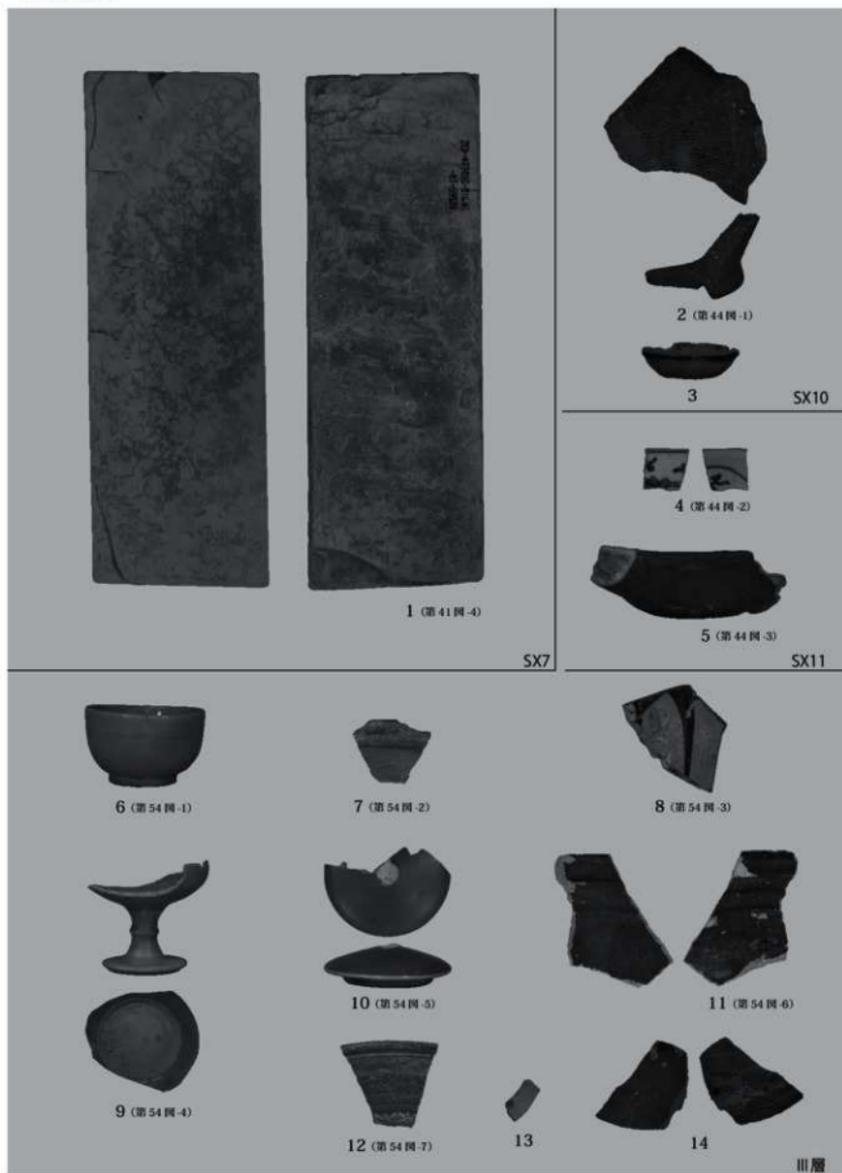


図版 34 川内 B 遺跡出土遺物 (2)

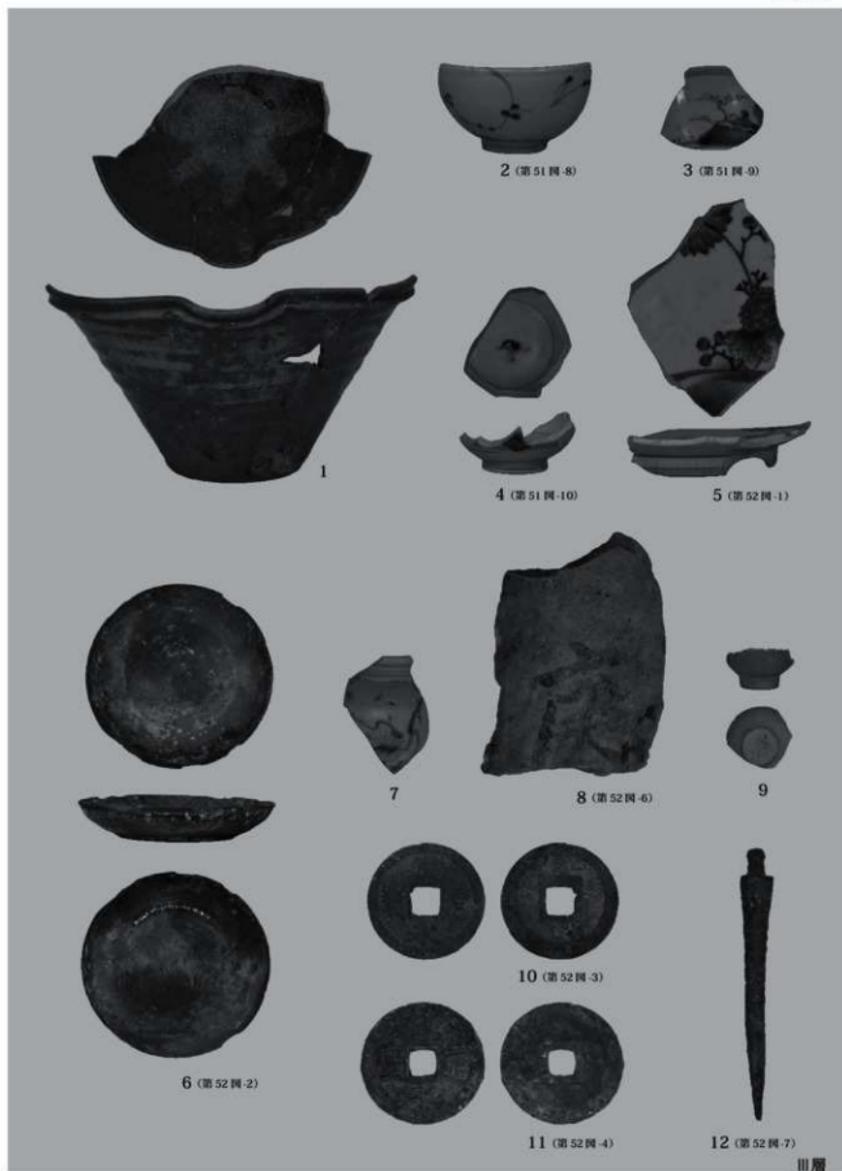


SX7

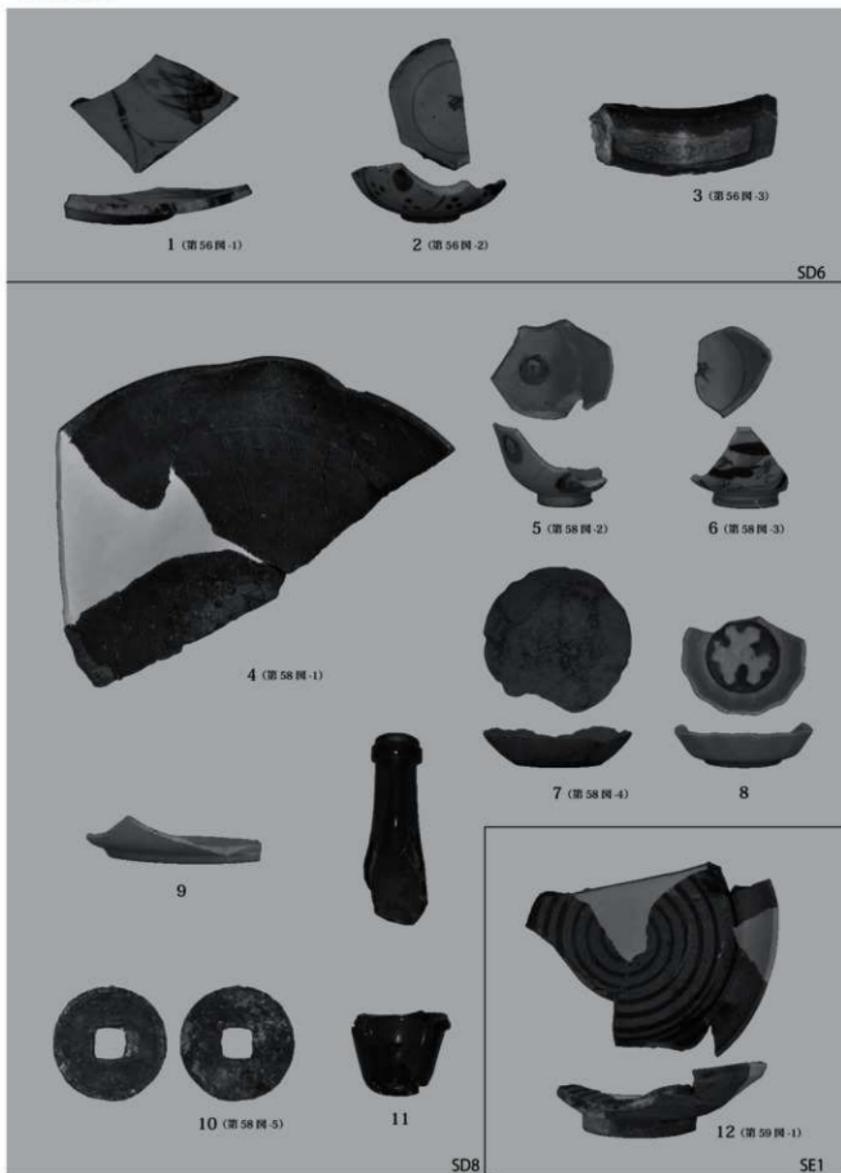
図版35 川内B遺跡出土遺物(3)



図版 36 川内 B 遺跡出土遺物 (4)



図版 37 川内 B 遺跡出土遺物 (5)



図版 38 川内B遺跡出土遺物(6)



1 (第61図-1)



2 (第61図-2)

SK10



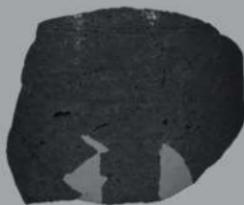
3 (第66図-1)



4 (第66図-2)



5 (第66図-3)



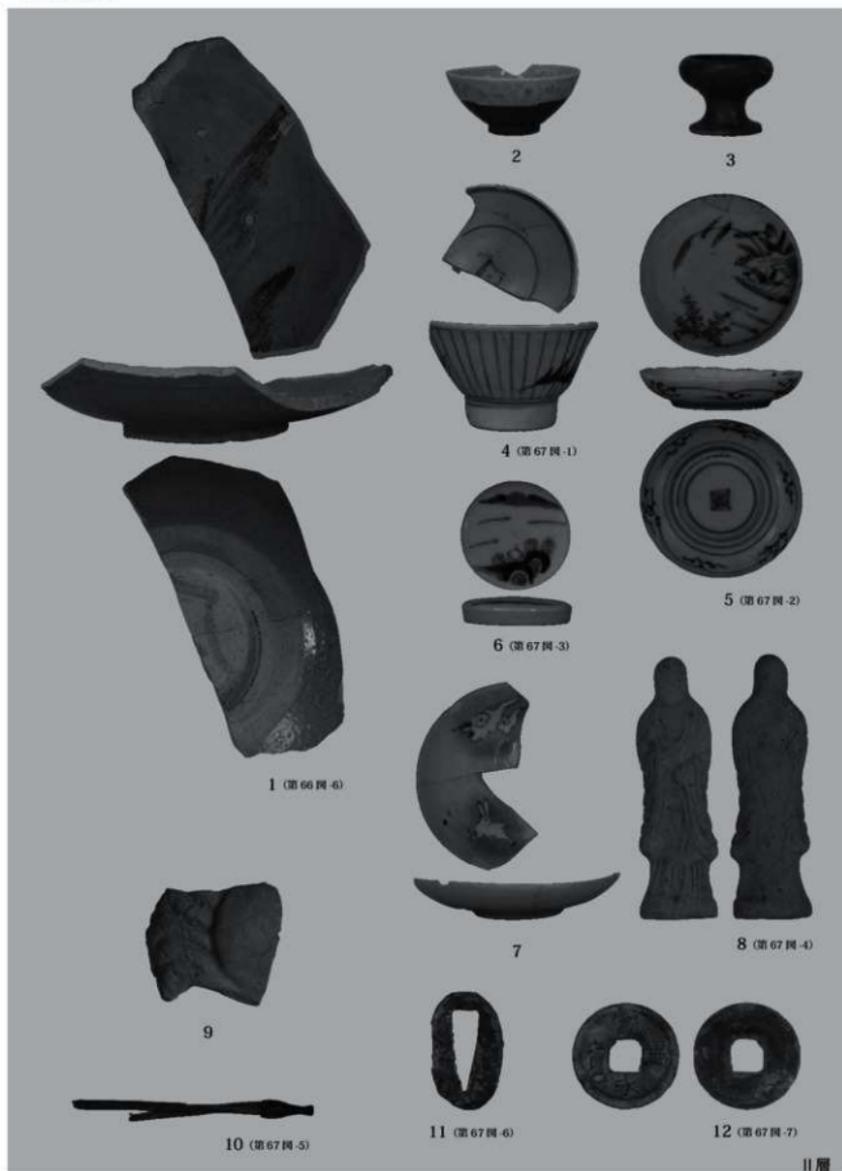
6 (第66図-4)



7 (第66図-5)

川層

図版 39 川内B遺跡出土遺物(7)



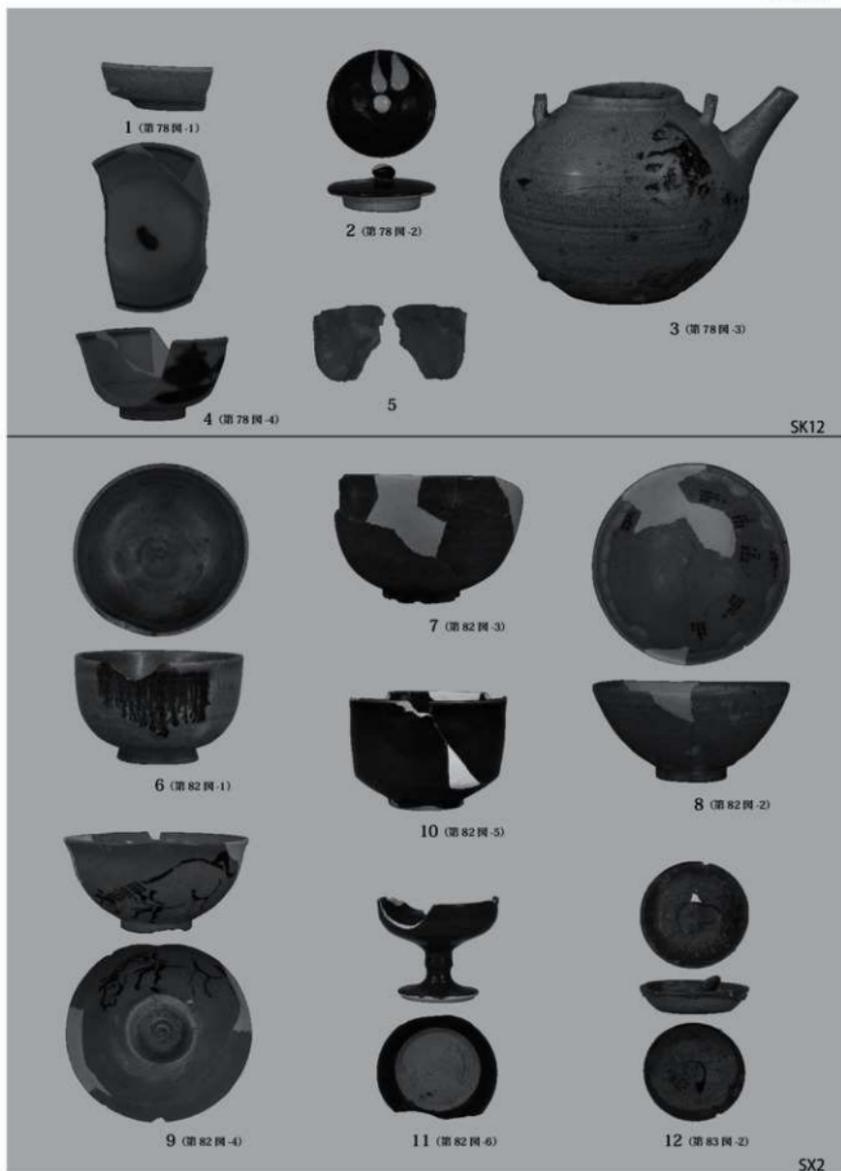
図版 40 川内B遺跡出土遺物(8)



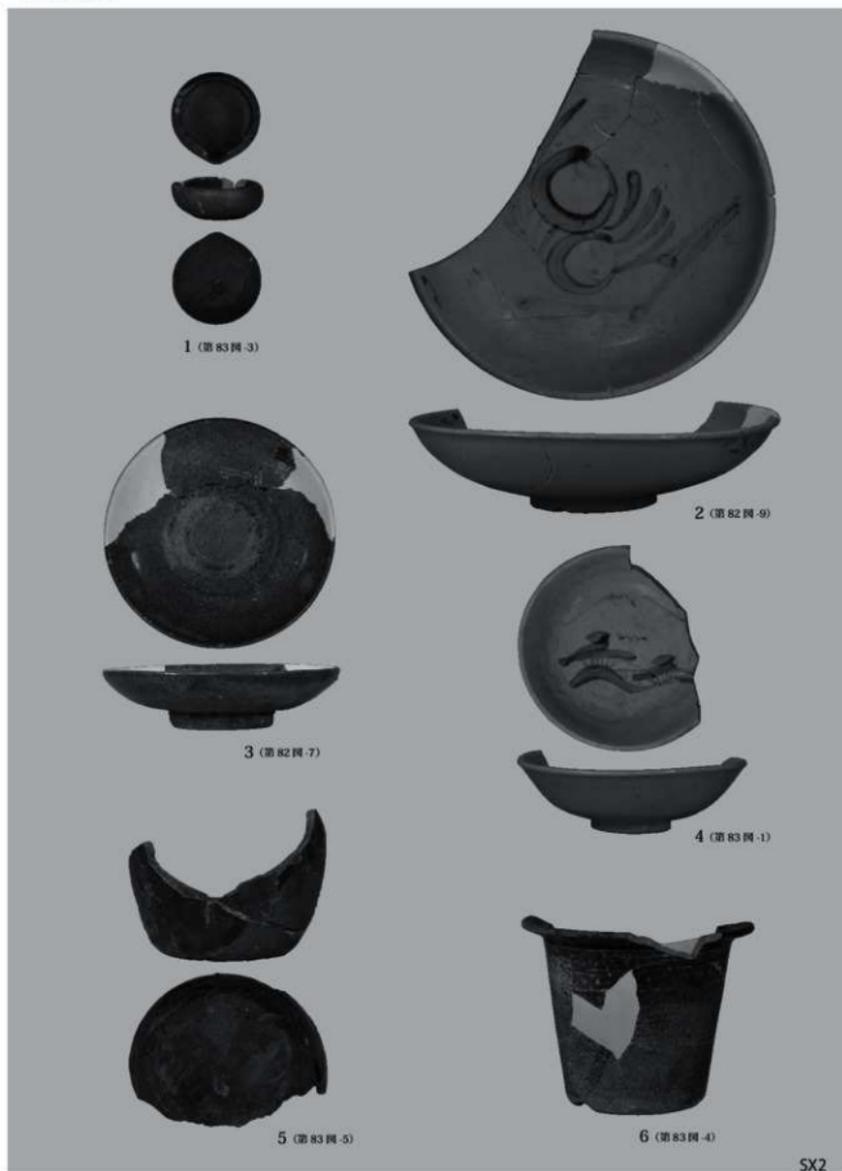
図版41 川内B遺跡出土遺物(9)



図版 42 川内 B 遺跡出土遺物 (10)



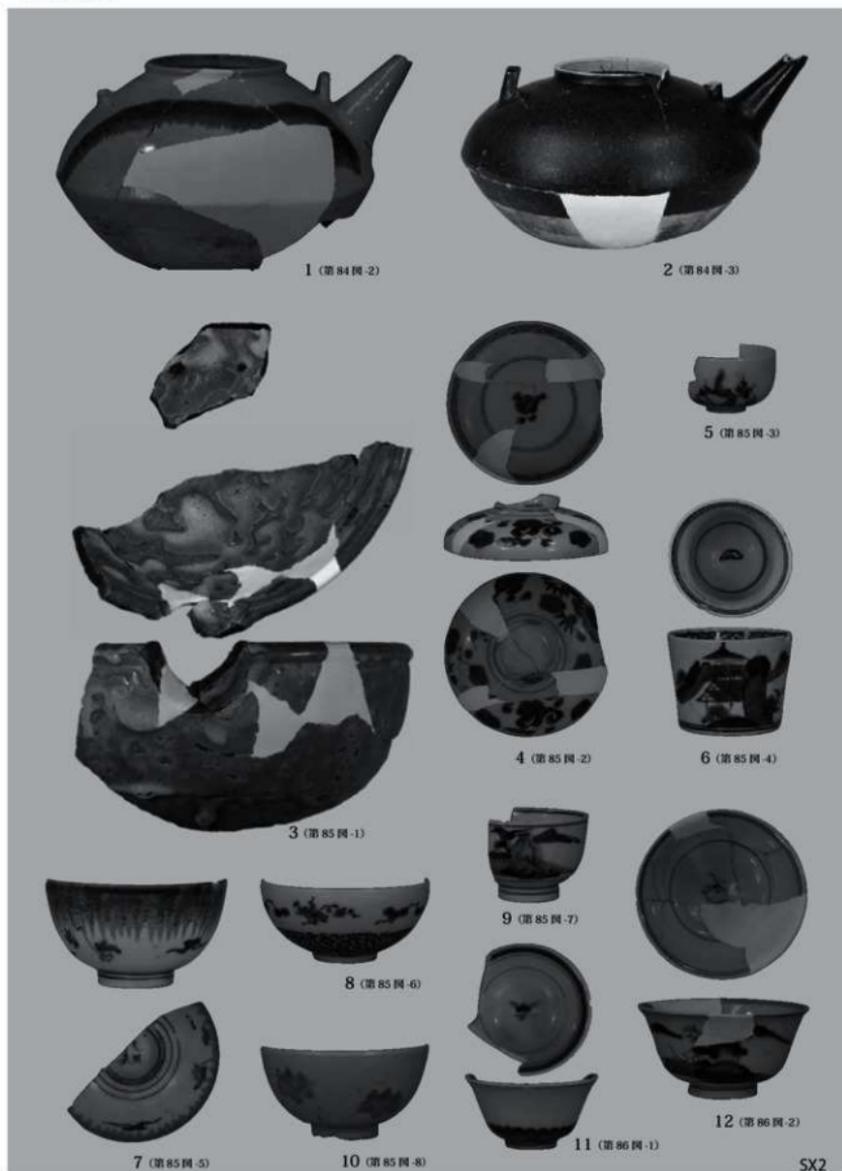
図版43 川内B遺跡出土遺物(11)



図版44 川内B遺跡出土遺物(12)



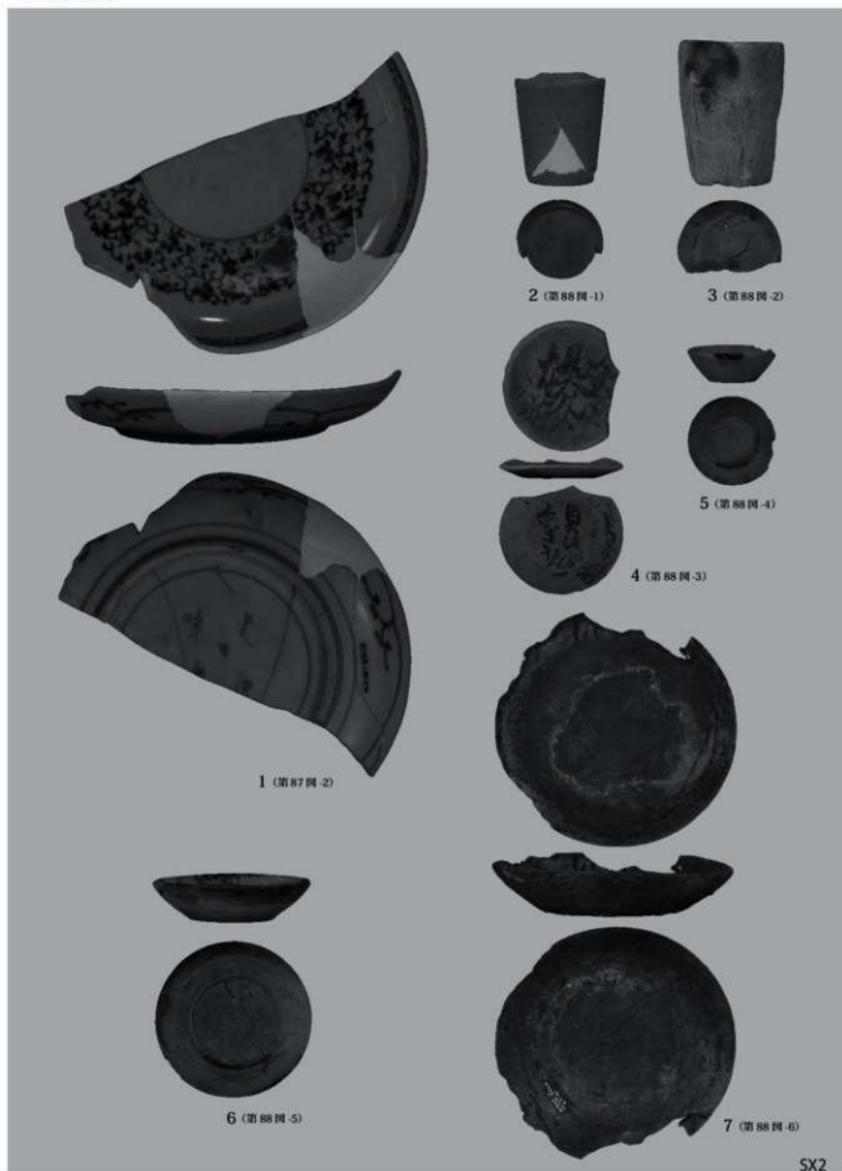
図版 45 川内 B 遺跡出土遺物 (13)



図版 46 川内B遺跡出土遺物 (14)



図版 47 川内 B 遺跡出土遺物 (15)



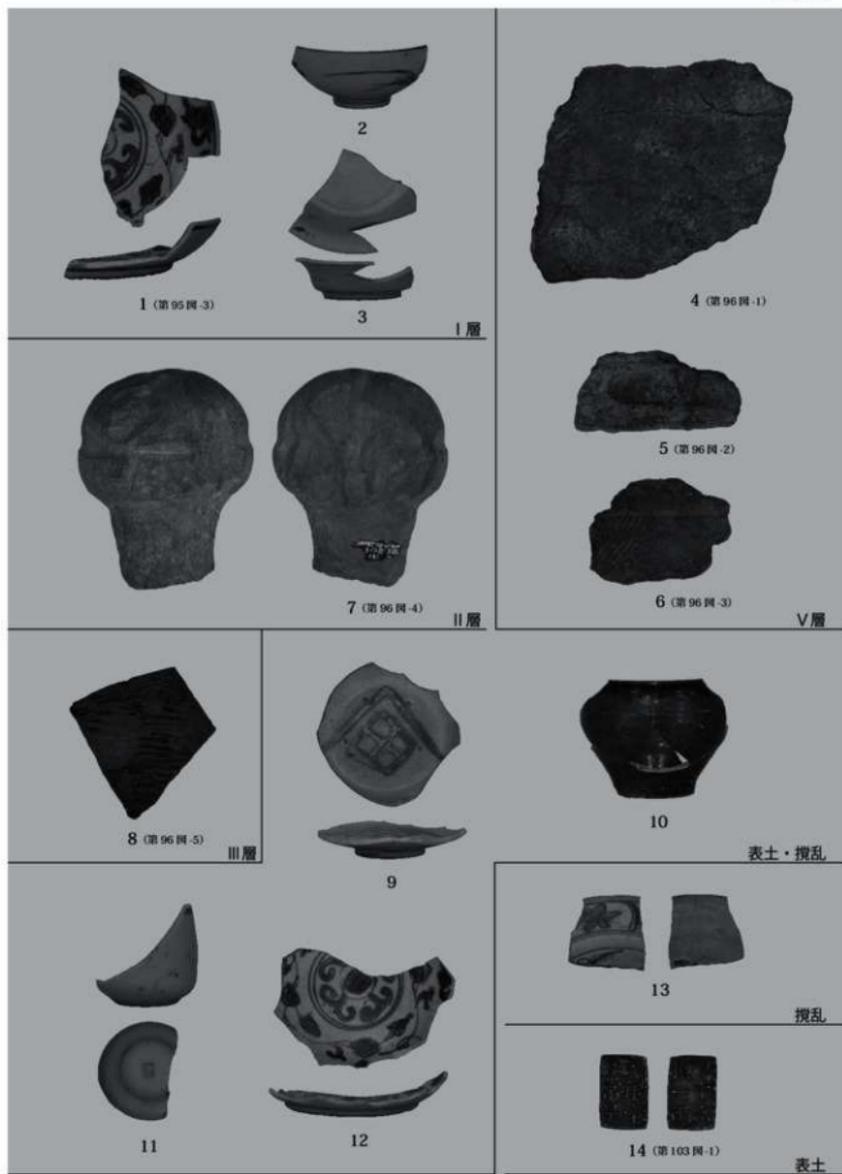
図版 48 川内 B 遺跡出土遺物 (16)



図版 49 川内 B 遺跡出土遺物 (17)



図版 50 川内 B 遺跡出土遺物 (18)



図版 51 川内 B 遺跡出土遺物 (19)



陶器

大塚相馬、在地製作の陶器。灯明具、小碗、中碗、小皿、中皿、土瓶、植木鉢、搦鉢が出土しているが、碗類が大半を占める。碗には端反碗や丸碗、腰張碗、筒形碗、掛分碗などが見られる。

1. SX2出土遺物 (1)



陶器

大塚相馬の他、本遺構からは小野相馬の小皿、萩焼と推測される小碗、京・信楽の色絵半球碗、肥前姫野銅緑釉小皿、志戸呂大瓶、京焼と推測される火入・碗、瀬戸・美濃高田徳利などが出土している。点数比では圧倒的に大塚相馬が多くなるが、このような製作地の陶器も確認されている。

2. SX2出土遺物 (2)



磁器

肥前、瀬戸・美濃の製品が主体であるが、波佐見、三田・王地山、中国磁器も出土している。器種を見ると、小杯や端反碗、広束碗などといった碗類のほか、小皿、中皿などいわゆる生活雑器が多く出土している。この他、仏花瓶や香がなどの神仏具、鶴首徳利といった器種も出土している。遺物の製作年代は、初期伊万里や明末清初など17世紀代の遺物や外面コンニャク印判装飾、染付雨降文中碗など17世紀末から18世紀中葉の遺物も出土するもの、端反碗や変形型押小皿など19世紀代の遺物が主体となっている。

3. SX2出土遺物 (3)

図版 52 川内 B 遺跡出土遺物 (20)

土器・土製品

在地および塚の製品が出土している。土器製品は、かわらけや灯明皿、火鉢など灯火具、暖房具といった器種が目立つ。この他にも散面三足の蚊遣りや焼塩壺、塩壺といった器種がある。土製品は本遺構からの出土数は少ないが、子守像、狐、瓶型のミニチュアが出土している。製作年代は概ね19世紀代の製品が多い。



1. SX2出土遺物 (4)

近代

型紙絵付、コバルト装飾などの磁器のほか、在地と思われる陶器製品、幕末から近代所産のワインボトルが出土している。この他にも薬品瓶や罫子などの製品も出土している。



2. SX2出土遺物 (5)



3. SX2出土遺物 (6)

瓦

烏伏間、軒棧瓦、塀瓦が出土している。いずれも在地の製品と推測される。



4. SX2出土遺物 (7)

陶製瓦

陶器質の軒棧瓦、棧瓦、伏間瓦(棟瓦)が本遺構最下層から出土している。明治期以降に製作されたものと思われる。製作地は不明である。

図版 53 川内 B 遺跡出土遺物 (21)

検出遺構写真



1. 南区土層断面 (西から)



2. 北区東側土層断面 (東から)



3. 北区中央土層断面 (東から)



4. 北区西側土層断面 (東から)



5. 南区V層上面遺構発掘 (西から)



6. 北区東側V層上面遺構発掘 (西から)



7. 北区西側V層上面遺構発掘 (西から)



8. SD2断面 (西から)

図版 54 仙台城跡基本土層・V層 (1)



1. SD2遺物出土状況（北から）



2. SD2遺物出土状況（南から）



3. SD3完掘（西から）



4. SD3断面（南から）



5. SD3完掘（北から）



6. SD4上部断面（南から）



7. SD4下部断面（南から）



8. SD4腐食植物検出状況（南から）

図版 55 仙台城跡V層（2）

検出遺構写真



1. SD4完掘 (南から)



2. SK7断面 (南から)



3. SK7完掘 (北から)



4. SK8完掘 (北から)



5. SK9断面 (北から)



6. SK9完掘 (西から)



7. SK10断面 (西から)



8. SK10完掘 (北から)

図版 56 仙台城跡V層 (3)



1. SK11断面 (南から)



2. SK11完掘 (北から)



3. SK12断面 (北から)



4. SK12完掘 (北から)



5. SK13完掘 (南から)



6. SX3機検出状況 (北から)



7. P8断面 (西から)



8. P8完掘 (西から)

図版 57 仙台城跡V層 (4)

検出遺構写真



1. P9断面（南から）



2. P9完掘（南から）



3. P10断面（南から）



4. P10完掘（南から）



5. P12断面（西から）



6. P12完掘（北から）



7. 北区東側V層上面遺物出土状況（南から）



8. 北区東側IV層上面遺構完掘（西から）

図版 58 仙台城跡V層（5）・IV層（1）



1. 北区西側IV層上面遺構発掘（東から）



2. SD1断面（南から）



3. SD1発掘（北から）



4. SK1断面（東から）



5. SK1発掘（西から）



6. SK2断面（東から）



7. SK2発掘（北から）



8. SK5断面（南から）

図版 59 仙台城跡IV層（2）

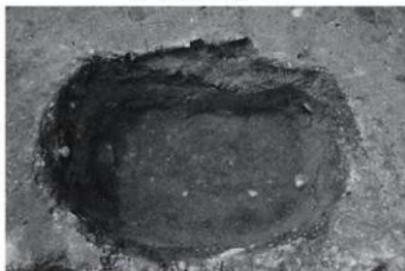
検出遺構写真



1. SK5完掘 (北から)



2. SK6断面 (南から)



3. SK6完掘 (南から)



4. SX2断面 (南東から)



5. SX2遺物出土状況 (南から)



6. SX2石組検出状況 (東から)



7. SX2完掘 (北から)



8. SX2石組掘り方断面 (南から)

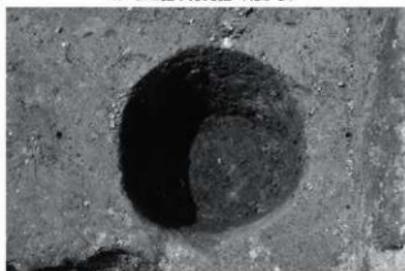
図版 60 仙台城跡Ⅳ層 (3)



1. SX2掘り方完掘（北から）



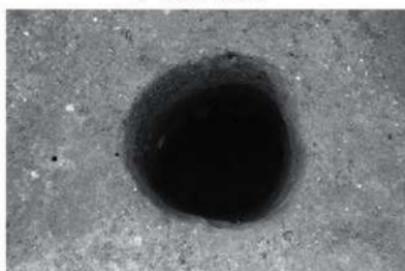
2. P2断面（南から）



3. P2完掘（南から）



4. P3断面（南から）



5. P3完掘（南から）



6. P4断面（南から）



7. P4完掘（南から）



8. P5断面（南から）

図版 61 仙台城跡Ⅳ層（4）

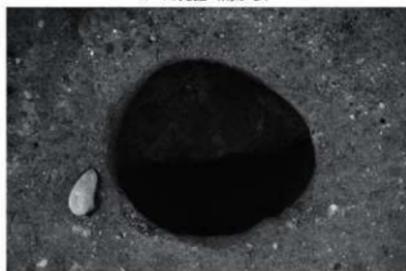
検出遺構写真



1. P5完掘 (南から)



2. P6断面 (南から)



3. P6完掘 (南から)



4. P7断面 (南から)



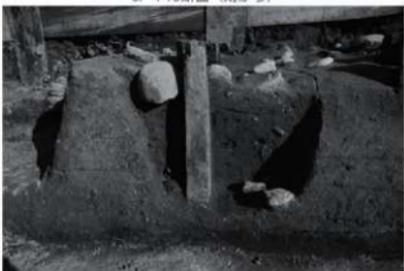
5. P7完掘 (南から)



6. P13断面 (南から)



7. P13完掘 (南から)



8. SK3断面 (北から)

図版 62 仙台城跡IV層 (5)・III層 (1)



1. SK3完掘 (北から)



2. SK4断面 (南から)



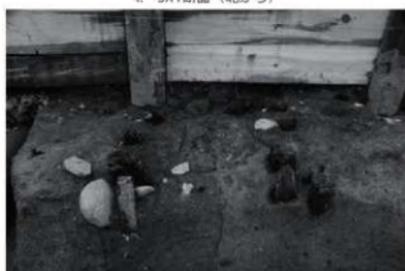
3. SK4完掘 (南から)



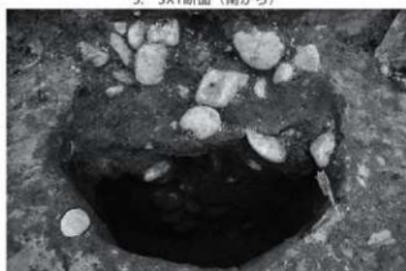
4. SX1断面 (北から)



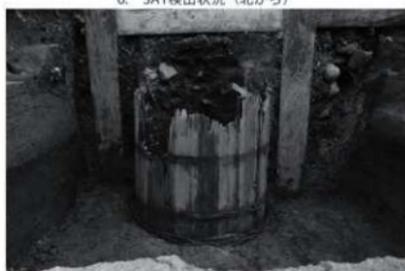
5. SX1断面 (南から)



6. SA1検出状況 (北から)

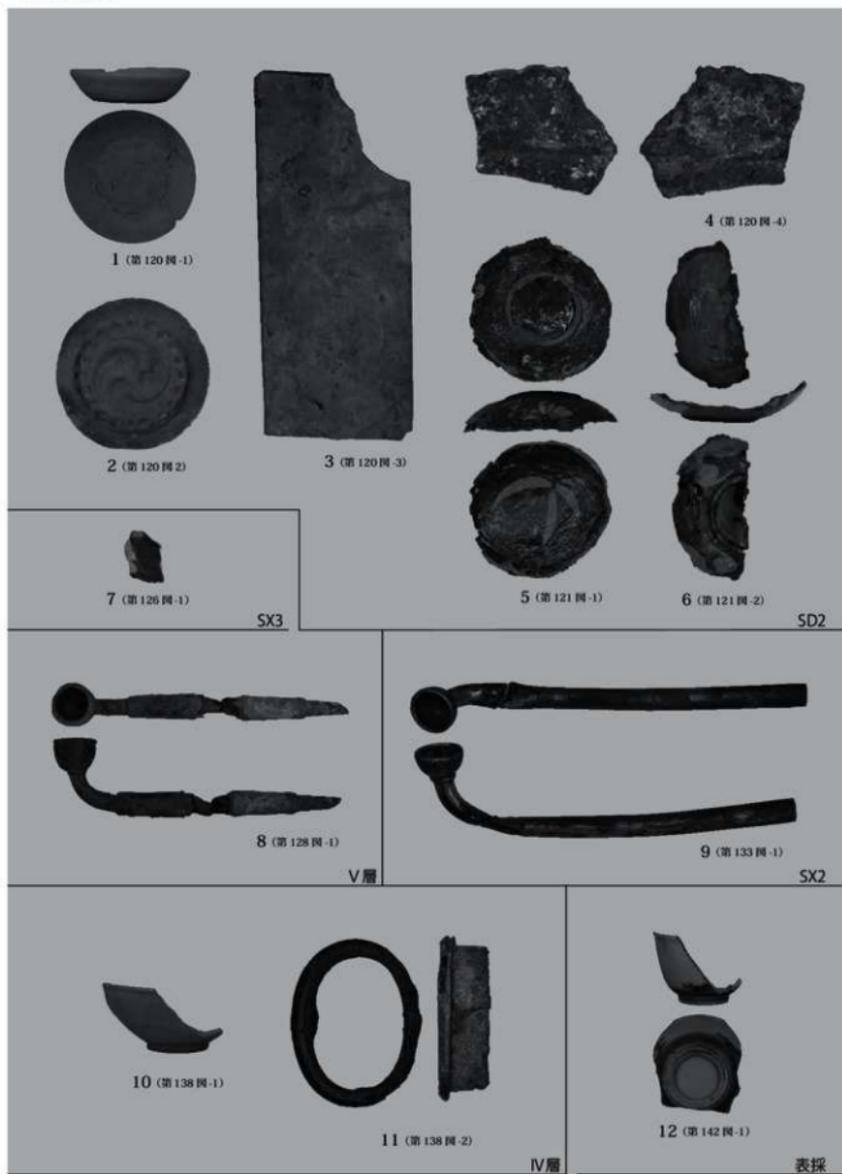


7. SE1断面 (北から)



8. SE1井桁検出状況

図版 63 仙台城跡Ⅲ層 (2)



図版 64 仙台城跡出土遺物 (1)

報告書抄録

ふりがな	かわうちびーいせきほか 一せんだいしこうそくてつどうごいせんかんけいいせきはつかつちょうきょうこくしよな一							
書名	川内B遺跡ほか 一仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第401集							
編著者名	工藤信一郎 水野一夫 蒲 明男 岩瀬雄史							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1番1号 TEL 022(214)8839							
発行年月日	2012年3月9日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
かわうちびーいせき 川内B遺跡	宮城県仙台市 青葉区川内地区内	4100	1565	38° 15' 38"	140° 51' 18"	2011.9.14 ～ 2011.12.28	1120㎡	仙台市高速鉄道 東西線建設事業 に伴う発掘調査
せんたいせき 仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区川内地区内	4100	1033	38° 15' 37"	140° 50' 55"	2011.5.18 ～ 2011.6.18	56㎡	
所収遺跡名	主な時代	種別	主な遺構	主な遺物		特記事項		
川内B遺跡	縄文時代 江戸時代 近代	散布地 武家屋敷	溝跡 井戸跡 土坑 性格不明遺構 ビット	縄文土器 陶磁器 土師質土器 瓦質土器 瓦 金属製品 木製品 土製品 石製品 ガラス製品		伊達家の家紋である三引両文の 鳥伏間瓦が近代の廃棄遺構から 出土した。		
仙台城跡	縄文時代 江戸時代	散布地 武家屋敷	溝跡 土坑 性格不明遺構 ビット	陶磁器 土師質土器 瓦質土器 瓦 金属製品 木製品 土製品 石製品				
要約	<p>川内B遺跡は、広瀬川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は42.1～46.8mである。平成22年度に1120㎡の調査を行った結果、基本層Ⅰ～Ⅳ層（近代・近世整地層）及びⅥ層（自然堆積層）上面において、17世紀～19世紀にかけての溝跡、井戸跡、建物跡の一部、柱列跡、その他土坑・ビットや性格不明遺構等が検出され、また当該期の陶磁器を中心とする多量の遺物が出土し、近世から近代にかけての当該地区の土地利用及び生活の変遷の一端が把握された。</p> <p>仙台城跡は、広瀬川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は65.0mである。平成22年度に56㎡の調査を行った結果、基本層Ⅲ～Ⅴ層（近世整地層）上面において、近世前半～近代初頭にかけての溝跡、井戸跡、土坑、ビットや性格不明遺構が検出され、当該期の陶磁器を中心とする遺物が出土した。平成18年度調査で区画施設と考えられた溝跡の続きが一部検出された。</p>							

仙台市文化財調査報告書 第401集

川内B遺跡ほか - 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書VII -

2012年3月

発行 仙台市教育委員会
宮城県仙台市青葉区二日町1番1号
文化財課 022(214)8839

印刷 株式会社共同印刷所
東京都府中市寿町3-13-8
042-368-2001